鹿児島県

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(31)

川久保遺跡2　B・D地点

二〇二〇年三月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（31）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

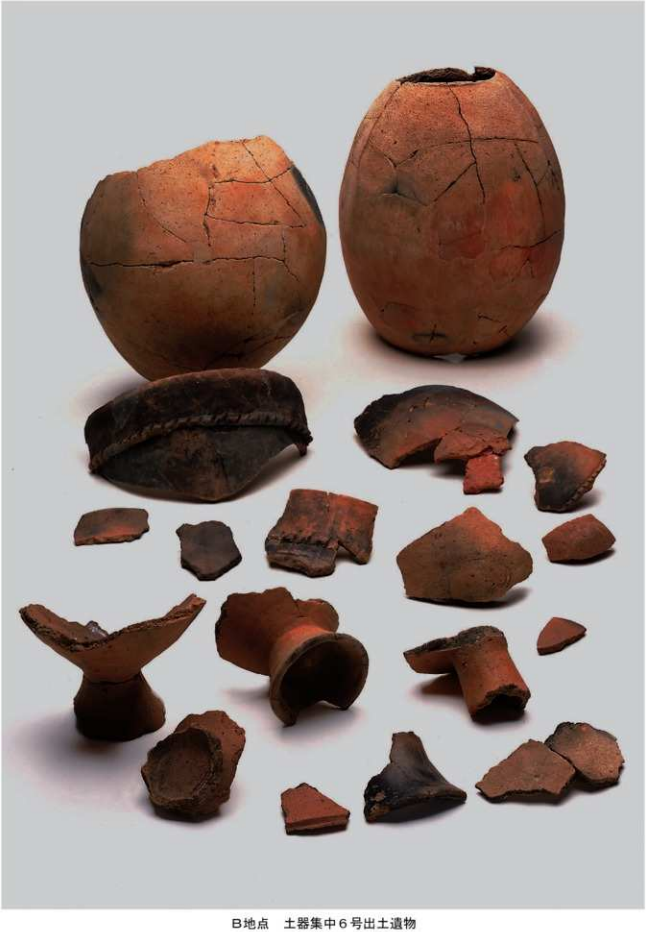
川久保（かわくぼ）遺跡2
Ｂ・Ｄ地点

（鹿屋市串良町）

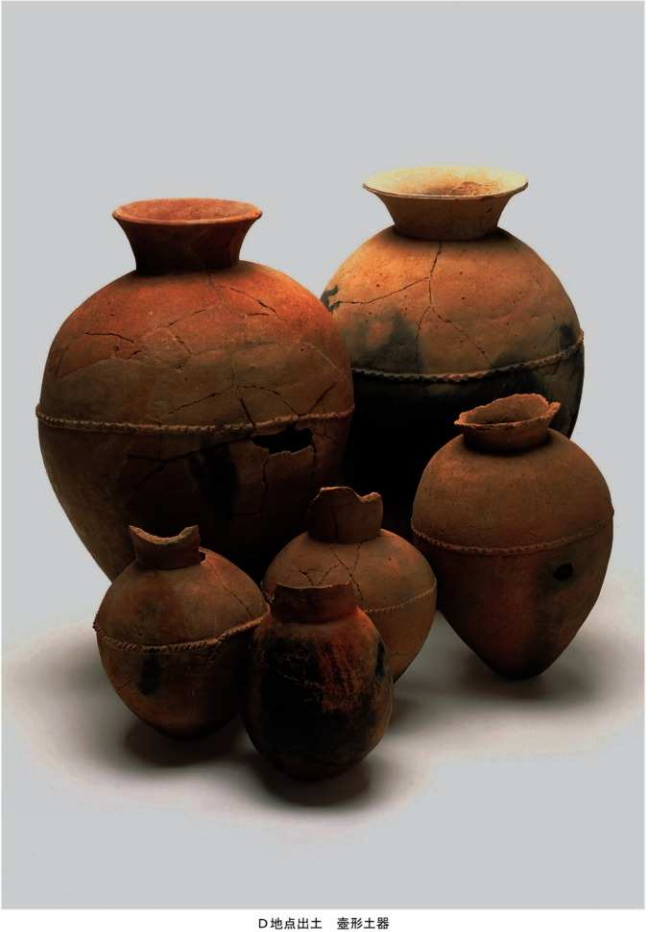
2020年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

川久保遺跡遠景



B地点　土器集中６号出土遺物



Ｄ地点出土　壺形土器

序　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴って，平成26年度から平成30年度にかけて実施した川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点の発掘調査の記録です。

川久保遺跡は，鹿屋市串良町に所在し，Ｂ・Ｄ地点では，縄文時代早期・晩期，弥生時代，古墳時代から近世までの遺構や遺物が発見されました。なかでも，古墳時代の遺物集中，中世の掘立柱建物跡，古墳時代から近世にかけての溝状遺構や道跡の発見は，当地で暮らした先人達の生活や土地利用，いわゆる選地活動を考えるうえで貴重な発見となりました。

本報告書が，県民の皆様をはじめ，多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成において御指導，御協力いただきました方々に対し厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　中原　一成

報　告　書　抄　録

ふりがな	かわくぼいせき２　Ｂ・Ｄちてん
書　　名	川久保遺跡２　Ｂ・Ｄ地点
副　書　名	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第31集
編 集 者 名	楙田　岳志・中村　有希・横手　浩二郎
編 集 機 関	公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-70-0574　　FAX 0995-70-0576
発 行 年 月	西暦2020年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
川久保遺跡 （かわくぼいせき） Ｂ地点 Ｄ地点	鹿児島県 （かごしまけん） 鹿屋市 （かのやし） 串良町 （くしらちょう） 細山田 （ほそやまだ）	46203	203-349	31° 26′ 40″	130° 56′ 23″	事前調査 2015.11.４～2016.１.28 本調査 ①2015.５.11～2016.２.10 ②2016.５.９～2017.１.27 ③2017.５.９～2018.１.26 ④2018.12.10～2019.２.22	Ｂ地点 6,091㎡（表面積） 14,704㎡（延面積） Ｄ地点 2,408㎡（表面積） 4,338㎡（延面積）	東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う発掘調査

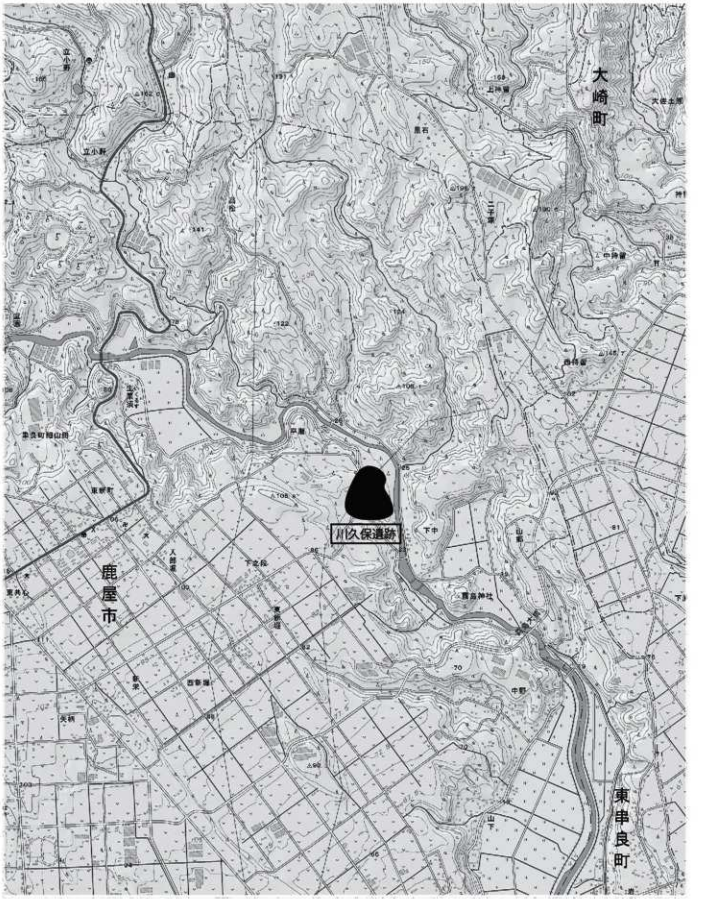
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保遺跡 Ｂ　地　点	散布地	縄文時代 早期	集石遺構，土坑	下剥峯式土器・塞ノ神式土器 磨製石斧，石鏃，磨敲石，穿孔線刻礫	本編掲載分のみ記載
		縄文時代 晩期	集石遺構，土坑	入佐式土器，黒川式土器，打製石斧，打製石鏃，石匙，磨石，石皿，台石，スクレイパー，横刃型石器，十字型石器	
		古墳 時代	掘立柱建物跡，礫集中，埋設土器，土器集中，道跡，溝状遺構，土坑，ピット	成川式土器，砥石	
		中世～ 近世	土坑墓，掘立柱建物跡，礫集中，道跡，溝状遺構，土坑，ピット	白磁，青磁，土師器，須恵器，青花，古銭	
川久保遺跡 Ｄ　地　点	散布地	縄文時代 晩期	集石遺構，土坑	入佐式土器，黒川式土器，打製石斧，打製石鏃，磨石，叩石	本編掲載分のみ記載
		古墳 時代	遺物集中，道跡，土坑，焼土跡	成川式土器	
		中世～ 近世	道跡	青磁，土師器，須恵器	

遺跡の概要

川久保遺跡は，大隅半島中部を流れ太平洋に注ぐ肝属川の支流である串良川の右岸に隣接する笠野原台地の東側縁辺部に位置する。串良川の開析によって形成された標高30～60ｍの河岸段丘上に位置する旧石器時代～近世の複合遺跡である。本報告書は，川久保遺跡のＢ地点とＤ地点についての報告である。

Ｂ地点の主となる時代は，古墳時代と中世である。古墳時代では，掘立柱建物跡が３軒，埋設土器が１基，土器集中が４か所検出されている。中世では，掘立柱建物跡が３軒検出された。

Ｄ地点の主となる時代は，古墳時代である。特に，谷部では古墳時代の壺形土器を多く含む遺物集中が９か所検出された。



川久保遺跡位置図（S＝1/25000）

例　言

1　本編は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）に伴う川久保遺跡発掘調査報告書「川久保遺跡２　Ｂ・Ｄ地点」である。

2　本遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という）が実施した。本遺跡は，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地点に区分し調査を行った。

4　川久保遺跡Ｂ地点の発掘調査は，平成27・28年度に埋文調査センターが実施し，すべてを完了した。なお，平成27・28年度は，株式会社埋蔵文化財サポートシステムに発掘調査支援業務を委託した。

5　川久保遺跡Ｄ地点の発掘調査は，平成29・30年度に埋文調査センターが実施し，すべてを完了した。なお，平成29年度は，株式会社島田組に発掘調査支援業務を委託した。

6　整理・報告書作成作業は，平成27年度・平成29年度は埋文調査センターの第一整理作業所，平成30・31（令和元）年度は第二整理作業所において実施した。なお，平成30年度は，大福コンサルタント株式会社に整理・報告書作成支援業務を委託した。

7　掲載遺構及び遺物には通し番号を付し，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

8　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「ＫＫＢ」である。

9　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

10　本編で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

11　本編で使用した方位は，すべて磁北であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

12　遺構の埋土，土器の色調は，『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を参考にした。

13　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者及び受託業者が行った。また，空中写真の撮影は，株式会社ふじたに委託した。

14　本編に係る遺構配置図・出土遺物の実測，トレース図の作成は，椒田・中村が整理作業員とともに行い，受託業者が行ったものは，眞邉・大保が監修した。

　また，遺物実測（石器）の一部を株式会社島田組に委託し，横手・椒田が監修した。

15　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という）の写場で，埋文調査センターの西園勝彦が行った。

16　本報告に係る自然科学分析を，株式会社加速器分析研究所，パリノ・サーヴェイ株式会社へ委託した。その成果を椒田が編集し，第６章に掲載した。

17　本編の執筆は次のように分担した。

第１章　発掘調査の経過　（椒田・大保）
第２章　遺跡の位置と環境　（椒田・大保）
第３章　調査の方法と層序　（椒田・大保）
第４章　発掘調査の成果（Ｂ地点）
　遺構（椒田・中村・大保）
　土器（中村・眞邉）
　石器（横手・眞邉）
第５章　発掘調査の成果（Ｄ地点）
　遺構（椒田・中村）
　土器（中村）
　石器（横手）
第６章　自然科学分析（椒田）
第７章　総括（椒田・中村・横手）
第８章　補遺「川久保遺跡Ｃ地点」（中村）

18　本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，埋文センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

19　Ｂ・Ｄ地点は傾斜部が多く，遺物の出土状況は原位置を保っていない可能性がある。これらのことを踏まえ，本来ならば層位は型式に優先されるべきところであるが，本報告書の遺物分類では出土層は判断材料の予備的な情報ととらえるところにとどめ，形態的特徴や文様，また胎土を参考にして分類した。

凡　例

1　本編に掲載してある遺構図・遺物出土状況等の１グリッド（１マス）は10m四方であり，各図には縮尺を示した。

2　遺構

(1)　遺構図の基本的な縮尺は以下のとおりである。
　土坑・集石遺構：1/20
　掘立柱建物跡：1/40
　溝状遺構・道跡：平面1/100・断面1/25

(2)　遺構番号に関しては，調査時に付したものから，報告書掲載順に振り直した。

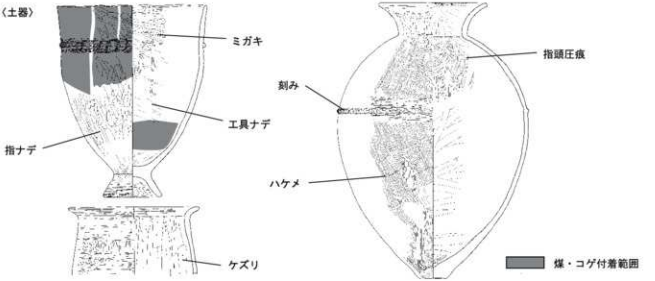
(3)　遺構配置図は，縮尺をそれぞれ別途に掲載した。

3　遺物

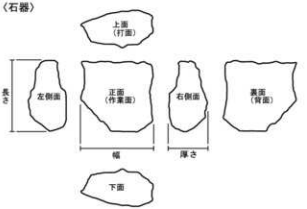
(1)　遺物図の基本的な縮尺は，以下のとおりである。
　土器：1/3
　石器　石鏃など小型の石器：1/1
　　打製石斧，磨・敲石：1/2～1/3
　　石皿など大型の石器は各図に提示した。

(2)　遺物の実測で用いた表現方法については，実測表現の凡例のとおりである。

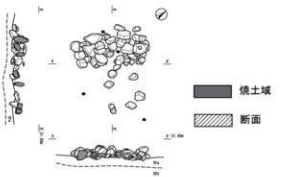
〈土器〉



〈石器〉



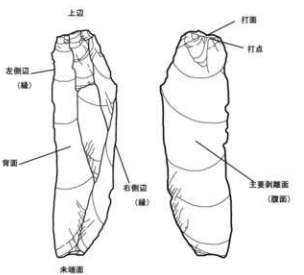
〈遺構〉

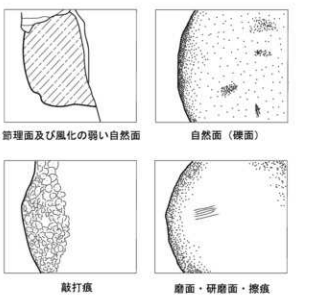


〈集石断面図〉

実線が検出面，破線は分層ラインを示す。

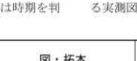
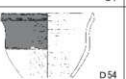
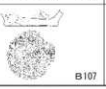
図中の層位は，基本層序を示したものである。





実測表現の凡例

B・D地点は傾斜部であり遺物の出土状況は原位置を保っている可能性は低いことが調査中からも指摘されていた。実際，包含層出土の遺物も広い時期幅をもつことが整理作業を進める中で明らかになった。これらのことを踏まえ，本来ならば層位は型式に優先されるべきところであるが本報告書の遺物分類では出土層位は時期を判断する際の予備的な情報ととらえるところにとどめ，形態的特徴や文様，調整，また胎土を参考にして分類し，Ⅰ類～Ⅻ類に分類した。以下，本遺跡の遺構内及び包含層から出土した土器を，器種及び形態・形式・様式等によって分類した表と，合わせてそれぞれの分類に該当する実測図・拓本を示す。

分類１	分類２	分類３	分類４	図・拓本	説明
Ⅰ	A	―	―	 B7	バケツ形の器形を呈す。文様は貝殻腹縁部による刺突文。１点出土。
	B	―	―	 B101	口縁部が頸部を境にラッパ状に外反し，胴部はやや膨らみをもつ。文様は頸部より下に，沈線で区画した内部に撚糸文を施文する。
	C	―	―	 B99	粗い条痕で幾何学的な文様を施す。塞ノ神式より粗雑なつくり。
Ⅱ	―	―	―	 D48	工具による刺突を列状に施文する。また本遺跡出土品は，装飾状の突起を貼付ける。
Ⅲ	―	―	―	 B21	口唇部に粘土を貼付け棒状工具による刻みを施す口縁部と胴部片。
Ⅳ	A	―	―	 C2	C地点で出土。沈線で幾何学文を施文する。
	B	―	―	 D51	斜位の貝殻刺突文。くの字形態の口縁部を持つ。１点出土。
	C	―	―	 C1	C地点で出土。口唇部に沈線を１～２条引くもの。胴部最大径部分で屈曲し頸部から口縁部にかけて外反する。沈線や凹線による施文がみられる。平底もしくは尖底。
	D	―	―	 D54	黒色磨研土器。
	―	―	e 底部	 B107	木葉痕のある底部。

分類基準表１

分類１	分類２	分類３	分類４	図・拓本	説明
Ⅴ	A	1 深鉢形	―	B108	口縁部形態は，内側に屈曲させるかもしくは直行させるもの。
		2 浅鉢形	―	B113	口縁部及び胴部の稜線が明瞭。肩部がくの字に鋭角に屈曲することで稜線が明瞭に入る。ヘラ状工具によるミガキを丁寧に施す。
	B	1 深鉢形	―	B118	口縁部が緩やかに外反し，胴部が膨らんだり屈曲部をもつ深鉢形土器。内外面に貝殻条痕やヘラ状工具による調整を施す。粗製。
		2 鉢形	―	B133	深鉢・浅鉢への分類が困難であり，口縁部下に突帯を貼付するもの。３点出土。
		3 浅鉢形	―	B141	口縁部から胴部までが短く，口唇部に粘土紐を貼付けて口縁部を作ることで玉縁状の口縁部をもつこともある。また，口縁部に屈曲をもたず，内湾して胴部につづくものもある。肩部形態は，算盤玉状に張ったり丸く湾曲して張るものがある。ヘラ状工具によるミガキを丁寧に施す。粗製，精製，半粗半精製。
	C	―	―	B16	浅鉢胴部片。網目状の跡がつく。
	D	―	―	B168	口唇部に粘土を貼付け棒状工具による刻みを施す口縁部と胴部片。
	―	―	e 底部	B176	時期不明の平底の底部。

分類基準表２

分類１	分類２	分類３	分類４	図・拓本	説明
Ⅵ	―	―	―	 D76	甕，壺，鉢等出土。鉢は胴部に屈曲をもち，赤色顔料を塗布するものもある。
Ⅶ	―	―	―	 D82	口縁部が斜め上方向にのびる。胴部には多条突帯を貼付する。
―	―	―	Ⅷ脚部	 B179	充実脚台。端部に沈線が入ることもある。
Ⅸ	―	―	―	―	小破片や器表面の調整が不明瞭で分類不可能だったもの。
Ⅹ	―	1 甕形	a 外反口縁 外湾口縁	 D89	屈曲部を持ち外反するものかもしくは屈曲部をもたずにＳ字状に外湾するもの。
			b 直口縁 内湾口縁	 B53	まっすぐ上方に伸びる口縁部形態をもつものかもしくは内湾するもの。
			c 脚部	 B228・B234	脚台状か上げ底ぎみのもの，または平底のもの。
		2 壺形	a なで肩	 D4	破片資料が多く全体の形状は不明であるが，肩部があまり張らずに倒卵状を呈するような形態で，最大径が胴部の中程にくることが予測されるもの。
			b いかり肩	 B249	破片資料が多く全体の形状は不明であるが，肩部付近に最大径をもつもの。
			c 底部	 B259・B261・B265	尖底，丸底，平底など。

分類基準表３

分類１	分類２	分類３	分類４	図・拓本	説明
Ⅹ	―	３ 高坏形	a 屈曲口縁	 B274	坏部口縁部に屈曲をもつもの。宮崎平野部編年における６～７型式に相当するもの。
			b 内湾口縁	 B282	内湾する口縁部。
			c 脚部エンタシス状 裾部湾形	 B286	脚筒部が空洞で丸みを帯び，裾部との境に屈曲部をもつもの。裾部分が湾状を呈するものもある。
			d 脚部スカート状	 B293	脚筒部が空洞で，裾部先端にむかって屈曲部をもたずに広がるもの。
		４ 鉢形	―	―	大小さまざまなサイズのものがある。
		５ 坩形	a 外反口縁 外傾口縁	 D46	外反するかもしくは外傾して開く口縁部形態のもの。
			b 直口口縁 内湾口縁	 B303	まっすぐ上方に伸びる口縁部形態のもの。
			c 胴部 底部	 B47・B312・B318・D144	突起状，上げ底，平底，もしくは丸底を呈するもの。
Ⅺ	―	―	―	 B320	丁寧で細かいハケメが施される。内面はケズリが施され，器壁は薄めに仕上げる。布留系。
Ⅻ	―	―	―	 B321	胎土に茶褐色や赤色の約２㎜～３㎜大の礫を多く含み，外面は木目の狭いハケメを施すもの。

分類基準表４

目　次

挿図目次

表目次

図版目次

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所（現西日本高速道路株式会社）は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～末吉ＩＣ）建設を計画し，当該事業区間における埋蔵文化財の有無について県教委に照会を行った。これを受けて，鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）は平成12年２月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。この分布調査結果をもとに，事業区内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）という。）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業計画の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化や，道路建設工事計画に伴い，遺跡についてもより綿密な把握が求められることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査と試掘調査及び確認調査が実施されることとなった。なお，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間については，平成14年４月に再度分布調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施工に伴う確認書が締結された。工事は，日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は，日本道路公団が鹿児島県へ再委託することになり，これまでの確認書，協定書は，そのまま生きることになった。また，日本道路公団からの再委託による発掘調査は，曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は，国土交通省からの受託事業となった。なお，平成21年度までの当該区間の確認調査は，事業の円滑な推進を図る観点から本発掘調査の手順の中で国土交通省の事業費により行ってきたが，平成23年度からは文化庁の国庫補助事業を導入し，県内遺跡事前調査事業として鹿児島県教育委員会が実施することになった。これをふまえ，平成23年度は荒園遺跡・永吉天神段遺跡・堂園平遺跡，平成24年度は町田堀遺跡・牧山遺跡・京の塚遺跡・宮脇遺跡，平成25年度は小牧遺跡・安良遺跡・木森遺跡，平成26年度は川久保遺跡・春日堀遺跡・小牧古墳群の確認調査を実施した。

近年，東九州自動車道建設事業等の増加に伴い，埋蔵文化財調査の事業量も増大することが見込まれ，その対応が困難な状況となりつつあった。そこで，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）を平成25年度に設立し，国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施することとなった。

川久保遺跡については，平成26年度に埋文センターによる確認調査で旧石器時代，縄文時代早期・晩期，古墳時代，古代の遺物包含層が確認された。なお，本調査は，民間調査組織と支援業務委託を契約して実施することとした。また，遺跡が広範囲におよぶため，地形等を勘案し調査区をＡ～Ｄ地点に区分することとした。

第２節　事前調査

１　分布・詳細分布調査

川久保遺跡に関する分布調査は，詳細分布調査を含めて２回実施した。１回目の分布調査は，文化財課が平成12年２月に志布志ＩＣ鹿屋串良ＪＣＴ間について実施した。この結果，川久保遺跡を含む50か所の遺跡で，面積は854,100㎡を確認した。

その後，より詳細な情報を得ることを目的として平成14年４月に県文化財課が詳細分布調査を実施した。この結果，川久保遺跡を含む遺跡面積は，384,400㎡を確認した。

２　試掘調査

川久保遺跡における試掘調査は，遺跡の東側を中心に平成25年度に実施した。試掘調査の結果，古墳時代の遺構や遺物包含層を確認した。また，平成27年度の本調査時には，Ａ地点・Ｂ地点について薩摩火山灰の試掘トレンチを掘削し，Ａ地点の約1,000㎡について縄文草創期から旧石器時代の包含層を確認した。

３　確認調査

川久保遺跡における確認調査は，遺跡の西側約4,700㎡を対象に，平成26年11月４日から平成27年１月28日に実施した。調査は，６ｍ×２ｍのトレンチを11か所設定し，掘削を行った。調査の結果，遺跡の全面で中世から縄文早期の包含層を２面確認し，さらに一部の区域では，約900㎡にわたって旧石器時代の包含層を確認した。

調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査統括	県立埋蔵文化財センター

	〃所長	井ノ上　秀　文
調査企画	〃次長兼総務課長	中　島　　治
	〃調査課長兼縄文調査室長	前　迫　亮　一
	〃調査課第二係長	今　村　敏　照
調査担当	〃文化財主事	光　永　　誠
	〃文化財主事	本　髙　謙　治
事務担当	〃総務課主事	池之上　勝　太

第３節　本調査

試掘調査・確認調査の結果をふまえ，本調査は平成26年度から平成30年度までの５か年で実施している。

第１回　平成26年４月11日～平成27年３月12日
（民間支援業務委託）
第２回　平成27年５月９日～平成28年１月27日
（民間支援業務委託）
第３回　平成28年４月11日～平成29年３月10日
（民間支援業務委託）
第４回　平成29年４月11日～平成30年３月９日
（埋文調査センター）
平成29年５月９日～平成30年１月26日
（民間支援業務委託）
第５回　平成30年12月10日～平成31年２月22日
（埋文調査センター）

１　概要

(1)　平成26年度

埋文調査センターは，発掘調査業務を大福コンサルタント株式会社に委託し，遺跡の東側5,830㎡を中心に本調査を実施した。その結果，縄文時代前期と晩期の遺物，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡及び鍛冶関連建物跡，古代・中世の掘立柱建物跡，溝状遺構や道跡などを発見した。

(2)　平成27年度

埋文調査センターは，発掘調査業務を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，遺跡全体で18,534㎡を対象に調査を実施した。その結果，縄文時代前期・晩期の遺構・遺物，弥生時代及び古墳時代の竪穴住居跡，古代の土坑，中世の掘立柱建物跡及び溝状遺構を発見した。また，トレンチ調査により，旧石器時代，縄文時代早期の遺構・遺物を確認した。

(3)　平成28年度

埋文調査センターは，発掘調査業務を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し，遺跡全体で34,230㎡を対象に調査を実施した。その結果，旧石器時代細石刃文化期の遺物，縄文時代早期の集石遺構と遺物，縄文時代前期・晩期，弥生時代の遺物，古墳時代の竪穴住居跡・製鉄関連の遺構と遺物，中世の土坑・道跡と遺物を発見した。

(4)　平成29年度

埋文調査センターと，調査を委託した株式会社島田組（民活）の２班体制で本調査を実施した。調査対象面積は，37,809㎡である。その結果，旧石器時代ナイフ形石器文化期から細石刃文化期の遺構と遺物，縄文時代草創期の礫群・連穴土坑等の遺構と遺物を発見した。さらに縄文時代早期の連穴土坑・土坑・集石遺構などの遺構と遺物，縄文時代後期の石器集積と遺物を発見した。さらに縄文時代晩期の集石遺構と遺物，弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴住居跡・土坑などの遺構と遺物を発見した。また株式会社島田組は，現場のプレハブにおいて，本調査と並行して遺物洗浄・注記の基礎整理作業を実施した。

(5)　平成30年度

平成30年度は，埋文調査センターで本調査を実施した。主に現道下2,283㎡を対象に調査を実施した。その結果，縄文時代晩期の集石と遺物，古墳時代の土坑・焼土跡などの遺構と遺物，古代から中世の遺物を発見した。

２　調査体制

(1)　平成26年度

事業主体	国土交通省　九州地方整備局 大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター	
調査企画	〃センター長	堂込　秀　人
	〃総務課長兼係長	山　方　直　幸
	〃調査課長	八木澤　一　郎
	〃調査第二係長	寺　原　　徹
調査担当	〃文化財専門員	岩　永　勇　亮
事務担当	〃主査	岡　村　信　吾
現地指導	東アジア古代鉄文化 研究センター（愛媛大学） センター長(教授)	村　上　恭　通
	鹿児島大学法文学部人文学科 教授	本　田　道　輝
	鹿児島大学埋蔵文化財調査センター 准教授	中　村　直　子
	佐賀大学文化教育学部 教授	重　藤　輝　行
	広島大学文学研究科 准教授	野　島　　永

調査の委託

委託先	大福コンサルタント株式会社 主任技術者	原　口　道　朗

主任調査支援員　重留康宏
調査支援員　岩下直樹
調査支援員　花田寛典
委託内容　発掘支援業務　1式
測量業務　1式
土工業務　1式
検査　中間検査　平成26年10月28日
完成検査　平成27年2月20日
（実地検査）
平成27年3月4日
（成果物検査）

(2)　平成27年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃センター長　堂込秀人
調査企画　〃総務課長兼係長　有村　貢
〃調査課長　八木澤一郎
〃調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃文化財専門員　岩永勇亮
事務担当　〃主査　荒瀬勝己
現地指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中村直子
調査の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
主任技術者　權現領　美千代
主任調査支援員　島内浩輔
調査支援員　松崎卓郎
調査支援員　立神勇志
調査支援員　礒村康行
調査支援員　沖野沙和美
調査支援員　坂井靖奈
研修生　冨永朋実
委託内容　発掘支援業務　1式
測量業務　1式
土工業務　1式
検査　中間検査　平成27年10月27日
完成検査　平成28年3月1日
（実地検査）
平成28年3月11日
（成果物検査）

(3)　平成28年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
調査企画　〃センター長　堂込秀人
〃総務課長兼係長　有村　貢
〃調査課長　八木澤一郎
〃調査第二係長　宗岡克英
調査担当　〃文化財専門員　岩永勇亮
〃文化財専門員　山形敏行
〃文化財専門員　湯場崎辰巳
事務担当　〃主査　荒瀬勝己
現地指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中村直子
調査の委託
委託先　株式会社埋蔵文化財サポートシステム
主任技術者　牧　美千代
主任調査支援員　島内浩輔
調査支援員　松崎卓郎
調査支援員　中田裕樹
調査支援員　内田賢一
調査支援員　立神勇志
調査支援員　中村耕治
調査支援員　礒村康行
調査支援員　沖野沙和美
調査支援員　冨永朋実
委託内容　発掘支援業務　1式
測量業務　1式
土工業務　1式
検査　中間検査　平成28年10月7日
完成検査　平成29年2月22日
（実地検査）
平成29年2月24日
（成果物検査）

(4)　平成29年度（直営）

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃センター長　前迫亮一
調査企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
〃調査課長　中原一成
〃調査第一係長　今村敏照
調査担当　〃文化財専門員　山形敏行
〃文化財専門員　石畑浩一
〃文化財専門員　三垣恵一
〃文化財専門員　徳永愛雄
〃文化財専門員　楸田岳志
（H29.5～11）
〃文化財専門員　本髙謙治

〃文化財専門員　相良典隆
〃文化財調査員　木場浅葱
〃文化財調査員　新屋敷　久美子
〃文化財調査員　福地祥平
（H29．5～8，12～H30．3）
事務担当　〃主　　査　荒瀬勝己
〃事業推進員　川崎麻衣
現地指導　鹿児島県考古学会
会　　長　本田道輝
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
センター長　中村直子
調査の委託
委託先　株式会社島田組
主任調査支援員　宮下貴浩
調査支援員　大橋裕子
委託内容　測量業務　1式
中間検査　平成29年11月22日
完成検査　平成30年3月6日
（成果物検査）

上記のとおり平成30年1月26日をもって民間組織による業務委託は終了した。

その後，本調査区の調査を当初計画どおり，2月まで継続するにあたって，調査を円滑かつ効率的に実施するため，発掘業務の一部を民間調査組織に別途委託して実施した。

委託先　株式会社島田組
委託期間　平成30年2月1日～平成30年2月23日
委託内容　測量業務　1式
土工業務　1式
検　　査　完成検査　平成30年3月13日
（成果物検査）

(5)　平成29年度（民活）

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃センター長　前迫亮一
調査企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
〃調査課長　中原一成
〃調査第一係長　今村敏照
調査担当　〃文化財専門員　馬籠亮道
事務担当　〃主　　査　荒瀬勝己
〃事業推進員　川崎麻衣
調査の委託
委託先　株式会社島田組
主任技術者　山本隆広
主任調査支援員　宮下貴浩
調査支援員　大橋裕子
調査支援員　清岡廣子
（～8月）
調査支援員　丹生泰雪
（9月～）
委託内容　発掘支援業務　1式
測量業務　1式
土工業務　1式
検　　査　中間検査　平成29年11月22日
完成検査　平成30年2月23日
（実地検査）
完成検査　平成30年3月6日
（成果物検査）

(6)　平成30年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
〃センター長　前迫亮一
調査企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
〃調査課長　中原一成
〃調査第三係長　三垣恵一
調査担当　〃文化財専門員　楸田岳志
〃文化財専門員　本髙謙治
〃文化財調査員　大坪啓子
事務担当　〃主　　査　小牧智子
〃事業推進員　塩屋奈諸美

3　調査の経過

本調査について，日誌抄を月ごとに集約して記した。なおここでは，B・D地点についてのみ記している。

(1)　平成26年度（B地点）

5月　B地点の環境整備と表土剥ぎ。
9月　B～D－8～11区，D－12・13，E－9～13区の環境整備。表土剥ぎ。グリッド杭打ち。
10月　B～D－8～11区，E－9・10区，C－11区，D・E－11～13区Ⅲ層調査。古道及び集礫検出。写真撮影。溝状遺構検出。トータルステーションにて遺物取り上げ。B－9～11区土層断面実測。

(2)　平成27年度（B地点）

5月　11日より調査開始。ベルトコンベア，発電機設置。表土剥ぎ。堂込センター長現地視察。
6月　C・D－12～19区，E－14～19区表土剥ぎ。グリッド杭打ち。Ⅱ～Ⅳ層調査。Ⅴ層上面にて遺構検出。図面・写真整理。寺原係長調査指導。
7月　C・D－9～11区Ⅳ層調査。C～E－15・16区Ⅴ層上面にて遺構検出。先行トレンチ2本掘下げ。

C～E-11～14区遺構検出・実測。C～E-12・13・15区，F-13区遺物取り上げ。地形測量。

8月　C・D-16～18区表土剥ぎ。B～D-9～12区Ⅳ層調査。C～E-9・10区遺構実測，C-13・14区，E-13区Ⅴ層上面遺構検出。C-13～15，C～E-16区Ⅴ層調査。B-9・10区，C-11～13区，D-9～12区，D・E-10～14区遺物取り上げ。C～E-12～14区，D-13・14区，D・E-15・16区遺構配置図作成。調査区全体写真撮影。

9月　B～E-10～12区Ⅳ層調査。C・D-15・16区，E-13～15区Ⅴ層調査。C-13～15区，D・E-16区Ⅵ層調査。溝・古道実測。ピット実測。C・D-9・10区，C～E-10・11区，C～E-15区遺物取り上げ。C～E-11区，C・D-16区遺構実測。C-16区遺構配置図。C～E-13～16区地形図測量。写真整理。

10月　調査区A地点～調査区C地点の空撮。C～E-9～14区Ⅵ層調査。B～D-9・10区遺物取り上げ。Ⅴ層上面遺構検出。C～E-13～19区Ⅴ層上面遺構検出。C-13・14区，E-16区集石実測。E-12区掘立柱建物跡実測。C-9区，D・E-9・10区溝状遺構実測。C-17～19区，D-17区遺構配置図。地形測量。

11月　F～J-14～16区表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層調査。Ⅳ層上面遺構検出。D-14区，E-16区集石実測。C・D-16区，D・E-17区掘立柱建物跡実測。ピット実測。D・E-12・13区遺構配置図。土層断面実測。地形測量。

12月　F～J-14～16区Ⅲ・Ⅳ層調査。Ⅳ層上面遺構検出。C～E-3～8区Ⅴ層調査。F・G-17・18区，G～I-14・15区Ⅳ層調査。F-16区，H～J-14～16区遺物取り上げ，遺構配置図作成。

1月　H-14・15区Ⅳ層調査。F・G-16・17区Ⅵ・Ⅶ層調査。H～K-14・15区Ⅳ層調査。遺構検出。F～I-14～16区先行トレンチ設定。図面・写真整理，遺物整理。

2月　H～K-14～16区Ⅳ層調査。遺構検出。F・G-16区Ⅵ・Ⅶ層調査。Ⅶ層上面遺構検出。
10日B地点の本年度調査終了。

(3)　平成28年度（B地点）

10月　B～E-9区，E-10区Ⅴ層調査。F-11区，F～H-12・13区，I-13区重機による表土剥ぎ後Ⅲ・Ⅳ層調査。遺構配置図作成。

11月　F-11区，F～H-12・13区，I-13区Ⅳ層調査。F-11～13区，G・H-12・13区，I-13区遺物取り上げ。E-10区土層断面実測。

12月　F-11区，F～H-12・13区，I-13区Ⅳ層調査。F-11～13区，G-12・13区，H・I-13区，J-14区遺物取り上げ。F・G-12・13区，H・I-13区土層断面実測。集石・土坑実測。古道・溝状遺構実測。

1月　F-9～11区，G・H-10～13区，I-11～13区，J-12・13区，K-13区Ⅴ層調査。G-11・12区，H-12・13区南壁土層断面実測。土坑実測。29日調査終了。B地点に係る調査は全て完了する。

(4)　平成29年度（D地点・民間）

9月　重機による表土剥ぎ。

10月　重機による表土剥ぎ。G・H-20～22区Ⅲ・Ⅳ層調査。

11月　G・H-21・22区Ⅳa～Ⅴ層調査。Ⅳa・Ⅳb層遺構検出写真撮影。Ⅳa・Ⅳb層遺構調査。中央ベルト掘削。

12月　G・H-21・22区Ⅳb～Ⅴ層調査。Ⅳb層遺構調査。先行トレンチ掘削。G-22区下層確認トレンチ掘削。南側調査区拡張区調査。J-17・18区トレンチ調査。G～J-18～20区表土剥ぎ。H・I-18～20区Ⅳa層調査。

1月　H・I-18～20区Ⅳb層調査。J-19区遺構調査。H・I-19・20区遺物出土状況写真撮影。I・J-18・19区Ⅳa・Ⅳb層調査。

(5)　平成30年度（D地点）

12月　重機による表土剥ぎ。F～I-18～22区Ⅳa層調査。Ⅳa層遺構検出写真撮影。Ⅳa層遺構調査。

1月　重機による表土剥ぎ。F～I-18～22区Ⅳa・Ⅳb層調査。Ⅳb層遺構検出写真撮影。Ⅳa・Ⅳb層遺構調査。I～L-22・23区トレンチ調査。

2月　F～H-23区Ⅳa・Ⅳb層調査，遺構検出写真撮影，遺構調査。I・J-17・18区Ⅳa・Ⅳb層調査。地形測量。22日調査終了。D地点に係る調査は全て完了する。

発掘調査状況（D地点）

第４節　整理・報告書作成作業

１　概要

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，県から受託した埋文調査センターが平成27年度，平成29年度～平成31（令和元）年度で実施した。

(1)　平成27年度

文化財課から委託を受けた埋文調査センターが，整理作業を実施することとなり，大福コンサルタント株式会社に対し，水洗い・注記の部分業務委託を行った。

(2)　平成29年度

文化財課から委託を受けた埋文調査センターが，整理作業を実施することとなり，第一整理作業所で行った。

(3)　平成30年度

文化財課から委託を受けた埋文調査センターが，整理・報告書作成作業を実施することとなり，大福コンサルタント株式会社へ整理・報告書作成の支援業務を委託した。作業は，埋蔵文化財調査センターの第二整理作業所で行った。

(4)　平成31（令和元）年度

文化財課から委託を受けた埋文調査センターが整理・報告書作成作業を実施することとなり，第二整理作業所で行った。

なお，平成26～28年度は，発掘調査の一部として，基礎的整理作業（遺物洗浄・注記）を行った。整理・報告書作成作業に係る組織は以下のとおりである。

２　整理・報告書作成作業の組織

(1)　平成27年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　(公財) 鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　堂込秀人
作成企画　〃総務課長兼係長　有村　貢
　　〃調査課長　八木澤一郎
作成担当　〃調査第二係長　寺原　徹
事務担当　〃主　　査　荒瀬勝己

(2)　平成29年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　(公財) 鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　前迫亮一
作成企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃調査課長　中原一成
　　〃調査第三係長　福永修一
作成担当　〃文化財専門員　岩永勇亮
　　〃文化財調査員　中村有希
　　〃文化財調査員　北園和代
　　(H29.12～H30.3)
事務担当　〃主　　査　荒瀬勝己
　　〃事業推進員　川崎麻衣

(3)　平成30年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　(公財) 鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　前迫亮一
作成企画　〃総務課長兼係長　中村伸一郎
　　〃調査課長　中原一成
　　〃調査第三係長　三垣恵一
作成担当　〃文化財専門員　眞邉　彩
　　〃文化財専門員　大保秀樹
事務担当　〃主　　査　小牧智子
　　〃事業推進員　塩屋奈緒美
整理指導　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村直子
整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託
委託先　大福コンサルタント株式会社
　　主任調査支援員　和田好史
　　調査支援員　岩下直樹
　　調査支援員　川俣幸次
　　調査支援員　永瀬武史
　　調査支援員　白井菜実
　　調査支援員　倉本るみ子
　　調査支援員　重久淳一
　　調査支援補助　新原奈津美
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
検　　査　中間検査　平成30年10月24日
　　完成検査　平成31年３月７日

整理指導状況

(4) 平成31（令和元）年度

事業主体　国土交通省　九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　（公財）鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　〃センター長　前迫亮一
作成企画　〃総務課長兼係長　中島　治
　　〃調査課長　中原一成
　　〃調査第三係長　横手浩二郎
作成担当　〃文化財専門員　楙田岳志
　　〃文化財調査員　中村有希
事務担当　〃主　　査　有川剛弘
　　〃事業推進員　塩屋奈諾美
整理指導　鹿児島県考古学会
　　会　　長　本田道輝
　　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター
　　センター長　中村直子

3　整理作業の経過

整理作業については，日誌抄を月ごとに集約して記した。なおここでは，B・D地点についてのみ記している。

(1) 平成27年度

5月　作業員へのオリエンテーション。遺物洗浄。遺物注記機（ジェットマーカー）による注記作業。遺物の一次分類。

6月　剥片石器の超音波洗浄機による洗浄。遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業。遺物分類。

7月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業。石器の分類。

8月　遺物洗浄・ジェットマーカーによる注記作業。石器の分類。礫の計測。遺物洗浄完了。

9月　ジェットマーカーによる注記作業。土器・石器・鉄滓の分類。重要遺物選別。礫の計測・仕分作業。図面修正。

10月　注記確認。土器・石器・鉄滓の分類。石器分類・整理・収納。礫の計測。青銅製品・鉄製品処理。図面修正。

11月　注記確認。土器・石器・鉄滓の仕分作業。包含層遺物分類。遺構内遺物分類。石器の分類。収納作業。遺物台帳・礫台帳作成。図面修正。

12月　遺物分類。遺物台帳作成。写真撮影。収納作業。

1月　遺物台帳作成。台帳入力。データ確認作業。

(2) 平成29年度

4月　作業員雇用準備。作業員オリエンテーション。遺物・図面搬入。土器洗い。図面整理。

5月　集石の分類・データ入力。遺物洗浄。遺物分類。図面整理。集石礫計測。

6月　遺物洗浄。遺物分類。遺物注記準備（下ニス塗り）。図面整理。鉄器鋲取り・脱塩処理。黒曜石産地分類。遺構デジタルトレース。写真整理。

7月　遺物洗浄，遺物分類。鉄器脱塩処理。鉄器カルテ作成。遺物注記準備（下ニス塗り）。遺構デジタルトレース。写真整理。

8月　遺物分類。鉄器鋲取り・脱塩処理。遺物注記。縄文土器の薬品処理。遺構デジタルトレース。写真整理。図面整理。

9月　遺物洗浄。鉄器鋲取り。遺物注記。遺構デジタルトレース。写真整理。集石観察表作成。

10月　遺物洗浄。鉄器鋲取り。遺物注記。遺構デジタルトレース。石器実測。写真整理。観察表作成。

11月　遺物洗浄。鉄器鋲取り。遺物注記。遺構デジタルトレース。石器実測。写真整理。観察表作成。鉄製品カルテ作成。ウォーターフローテーション

12月　遺物の分類・整理。鉄器鋲取り。遺物注記。遺構デジタルトレース。石器実測。写真整理。鉄製品カルテ作成。自然科学分析の準備。

1月　遺物の分類・整理。鉄器鋲取り。遺物注記。遺構デジタルトレース。石器実測。写真整理。鉄製品カルテ作成。自然科学分析の準備。

2月　遺物の分類・整理。土器接合。遺物注記。遺構デジタルトレース。石器実測。鍛造剥片抽出作業。写真整理。鉄製品カルテ作成。ウォーターフローテーション。

3月　遺物整理・図面整理。

(3) 平成30年度

4月　福山の第2整理作業所開設準備。

5月　作業員オリエンテーション。遺物搬入及び遺物コンテナの整理。遺物選別・接合。大隅支店へ遺物搬出。調査員事務所プレハブの設置。

6月　遺物選別。接合・復元。古代から近世遺物の抽出。遺構実測図チェック。遺構図デジタルトレース。台帳チェック。

7月　遺物選別。接合・復元。土器実測。石器実測。遺構実測図チェック。遺構図デジタルトレース。台帳チェック。
（本社2ビル）実査測対象石器の写真撮影。重量計測。台帳作成。

8月　遺物選別。接合・復元。土器実測。石器実測。遺構実測図チェック。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。
（本社2ビル）石器実測。

9月　遺物選別。接合・復元。土器実測・トレース。石器実測・トレース。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。
（本社2ビル）石器実測。集石デジタルトレース。

10月　土器復元・補強。土器実測・トレース。拓本。石器実測・トレース。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。石器仮レイアウト準備。原稿執筆。
（本社２ビル）石器実測。集石デジタルトレース。
11月　土器復元・補強。土器実測・トレース。拓本。石器実測・トレース。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。
（本社２ビル）石器実測。集石デジタルトレース。
12月　土器実測・トレース。石器実測・トレース。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。石材分類。原稿執筆。
（本社２ビル）石器実測・トレース。集石デジタルトレース。
１月　土器実測・トレース。石器実測・トレース。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。遺物収納。成果物の一部引渡検査。
（本社２ビル）石器実測・ペントレース。集石デジタルトレース。
２月　土器実測・トレース。石器実測・トレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。遺物収納。
（本社２ビル）石器実測・ペントレース。集石デジタルトレース。
３月　仮レイアウト。原稿執筆。遺物収納・整理。県外資料調査（宮崎，福岡）

(4)　平成31（令和元）年度

４月　作業員オリエンテーション。遺物・図面搬入。遺物分類・整理。遺物洗浄。遺物実測。図面整理。
５月　土器実測。遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。
６月　土器実測。遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。
７月　土器実測。遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。
８月　土器実測。遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。原稿執筆。レイアウト。
９月　土器実測。遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。レイアウト。遺物観察表作成。原稿執筆。
10月　遺物トレース。土器接合。遺物トレース確認。遺構図デジタルトレース。遺構デジタルトレース図チェック。レイアウト。観察表作成。原稿執筆。資料調査（宮崎）
11月　レイアウト。原稿執筆。掲載遺物写真撮影。
12月　レイアウト。原稿執筆。
１月　校正。遺物・図面等の整理。
２月　校正。遺物・図面等の整理収納作業。
３月　写真・図面等の整理・収納作業。

整理作業状況

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

川久保遺跡は鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。遺跡の所在する鹿屋市串良町は，大隅半島南部のほぼ中央に位置し，東側は東串良町，南側に肝属川を挟んで肝付町，西側は，鹿屋市東原町・旭原町・笠之原町，北東は，立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地等の地形から形成されている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（1,119m）で，中生層の地層からなっている。西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈連山へと連なっている。

高隈山地は北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と，南部の大隅柄岳（1,236m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は高隈山周辺に分布する新生代古第三紀の日南層群が基盤をなしている。山地間を埋めるように，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は堆積した後，現在に至るまで大小多くの河川で開析されている。

大隅半島中央部の地形は，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や，ほとんど浸食されずに残った広大な台地となっている。

一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が走り，志布志湾・鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で谷底平野を形成し，また下流域では河岸段丘の形成も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5km，南北に13kmの狭長で北部の山地中央部の台地，南部の低地に大別されるが，大部分において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地から成っている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。

南部及び東部は肝属川とその支流の串良川が流れ，それにによる沖積地が広がり，約560haの水田地帯を形成している（平成16年度旧町統計）。また，北部には低い丘陵状地形の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

川久保遺跡は，大隅半島中部を流れ太平洋に注ぐ肝属川の支流である串良川の右岸に隣接する笠野原台地の東側縁辺部に位置する。串良川の開析によって形成された標高30～60mの河岸段丘上に立地し，串良川との比高差は，約10～30mである。調査前は宅地あるいは畑地であった。

第２節　歴史的環境

川久保遺跡周辺の遺跡については，大隅中央広域農道や東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって次第に歴史的様相が明らかになりつつある。ここでは，主な遺跡について，時代別に紹介する。

(1)　旧石器時代

天神段遺跡ではナイフ型石器文化期と細石刃文化期の石器製作所跡及び石器の良好な接合資料が出土している。二子塚Ａ遺跡や本遺跡の西に位置する牧山遺跡において旧石器時代の剥片が出土している。荒園遺跡では細石刃文化期の石器類が，永吉天神段遺跡では角錐状石器やナイフ形石器など，ナイフ形石器文化期の遺物や製作跡が発見されている。また，西丸尾遺跡，榎崎Ａ遺跡，榎崎Ｂ遺跡において，ナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

(2)　縄文時代

縄文時代草創期の遺跡としては，天神段遺跡で土器片の出土が確認されている。

縄文時代早期の遺跡としては田原迫ノ上・十三塚・石縊・益畑・下堀遺跡等が挙げられる。本遺跡より南東に1.2km離れた益畑遺跡では，早期の竪穴住居跡２基，連穴土坑16基，集石遺構86基が確認され，前平・加栗山・吉田・石坂・下剥峯・桑ノ丸などの早期の各型式の土器が幅広く出土している。ほかにも磨製石鏃・石匙・石皿などが多数発見され，本格的な縄文時代早期の集落跡の発見となった。住居跡の埋土に桜島起源の軽石（P13）がレンズ状に堆積していたことから，霧島市上野原遺跡とほぼ同様の状況が窺える。下堀遺跡では集石遺構13基が検出され，前平式土器・手向山式土器・塞ノ神式土器などが出土している。古園遺跡では早期の石坂式土器が出土している。石縊遺跡では早期の集石遺構・土坑が検出され，隣接する十三塚遺跡では，早期の石坂式土器などが出土している。

前期・中期の遺跡としては，田原迫ノ上遺跡で曽畑式土器，立小野堀遺跡で深浦式土器の出土が確認されている。同じ台地上に位置する細山田段遺跡では200基を超える縄文中期の土坑が検出され，在地系の深浦式のほかにも，近畿地方の大歳山式土器・鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の広範囲での交流を知ることができる。

後期の遺跡としては，牧山・立小野A及びB・田原迫ノ上・立小野堀・ホンドンガマ遺跡で指宿式・市来式土器が出土している。牧山遺跡からは，縄文時代後期の建物跡を構成した可能性のある300～400個の柱穴群が環状に発見されたことが注目され，複数の埋設土器と石冠が1点出土している。細山田段遺跡では土坑の検出とともに，丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が出土している。本遺跡の西1.5kmに位置する町田堀遺跡では，中岳Ⅱ式土器が数多く出土し埋設土器も見られ，また，同時期の竪穴住居跡から橿原式文様を施す完形の石刀が出土し，西日本では珍しい出土例となった。

晩期の遺跡としては，牧山遺跡で入佐式土器，益畑遺跡で黒川式古段階，細山田段遺跡で黒川式の新段階と思われる土器片や刻目突帯文系の土器が出土している。柿木段遺跡では，晩期の落とし穴・土坑のほか，石斧埋納遺構が検出されている。永吉天神段遺跡では突帯文土器の伴う竪穴住居跡や鉢，壺，打製石斧，石鏃，石匙，石皿などが発見されている。

(3) 弥生時代

中期の遺跡としては，田原迫ノ上遺跡からは山之口式・中溝式土器，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，砥石，敲石，台石などが出土し，弥生時代中期のベッド状遺構を伴う方形や円形の大型竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形・方形の周溝などが検出されており，大隅地方での当時の集落の様相を知ることができる。

中期以降の遺跡は，西ノ丸遺跡・下堀遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・益畑遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では中期の竪穴住居跡が3軒確認されている。王子遺跡では竪穴住居跡27軒が検出され，山ノ口式土器や瀬戸内地方の影響を受けた土器が出土している。十三塚遺跡においては，花弁型・方形・円形の竪穴住居跡が発見された。山之口式土器，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲石などの遺物とともに無茎の鉄鏃が出土している。牧山遺跡においては中期の竪穴住居跡から銅鑿が出土している。

永吉天神段遺跡では中期の円形周溝墓と土坑墓群から国内最古級となる鉄鏃（十三塚出土品と類似）が出土している。その他には入来式・山ノ口式・黒髪式土器，磨製石鏃，管玉などが出土しており，弥生時代の長期間に渡って集落が存在していたことが窺える。

(4) 古墳時代

志布志湾沿岸部・大隅地方には唐仁古墳群，塚崎古墳群，横瀬古墳をはじめとする多くの高塚古墳が存在することが知られている。また，南九州特有の墓制である地下式横穴墓も多く分布する地域である。

本遺跡の周辺には，町田堀遺跡，立小野堀遺跡・小牧遺跡・上小原遺跡・下堀遺跡・岡崎古墳群が存在する。

町田堀遺跡・立小野堀遺跡では，多数の地下式横穴墓が検出されている。特に立小野堀遺跡では，古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されており，玄室内には鉄鏃や鉄剣等の多数の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。成川式のうち辻堂原期の特徴を持つ壺・高坏類が多く出土しており，折損・欠損行為・穿孔行為を受け，器種に関わらず粉砕されたような土器片の出土状況から，祭祀的な遺棄行為が行われたのではないかということが考えられる。

上小原古墳群では，前方後円墳1基・円墳20基・地下式横穴墓が確認されている。地下式横穴墓には，赤彩された軽石製石棺をもつものや，大型で玄室床面に粘土床をもつものが確認されている。4号墳・16号墳・17号墳・18号墳では，高塚墳の周溝内に地下式横穴墓が複数確認されている。

岡崎18号墳の2号地下式横穴墓で発見された須恵器は，愛媛県伊予市の市場南組窯産と考えられる。さらに，鉄鋌・U字型鍬鋤先・鐙子状鉄製品等の朝鮮半島系遺物や琉球列島産イモガイ製貝釧等が出土していることから，広い範囲で交易を行っていたと考えられている。

下堀遺跡では竪穴住居跡や溝状遺構等の他，地下式横穴墓5基が確認された。地下式横穴墓2号からは大隅半島では初見となる異形鉄器が出土している。また地下式横穴墓周辺で高坏や坩が意図的に配置されたような状態で発見され，祭祀遺構の可能性が指摘されている。

また川久保遺跡のA地点（整理作業中）では，多数の古墳時代の竪穴住居跡が切り合いながら多数検出されている。大型の鉄製品の製作を行っていたことが想定される鍛冶遺構と，小型の鉄製品，あるいは鉄製品製作の仕上げの工程や修繕程度の作業を行ったと想定される小規模な鍛冶遺構が，隣接する住居跡から検出されており，ともに転用・専用の鞴の羽口が複数発見されている。川久保遺跡では成川式のなかでも，笹貫式の新段階と呼ばれている土器群の出土が主体であるが，東原式の甕や高坏なども多く出土している。

益畑遺跡の5号竪穴住居跡からは，初期須恵器に比定される蓋杯や鉄製のU字型鍬先，砥石などが出土している。

(5) 古代

古代の串良は大隅国串良郡に属していたと思われるがその国境・郡境については定かではなく，また，串良川流域においては，古代の遺物・遺構が発見されている遺跡が少ないこともあり，今後の文献・考古資料によるさらなる検証が待たれる。

大隅地域においては旧鄕北町（現：鹿屋市）の新田遺跡で古代の掘立建物跡が5棟検出されており，古代の土師器の坏・皿・埦・墨書土器・須恵器などが出土している。

旧財部町（現：曽於市）の高篠遺跡においては16棟の

掘立柱建物跡が検出され，多数の坏・甕・埦などの土師器や黒色土師器埦，須恵器，墨書土器，焼塩土器，鞴の羽口，鉄滓などが出土しており，官営の牧であった可能性も報告書中で示唆されている。

天神段遺跡において７棟の掘立柱建物跡，２棟の竪穴建物跡，土坑，炉跡，土師器，焼塩土器，墨書土器，刻書土器，鍛造薄片が確認されている。

(6)　中世

川久保遺跡の周辺には，北西に細山田城跡と北原城跡，南東に霧島城跡が知られている。中世初期の串良は肝付氏の領土であり，串良町郷土史によると肝付氏初代兼俊の３男兼幸が北原氏を名乗り，細山田に開いたのが北原城である。

近年の発掘調査では村落跡も各地で発見されている。天神段遺跡では掘立柱建物跡，溝，古道，鍛冶遺構などが発見されている。ほかにも８基の土坑墓が検出され，青磁，白磁，和鏡，鉄製の紡錘車や和鋏，滑石製石鍋，腰刀などが副葬品として納められた状況で出土している。永吉天神段遺跡では土師器の坏・皿や瓦器・瓦質土器，東播系須恵器，白磁・青磁・染付などの中世の遺物が多数出土している。

(7)　近世以降

天神段遺跡において，畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。また，永吉天神段遺跡においても薩摩焼や肥前系染付などが出土し道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。同じ台地上の細山田段遺跡でも，近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。

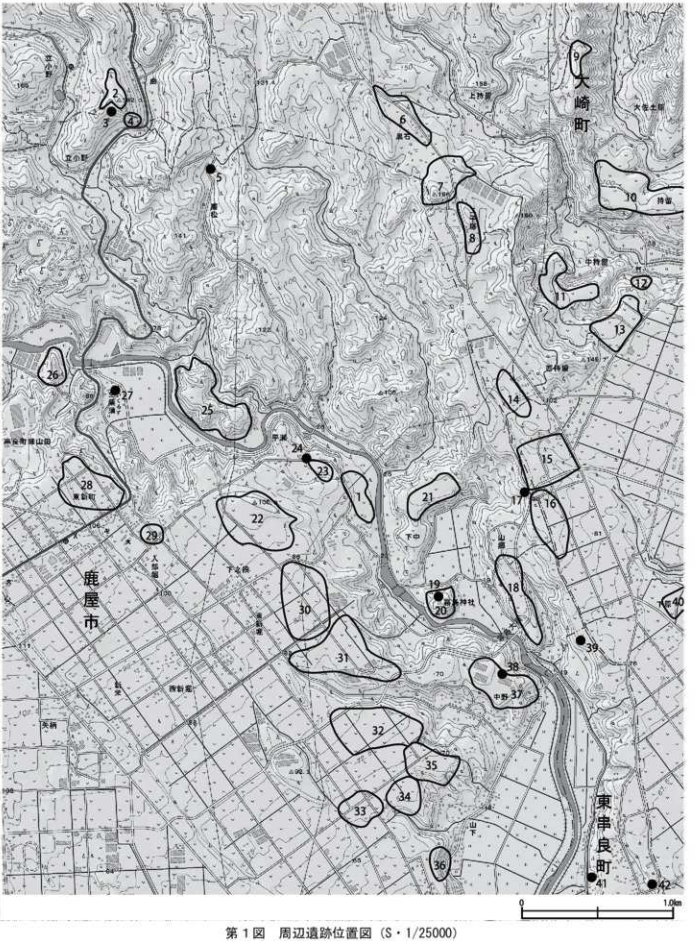
〈参考・引用文献〉

鹿児島県教育委員会　1985『王子遺跡』
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）
鹿児島県教育委員会　1992『榎崎Ａ遺跡』
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（63）
鹿児島県教育委員会　1992『西丸尾遺跡』
鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（64）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993『榎崎Ｂ遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（４）
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2011『石縄・十三塚遺跡』
鹿児島埋蔵文化財センター発掘調査報告書（164）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016『田原ノ上遺跡』発掘調査報告書（５）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016『永吉天神段遺跡』発掘調査報告書（６）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016『町田堀遺跡』発掘調査報告書（７）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2018『永吉天神段遺跡』発掘調査報告書（８）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『荒園遺跡１』発掘調査報告書（12）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『牧山遺跡１』発掘調査報告書（14）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『田原迫ノ上遺跡１』発掘調査報告書（15）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『立小野堀遺跡１』発掘調査報告書（16）
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2018『町田堀遺跡２』発掘調査報告書（20）
串良町教育委員会　2005『細山田段・瓜々良蒔遺跡』
串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）
串良町教育委員会　2005『益畑遺跡』
串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
串良町郷土誌編纂委員会　1973『串良町郷土誌』
曽於郡大崎町役場　1975『大崎町史』
東串良郷土誌編纂委員会　1980『東串良町郷土誌』

串良川と河岸段丘

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	備考
1	**川久保遺跡**	**鹿屋市串良町細山田川久保**	**河岸段丘**	**旧石器，縄文，弥生，古墳，中世，近世**	**本報告書**
2	遠見ヶ丘遺跡	曽於郡大崎町野方立小野	台地	中世	
3	立小野A・B遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文	
4	立小野遺跡	鹿屋市串良町細山田立小野	台地	縄文（後），弥生	平成22～26年度本調査
5	高松遺跡	鹿屋市串良町細山田高松	台地	弥生	
6	二子塚A遺跡	曽於郡大崎町野方二子塚	台地	旧石器，縄文（早・晩），弥生，古墳	平成11年度本調査
7	二子塚B遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	縄文，弥生	
8	二子塚C遺跡	曽於郡大崎町持留二子塚	台地	弥生（中・後）	
9	大佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方大佐土原	山腹傾斜面	弥生（中）	
10	佐土原遺跡	曽於郡大崎町野方4715-2	台地	縄文，古墳	
11	屏山城跡	曽於郡大崎町持留	台地	弥生，古墳，中世	別称「山ノ城」，城跡の正確な所在は不明・推定
12	川上神社遺跡	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	縄文（後）	
13	持留牧遺跡	曽於郡大崎町持留牧・東尾ノ鼻	台地	縄文，古墳	平成９年度農政分布調査
14	茶ノ木遺跡	曽於郡大崎町持留1406-2	台地	古墳	
15	細山田段遺跡 （旧・京の塚遺跡）	曽於郡大崎町西持留 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文（早～晩）	平成25～27年度本調査
16	細山田段遺跡	曽於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	縄文（後・晩），弥生（前），古墳	平成８年度農政分布調査，平成11年度農政分布調査で拡大
17	京の塚古墳	曽於郡大崎町下原 鹿屋市串良町下中京の塚	台地	古墳	
18	益畑遺跡	鹿屋市串良町細山田益畑	台地	縄文，弥生	平成14～15年度本調査
19	ホンドンガマ遺跡	鹿屋市串良町細山田下中	洞窟	縄文	シラス洞窟で崩壊しつつある
20	霧島城跡	鹿屋市串良町細山田下中	丘陵	中世	
21	小牧遺跡	鹿屋市串良町細山田小牧	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世	平成27～29年度本調査
22	町田堀遺跡	鹿屋市串良町細山田アタゴ山	台地	弥生，古墳	平成25～29年度本調査
23	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	古墳	
24	北原墓地逆修 古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	台地	中世（鎌倉末）	
25	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世（南北朝）	
26	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	丘陵	中世	
27	生栗巣遺跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	台地	弥生	
28	牧山遺跡	鹿屋市串良町細山田牧山	台地	弥生，古墳	平成11年度分布調査，平成12年度試掘調査，平成25～29年度本調査
29	入部堀遺跡	鹿屋市串良町細山田入部堀	台地	弥生，古墳	
30	新堀遺跡	鹿屋市串良町細山田新堀	台地	縄文	
31	是ヶ迫遺跡	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	台地	縄文，弥生	
32	瓜々良毒遺跡	鹿屋市串良町有里瓜々良毒	台地	弥生	平成12年度本調査
33	熊ヶ鼻遺跡	鹿屋市串良町有里熊ヶ鼻	台地	縄文，弥生	
34	枦場遺跡	鹿屋市串良町有里枦場	台地	弥生	
35	永田堀遺跡	鹿屋市串良町有里永田堀	台地	弥生，古墳	
36	宮留古墳群	鹿屋市串良町有里	台地	古墳	
37	石塚遺跡	鹿屋市串良町有里石塚	台地	弥生	
38	石塚古墳	鹿屋市串良町有里石塚2169	台地	古墳	
39	牧内古墳	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	
40	下原遺跡	曽於郡大崎町持留	台地	縄文（後），弥生，古墳	
41	岩弘上古石塔	肝属郡東串良町岩弘上共同墓地	台地	中世	
42	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	



第１図　周辺遺跡位置図（S・1/25000）

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，第２表に示すとおり23か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

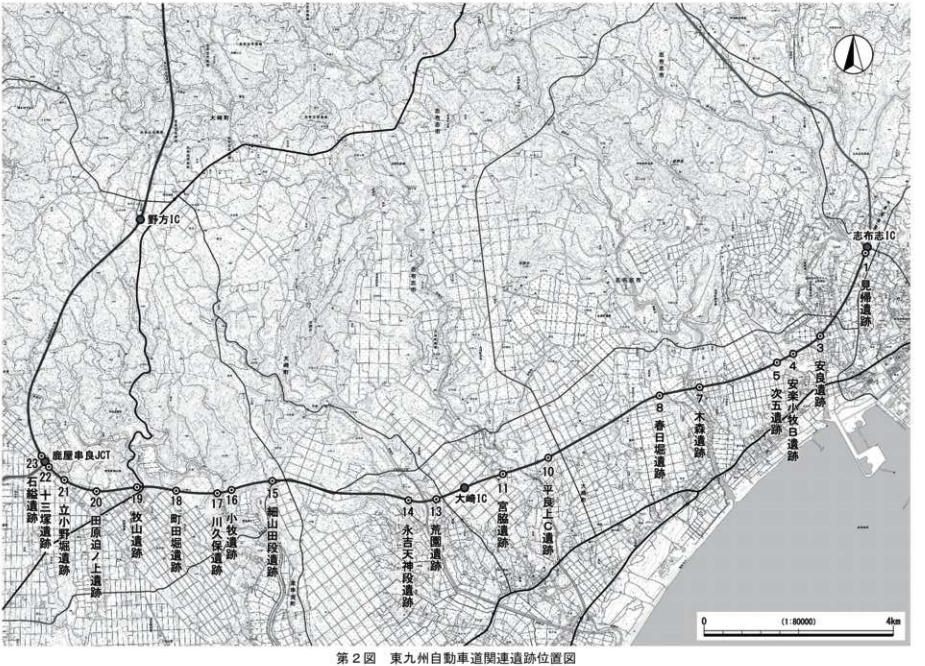
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度に埋文センター調査（隣接地）	H30年度 刊行 R元年度 ※埋文センター作業中	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，ハンマーストーン
					縄文早期	土坑（H25年度埋文センター調査のみ）	石版式，押型文，下剥事式，石鏃，磨石，石皿
					縄文前・中期	落とし穴，土坑	
					縄文後・晩期		磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石
	縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前ー中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。						
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 作業中	縄文早・後期	土坑，集石	小牧３Ａ，西平式，丸尾式
					弥生中期	甕棺	山ノ口式
					古墳時代	甕棺式住居跡，地下式横穴墓，溝状遺構	板貫式土器，鉄鏃，鉄鎌，須恵器
					古代～中世	掘状硬化面，掘立柱建物跡，甕棺建物跡，土坑，土坑墓，柱穴他	土師器，須恵器，青磁，白磁，滑石製石鍋，炭化米塊
					近世	土坑，柱穴	—
	古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。調査区内における両時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。						
4	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 作業中	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃稜，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	吉田式，妙見・天道ヶ尾式，塞ノ神Ａ式，塞ノ神Ｂ式，笠沢式，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥生	—	弥生土器，石包丁
	起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の形状土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では墓跡を含め古墳は確認されていない。						
5	茨木	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積	前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元Ⅶ類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥事式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神Ⅱ式，打製・磨製石鏃，石斧，局部磨製石斧
	旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。						
6	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	R元年度以降	縄文早期	竪穴住居状遺構，集石，土器集中，連穴土坑，土坑	前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥事式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石
					縄文中・後期		春日式，岡藤文系土器
					古墳～古代		須恵器
					中世	掘立柱建物跡，杭列状遺構	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
	縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴住居状遺構，連穴土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石鏃，磨石・敲石の他，中・後期の土器，古墳～古代の須恵器，土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。						
8	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 作業中	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥事式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製・磨状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，礫石，骨孔円礫
					弥生	竪穴住居跡	山ノ口式
					古墳～飛鳥	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，移状礫集積遺構	甕（東原式，板貫式），壺，埴，高坏，須恵器高坏，椀状礫，磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，杭列跡，焼土跡	土師器
					近世	土坑，溝状遺構，古道，遺物集中	陶器，磁器
	縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古墳・飛鳥時代の竪穴住居跡（後天住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，墓跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，磨状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。						

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
9	鳩倉堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により、本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
10	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、平栫式、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、敲平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核、フレーク、チップ
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う降灰化現象（噴砂跡）も確認されている。					
11	宮迫A	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石器、石核、スクレイパー、掻器、使用痕剥片、フレーク、チップ、磨石、凹石
					縄文早期	集石、土坑、土器集中	加栗山式、小坂3A、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、平栫式、塞ノ神式、打製石鏃、磨石、チップ
					近世	—	薩摩焼、寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では、石器製作に関連すると考えられる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期では、集石、土坑、土器集中、ピットと土器、石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う降灰化現象の噴砂跡も確認されている。					
12	宮園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により、本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
13	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 （第1地点） 刊行 H30年度 R元年度 （第2地点） （第3地点） 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃、敲石、チップ
					縄文早期	集石、土坑、剥片・チップ集中	前平式、吉田式、加栗山式、下剥峯式、押型文、手向山式、平栫式、塞ノ神式、苦浜式、条痕文、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ
					弥生中期	竪穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノ口式、磨製石鏃未製品、砥石
					古墳	竪穴住居跡	成川式土器、須恵器、砥石
					古代以前	片栗研堀溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、焼状硬化面	土師器、東播系須恵器、備前焼、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	焼状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片栗研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う降灰化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度 （第1地点） 刊行 H28年度 （第2地点1） 刊行 H29年度 （第2地点2） 刊行 H30年度 （第3地点） 刊行 R元年度 （第2地点3） 刊行	旧石器	礫群、ブロック	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
					縄文早期	集石、土器埋設遺構	前平式、加栗山式、吉田式、手向山式、下剥峯式、押型文、平栫式、塞ノ神式、苦浜式、条痕文、石鏃、石匙、石斧、磨石、敲石、石皿、フレーク、チップ
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式、北久根山式、中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式、黒川式、別目突帯文、管玉、打製石斧
					弥生	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝墓、土坑墓群、土坑	入来式、山ノ口式、黒髪式、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、錦明六花鏡、砥石、石臼、古銭
					近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝、石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
15	細山田段	曽於郡 大崎町 西仲留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H28年度 H29年度 H30年度 R元年度 作業中	縄文早期	集石、埋設土器	吉田式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、中原式、押型文、平栫式、塞ノ神式、苦浜式、石京西式、打製石鏃、石匙、磨・敲石、石核、フレーク、チップ
					縄文前期～中期初頭	土坑、土器集中	曽畑式、深浦式、大歳山式、轟島式、船元式、打製石鏃、石匙、石鏃、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、敲石、石皿、石核、フレーク、チップ
					縄文後期	土坑	平川式、丸尾式、西平式、中岳Ⅱ式、打製石鏃、石匙、石鏃、スクレイパー、磨・敲石、打製石斧、磨製石斧、石皿、フレーク、チップ
					縄文晩期		入佐式、黒川式
					弥生前期		高橋式
					古墳		成川式
					近世以降	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器、近畿地方の大歳山式土器や轟島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。※遺跡ＧＩＳの変更に伴い、遺跡名を「細山田段遺跡」に変更。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要			
					時代・時期	主な遺構	主な遺物	
16	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	—	細石刃，フレーク，チップ	
					縄文早期	竪穴住居跡，遺穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平柳式，条痕文，石鏃，磨石，石皿	
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石	
					縄文後期	竪穴住居跡，石皿立石遺構，伏葉，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠	
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文	
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，銅石	
					古墳	竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品	
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車	
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，輪羽口，刀子，鉄製紡錘車，碁石，古銭，薩摩焼	
	旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花井原住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。							
17	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (C地点) 刊行 R元年度 (A地点) 作業中 (B・D地点) 本報告書	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，敲原型細石核	
					縄文早期	竪穴住居跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園B式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟A式，石鏃，打製石斧，石皿	
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧	
					縄文後期	—	中岳式	
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文	
					弥生前期	—	高橋式	
					弥生中期	竪穴建物跡	下城式，山ノ口式	
					古墳	竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡	成川式土器，輪羽口，高坏脚転用輪羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉	
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器	
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀	
	旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							
18	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 刊行 H29年度 (2) 刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平柳式	
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳B式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉	
					縄文晩期	—	黒川式土器，刻目突帯文	
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式，山ノ口式土器，土製勾玉	
					古墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器	
					古代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器	
	縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する芝布古墳群の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，機照文を施す完全な石刀が出土している。							
19	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) 刊行 H30年度 R元年度 (A地点2，B，C，D地点) 作業中	旧石器	—	剥片	
					縄文早期	竪穴住居跡，遺穴土坑，土坑，集石構，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，立タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ	
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式，条痕文	
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳B式，打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠	
					縄文晩期	土坑	入佐式，刻目突帯文	
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鏃	
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼	
	旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文早時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。							

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
20	田原道ノ上	鹿児市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 (1) 刊行 H27年度 H28年度 (2) 刊行 R元年度 (3) 作業中 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴住居跡，遺穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園B式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石鏃，石斧，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝	山ノ口式・中溝式，掘回線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，合石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器碗，鉄摩擦
	縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，遺穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。						
21	立小要塚	鹿児市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 R２年度以降 (2) 作業 ※H24は埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
	縄文時代前期から古墳時代末までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。						
22	十二塚	鹿児市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	岡藤文，市来式，三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古　墳	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	清武通貫（加治木銭）
	弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴住居跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。						
23	石蔵	鹿児市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟A式，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式土器
	縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟A式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。						



第２図　東九州自動車道関連遺跡位置図

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

川久保遺跡の発掘調査は，平成26年度から平成30年度の５か年にわたり実施した。調査対象表面積は27,327㎡，調査対象延面積96,403㎡である。（Ｂ地点は，平成26年度から平成28年度，調査対象表面積6,091㎡，調査対象延面積14,704㎡である。Ｄ地点は，平成29年度から平成30年度，調査対象表面積2,408㎡，調査対象延面積4,338㎡である。）

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，大隅河川国道事務所の設置した道路建設用センターライン「ＳＴＡ154」と「ＳＴＡ155」を結ぶ延長線を基軸として，西側から東側に向かって１・２・３･･･，北側から南側に向かってＡ・Ｂ・Ｃ･･･とする10ｍ間隔で設定した。

このグリッドを基にして遺構・遺物の測量作業を行うことにした。光波測距儀（トータルステーション）で測量作業を行う場合，測量座標は，Ａ－１区の左上を原点（０，０）とし，縦軸をＸ，横軸をＹ軸とした。

調査は，調査区内の雑木や雑草の伐採を行った後，文化財課による試掘調査と，埋文センターが実施した確認調査の結果に基づき，表土から遺物包含層上面まで重機で除去した後，遺物包含層は人力で掘り下げを行った。

出土した遺物については，必要に応じて出土状況の記録写真撮影を行った後，トータルステーションで記録し，取り上げを実施した。まとまりのある遺物や遺構に伴う遺物については，縮尺10分の１で実測を行った。遺構については，検出状況の写真を撮影後，人力による掘り下げを行い，必要に応じて，段階的に断面や完掘状況の記録写真を撮影し，遺構の規模に応じて縮尺10分の１，20分の１で実測を行った。遺物包含層間にある無遺物層は，その都度重機で除去し，下層の遺物包含層を人力によって掘り下げる作業を繰り返した。

なお，調査中に生じた掘削土については，調査区に仮置きしたほか，大隅河川国道事務所から指定された調査区外へ搬出し，調査が終了した調査区については重機による埋め戻しと整地を行った。

２　遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出した遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構の認定・分類・時期判断

検出面，埋土状況や色調，規模等を担当者で検討したうえで総合的に判断し，遺構の認定を行った。本編に掲載した主な遺構の認定は以下のとおりである。

土坑及びピットは，ほぼ円形で概ね径50cm以下のものをピット，それ以上のものを土坑とした。方形，円形，楕円形など形状が異なるが，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し区別した。土坑には，後世の削平の影響もあり，該当時期の地層より下位で検出したものもあるが，埋土の堆積状況や色調，遺構内遺物などを検討し，時期判断を行った。

集石遺構は，ある程度の数量の礫が集中して検出されたもので，礫の密集度，検出状況，掘り込みの有無などを総合的に判断して認定した。やや散礫状に広がるものも含まれる。時期については，検出面や集石遺構内外の出土遺物などを検討したうえで判断した。

(2)　遺構の検出方法

遺構の検出は，各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めた。古墳時代の遺構については，遺物包含層の主体となるⅢ層と遺構埋土が同じ黒褐色系の色調であったことから，判別のしやすい面での検出が多くなった。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

平成26～28年度の発掘調査支援業務においては，発掘調査と並行して遺物の水洗・注記を行った。

水洗作業は，基本的には柔らかいブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器には超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗終了後順次行った。注記は，十分な換気に留意しつつ，手作業やジェットマーカーを使用し進めた。遺跡記号は，データを管理している県の南の縄文調査室に確認をとった上で，「ＫＫＢ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。

平成27年度の整理作業では，遺物洗浄・注記から作業を開始した。遺構内遺物と包含層遺物に分類し，包含層出土土器については胎土や文様等で時期ごとに分別した。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。

平成29年度の整理作業は，第１整理作業所にて，遺物洗浄・注記，包含層出土遺物の選別・抽出を行った。

平成30年度は，大福コンサルタント株式会社に整理作業及び報告書作成支援業務を委託し，第２整理作業所にて，掲載遺物の選定・実測・拓本・トレース，遺構図等データの編集加工，レイアウト作成，原稿執筆等の作業を実施した。遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。土層断面や遺構図は，原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。遺物出土分布図は，トータルステーションで取り上げたデータを統合し，図化ソフトを使用して作成した。

平成31（令和元）年度の整理作業は，第二整理作業所にて，掲載遺物の選定・実測・拓本・トレース，遺構図等データの編集加工，レイアウト作成，遺物写真撮影，原稿執筆等の作業を実施し，原稿の校正等の本報告書作成作業，印刷・製本を行った。

第２節　層序

基本層序は，以下のとおりである。調査区内における地層の堆積（残存）状況に差があるため，Ⅰａ層～Ⅳａ層までは残存状況が良好なＢ－７・８区，Ⅳｂ～Ⅺ層までは１－６・７区の地層をそれぞれ指標とした。

遺物包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細は，以下のとおりである。

Ⅰ層：表土，旧耕作土

Ⅰａ層：表土，遺跡を覆っていた堆積土で造成土を含む。

Ⅰｂ層：旧耕作土

Ⅰｃ層：しまりが弱く，Ⅰａ層より明るい。

Ⅱ層：黒色系の色調をもつ層である。色調や硬さの違いにより11層に分層した（第３表参照）。

Ⅱａ層：硬くしまる。

Ⅱｂ層：Ⅰｂ層とⅣａ層の混土。

Ⅱｃ層：しまりがあり，１～３㎜程度の褐色土含む。

Ⅱｄ-ｘ層：Ⅱｃ層より明るくしまりが強い。

Ⅱｄ-ｙ層：しまりがあり，暗褐色土と褐色土の混土。

Ⅱｄ-ｚ層：暗褐色土と褐色土の混土。灰白色砂質土Ｐ１またはＰ２（桜島起源の噴出物）を含む。

Ⅱｅ層：しまりが強い。

Ⅱｆ層：しまりが強く，Ⅱｅ層より暗い。

Ⅱｇ-ｘ層：やや砂質でしまりが強い。

Ⅱｇ-ｙ層：しまりあり。

Ⅱｇ-ｚ層：暗褐色土と褐色土の混土。

Ⅲ層：古墳時代～古代にかけての遺物包含層。

Ⅳ層：色調の違いから２層に分層した。

Ⅳａ層：縄文時代晩期～古墳時代の遺物包含層。

Ⅳｂ層：軽石（池田降下軽石。約6,400年前，阿多カルデラ起源の噴出物）を含む。

Ⅴ層：アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層であるが，色調や性質などの違いから３層に分層した。

Ⅴａ層：アカホヤ火山灰を基本とする二次堆積層の腐植土。

Ⅴｂ層：アカホヤ火山灰二次堆積層である。アカホヤ火山灰一次の軽石が点在する。

Ⅴｃ層：アカホヤ火山灰一次の軽石（幸屋降下軽石）層。Ⅴｂ層とⅥ層間にブロック状に堆積。

Ⅵ層：縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層。

Ⅶ層：黒色系の色調で硬質である。色調など特徴の違いから２層に分層した。

Ⅶａ層：縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層。

Ⅶｂ層：硬質である。基本的に無遺物層。

Ⅷ層：P14（薩摩火山灰）（約12,800年前，桜島起源の噴出物）関連の層である。硬質でややブロック状に堆積する。

Ⅸ層：旧石器時代ナイフ形石器文化期の遺物が出土した層である。いずれも粘質がある。色調と粘質の違いから３層に分層した。

Ⅸａ層：粘質は弱い。

Ⅸｂ層：粘質が強い。

Ⅸｃ層：Ⅸｂ層に比べて粘質は弱い。

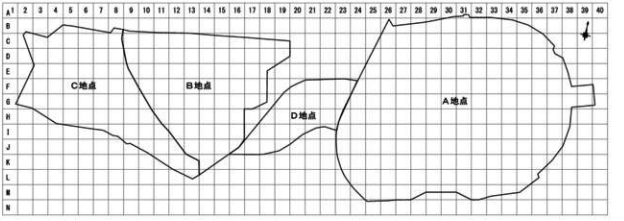
Ⅹ層：粘質があり，小礫を含む。

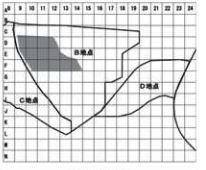
ⅩⅠ層：ＡＴ（姶良・丹沢火山灰），通称シラスとよばれる，約26,000～29,000年前の姶良カルデラを起源とする噴出物の二次堆積層である。無遺物層である。

※火山灰の年代は，2003　町田洋　新井房夫著　東京大学出版会『新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺』（P106～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。

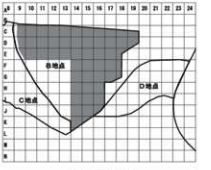
第３表　川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点基本層序

層		色調・土質	層厚
Ⅰ層	Ⅰａ	暗褐色土	90～140cm
	Ⅰｂ	暗褐色土	12～20cm
	Ⅰｃ	黒褐色土	10～25cm
Ⅱ層	Ⅱａ	黒褐色土（10YR2/3）	６～14cm
	Ⅱｂ	暗褐色土（7.5YR3/3）	４～15cm
	Ⅱｃ	黒褐色土（7.5YR2/2）	16～25cm
	Ⅱｄ－ｘ	暗褐色土（7.5YR3/3）	５～12cm
	Ⅱｄ－ｙ	暗褐色土（7.5YR3/4）	６～８cm
	Ⅱｄ－ｚ	暗褐色土（7.5YR3/4）	６～８cm
	Ⅱｅ	黒褐色土（7.5YR2/2）	12～22cm
	Ⅱｆ	黒色土（7.5YR2/1）	５～10cm
	Ⅱｇ－ｘ	暗褐色土（7.5YR3/4）	５～８cm
	Ⅱｇ－ｙ	暗褐色土（7.5YR3/3）	６～12cm
	Ⅱｇ－ｚ	暗褐色土（7.5YR3/3）	６～22cm
Ⅲ層		黒色土	12～20cm
Ⅳ層	Ⅳａ	褐色土（10YR4/4）	56～63cm
	Ⅳｂ	褐色土（10YR4/6）	20～22cm
Ⅴ層	Ⅴａ	明黄褐色土	10～30cm
	Ⅴｂ	明褐色土	25～30cm
	Ⅴｃ	黄橙色軽石層	５～10cm
Ⅵ層		暗褐色土	20～35cm
Ⅶ層	Ⅶａ	黒褐色土	20～30cm
	Ⅶｂ	黒色土	20～30cm
Ⅷ層		淡黄褐色土	15～20cm
Ⅸ層	Ⅸａ	暗褐色粘質土	10～15cm
	Ⅸｂ	黒褐色粘質土	６～15cm
	Ⅸｃ	暗茶褐色粘質土	６～15cm
Ⅹ層		にぶい黄褐色粘質土	８～15cm
Ⅺ層		明黄褐色砂質土	15cm～

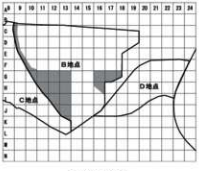




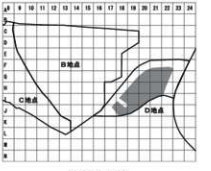
平成26年度



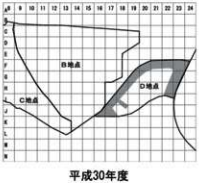
平成27年度



平成28年度

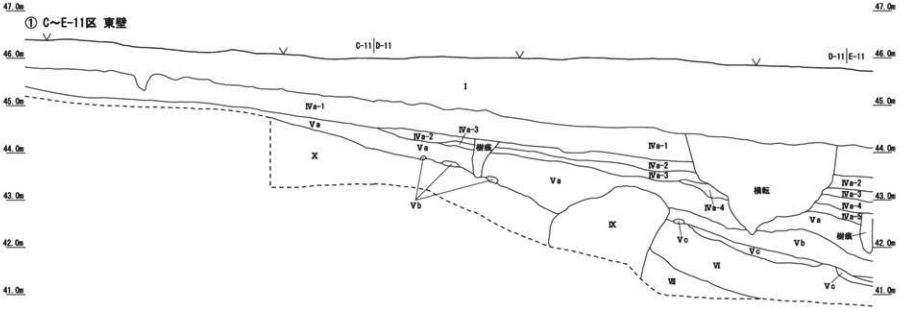


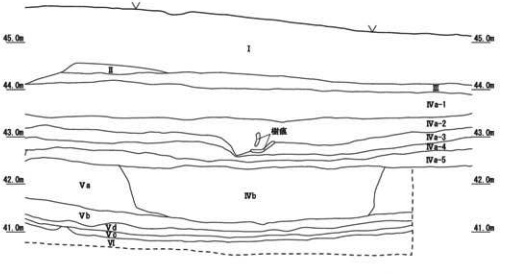
平成29年度

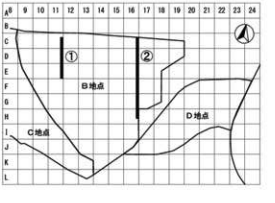


平成30年度

第３図　川久保遺跡全体図及びＢ・Ｄ地点年度別調査範囲

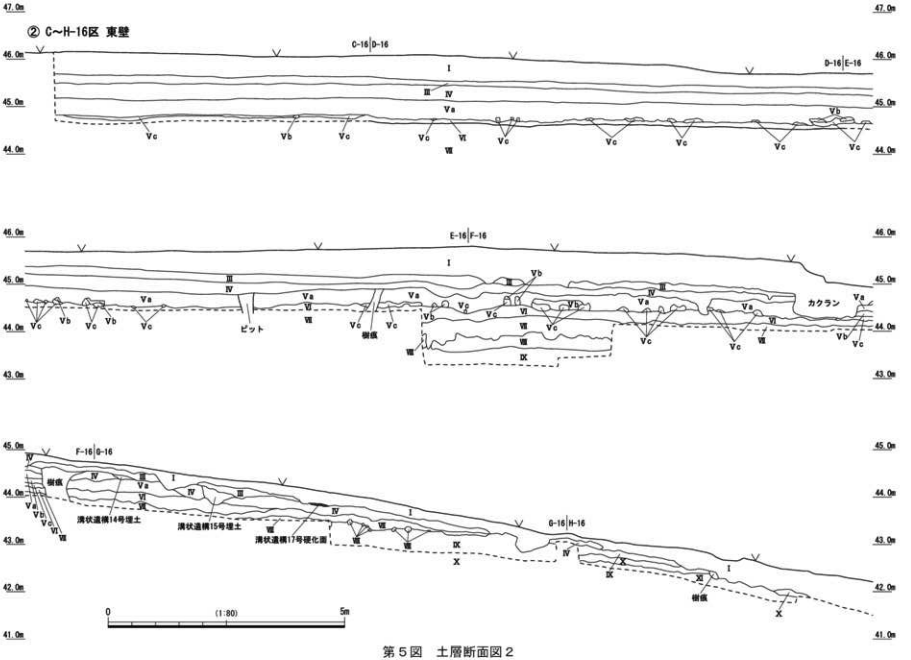




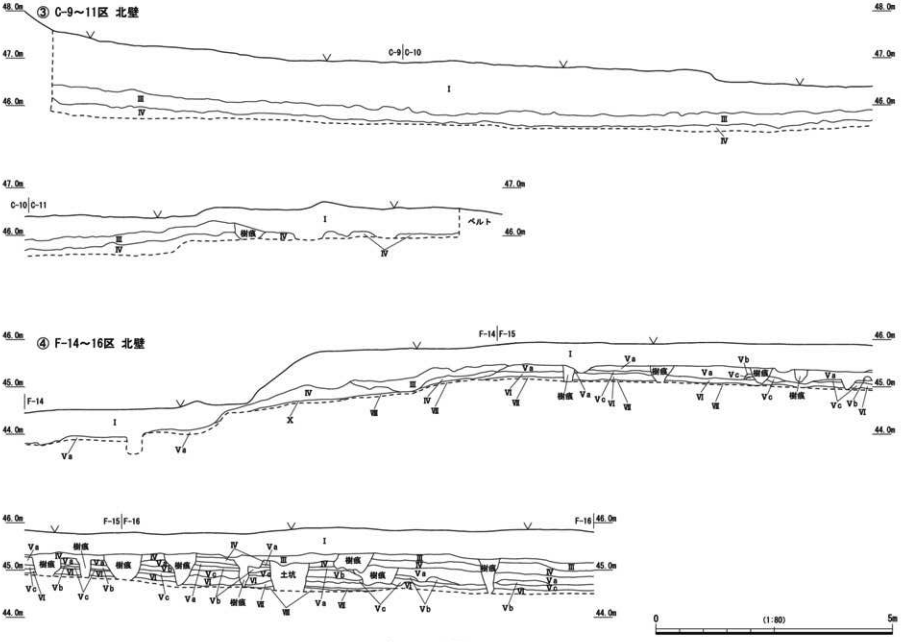


0 (1:80) 5m

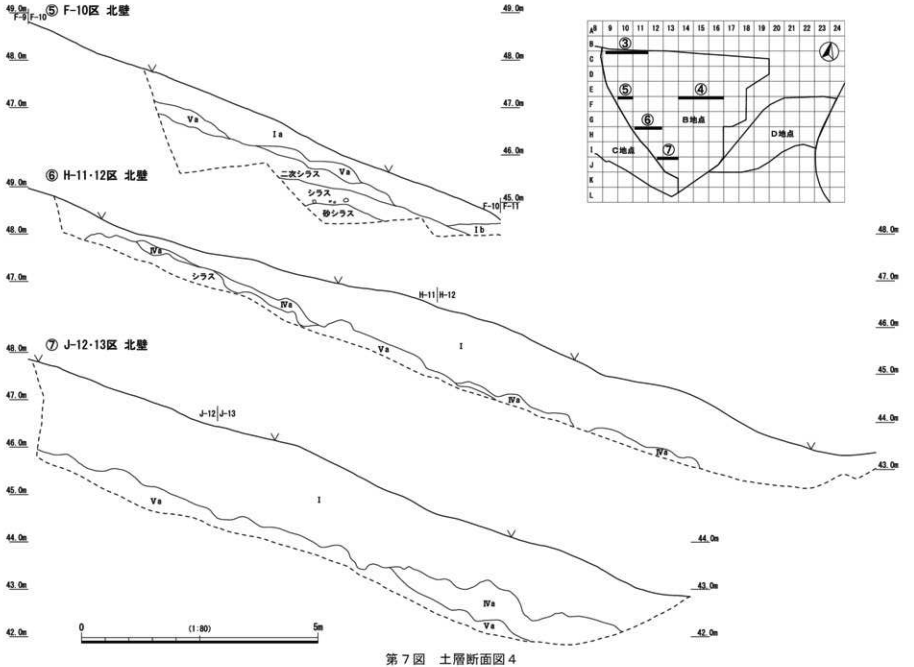
第４図　土層断面図１


② C～H-16区 東壁
C-16|D-16
D-16|E-16
E-16|F-16
F-16|G-16
G-16|H-16
47.0m
46.0m
45.0m
44.0m
43.0m
42.0m
41.0m
ピット
樹痕
カクラン
溝状遺構14号埋土
溝状遺構15号埋土
溝状遺構17号硬化面
0
(1:80)
5m

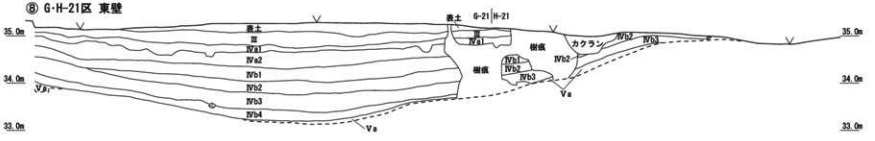
第５図　土層断面図２

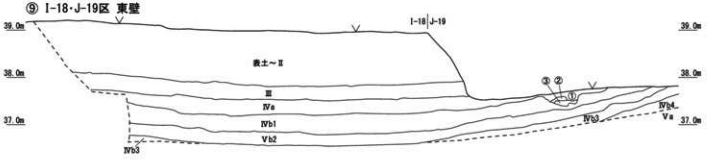

③ C-9～11区 北壁
48.0m
47.0m
46.0m
C-9
C-10
C-11
I
III
IV
樹痕
ベルト
④ F-14～16区 北壁
45.0m
44.0m
F-14
F-15
F-16
Va
Vb
Vc
VI
VII
VIII
X
土坑
0
(1:80)
5m

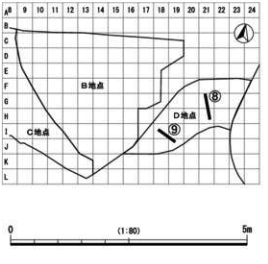
第６図　土層断面図３


⑤ F-10区 北壁
F-9 F-10
49.0m
48.0m
47.0m
46.0m
45.0m
Ⅴa
Ⅰa
二次シラス
シラス
砂シラス
Ⅰb
F-10 F-11
⑥ H-11・12区 北壁
Ⅳa
H-11 H-12
Ⅰ
44.0m
43.0m
⑦ J-12・13区 北壁
J-12 J-13
42.0m
0
(1:80)
5m
A B C D E F G H I J K L
9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
③
④
⑤
⑥
⑦
B地点
C地点
D地点

第７図　土層断面図４


⑧ G-H-21区 東壁
35.0m
34.0m
33.0m
表土
Ⅲ
Ⅳa1
Ⅳa2
Ⅳb1
Ⅳb2
Ⅳb3
Ⅳb4
Ⅴa
Ⅴb
G-21
H-21
樹根
カクラン
Ⅳb2
Ⅳb3


⑨ I-18・J-19区 東壁
39.0m
38.0m
37.0m
I-18
J-19
表土～Ⅱ
Ⅲ
Ⅳa
Ⅳb1
Ⅴb2
Ⅳb3
Ⅳb4
Ⅴa


B地点
C地点
D地点
⑧
⑨
0
(1:80)
5m

第８図　土層断面図５

B　地　点

第４章　発掘調査の成果（Ｂ地点）

第１節　Ⅵ～Ⅷ層の調査

通常は遺構・遺物の時期認定を行い，それに基づき，時期ごとに掲載をしていく。ところが，川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点は，調査区の大部分が傾斜地・谷部であるため，各層から複数の時期の遺構・遺物が出土している。

そのため，遺構の時期認定にあたって，帰属時期に幅を持たせたものが多い。そこで，通常の時期別の掲載では区分できない遺構が多いため，検出層位に依拠し，掲載することとした。そのうえで，埋土等から時期を絞り込むことができたものは，時期ごとにまとめた。

遺物についても，出土層に依拠し掲載し，土器型式から時期を認定できるものは，その時期ごとにまとめた。

遺構・遺物の各時代ごとの整理・分析等については，総括において行う。

１　調査の概要

Ｂ地点の調査区域は，Ⅴ層上面での地形をみると，南東から北西に入り込んだ谷部分と，その谷に向かって北東から南西に緩やかに傾斜する緩斜面とに分けられる。

Ⅵ～Ⅷ層の調査は，10ｍ四方のグリッドを設定し，調査を行った。安全管理上，調査区全面を調査することはできず，調査区北東部にある丘陵地のみ調査した。

Ⅵ～Ⅷ層からは縄文時代早期の遺構・遺物が出土した。Ⅷ層が薩摩火山灰層である。Ⅶ層が薩摩火山灰直上の黒色土・黒褐色土である。Ⅵ層は黄橙色軽石の幸屋降下軽石層直下の層で暗褐色土である。

遺構は，Ⅷ層から土坑が１基，Ⅶ層から集石が２基，Ⅵ層から土坑墓１基と集石７基を検出した。土坑は，Ⅷ層面で検出したが，埋土が黒褐色土であることから，本来はもっと上位の層から掘り込まれていたものと思われる。

集石は，Ⅷ層から２基，Ⅵ層から７基を検出した。主に，Ｃ・Ｄ-13・14区とＥ・Ｆ-16区の２つのエリアで検出した。エリアと集石の時期との関連は不明である。いずれも谷部へと下る斜面の落ち際で検出されている。掘り込みをもつタイプは検出していない。

土坑墓は，Ⅵ層面で検出した。遺構内の古銭や科学分析の結果から，中世～近世の土坑墓の可能性が高いが，検出面に依拠してここに掲載した。

遺物は，縄文時代早期・後期の土器とともに，打製石鏃，磨敲石が出土している。また，集石９号からは線刻礫が出土している。

２　遺構

(1)　土坑

土坑１号（第９図）縄文時代早期の土坑

Ｇ-17区のⅧ層で検出された。調査区東端の緩やかな斜面にある。長軸83cm，短軸70cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約18cmである。埋土がⅦ層の黒褐色土であることから，縄文時代早期の遺構と判断した。

(2)　集石

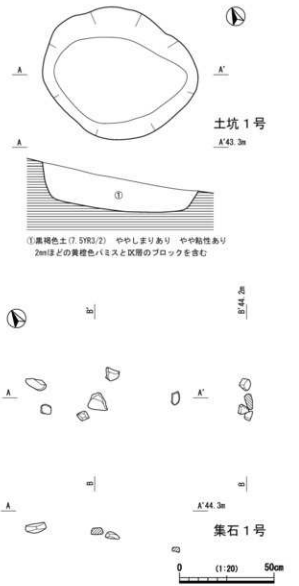
集石の形態分類については，川久保遺跡Ｃ地点の分類を参考に，次のように分類した。

タイプⅠ：構成礫の明確な集中部と，掘り込み部のないもの。

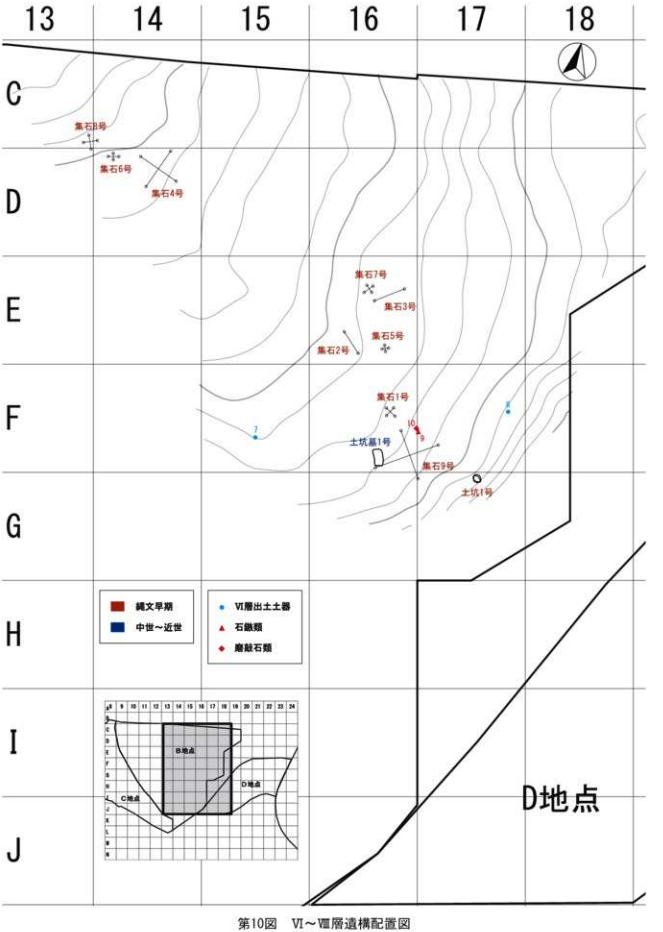
タイプⅡ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部のないもの。

タイプⅢ：構成礫の明確な集中部があり，掘り込み部を伴うもの。

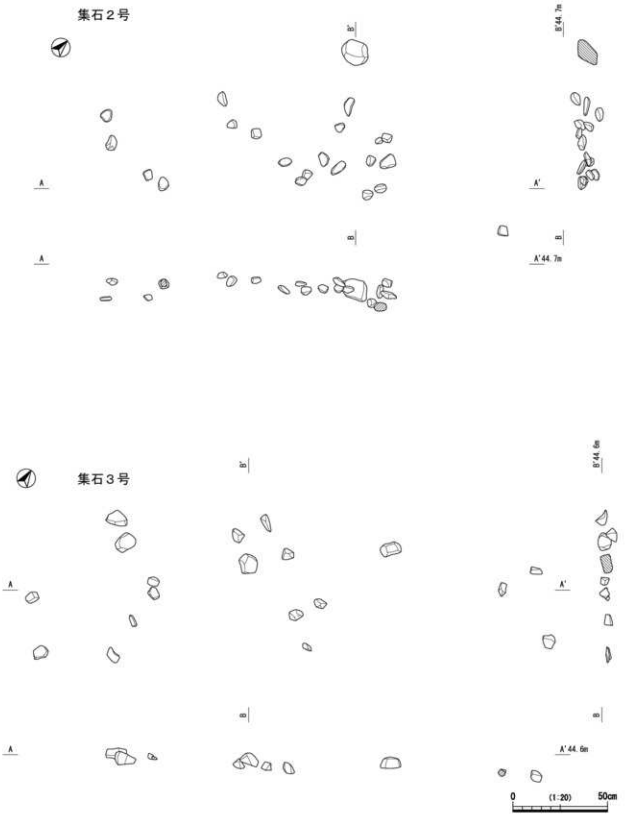
時期認定については，検出状況から判断した。



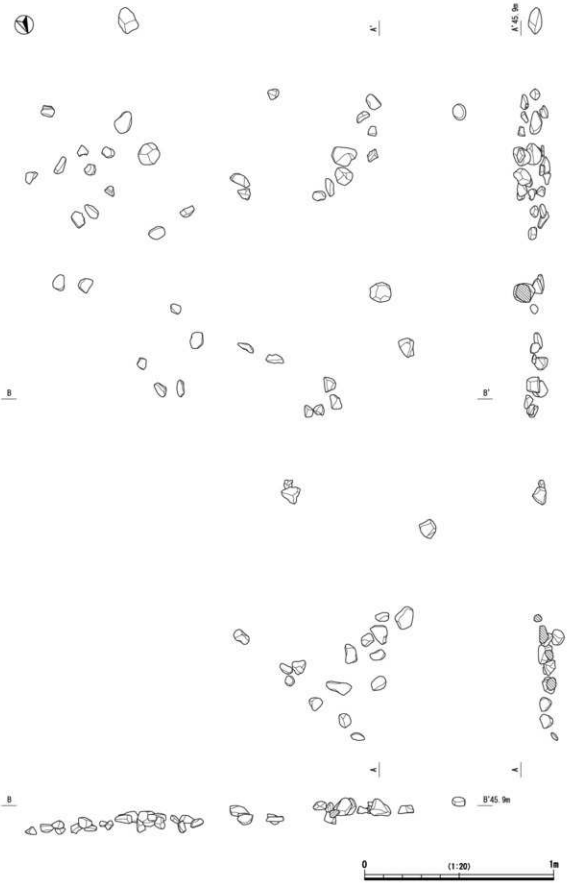
第９図　土坑１号・集石１号



第10図　Ⅵ～Ⅷ層遺構配置図
及び遺物出土状況図



第11図　集石２・３号



第12図　集石４号

① 縄文時代早期の集石

集石１号（第９図）タイプⅠ

Ｆ-16区のⅦa 層，谷部へと下る斜面で検出された。82×28㎝の範囲に６個の礫が散在している。10㎝大の亜角礫が多い。被熱痕のある礫が確認できる。砂岩製磨石片の小破片が出土している。

集石２号（第11図）タイプⅠ

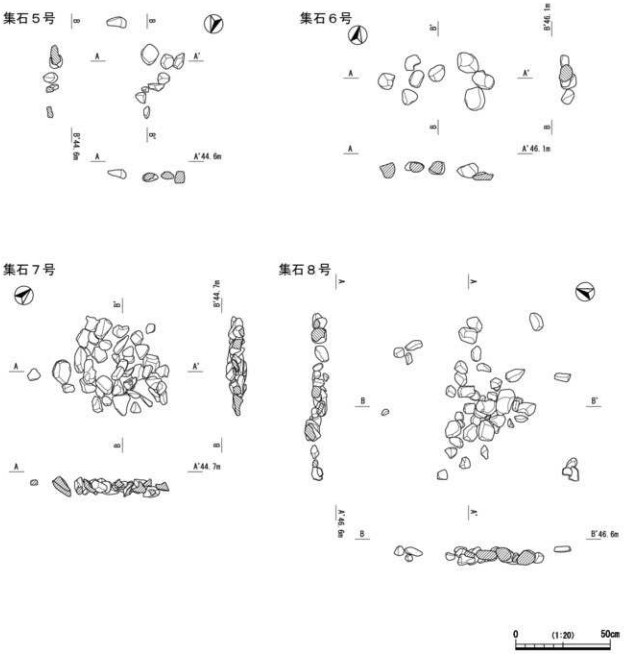
Ｅ-16区のⅥ層で検出された。215×103㎝の範囲に，27個の礫が上下の重なりもなく散在している。10㎝以下の礫が多い。ホルンフェルスが14個と多いのが特徴である。被熱痕のある礫が多く確認できる。

集石３号（第11図）タイプⅠ

Ｅ-16区のⅥ層で検出された。280×81㎝の範囲に，19個の礫が上下の重なりもなく散在している。５～10㎝大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が17個と多い。10点の礫に被熱痕が確認できる。集石７号とは隣接する。

集石４号（第12図）タイプⅠ

Ｄ-14区のⅥ層で検出された。388×233㎝の範囲に，62個の礫が散在している。５～10㎝大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が37個と多い。約４割の礫に被熱痕が確認ができる。ホルンフェルス製磨石の小破片１点が出土している。



第13図　集石５～８号

集石５号（第13図）タイプⅡ

E-16区のⅥ層で検出された。53×42cmの範囲に，９個の礫がまとまって検出された。５～10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が５点と多い。被熱痕のある礫が数点確認できる。

集石６号（第13図）タイプⅡ

D-14区のⅥ層で検出された。61×31cmの範囲に，８個の礫がまとまって検出された。10cm大の亜円礫が多く，礫構成は安山岩がほとんどを占める。被熱痕のある礫が数点確認できる。

集石７号（第13図）タイプⅡ

E-16区のⅥ層で検出された。75cm×53cmの範囲に，45個の礫が密集している。５～10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が23点と多い。被熱痕が確認できる礫が数点ある。

集石８号（第13図）タイプⅡ

C-13・14，D-13区のⅥ層で検出された。105×89cmの範囲に，44個の礫が集中している。５～10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩21個・ホルンフェルス22個と，ホルンフェルスが多いのが特徴である。被熱痕のある礫が数点確認できる。

集石９号（第14図　１）タイプⅡ

F・G-16・17区のⅦa 層で検出された。460×404cmの範囲に，237個の礫が検出された。５～10cm大の亜角礫が多い。礫構成は安山岩が124個と多く，ホルンフェルスが99個と続く。被熱痕のある礫が数点確認できる。

１は，集石９号の構成礫中に混在して出土した線刻礫である。安山岩のやや不整形な盤状礫を素材とし，２～３方向に集約するごく浅い刻線十数本が平坦な正面側に観察されるほか，同じ面と左右の側面及び凸レンズ状になっている裏面側には，深さの不揃いな円形の凹みが不規則に点在している。礫の表面が全体的に軽く風化しているため，残念ながら刻線等に用いられた工具痕などは視認できないが，凹みについては輝石等の斑晶が抜けた穴を利用して穿ったものと想定される。集石の構成礫中から出土しているが，明瞭な被熱痕跡は確認されない。また，正面側は平坦であるが，裏面側は敲打痕のようにもみえる細かい凹凸がほぼ全面に観察され，対称的である。長さ13.3cm，幅10.9cm，厚さ3.9cm，重さ607.5ｇである。

(3)　土坑墓（中世～近世の土坑墓）

土坑墓１号（第15図　２～６）

F-16区のⅥ層で検出された。長軸155cm，短軸83cmの平面角丸長方形である。長軸は，ほぼ南北方向に向いており，方角を意識したものと考えられる。検出面からの深さは約29cmであるが，検出層との関係から，掘り込み面は30～40cm上位であったと考えられる。ほぼ検出面に近い埋土中から，古銭５枚が北半分寄りで出土した。埋土中の炭化物の年代測定の結果では，106±20yrBP の数値が出ている。嘉定通寶が江戸初期まで流通していたこともあり，近世の土坑墓の可能性が高いが，検出面に依拠してここに掲載した。

５点の古銭が出土した。２は太平通寶である。鋳造期間は北宋の976～983年までである。３は淳化元寶である。初鋳は北宋で990年である。４は淳照元寶である。鋳造期間は南宋で1127～1279年である。５は嘉定通寶である。初鋳は1208年である。６は半分以上が欠損するが，洪武通寶である。「武」と「通」の文字部分以外を欠く。

３　遺物

(1)　土器

①　ⅠA類土器（第16図　７）

７は深鉢の口縁部である。口縁部は厚みがあり，内湾する。外面は貝殻刺突文を施文する。外面に煤が付着。

②　ⅣC類土器（第16図　８）

８は，深鉢の口縁部である。内外面ともに工具によりナデを施す。

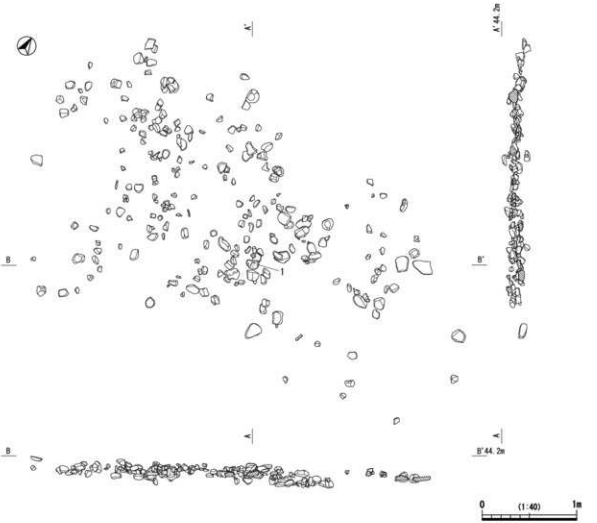
(2)　石器

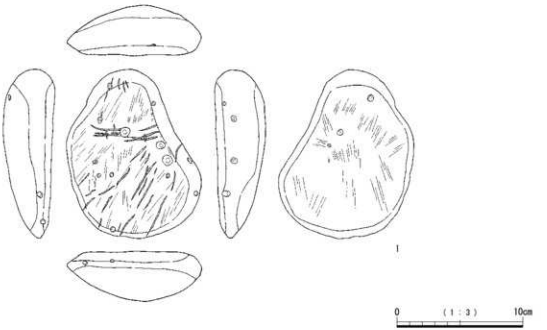
①　石皿（第16図　９）

９は，左脚端のみわずかに欠損する。やや厚みのある黒曜石の剥片を素材とし，平面形は略正三角形で基部を抉り，両脚端は丸く仕上げる。正裏面に施された深い成形剥離で形状まで整え，両側縁は鋸歯状を呈する。長さ2.1cm，幅1.8cm，厚さ0.5cm，重さ1.0ｇである。

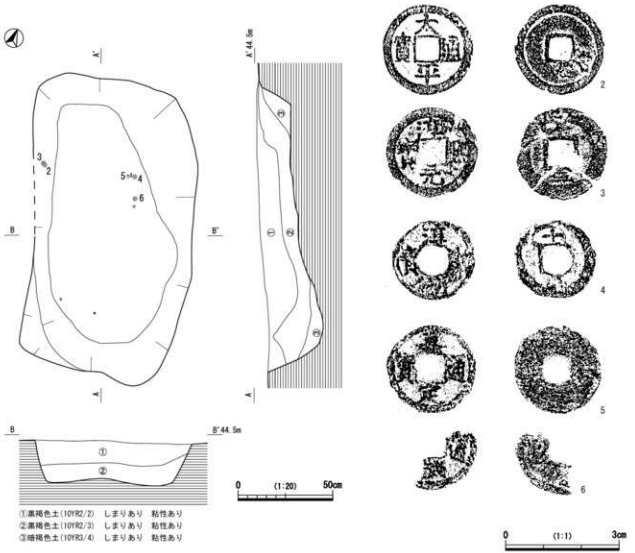
②　磨・敲石（第16図　10）

10は，輝石安山岩製で完形品である。磨面は主に正面に形成される。裏面にも磨面は認められるがごくわずかである。敲打部は両側面と上面に観察されるが，あまり顕著ではない。被熱痕跡等は観察されない。長さ9.9cm，幅8.9cm，厚さ5.5cm，重さ565.0ｇである。

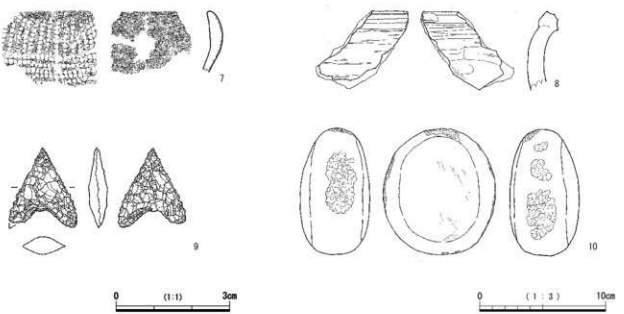




第14図　集石９号・出土遺物



第15図　土坑墓１号・出土遺物



第16図　Ⅵ層出土遺物（ⅠA，ⅣC類，石器）

第２節　Ⅳ・Ⅴ層の調査

１　調査の概要

Ｂ地点の調査区域は，Ⅴ層上面での地形をみると，調査区の中央部を，北西から南東方向に深い谷が貫いており，谷の北東側が緩やかな丘陵地となっている。谷の西側を上ったところに，Ｃ地点がある。この谷は，南西へと緩やかに下り，Ｄ地点の谷部へと繋がっていく。

Ⅳ・Ⅴ層の調査は，10ｍ四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。Ⅳ・Ⅴ層からは，縄文時代早期から中世の遺構・遺物が出土したが，層序の細分等によっても明確な時代区分ができなかった。ただし，遺物や埋土状況等との関連で時代の特定できた遺構もある。

遺構は，掘立柱建物跡・埋設土器・土坑・焼土跡・炭化物集中・ピット・集石・礫集中・溝状遺構・道跡を検出している。遺構の時期認定は，発掘調査時に，検出状況・埋土の特徴・埋土中出土遺物などから行った。

掘立柱建物跡は，調査区の北東側の丘陵のⅤ層で，溝状遺構に囲まれるようにして６棟検出された。柱穴の埋土の状況などから，３棟が古墳時代，３棟は中世の遺構と判断した。

埋設土器は，谷部の谷底部分のⅣ層で１基検出した。煤付着の状況から，煮沸具として使われた可能性のある古墳時代の壺形土器が出土している。

土器集中は，谷部の谷底部分のⅣ層で４か所検出した。古墳時代の甕形・壺形・鉢形土器などが出土している。

土坑は，調査区南側の Ｉ・Ｊ-13～16区や，調査区北東側の掘立柱建物跡の周囲を中心に，Ⅴ層から７基，Ⅳ層から25基の計32基検出されている。検出状況などから，時期を特定できたものは，縄文晩期２基，古墳時代５基，中世２基であった。その他の土坑は，時期の特定が難しく，幅を持たせた時期認定を行った。

焼土跡は，谷部の斜面である，Ｄ-11・12，Ｅ-12区のⅤ層で３か所検出された。

炭化物集中は，谷底部分であるＣ・Ｄ-10・11区のⅣ層で３か所検出された。

集石・礫集中は，そのほとんどが谷部の谷底部分で検出された。Ⅴ層から礫集中１基，Ⅳ層からは集石２基，礫集中17基が検出された。

溝状遺構は，掘立柱建物跡が検出された調査区北東側の丘陵地の縁辺を囲むように多数検出された。Ⅴ層から11条，Ⅳ層から６条検出された。

道跡は，遺跡内を北西方向から南東方向に傾斜する谷部に沿ってほとんどの道跡が形成されている。Ⅳ層から７条検出された。

遺物については，縄文時代早期から中世の土器が出土している。石器は，打製石鏃，磨製石鏃，石匙・スクレイパー，十字型石器，横刃型石器，打製石斧，磨製石斧，石庖丁，磨・敲石類，石皿などが出土している。しかし，土器も石器も基本的には流れ込みによる可能性があり，それらの遺物と層位との関係は，本来のものでない可能性も考慮に入れる必要がある。

２　Ⅴ層（第19図～第33図）

(1)　遺構

①　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，６棟が検出された。柱穴の埋土が，暗褐色土・褐色土のものを古墳時代の建物跡（３棟），黒褐色土のものを中世の建物跡（３棟）と判断した。ただし，柱間距離やピットの径などから考えると，古墳時代と判断したものも，古墳時代以降の遺構となる可能性もある。いずれも溝状遺構に囲まれるように，遺跡の北東側に立地しており，周辺には用途不明のピットが多数検出されている。

建物跡の方位は磁北と桁との角度から求め，柱穴の計測値は実測図による。また，平均値は各柱穴の長径の平均値×短径の平均値，深さは各柱穴の深さの平均値を記載してある。梁・桁行は，柱穴の心-心間で計測している。小数点以下は四捨五入して整数で記載している。

ア　古墳時代の掘立柱建物跡

掘立柱建物跡１号（第19図）

Ｃ・Ｄ-15・16区のＶｃ層で検出された。２間×３間の建物で，平面形はほぼ長方形を呈しており，主軸はN60°Ｅ，梁行Ｐ１-Ｐ３=396cm，桁行Ｐ１-Ｐ８=594cmを測る。内角はおよそ∠Ｐ１・Ｐ３・Ｐ６が88°，∠Ｐ３・Ｐ６・Ｐ８が90°である。柱痕跡は確認できなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径25×24cm，深さ28cmである。

掘立柱建物跡２号（第20図）

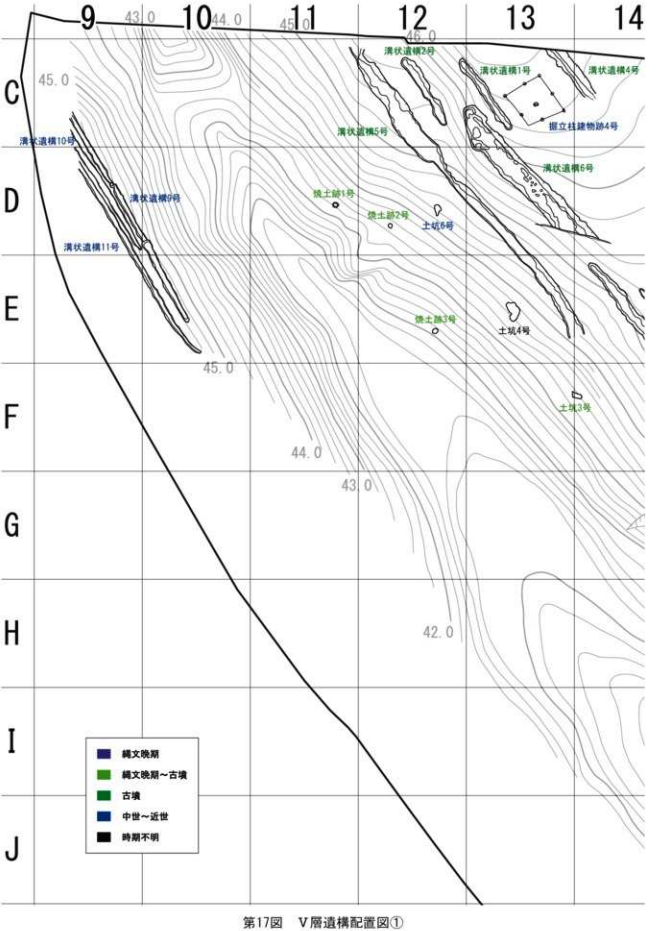
Ｅ-16区のＶａ層で検出された。掘立柱建物跡３号の東側に隣接する。１間×２間の建物で，北側に開く平面形台形を呈しており，主軸はＮ３°Ｗ，梁行Ｐ４-Ｐ５=171cm，Ｐ１-Ｐ２=264cm，桁行Ｐ１-Ｐ５=552cm，Ｐ２-Ｐ４=435cmを測る。内角はおよそ∠Ｐ５・Ｐ１・Ｐ２が80°，∠Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４が91°，∠Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５が108°，∠Ｐ４・Ｐ５・Ｐ１が81°である。柱痕跡は確認できなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径30×27cm，深さ39cmである。

掘立柱建物跡３号（第20図）

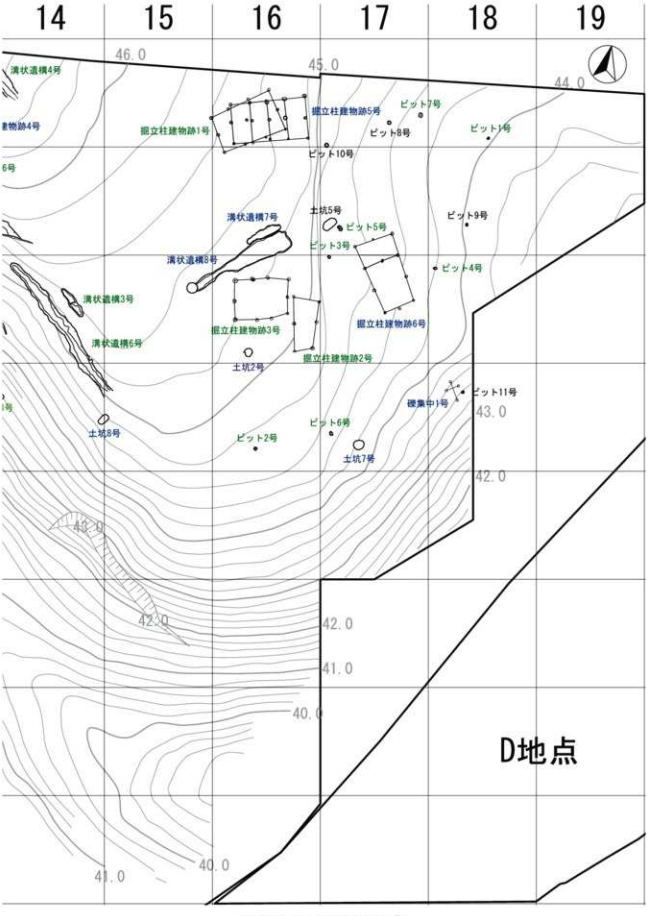
Ｅ-16区のＶａ層で検出された。２間×３間の建物で，平面形はほぼ長方形を呈しており，主軸はN72°Ｅ，梁行Ｐ４-Ｐ６=354cm，桁行Ｐ６-Ｐ９=552cmを測る。内角はおよそ∠Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６が88°，∠Ｐ４・Ｐ６・Ｐ９が105°，∠Ｐ６・Ｐ９・Ｐ１が91°，∠Ｐ９・Ｐ１・Ｐ４が94°である。柱痕跡は確認できなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径33×30cm，深さ39cmである。

イ　中世の掘立柱建物跡

掘立柱建物跡４号（第21図　11）



第17図　Ⅴ層遺構配置図①



第18図　Ⅴ層遺構配置図②

C-13区のVa層で検出された。2間×2間の建物で，平面形は北東側に開く台形状を呈しており，主軸はN46°W，梁行はP1-P3=372cm，桁行P3-P5=402cmを測る。内角はおよそ∠P1・P3・P5が96°，∠P3・P5・P6が78°，∠P7・P1・P3が82°である。柱痕跡は確認できなかった。

同一面上で検出された溝状遺構1・4号に囲まれるようにして検出されたが，南西側のピットは見つからなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径31×27cm，深さ28cmである。

11は，ピット6からの出土である。壺の肩部である。刻目突帯を1条貼付する。内外面ともに工具によるナデを施す。内面には指頭圧痕が確認できる。

掘立柱建物跡5号（第22図）

C-16区のVc層で検出された。4間×2間の総柱で，平面形はほぼ長方形を呈しており，主軸はN75°E，梁行はP1-P3=384cm，桁行P1-P9=696cmを測る。内角はおよそ∠P7・P9・P1が90°，∠P9・P1・P3が90°，∠P1・P3・P7が89°，∠P3・P7・P9が90°である。柱痕跡は確認できなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径29×26cm，深さ27cmである。

掘立柱建物跡6号（第23図）

D・E-17区のVa層で検出された。2間×3間の建物で，平面形はほぼ長方形を呈しており，主軸はN24°W，梁行はP1-P3=369cm，桁行P3-P6=708cmを測る。内角はおよそ∠P1・P3・P6が89°，∠P3・P6・P8が95°，∠P6・P8・P1が91°，∠P8・P1・P3が85°である。柱痕跡は確認できなかった。ピットの形状は平面楕円形ないし円形であり，平均して径26×23cm，深さ23cmである。

② 土坑

V層からは，7基検出された。埋土状況や遺物から，おおむね縄文時代晩期から中世以降の土坑と思われる。

ア 縄文時代晩期の土坑

土坑2号（第24図）

E-16区のVa層で検出された。調査区北東側の丘陵地にあり，長軸82cm，短軸71cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約88cmである。埋土は，レンズ状堆積をしており，6層に分層される。掘立柱建物跡2号・3号のすぐ南側で検出された。

イ 縄文時代晩期～古墳時代の土坑

土坑3号（第24図）

F-13・14区のVa層で検出された。谷部の南西に下る斜面に掘り込まれている。長軸94cm，短軸47cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約14cmである。埋土は単層で，やや粘性のある暗褐色土である。底部に礫が出土しているが，使用された跡は確認できなかった。

ウ 縄文時代晩期以降の土坑

土坑4号（第24図）

E-13区のVa層で検出された。谷部の南西に下る斜面に掘り込まれている。平面は長軸168cm，短軸105cmの不定形状で，検出面からの深さは約45cmである。

底面は北側壁面に向かい階段状に傾斜する。土坑の中央付近にあるピット状の落ち込みは，その埋土から後世の撹乱と思われる。埋土は単層で，しまりのある暗褐色土である。

土坑5号（第25図）

D-17区のVa層で検出された。調査区北東側の丘陵地にあり，長軸143cm，短軸79cmの平面楕円形に近い形状で，検出面からの深さは約83cmである。底面は北東側壁面から南西に向かって急傾斜し，そのまま垂直に立ち上がる。埋土は6層に分層され，全体的にアカホヤ火山灰を含む。

エ 中世以降の土坑

土坑6号（第25図）

D-12区のVa層で検出された。谷部の南西に下る斜面に掘り込まれている。平面は長軸106cm，短軸62cmの不定形状で，検出面からの深さは約15cmである。底面は南側壁に向かって緩やかに傾斜し，北東に段をもつ。埋土は，しまりがなくやや粘性のある黒褐色土である。

土坑7号（第25図）

F-17区のVa層で検出された。遺跡中央北側の小高い丘から南に傾斜しはじめる場所に位置する。長軸101cm，短軸89cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約41cmである。埋土はレンズ状堆積をなし，床上5cmの②より陶磁器の小片が出土していることから，中世以降の遺構と判断した。

土坑8号（第26図）

F-14・15区のVa層で検出された。調査区北東側の丘陵地から南東に傾斜しはじめる所に掘り込まれている。長軸108cm，短軸66cmの平面長楕円形で，検出面からの深さは約86cmである。底面は，北西から南西に向かって緩やかに傾斜し，南東側壁面付近で急に深くなっている。埋土は単層で，しまりの弱い黒褐色土である。

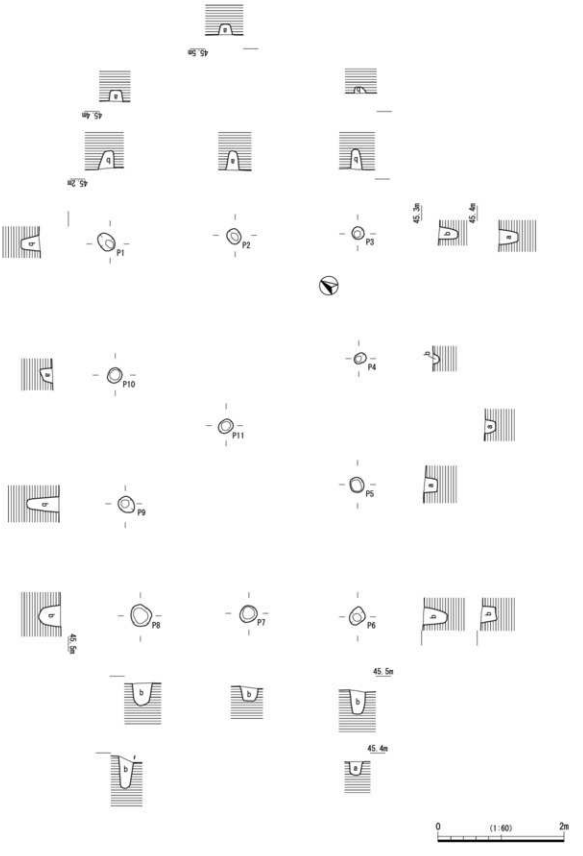
③ 焼土跡（縄文時代晩期～古墳時代の焼土跡）

焼土跡1号（第26図）

D-11区のVa層で検出された。谷部の南西に下る斜面に位置し，長軸62cm，短軸53cmの平面楕円形である。埋土中に，1～10mm程度の炭化物や赤く焼けた1～10cm程度の焼土ブロックが多く含まれる。検出状況や底部が不定形であることから，落雷によって樹根が燃えた可能性もある。

焼土跡2号（第26図）

D-12区のVa層で検出された。谷部の南西に下る斜面に位置し，表面のみ赤化した焼土部分は長軸40cm，短軸38cmの平面楕円形である。焼土下の掘り込み部分の検



第19図　掘立柱建物跡１号

第20図　掘立柱建物跡２・３号

出面からの深さは約28cmである。埋土は２層に分層され，どちらも暗褐色土だが，炭化物・焼土の量で分層した。

焼土跡３号（第26図　12）

E−12区のⅤa層で検出された。表面のみ赤化した焼土部分は，長軸54cm，短軸48cmの楕円形である。焼土下の掘り込み部分の検出面からの深さは約25cmである。底面は，東から西へ緩やかに傾斜するが，西側壁面付近で急に深くなっている。埋土は２層に分層され，どちらも暗褐色土だが，炭化物，焼土の量で分層した。

12は，埋土中から出土した打製石鏃で，安山岩製の完全品である。平面形は二等辺三角形状で基部には浅く抉りを入れ，両側縁は基部寄りをやや外弯させる。先端と脚端を除き比較的深く広い剥離で全形を整えている。被熱痕跡など当該遺構との関連を積極的に伺わせる形跡はみられない。長さ1.9cm，幅1.8cm，厚さ0.4cm，重さ1.0gである。

④　ピット

ピットは多数検出したが，建物跡と認定できないものが多かった。ここでは，礫や土器等を含む11基のピットについて図化した。その他は，遺構配置図に平面図のみ掲載することとした。以下，土器の出土したピットについてのみ記述する。

ピット11号（第27図　13）

F−18区のⅤa層で検出された。長軸27cm，短軸23cmの平面円形で，検出面からの深さは約40cmである。埋土は黒褐色土でしまりが弱く，粘性がない。

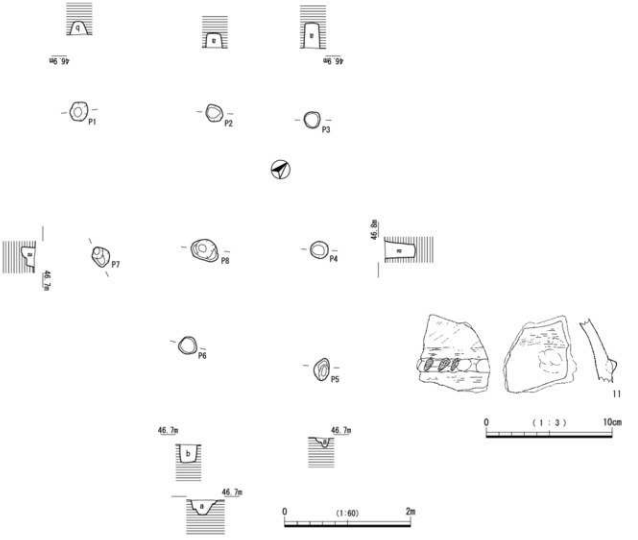
13は，土師器の埦である。口径約13.2cm，器高は約5.7cmを測る。回転ナデで成形される。底面はヘラ切り後ナデが施される。埋土や出土遺物などから中世の遺構と判断した。

⑤　礫集中（中世の礫集中）

本報告書では，礫が集中して検出された遺構で，縄文時代までのものは集石とし，古墳時代以降のものは礫集中として取り扱った。Ⅴ層から１基のみ検出された。Ⅵ〜Ⅷ層の調査における，集石の形態分類と同様に，タイプⅠ〜Ⅲの分類で判別した。

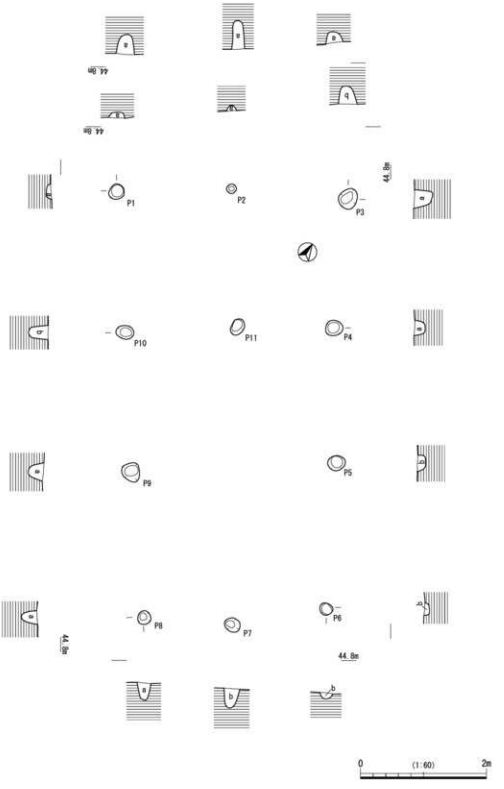
礫集中１号（第28図）タイプⅡ

F−18区のⅤa層で検出された。調査区北東側の丘陵

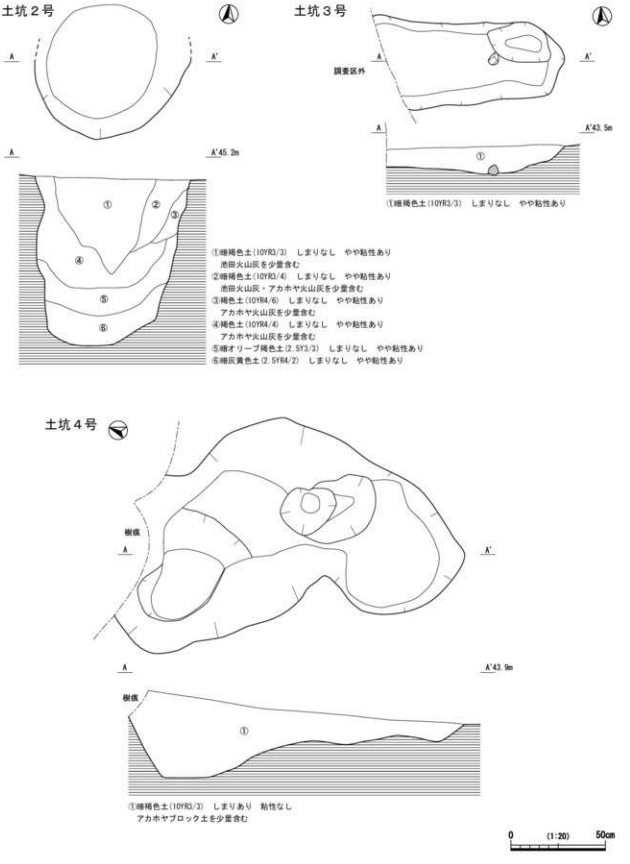


第21図　掘立柱建物跡４号・出土遺物

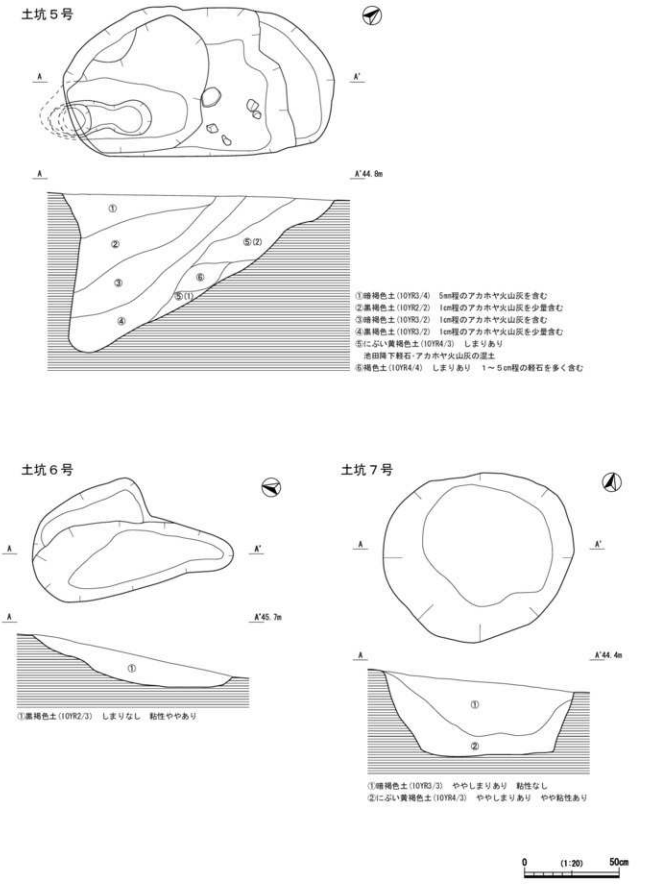
第22図　掘立柱建物跡５号



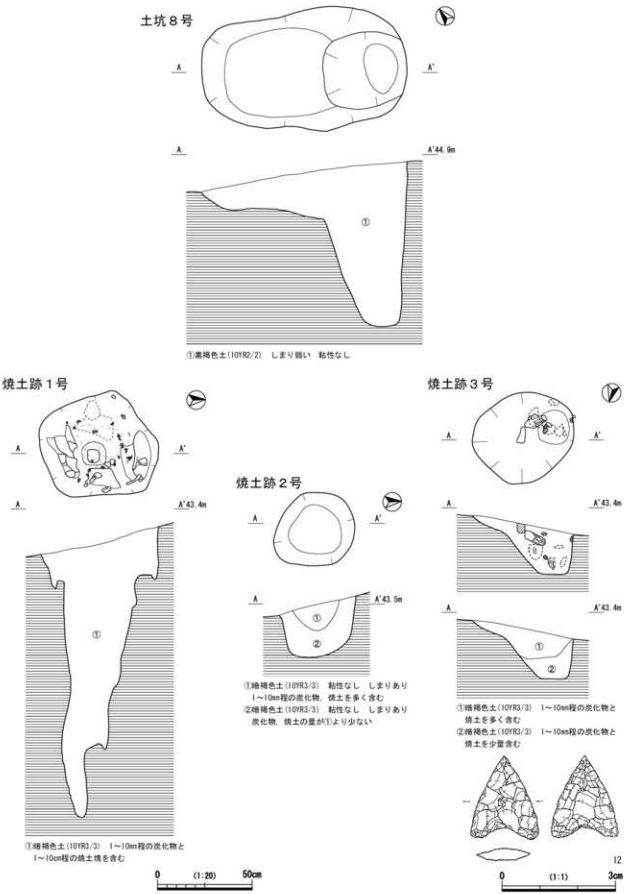
第23図　掘立柱建物跡６号


土坑２号
A
A'
A
A'45.2m
①
②
③
④
⑤
⑥
①暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　やや粘性あり
池田火山灰を少量含む
②暗褐色土(10YR3/4)　しまりなし　やや粘性あり
池田火山灰・アカホヤ火山灰を少量含む
③褐色土(10YR4/6)　しまりなし　やや粘性あり
アカホヤ火山灰を少量含む
④褐色土(10YR4/4)　しまりなし　やや粘性あり
アカホヤ火山灰を少量含む
⑤暗オリーブ褐色土(2.5Y3/3)　しまりなし　やや粘性あり
⑥暗灰黄色土(2.5Y4/2)　しまりなし　やや粘性あり
土坑３号
調査区外
A
A'
A
A'43.5m
①
①暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　やや粘性あり
土坑４号
樹痕
A
A'
A
A'43.9m
樹痕
①
①暗褐色土(10YR3/3)　しまりあり　粘性なし
アカホヤブロック土を少量含む
0
(1:20)
50cm

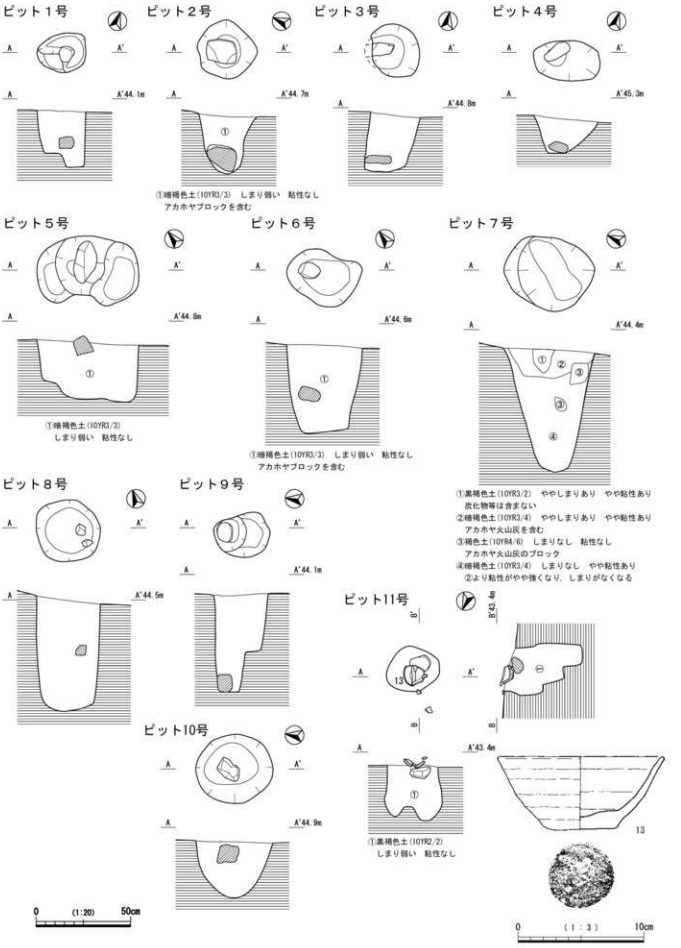
第24図　土坑２～４号


土坑５号
A
A'
A
A'44.8m
①
②
③
④
⑤(1)
⑤(2)
⑥
①暗褐色土(10YR3/4)　5mm程のアカホヤ火山灰を含む
②黒褐色土(10YR2/2)　1cm程のアカホヤ火山灰を少量含む
③暗褐色土(10YR3/2)　1cm程のアカホヤ火山灰を含む
④黒褐色土(10YR3/2)　1cm程のアカホヤ火山灰を少量含む
⑤にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりあり
池田降下軽石・アカホヤ火山灰の混土
⑥褐色土(10YR4/4)　しまりあり　1～5cm程の軽石を多く含む
土坑６号
A
A'
A
A'45.7m
①
①黒褐色土(10YR2/3)　しまりなし　粘性ややあり
土坑７号
A
A'
A
A'44.4m
①
②
①暗褐色土(10YR3/3)　ややしまりあり　粘性なし
②にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ややしまりあり　やや粘性あり
0
(1:20)
50cm

第25図　土坑５～７号



第26図　土坑８号，焼土跡１～３号・出土遺物



第27図　ピット1～11号・出土遺物

地から南東に下る緩やかな斜面にあり，112cm×95cmの範囲に，20個の礫が集まっている。10～15cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が11個と多い。被熱痕が確認できる礫が数点ある。

⑥ 溝状遺構

溝状遺構については，一定方向にV字または凹状に堀り込まれている遺構を溝状遺構と認定した。V層からは，11条検出された。掘立柱建物跡が検出された調査区北側で，北東側の丘陵地の縁辺を囲むように溝状遺構が多数検出された。また，北西方向から南東方向に傾斜する谷部の底にも検出された。

ア 古墳時代の溝状遺構

溝状遺構１号（第29図 14・15）

C-12・13区のVa層で検出された。調査区の北端部で，すぐ東側に掘立柱建物跡４号がある。北西方向から南東方向に傾斜する地形に沿って，掘り込まれている。検出範囲で長さ約7.9m，幅約0.8mの規模で，検出面からの深さは約23cmである。埋土は暗褐色土で，１cm程のアカホヤブロックを含む。

14は甕形土器の底部で，X1c類の土器に分類される。脚台が低く，径からするとやや小ぶりの甕であることがわかる。15は中世後半ごろの青磁碗である。見込みに草文が確認できる。

溝状遺構２号（第29図）

C-12区のVa層で検出された。調査区の北端部で，溝状遺構１号と溝状遺構５号と平行している。北西方向から南東方向に傾斜する地形に沿って，掘り込まれている。検出範囲で長さ約7.3m，幅約1.0mの規模で，検出面からの深さは約10cmである。埋土は暗褐色土で，しまりがある。

溝状遺構３号（第29図）

E-14区のVa層で検出された。溝状遺構６号の隣に位置しており，北西方向から南東方向に傾斜する地形に沿って，掘り込まれている。検出範囲で長さ約3.1m，幅約0.8mの規模で，検出面からの深さは約15cmである。埋土はにぶい黄褐色土で，しまりはなく，アカホヤブロックを含む。

溝状遺構４号（第29図）

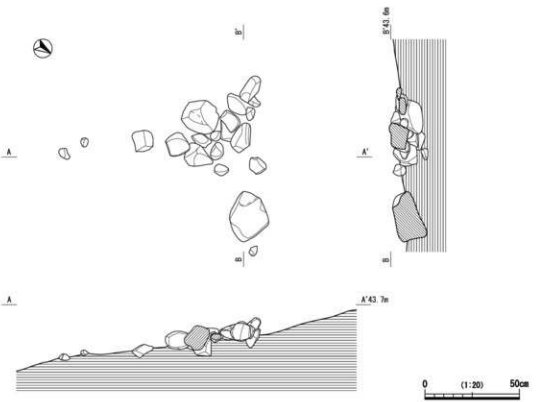
C-13・14区のVa層で検出された。調査区の北端部で，すぐ西側に掘立柱建物跡４号がある。北西方向から南東方向に傾斜する地形に沿って，掘り込まれている。検出範囲で長さ約5.8m，幅約1.1mの規模で，検出面からの深さは約33cmである。埋土は２層に分層され，レンズ状に堆積している。いずれも５cm程度の礫を含む。

溝状遺構５号（第30図 16）

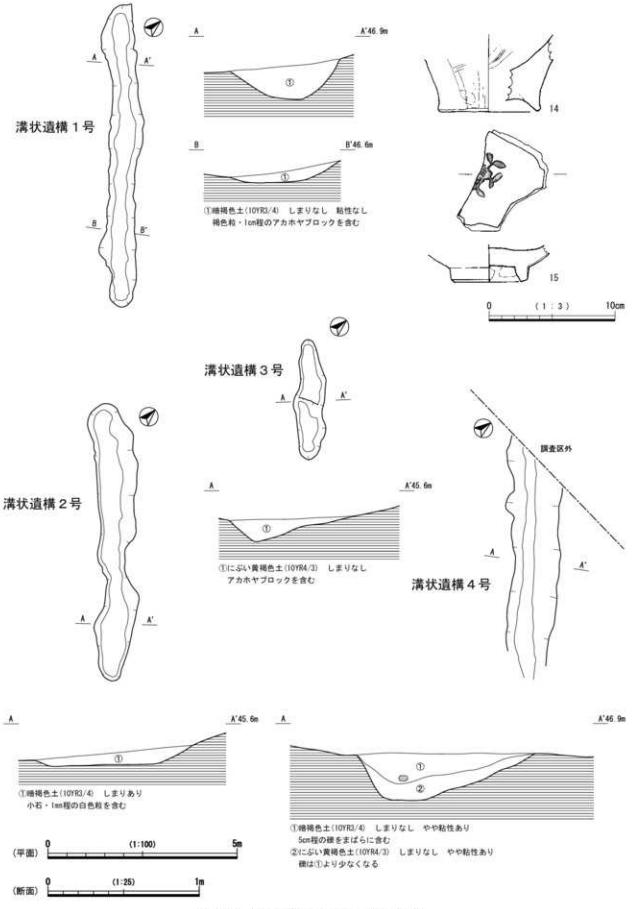
C～E-12～14区のVa層で検出された。検出範囲で長さ約33.8m，幅約1.9mの規模で，検出面からの深さは約10cmである。埋土は２層に分層され，上の暗褐色土の層は少量の炭化物を含む。

16は組織痕のある鉢の底部付近でVC類の土器に分類される。

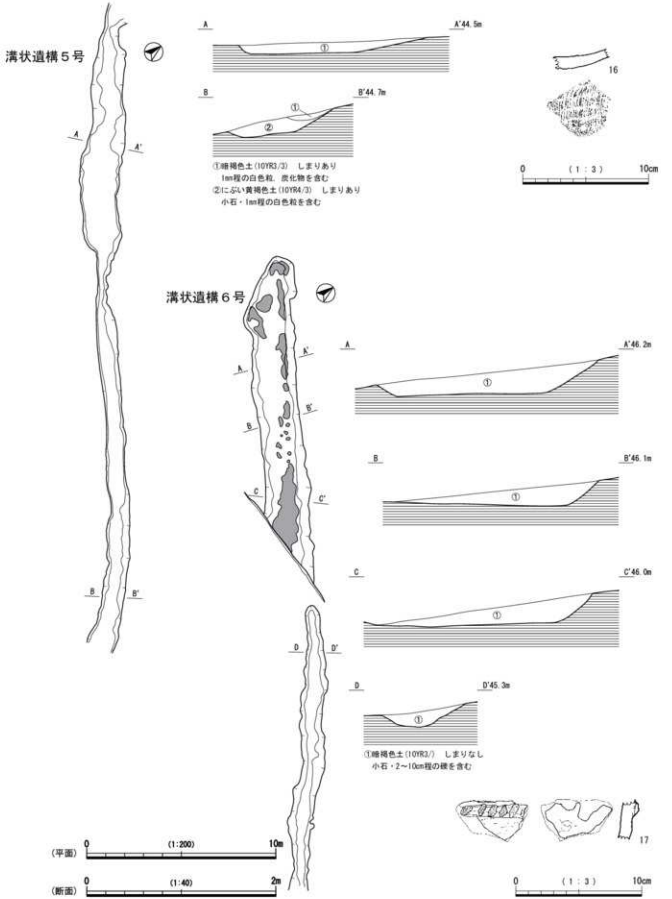
溝状遺構６号（第30図 17）



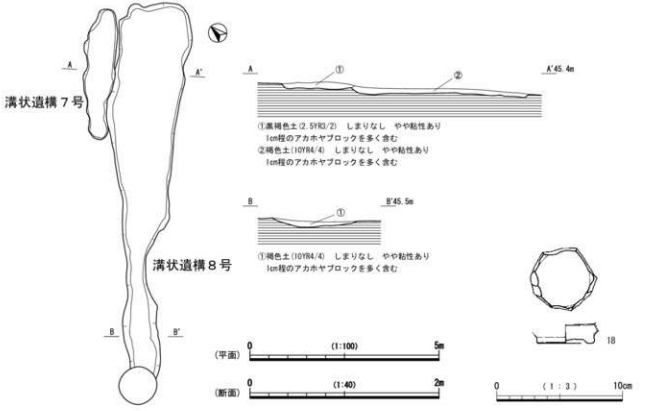
第28図 礫集中１号



第29図　溝状遺構１～４号・出土遺物



第30図　溝状遺構５・６号・出土遺物



第31図　溝状遺構７・８号・出土遺物

Ｃ～Ｆ-12～15区のＶａ層で検出された。中央部分が削平を受けており，北側と南側に分かれた形で検出された。また南側は溝状遺構14・15号によって切られている。北側と南側を合わせた規模は，検出範囲で長さ約33.2ｍ，幅約2.2ｍ，検出面からの深さは約15cmである。埋土は暗褐色土で，しまりはない。２～10cm程の礫を含む。

17は，壺形土器である。胴部に刻目突帯を少なくとも１条貼付する。

イ　中世の溝状遺構

溝状遺構７・８号（第31図　18）

Ｄ・Ｅ-15・16区のＶａ層で検出された。溝状遺構７号が溝状遺構８号を切るかたちで検出された。他の溝状遺構と場所的にも離れており，方向も異なる。掘立柱建物跡２・３号と隣接しており，何らかの関係があると考えられるが，検出面からの深さが約５cmと浅く，詳細は分からなかった。

溝状遺構７号の規模は，検出範囲で長さ約3.4ｍ，幅約0.8mである。埋土は黒褐色土で，１cm程のアカホヤブロックを含む。

溝状遺構８号の規模は，検出範囲で長さ約9.5ｍ，幅約1.8ｍ，検出面からの深さは約５cmである。埋土は褐色土で，１cm程のアカホヤブロックを含む。

18は，青磁碗の高台部分である。体部と高台の境に接合痕が確認でき，また釉だまりがある。施釉はされるが，畳付は釉剥ぎされる。輪郭は細かく割れていることから，周囲を打ち欠いた可能性がある。時期は13世紀頃と考えられる。

ウ　中世以降の溝状遺構

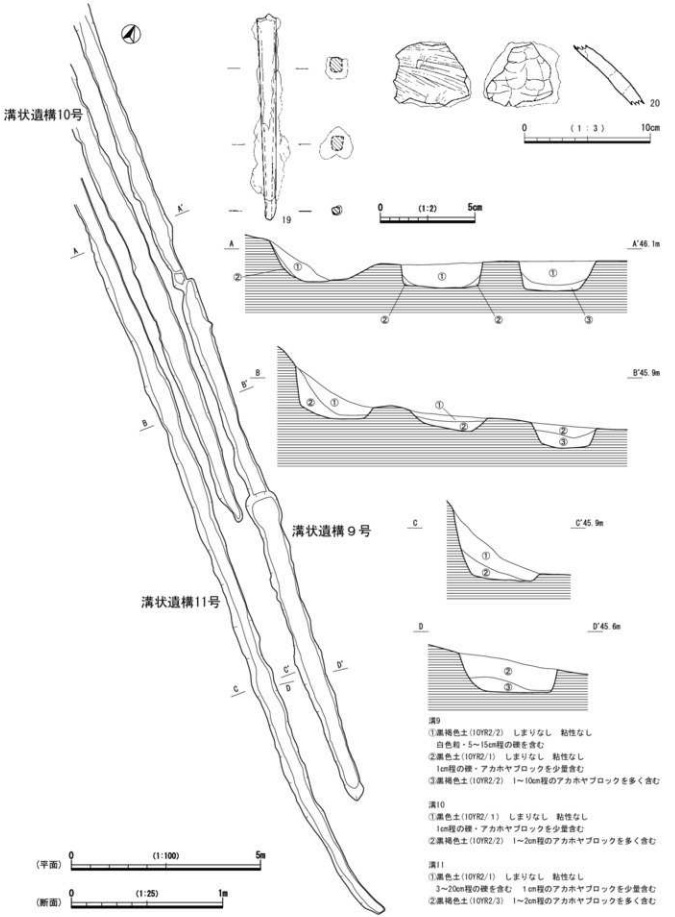
溝状遺構９・10・11号（第32図　19・20）

Ｃ～Ｅ-９・10区のＶａ層で検出された。遺跡の北西端部に位置しており，Ｃ地点との境界付近にある。埋土中からは，５～20cm程の礫が出土した。

溝状遺構９号の規模は，検出範囲で長さ約21.8ｍ，幅約0.8ｍ，検出面からの深さは約20cmである。埋土は３層に分層され，礫は上層の部分から出土している。19は，中近世の釘である。

溝状遺構10号の規模は，検出範囲で長さ約9.8ｍ，幅約0.6ｍ，検出面からの深さは約20cmである。埋土は２層に分層され，上層から１cm程の礫が出土している。９・11と比較すると，出土する礫の大きさが異なることなどから，作られた時期が他の二つとやや異なる可能性もある。

溝状遺構11号の規模は，検出範囲で長さ約20.7ｍ，幅約0.7ｍ，検出面からの深さは約20cmである。埋土は２層に分層され，９号と同様に礫は上層の部分から出土している。20は，壺形土器の胴部である。外面は斜位方向にハケメを施す。内面はナデが不十分で粘土の接合帯が顕著に確認できる。



第32図　溝状遺構９～11号・出土遺物

(2) 遺物

① 土器

ア ⅢA類土器（第33図 21）

21は外頓する口縁部をもつ深鉢形土器である。口唇部には貝殻刺突文が施文される。外面は横位の凹線が数条巡る。内面はナデ調整が施される。

イ ⅤB3類土器（第33図 22）

22は，口縁部が短く外反し，胴部から大きく屈曲する浅鉢形土器である。口唇部に1か所，押圧による浅い凹みを有する。また，内外面ともに丁寧な横位のミガキ調整を施す。

② 石器

ア 打製石斧（第33図 23）

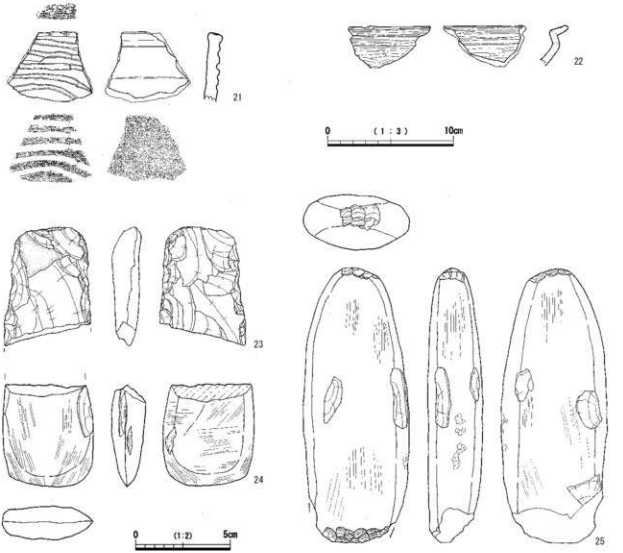
23は，刃部を大きく欠損する。頁岩製で，比較的厚みの薄い剥片の縁辺に浅い整形剥離を施している。撥形の可能性がある。長さ6.2cm，幅4.5cm，厚さ1.4cm，重さ45.5gである。

イ 磨製石斧（第33図 24）

24は，刃部のみの資料で，節理面で破断している。砂岩製で，主に刃部と側辺を丁寧に研磨しており，正裏面の軸部分の研磨は，刃部などに比べるとあまい。大きさの割りに厚みが薄く，刃部には顕著な刃毀れなどを観察できないことから，日常品でなかった可能性も想定される（その場合，破断に至った経緯の解明が課題となる）。長さ5.4cm，幅4.8cm，厚さ1.8cm，重さ67.7gである。

ウ 敲石（第33図 25）

25は，ホルンフェルス製の完全品であるが，全体形状や側縁に部分的に磨面が看取されることなどから，磨製石斧の刃部欠損品の転用と考えられる。主な作業面は下端で，先端部に微細だが衝撃剥離痕を観察できる。ただし，一般的な敲石の作業面と比べると面の潰れ具合が弱く，むしろ鋭利さを残しているようにもみえる。上端にも敲打部を観察できるが，個々の敲打痕が大きい点が目を引く。敲石としての使用頻度が少なかったか，タガネ



第33図 Ⅴ層出土遺物（ⅢA，ⅤB3類，石器）

のような使い方をした可能性も想定される。長さ14.5cm，幅5.6cm，厚さ2.9cm，重さ368.0gである。

3　Ⅳ層（第34図～第105図）

(1)　遺構

①　埋設土器

埋設土器１号（第34図　26）

Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。遺跡の南端部の北西方向から南東方向に傾斜する谷部に位置し，周囲からは，礫集中や土坑などが集中している。後述するが，D地点とも近く，祭祀的な意味合いをもつ可能性もある。掘り込みは，長軸45cm，短軸33cmの平面円形で，検出面からの深さは63cmである。埋土は褐色土で，白色の微細なパミスと炭化物を含む。土器は正位置で埋設されている。

26は，肩部から胴部にかけて緩やかに張る形状を呈することから，X2a類に比定される。頸部～口縁部を欠くが，残存器高が約34.5cm，最大径は約25.5cmを測る。最大径は胴部の真ん中よりやや上部分にもち，ややいびつな丸底を呈する。内外面ともに工具によるナデ調整がされる。胴部には帯状に一周，また底部外面には底部分に煤が付着する。頸部から上を欠き，胴部に煤が付着することから，煮沸具として利用されたことが分かる。

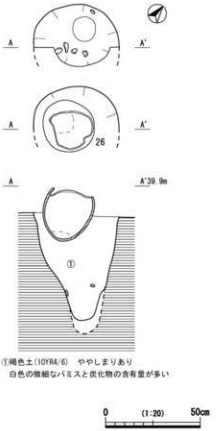
②　土坑

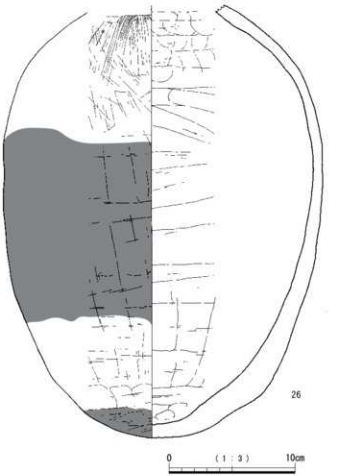
Ⅳ層から25基検出された。埋土状況や遺物から，おおむね縄文時代晩期から中世以降の土坑と思われる。

ア　縄文時代晩期の土坑

土坑９号（第37図）

Ⅰ・J-15区のⅣa層で検出された。谷部の谷底部分にあり，長軸80cm，短軸40cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約７cmである。検出時に，東側に焼土跡がみられた。埋土はやや粘性のある暗褐色土で，直径２mm程の炭化物を少量含む。すぐ南側30cmのところに集石10号があり，この集石の掘り込みの可能性もある。





第34図　埋設土器１号・出土遺物

イ　古墳時代の土坑

土坑10号（第37図）

Ｈ・Ｉ-15区のⅣa 層で検出された。遺跡の中央を北西から南東方向に傾斜する谷部の南端に位置する。残存部の長軸38cm，短軸24cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約44cm である。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある褐色土である。

土坑11号（第37図）

Ｉ-14区のⅣa 層で検出された。長軸46cm，短軸34cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約10cm である。谷部の谷底部分で，土坑が集中しているエリアである。埋土中からは，10cm大の礫が出土している。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。

土坑12号（第37図）

Ｉ-14区のⅣa 層で検出された。長軸54cm，短軸36cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約32cm である。土坑11号のすぐ西側にあり，埋土中に10cm大の礫を含む。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。古墳時代の土器小片が出土している。

土坑13号（第37図）

Ｉ-16区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置しており，東端部分は調査区外のため完掘できなかった。残存部の長軸120cm，短軸118cm の平面長楕円形で，検出面からの深さは約22cm である。埋土は２層から成り，②層から多量の炭化物が出土した。焼土などは検出されず，その場で火を使った痕跡は確認できなかった。炭化物の年代測定の結果では1171±22yrBP の数値が出ている。古墳時代の土器小片が出土している。

土坑14号（第38図）

Ｆ・Ｇ-12･13区のⅣa 層で検出された。谷部の中央部に位置し，すぐ西側では土器集中１号が検出されている。残存部の長軸135cm，短軸124cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約34cm である。埋土は３層に分層され，どの埋土にも炭化物がまばらに含まれる。床面に近いところで，古墳時代の土器小片が出土している。

ウ　縄文時代晩期～古墳時代の土坑

土坑15号（第38図）

Ｉ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置しており，長軸58cm，短軸47cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約12cm である。埋土は暗褐色土で粘性・しまりともにややあり，礫と直径２mm程の炭化物をまばらに含む。

土坑16号（第38図）

Ｉ・Ｊ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置する。長軸81cm，短軸39cm の平面長楕円形で，小ピットをもつ土坑である。検出面から小ピット床面までの深さは約33cm である。埋土はやや粘性はあるがしまりはない暗褐色土で，礫が出土している。

土坑17号（第38図）

Ｉ-15区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置しており，平面形は長軸67cm，短軸55cm と不定形で，検出面からの深さは約83cm である。埋土は４層に分層でき，直径２cm 程の炭化物も多く検出された。

土坑18号（第39図）

Ｊ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置しており，残存部の長軸94cm，短軸36cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約24cm である。埋土は単層で，しまりがなく，やや粘性のある暗褐色土で，直径３cm程の礫が出土している。

土坑19号（第39図）

Ｉ-15区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置しており，長軸68cm，短軸66cm の平面円形で，検出面からの深さは約23cm である。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。直径２～３mm 程の炭化物と軽石が少量混ざる。遺構内ではないが，周囲から花崗岩製の石皿（406）が出土しており，埋土中に炭化物もあり，調理施設などに関連する可能性もある。

土坑20号（第39図）

Ｇ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の中央付近に位置しており，長軸100cm，短軸50cm の平面楕円形で，検出面からの深さは10cm である。さらに中央付近に床面から深さ36cm の小ピットをもつ。小ピットには礫が密集し，下部まで及んでいる。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。土器小片が出土している。

土坑21号（第40図）

Ｉ・Ｊ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸89cm，短軸53cm の平面長楕円形で，検出面からの深さは24cm である。さらに床面から深さ16cm の小ピットをもつ。15～30cm大の礫が密集して土坑を覆っている。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。

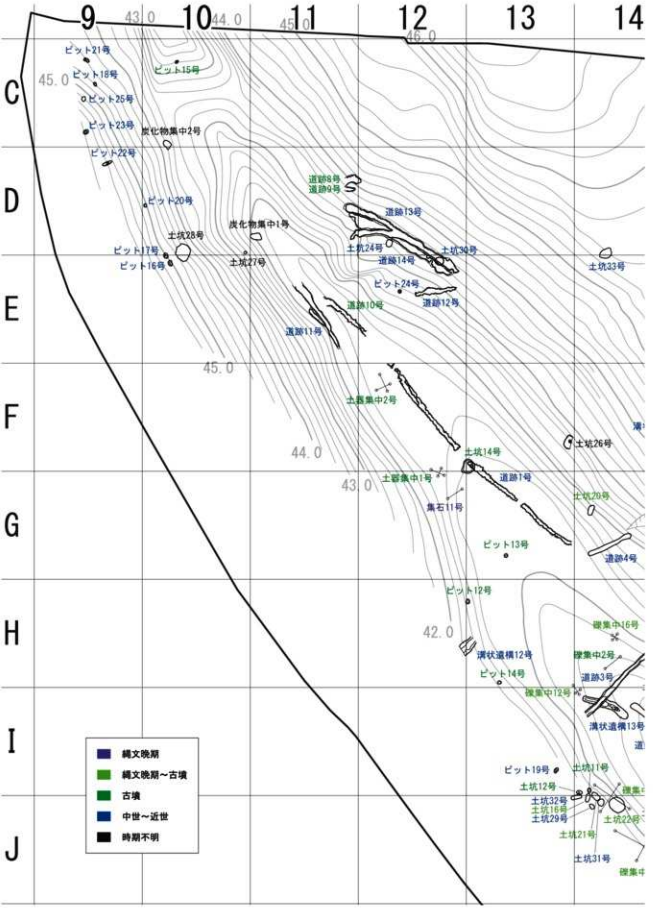
土坑22号（第40図）

Ｊ-14区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸160cm，短軸137cm の平面楕円形で，検出面からの深さは約10cm である。埋土は暗褐色土であるが，中央部に黒褐色土が楕円形に広がる。埋土等から，中世の土坑に切られている可能性もある。

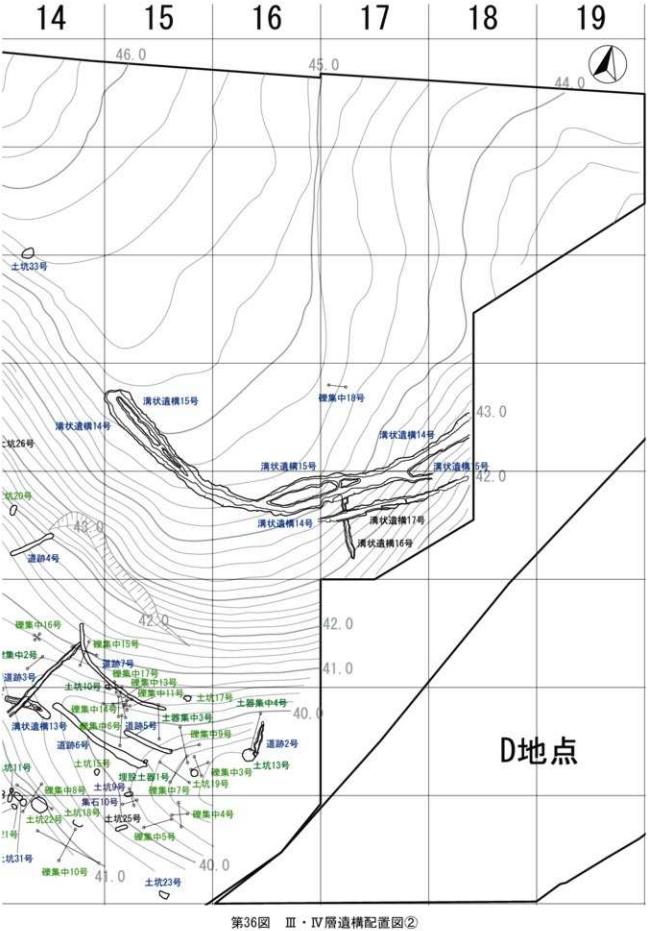
エ　中世の土坑

土坑23号（第41図）

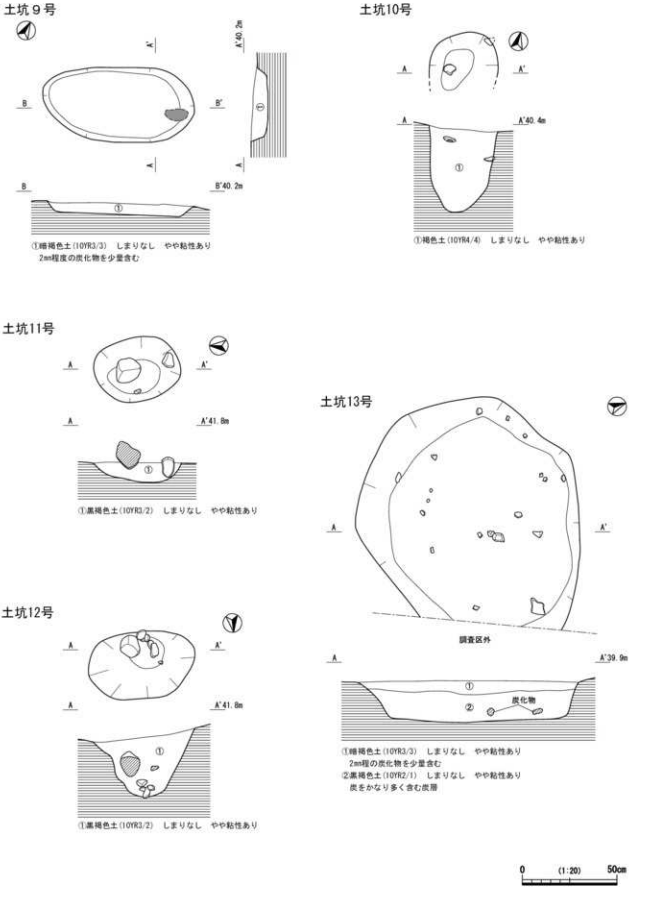
Ｊ-15区のⅣa 層で検出された。谷部の南端に位置し，残存部の長軸90cm，短軸55cm の平面長楕円形で，検出面からの深さは16cm である。さらに床面から深さ８cm の小ピットをもつ。礫が出土しているが流れ込みによるものと思われる。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。



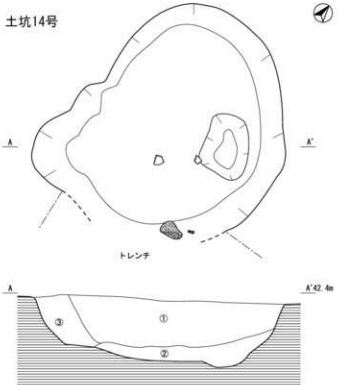
第35図　Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図①



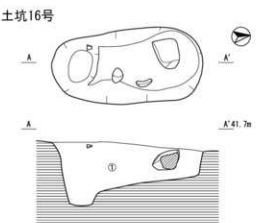
第36図　Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図②


土坑９号
A
A'
A'40.2m
B
B'
①
A
A'
B
B'40.2m
①
①暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　やや粘性あり
2mm程度の炭化物を少量含む
土坑10号
A
A'
A
A'40.4m
①
①褐色土(10YR4/4)　しまりなし　やや粘性あり
土坑11号
A
A'
A
A'41.8m
①
①黒褐色土(10YR3/2)　しまりなし　やや粘性あり
土坑12号
A
A'
A
A'41.8m
①
①黒褐色土(10YR3/2)　しまりなし　やや粘性あり
土坑13号
A
A'
調査区外
A
A'39.9m
①
②
炭化物
①暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　やや粘性あり
2mm程の炭化物を少量含む
②黒褐色土(10YR2/1)　しまりなし　やや粘性あり
炭をかなり多く含む炭層
0
(1:20)
50cm

第37図　土坑９～13号

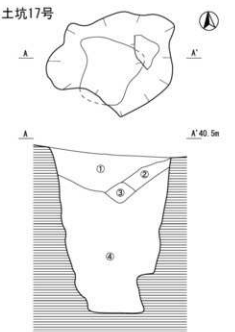


①にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりなし　やや粘性あり
5mm程の炭化物をまばらに含む
②暗褐色土(10YR3/3)　ややしまりあり　やや粘性あり
4cm程の炭化物を含む
③にぶい黄褐色土(10YR4/3)　ややしまりあり　やや粘性あり
3mm程の炭化物をまばらに含む



①暗褐色土(10YR3/3)　しまりなし　やや粘性あり

①暗褐色土(10YR3/4)　ややしまりあり　やや粘性あり
2mm程の炭化物をまばらに含む



①暗褐色土(10YR3/4)　しまりなし　やや粘性あり
焼土(黄橙色土10YR6/8)と炭を少量含む
②にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまりなし　やや粘性あり
明黄褐色土(10YR6/8)を少量含む
③明黄褐色土(10YR6/8)　しまりなし　やや粘性あり
アカホヤブロックである
④暗褐色土(10YR2/3)　しまりなし　やや粘性あり
2cm程の炭を含む

第38図　土坑14～17号

土坑24号（第41図）

D−12区のⅣ層で検出された。谷部の北側に位置する。道跡13号・14号のすぐ隣で検出されており，道跡13号と同時期のものと思われる。長軸72cm，短軸56cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約29cmである。埋土③の上部に，焼土跡を含んだ埋土②が堆積している。埋土②の中に，10〜20cm大の焼土ブロックが混在する。

オ　古墳時代以降の土坑

土坑25号（第41図）

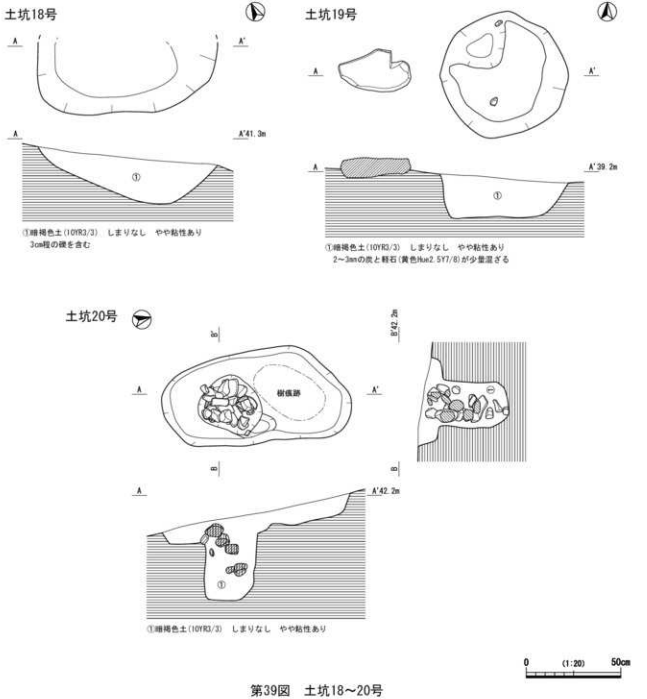
J−15区のⅣ層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸112cm，短軸36cmの平面長楕円形で，検出面からの深さは約12cmである。埋土は単層でしまりが弱く，粘性のない暗褐色土である。

土坑26号（第41図）

F−13区のⅣa層で検出された。谷部の中央部に位置し，残存部の長軸127cm，短軸69cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約9cmである。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。

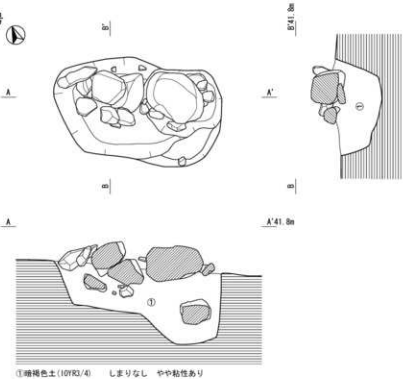
土坑27号（第41図　27・28）

D−10区のⅣ層で検出された。谷部の北端に位置し，

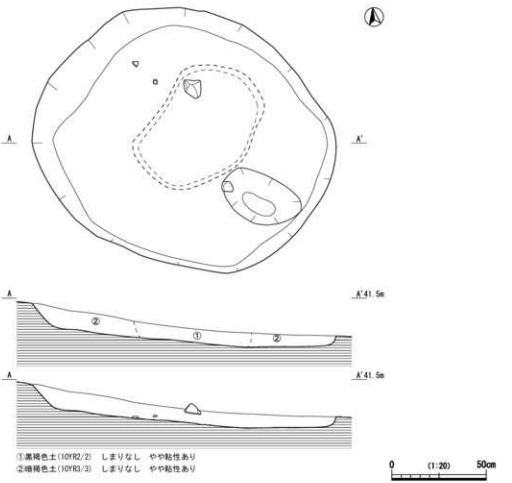


第39図　土坑18〜20号

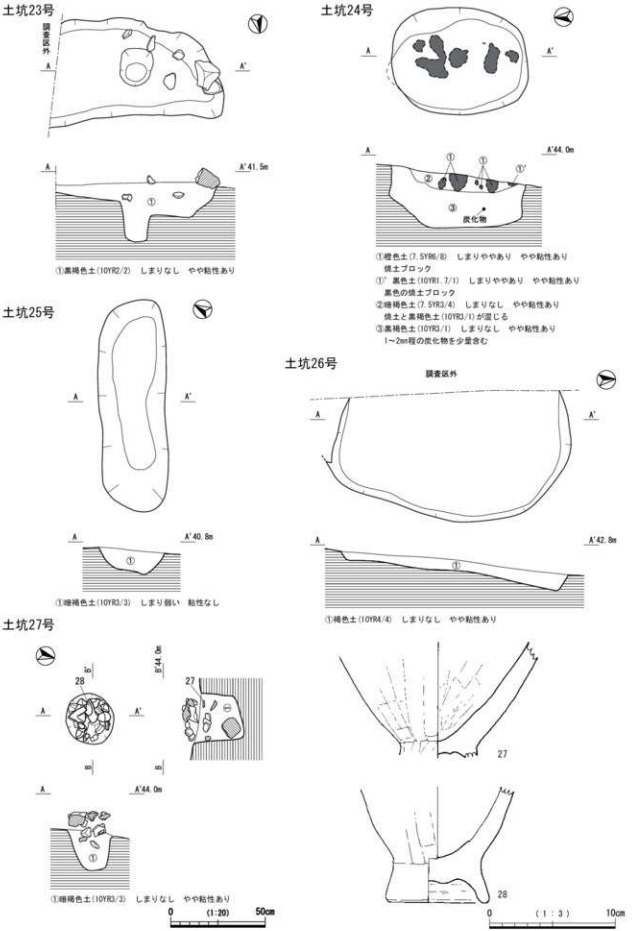
土坑21号



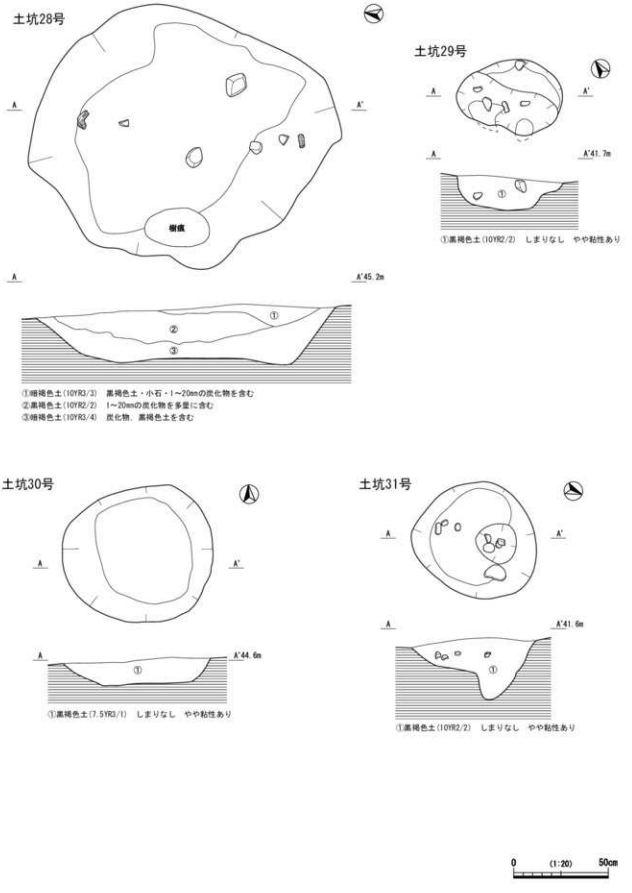
土坑22号



第40図　土坑21・22号



第41図　土坑23～27号・出土遺物



第42図　土坑28～31号

長軸26cm，短軸25cmの平面円形で，検出面からの深さは約22cmである。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。土坑の上部に礫が集中している。

27は胴部～脚部である。28はX1c類の土器である。低めの脚台を持つ。

土坑28号（第42図）

D・E-10区のⅣ層で検出された。谷部の北端に位置する。長軸164cm，短軸132cmの平面隅丸方形を呈し，検出面からの深さは約36cmである。埋土は3層に分層され，②層は多くの炭化物を含む。西側部分で樹痕による攪乱を受けている。埋土中から土器小片や礫が出土している。

カ　中世以降の土坑

土坑29号（第42図）

J-14区のⅣa層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸56cm，短軸40cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約17cmである。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。

土坑30号（第42図）

E-12区のⅣ層で検出された。谷部のやや北側に位置し，道跡13号・14号のすぐ近くにあり，道跡14号と同時期のものと考えられる。長軸80cm，短軸72cmの平面円形に近い形状で，検出面からの深さは約12cmである。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。

土坑31号（第42図）

J-14区のⅣa層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸66cm，短軸62cmの平面円形で，検出面からの深さは約18cmである。さらに床面から深さ約12cmの小ピットをもつ。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土で，埋土中に礫が混在する。

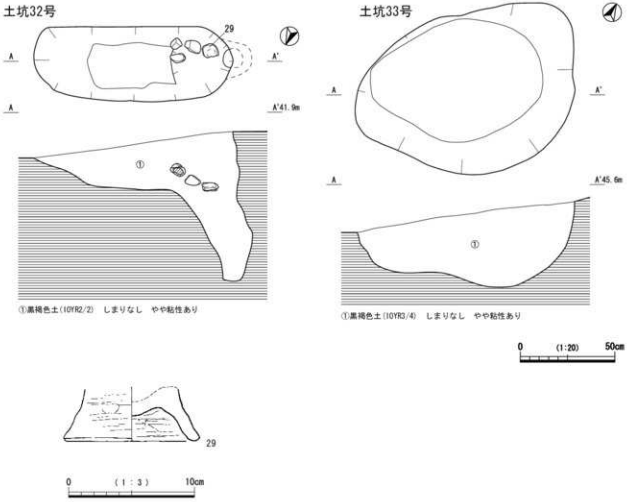
土坑32号（第43図　29）

I・J-13・14区のⅣa層で検出された。谷部の南端に位置し，長軸105cm，短軸39cmの平面長楕円形で，検出面からの深さは25cmである。さらに床面から深さ約53cmの小ピットをもつ。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。

29は甕の脚部で，X1c類の土器である。横方向にナデを施すが荒いナデなので凹凸が顕著にみられる。

土坑33号（第43図）

D・E-14区のⅣ層で検出された。調査区の北東側の丘陵地の縁辺で検出された。周囲には溝状遺構6号が検



第43図　土坑32・33号・出土遺物

出されているが，埋土状況等からみると，時期差がある。長軸115cm，短軸87cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約41cmである。埋土は単層でしまりがなく，やや粘性のある黒褐色土である。

③　炭化物集中（第44図）

炭化物集中は，いずれも遺跡の中央を北西から南東方向に傾斜する谷部の北部で検出された。

古墳時代以降の炭化物集中

炭化物集中１号（第44図　30・31）

D−11区のⅣ層で検出された。長軸99cm，短軸64cmの範囲に炭化物が集中して検出された。下部には，検出面からの深さ約26cmの掘り込みをもつ。中央より西側壁面に向かい緩やかに傾斜する段をもち，その段から13cm程深い位置にほぼ水平に広がる底面をもつ。古墳時代の壺形土器（30・31）が出土しているが，どちらも埋土の上位での出土である。埋土は単層で，しまりがあり，やや粘性のある暗褐色土である。５mm程の炭化物がまんべんなく含まれる。土坑内に焼土や被熱の跡は見られなかった。

30は平底，31は丸底を呈する壺で，Ⅹ2c類の土器である。31は，内外面ともにハケメを密に施す。外面は風化もしくは摩耗により剥落する部分が多い。

炭化物集中２号（第44図）

C・D−10区のⅣ層で検出された。長軸81cm，短軸74cmの範囲に炭化物が集中して検出された。下部には，検出面からの深さ約８cmの掘り込みをもつ。礫及び20cm程の炭化材も出土している。埋土は単層で，しまりがなく，やや粘性のある暗褐色土である。１mm程の炭化物が少量混在する。土坑内に焼土や被熱の跡は見られない。

④　ピット（第45・46図）

ピットは多数検出したが，建物跡と認定できないものが多かった。ここでは，礫や土器等を含む14基のピットについて図化した。その他は，遺構配置図に平面図のみ掲載することとした。以下，土器の出土したピットについてのみ記述する。

古墳時代のピット（ピット12〜25号）

ピット15号（第45図　32）

C−10区のⅣ層で検出された。長軸35cm，短軸25cmのほぼ平面円形で，検出面からの深さは約38cmである。埋土は単層でしまりが弱く，粘性のない暗褐色土である。

32は，浅鉢の底部である。外面には指ナデの痕跡が明瞭に確認できる。指紋状の条線もあり，粒径の大きい雲母をまばらに含む。

ピット17号（第45図　33）

D・E−10区のⅣ層で検出された。長軸51cm，短軸40cmのやや楕円形で，検出面からの深さは約28cmである。埋土は単層でしまりが弱く，粘性のない黒色土である。

33は，甕形土器の口縁部である。内外面ナデで仕上げる。時期は不明である。

⑤　集石（第47図）

前節でも述べたが，礫が集中して検出された遺構で，縄文時代までのものは集石とし，古墳時代以降のものは礫集中として取り扱った。

Ⅳ層からは，２基検出された。Ⅵ〜Ⅷ層の調査における集石の形態分類と同様に，タイプⅠ〜Ⅲに分類した。

縄文時代晩期の集石

集石10号（第47図）タイプⅡ

Ⅰ・J−15区のⅣa層で検出された。谷部南端の谷底部分に位置し，71×45cmの範囲に13個の礫がまとまっている。５〜10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が８個と多い。被熱痕のある礫が１点が確認できる。北側約30cmの所に土坑９号が検出されている。土坑９号が焼土を伴い，埋土に炭化物を含むことから，この集石の掘り込みの可能性がある。

集石11号（第47図）タイプⅢ

G−12区のⅣ層で検出された。谷部中央の谷底部分に位置し，153×78cmの範囲に56個の礫が集中している。５〜15cm大の亜角礫が多い。礫構成は安山岩が38個と多い。検出面からの深さ約13cmの掘り込みを伴う。掘り込み部分から北東方向へ礫を掻き出したような形で，礫が出土している。被熱痕は確認できなかった。

⑥　礫集中（第47〜59図）

Ⅳ層からは，17基検出された。時期を特定できないものが多く，縄文時代晩期から古墳時代の時期幅が想定されるものは，礫集中として掲載した。

Ⅵ〜Ⅷ層の調査における，集石の形態分類と同様に，タイプⅠ〜Ⅲに分類した。

ア　古墳時代の礫集中

礫集中２号（第47図　34）タイプⅡ

H−14区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，58×58cmの範囲に25個の礫がまとまっている。10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が17個と多い。９点の礫に被熱痕を確認できる。検出面のレベルから古墳時代の礫集中と判断した。

34は，浅鉢形土器である。VB3類の土器に比定される。口唇部内面には粘土紐を貼付して強調させる。内外面丁寧な横方向のヘラミガキで仕上げる。

イ　縄文時代晩期〜古墳時代の礫集中

礫集中３号（第48図）タイプⅠ

Ⅰ−15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，121×115cmの範囲に13個の礫や土器が散在している。10cm大の亜角礫が多く，礫９個の構成は安山岩が５個と多い。被熱痕のある礫が１点確認できる。古墳時代の土器が出土している。

礫集中４号（第48図　35）タイプⅠ

J−15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に

位置し，207×72cm の範囲に15個の礫や土器が散在している。10cm大の亜角礫が多く，礫11個の構成は安山岩が７個と多い。被熱痕のある礫が１点確認できる。

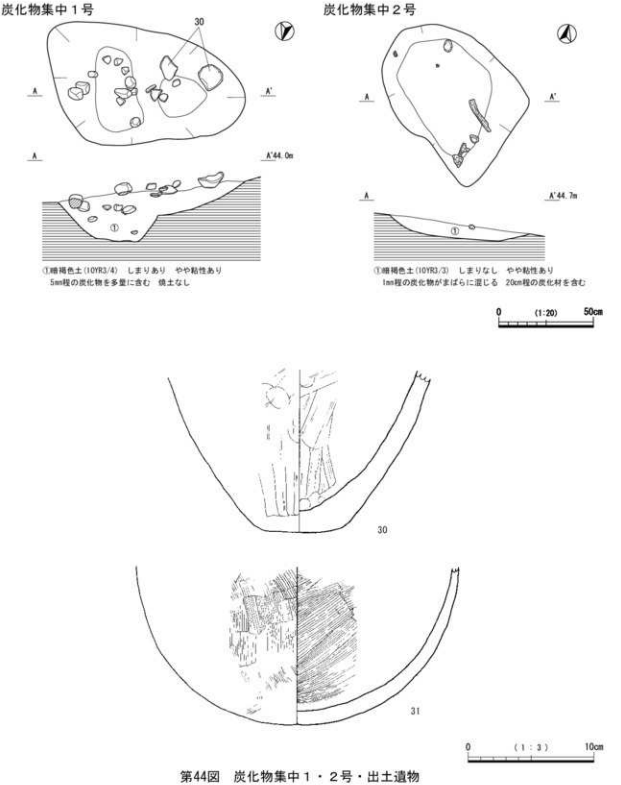
35は丸みを帯びた平底を呈する壺形土器である。X2C類に分類される。突レンズ状の底部形態で，内外面ともに工具によるナデを施す。

礫集中５号（第49図　36）タイプⅠ

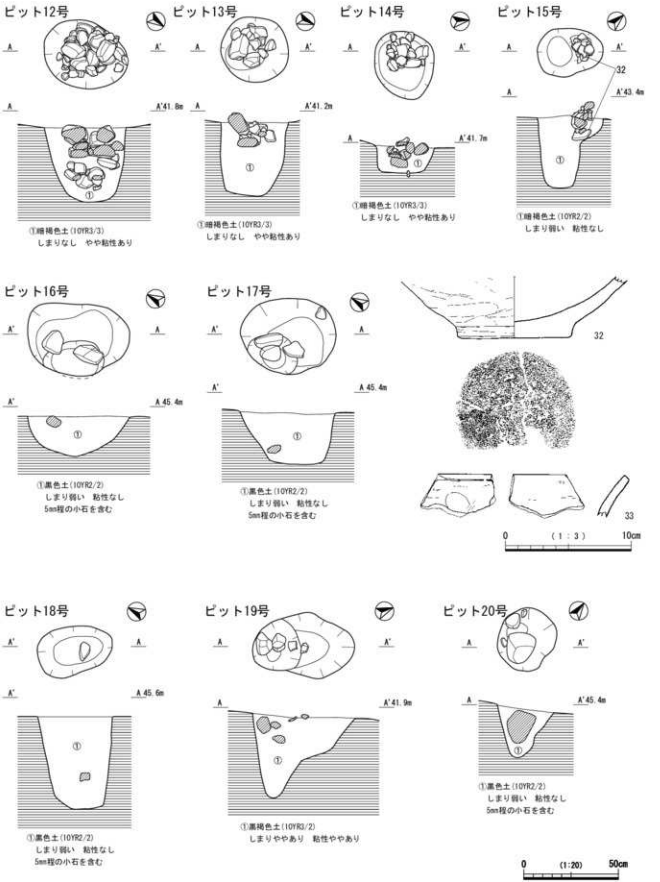
J-15区のⅣa 層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，252×149cm の範囲に24個の礫や土器が散在している。10cm以下の亜角礫が多く，礫22個の構成は，安山岩が15個と多い。被熱痕のある礫が１点確認できる。

36は，甕形土器の口縁部である。X1A 類の土器に分類される。口縁部屈曲の直下に刻目突帯を貼付する。

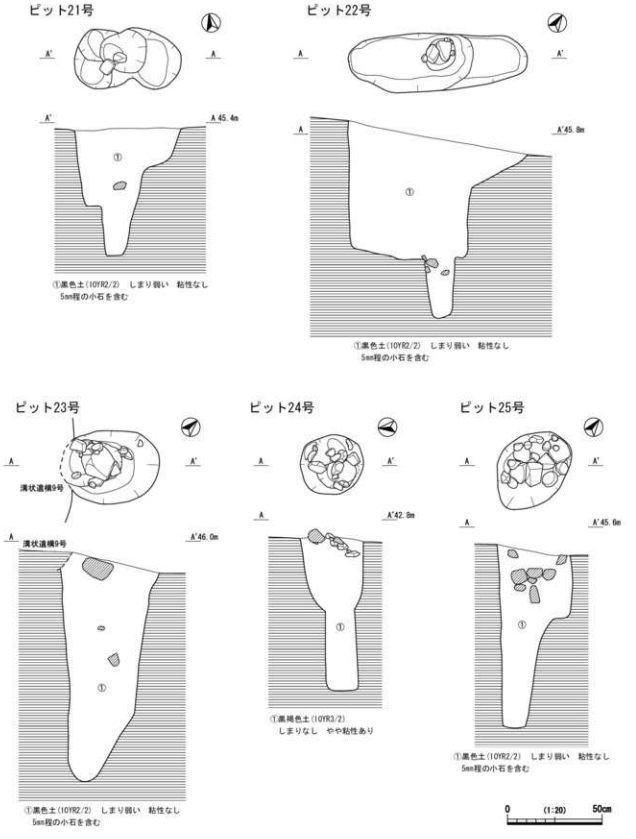
礫集中６号（第50図）タイプⅠ



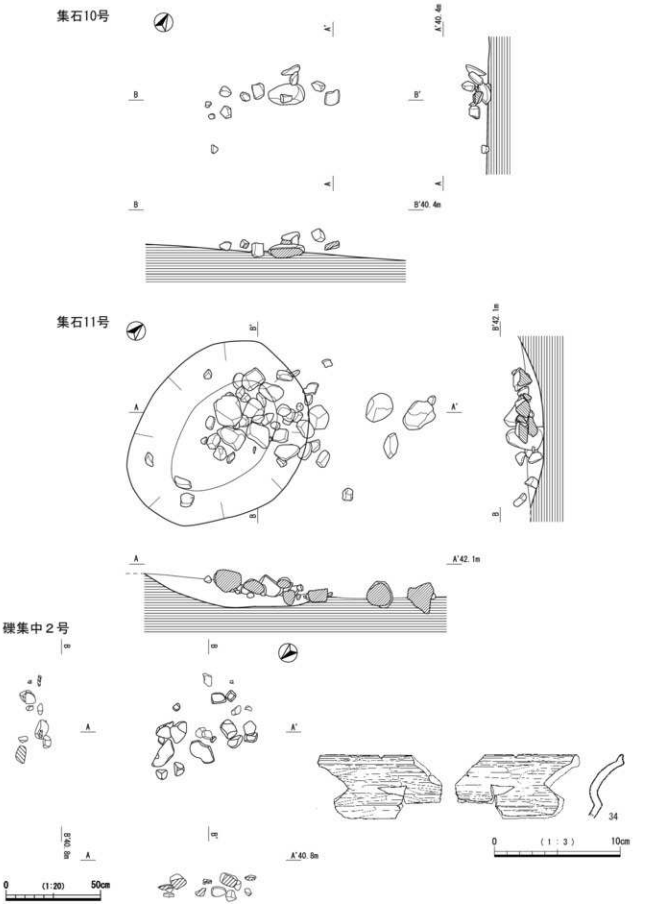
第44図　炭化物集中１・２号・出土遺物



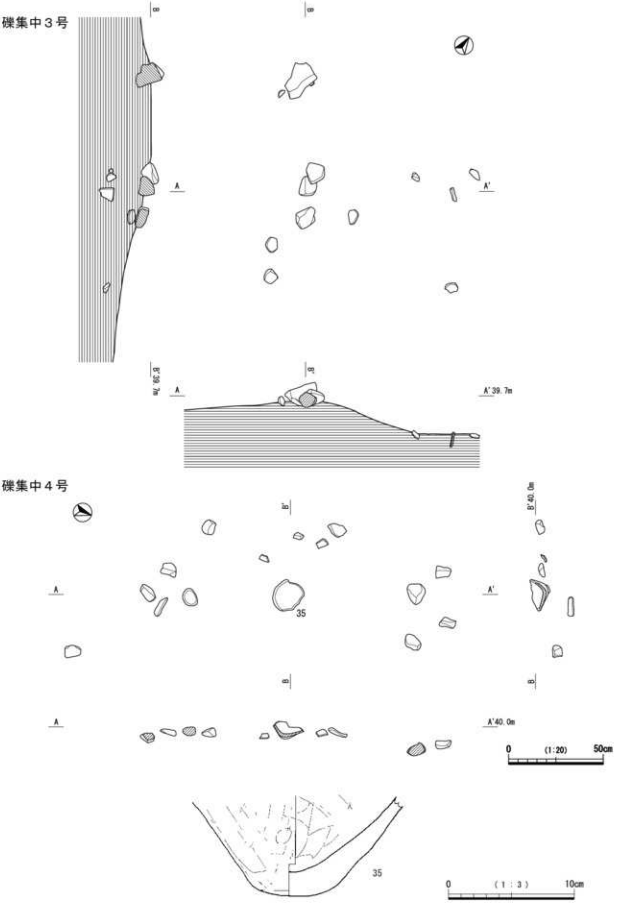
第45図　ピット12～20号・出土遺物



第46図　ピット21～25号



第47図　集石10・11号，礫集中２号・出土遺物



第48図　礫集中３・４号・出土遺物

Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，260×125cmの範囲に45個の礫が散在している。10cm以下の亜円礫が多く，礫構成は安山岩が30個と多い。被熱痕のある礫５点が確認できる。

礫集中７号（第51図　37～39）タイプⅠ

Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，268×249cmの範囲に60個の礫や土器が散在している。５～10cm大の亜角礫が多く，礫38個の構成は，安山岩が26個と多いが，砂岩が５個，黒曜石が２個含まれる。被熱痕のある礫が８点確認できる。

37は，浅鉢形土器の胴部である。内面には部分的に煤が付着する。VB3類の土器に比定される。38は，壺形土器である。丸底を呈すると考えられる。Ⅹ4類の土器である。内外面工具によるナデを施す。39は，古墳時代の壺形土器である。

礫集中８号（第52図　40）タイプⅠ

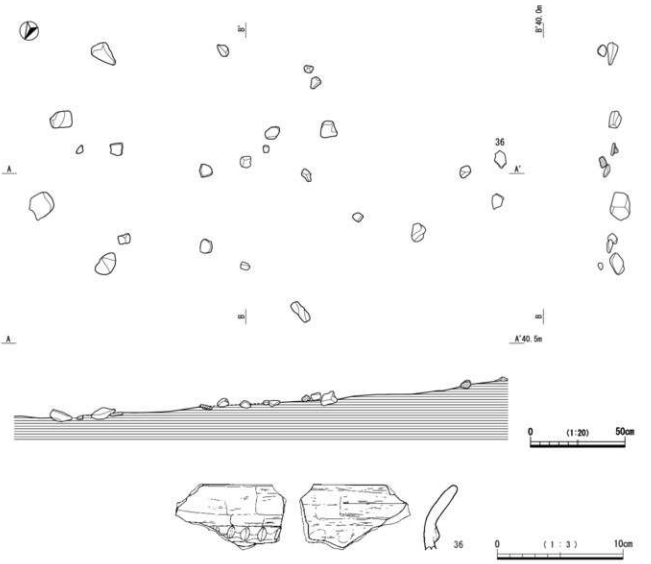
Ⅰ・Ｊ-14区のⅣa層で検出された。谷部南端の斜面部分に位置し，357×268cmの範囲に67個の礫や土器が散在している。西側部分に深鉢形土器40がややまとまって出土している。５～10cm大の亜角礫が多く，礫50個の構成は安山岩が36個と多い。被熱痕のある礫が５点確認できる。

40は，深鉢形土器の胴部である。VB1類の土器に分類される。胴部下方に屈曲部をもつ。内外面ともに粗いナデが施される。外面は屈曲部より上部分に煤が付着する。

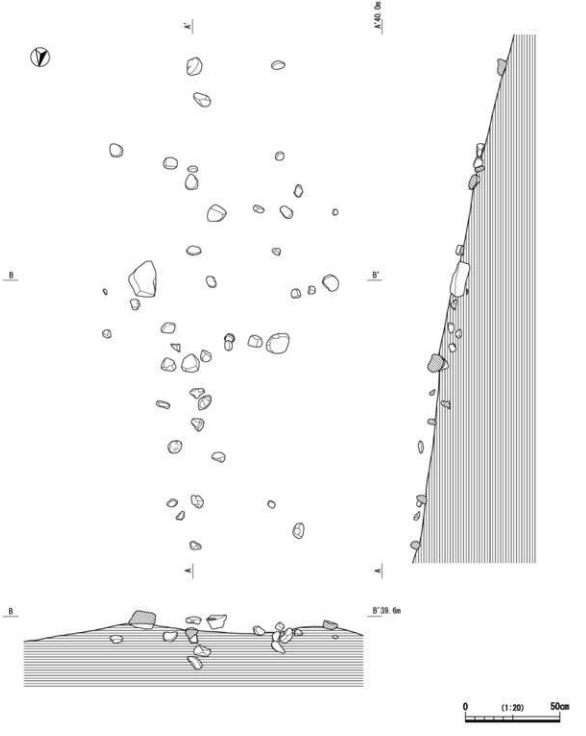
礫集中９号（第53図　41～46）タイプⅠ

Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。谷部南端の谷底部分に位置し，404×328cmの範囲に93個の礫や土器が散在している。５～10cm大の亜角礫が多く，礫53個の構成は安山岩が35個と多い。被熱痕のある礫が13点確認できる。

41・42は甕形土器である。41は甕の口縁部で外反することから，Ⅹ1A類の土器に比定される。口縁部直下に刻目突帯を貼付する。内外面横ナデで仕上げる。42は突



第49図　礫集中５号・出土遺物



第50図　礫集中６号

帯貼付部分～胴部で，刻目突帯より下部分で，内外面工具によるナデを施す。

43・44は壺形土器で，いずれも突帯を２条貼付する胴部である。43は，Ⅹ2A 類の土器に相当する。43は三角突帯，44は刻目突帯を貼付する。

45・46は高坏形土器である。45は坏底部の脚部との接合部分である。脚部と接合するために，粘土を貼り付けたことが断面から観察できる。内面は丁寧な工具ナデ，外面は木製工具によるハケメが残る。46は小さめの脚部で裾部分まで残る。Ⅹ3d 類の土器に分類される。内外面ともに横方向のナデを施す。

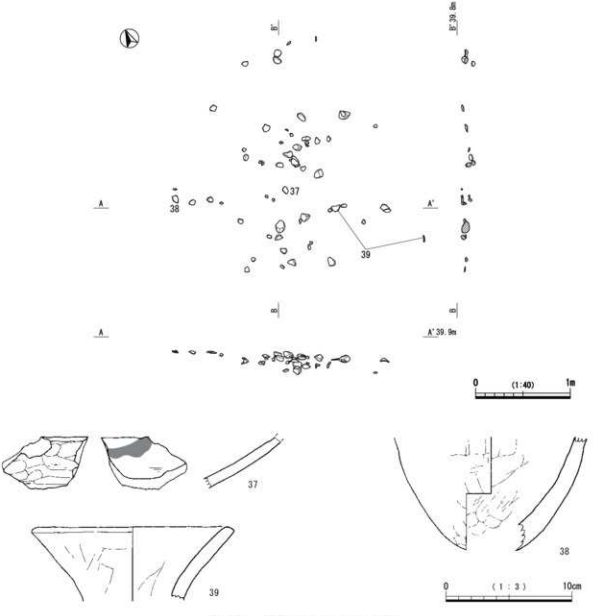
礫集中10号（第54図）タイプⅠ

J－14区のⅣa 層で検出された。谷部南端の斜面部分に位置し，617×310cm の範囲に124個の礫や土器が散在している。10cm以下の亜角礫が多く，礫119個の構成は，安山岩が72個と多い。被熱痕のある礫が10点確認できる。

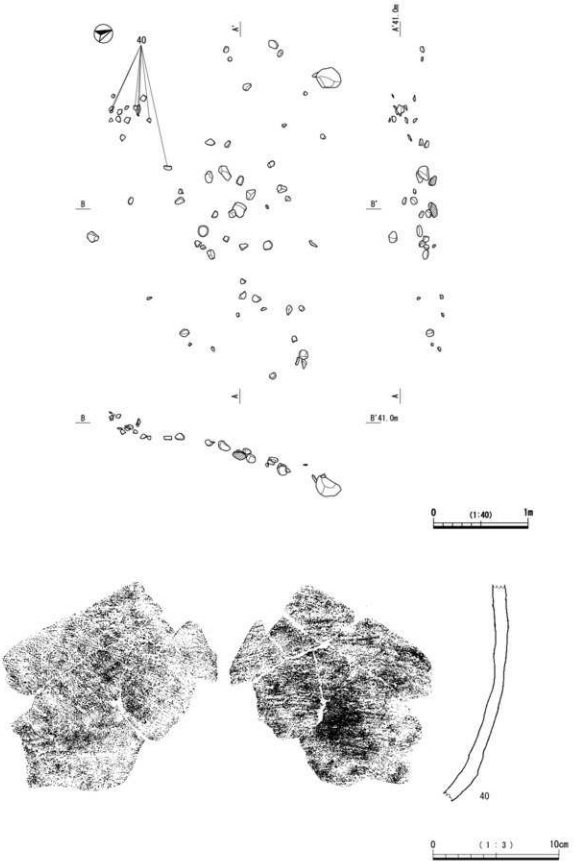
礫集中11号（第55図　47・48）タイプⅡ

Ⅰ－15区のⅣa 層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，41×34cm の範囲に，20個の礫や土器が密集している。礫16個の構成は安山岩が12個と多い。被熱痕のある礫が７点確認できる。掘り込みは確認できなかった。

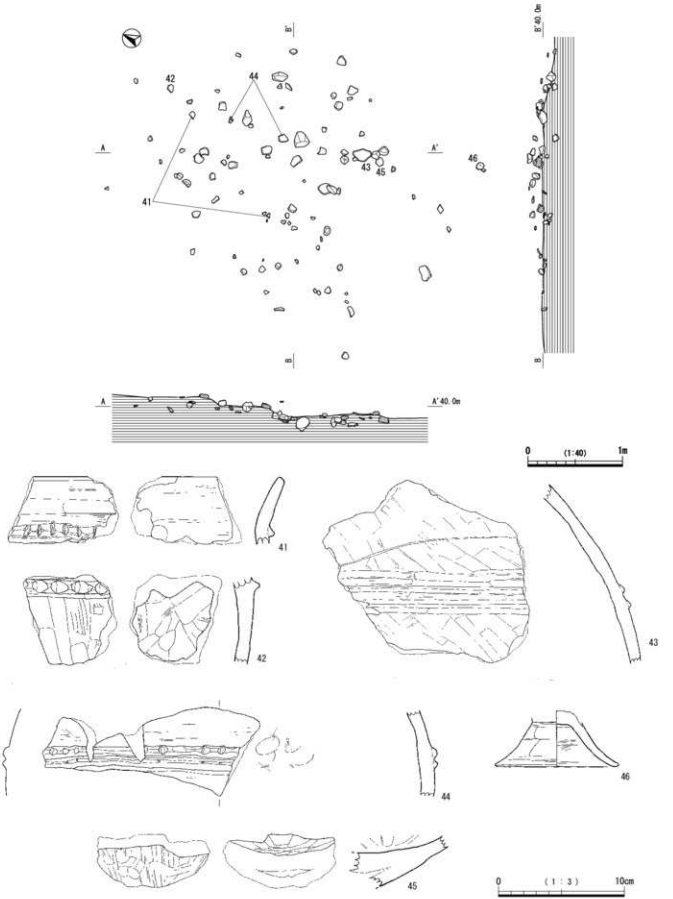
47・48は坩形土器である。47は48よりもややサイズが大きい。Ⅹ5C 類の土器に分類される。口縁部を欠くが，頸部から口縁部にかけて外反すると考えられる。胴部最大径をほぼ中位にもち，胴部最大径は，約11.7cmを測り，丸底を呈する。48は胴部で，47よりも胎土が白っぽく精製である。胴部最大径は中位よりやや上の方にもつ。いずれも工具によるナデで仕上げる。



第51図　礫集中７号・出土遺物

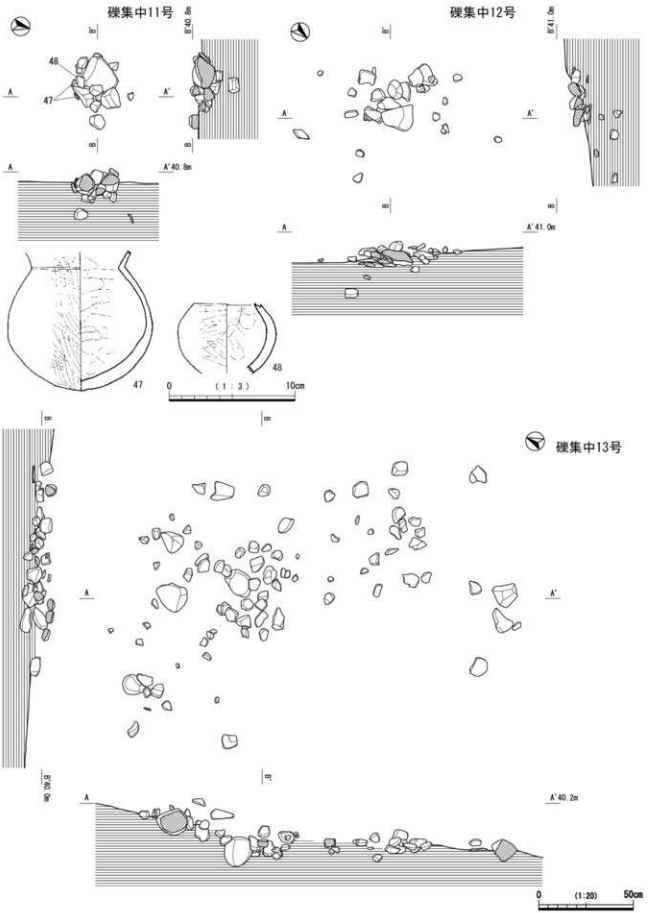


第52図　礫集中８号・出土遺物



第53図　礫集中９号・出土遺物

第54図　礫集中10号



第55図　礫集中11～13号・出土遺物

礫集中12号（第55図）タイプⅡ

H・Ⅰ-13・14区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，110×63cmの範囲に，29個の礫がまとまって検出された。礫構成は安山岩が16個と多い。被熱痕のある礫が12点確認できる。

礫集中13号（第55図）タイプⅡ

Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，218×152cmの範囲に86個の礫がややまとまっている。5～10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が54個と多い。被熱痕のある礫が5点確認できる。

礫集中14号（第56図）タイプⅡ

Ⅰ-14・15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，184×180cmの範囲に61個の礫がややまとまっている。5～10cm大の亜角礫が多く，礫構成は安山岩が33個と多い。被熱痕のある礫が5点確認できる。

礫集中15号（第57図）タイプⅢ

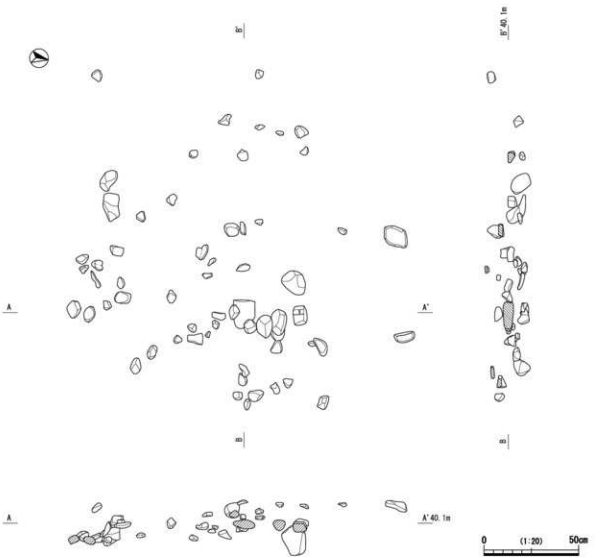
H-14区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，170×162cmの範囲に288個の礫が密集している。調査時には掘り込みを確認できなかったが，礫の出土状況からみると，掘り込みがあったことが想定されることからタイプⅢに分類した。5cm大の小さな礫が多く，礫構成は安山岩が199個と多いが，頁岩を6個，花崗岩を2個含む。被熱痕のある礫が9点確認できる。

礫集中16号（第58図）タイプⅢ

H-14区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，32×30cmの範囲に21個の礫が集中している。10cm以下の礫が多く，礫構成は安山岩が10個と多いが，軽石・チャート・黒曜石を含む。被熱痕のある礫が7点確認できる。礫の下に検出面からの深さ約64cmの土坑が検出されているが，土坑が完全に埋まってから集石が作られた可能性もある。

礫集中17号（第58図）タイプⅢ

H・Ⅰ-15区のⅣa層で検出された。谷部南側の谷底部分に位置し，79×73cmの範囲に103個の礫が密集して



第56図　礫集中14号

いる。５～10cm大の礫が多いが，中には15cmを超えるような大きな礫もあり，床石として使われた礫の可能性もある。被熱痕のある礫が３点確認できる。掘り込みは，長径63cm×短径54cm，検出面からの深さが28cmである。埋土はややしまりがあり，粘性のない褐色土で，焼土・炭化物は確認できなかった。

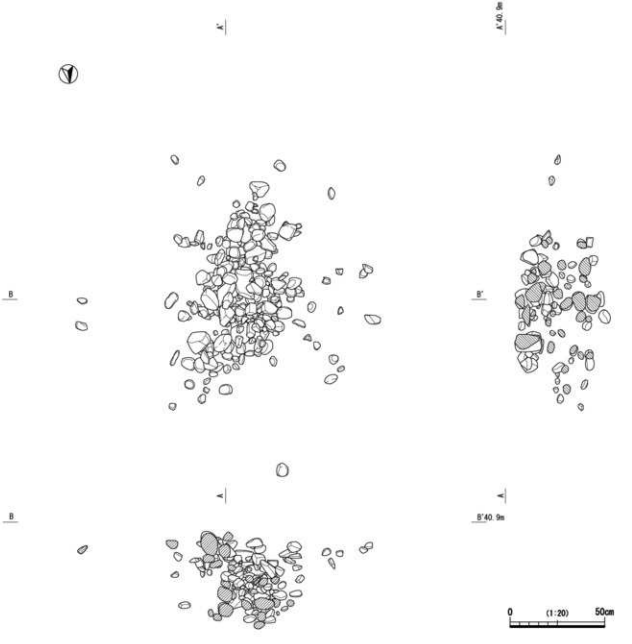
ウ　中世の礫集中

礫集中18号（第59図）タイプⅢ

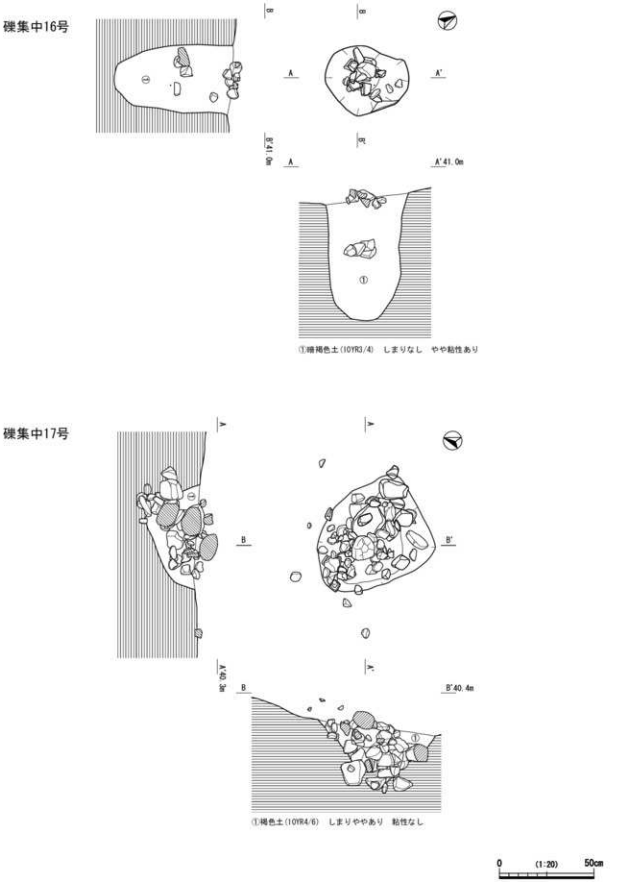
F-17区のⅣ層で検出された。掘立柱建物跡が検出された調査区北東側の丘陵地に位置し，100×80cmの範囲に38個の礫が密集している。５m北側には掘立柱建物跡６号がある。礫構成は安山岩が18個と多い。被熱痕のある礫が16点確認できる。長径100cm×短径64cm，検出面からの深さが約30cmの掘り込みがあるが，東側は樹痕で一部切られている。埋土はしまり・粘性ともにない黒褐色土で，焼土・炭化物は確認できなかった。黒褐色土の埋土から中世の遺構と判断した。

④　土器集中

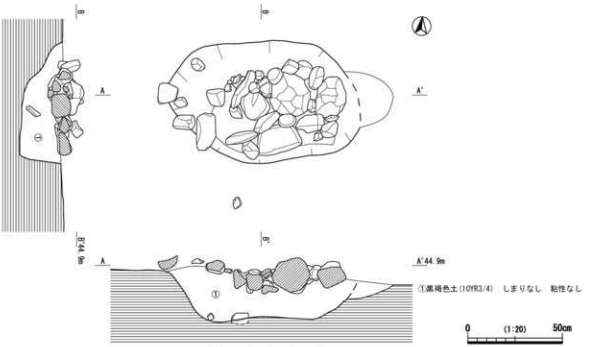
Ⅳ層では土器集中が４か所検出された。いずれも，遺跡の中央を北西から南東方向に傾斜する谷部に位置する。この谷部では，完形品や大型の破片が集中して出土する場所がみられた。調査時も慎重に調査を進め，同一個体の可能性が高い遺物については，出土状態を図化した。土器集中と認定できた遺構の中では，古墳時代の土器がその多くを占めている。後述するが，D地点でも，同時期と考えられる遺物集中が検出されており，それと



第57図　礫集中15号



第58図　礫集中16・17号



第59図　礫集中18号

一連のものの可能性がある。出土遺物や検出状況等から，時期認定を行った。

ア　古墳時代の土器集中

土器集中１号（第60図　49～52）

F・G-12区Ⅳ層で検出された。谷部中央の谷底部分に位置している。115×81cmの範囲に土器や礫が集中している。掘り込みは確認できなかった。

49は，外に開きながら伸び，外反する甕形土器の口縁部である。よってX1A類の土器に比定される。口縁部直下に貼付する突帯は三角突帯で，内外面ともに工具によるナデで調整し，口縁部は横ナデを施す。50は外に開きながらまっすぐ伸びる口縁部である。51は，外面には絡状突帯を貼付しており，突帯から上部分には煤が付着する。内外面工具によるナデ調整で仕上げる。52は上げ底の底部である。

土器集中２号（第61・62図　53・54）

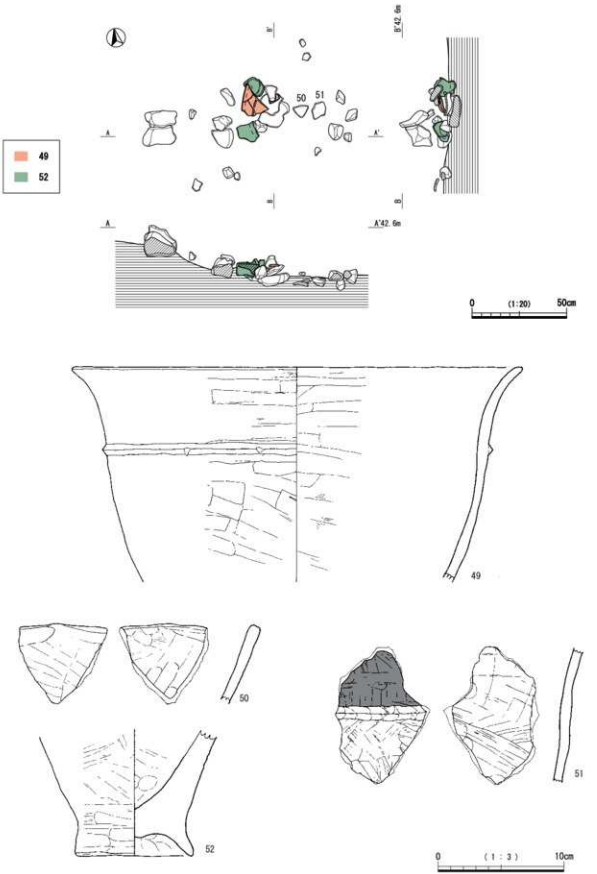
F-12区Ⅳ層で検出された。谷部中央の谷底部分に位置している。土器集中１号よりも約10mほど谷の上手の方にある。150×136cmの範囲に土器や礫が集中しており，北側部分で甕形土器53がつぶれ，その後傾斜にそって南側に流れたような状態で出土している。掘り込みは確認できなかった。

53・54は甕形土器である。いずれもXB類の土器に比定される。53は，口縁部下には刻目突帯を貼付する。胴部最大径を突帯直下に持つが，あまり張らない形態を呈する。口径は約33cm，器高は約40.5cmを測る。底部は低い脚台をもつ。内外面ともに工具によるナデを施す。54はやや内湾する口縁部をもち，口縁部に刻目突帯を巡らせる。内外面ともに工具や指によるナデを施す。外面の一部に煤が付着する。

土器集中３号（第63・64図　55～64）

I-15区Ⅳa層で検出された。谷部南端の谷底に位置している。周囲からは礫集中が多く検出されている。341×219cmの範囲に，甕形土器・鉢形土器・壺形土器・高坏形土器が散在している。56は，ある程度の大きさの破片がその場でつぶれたような状態で出土しているが，その他のものは傾斜に沿って流れてきたものと思われる。掘り込みは確認できなかった。

55・56は甕形土器である。55は外反する口縁部で端部は平坦に仕上げる。X1A類の土器に分類される。内外面ナデ調整が施される。56は丸底を呈する甕形土器である。脚台を持ち，広口を呈する南九州によくみられるタイプの甕形土器よりも，外面の調整でハケメを密に施すことや，内面は胴部下半に強めのナデで，粘土を結果的に削っていることから土師甕が在地化したものと考えられる。内面調整はその他にも指押さえやハケメを施す。外面の胴部最大径付近と口縁部に煤が付着する。57は口縁部が屈曲して外反する鉢形土器である。外面はハケメ調整で仕上げる。外面に部分的に煤が付着する。58は外に開きながら外反する口縁部を持つ大型の壺形土器である。工具によるナデ後口縁端部は横ナデを施す。肩部以下には縦方向のミガキを施す。内面の口縁部は横方向のナデを施し，肩部以下は工具によるナデを施す。59は肩部，60は１条の刻目突帯を貼付する胴部である。61・62



第60図　土器集中１号・出土遺物

はX2C 類の土器である。丸底を呈する。工具によるナデを施すが，61の内面は風化により調整不明。63・64は高坏形土器である。63はX3A 類の土器に分類される。内外面工具によるナデを施し，外面はハケメを縦方向に施す。64は脚筒部で，横方向にミガキを密に施す。

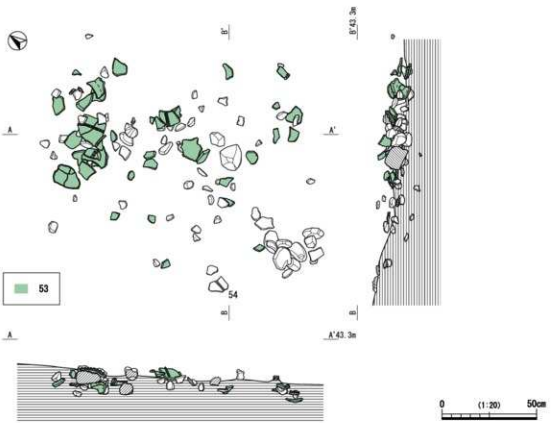
土器集中４号（第65～68図　65～83）

Ⅰ-16区Ⅳa 層で検出された。谷部南端の谷底部分に位置している。周囲からは礫集中が多く検出されており，土器集中３号から10ｍほど東にある。344×281㎝の範囲に，甕形土器・鉢形土器・壺形土器・高坏形土器が集中している。73や74の壺形土器が，その場でつぶれたような状態で出土している。掘り込みは確認できなかった。

65～72は，甕形土器である。65～68は口縁部で，X1A 類の土器に分類される。65は，「く」の字状に屈曲する。内外面は供に工具によるナデを施し，横ナデ調整で仕上げる。66・67は，外傾しながら外反する口縁部形態をもつ。66は突帯を持たず，内外面工具によるナデを施す。67は刻目突帯を巡らせる。また外面には煤が付着しており，使用時の吹きこぼれの痕跡が確認できる。工具及び指等によるナデで仕上げる。69は，X1B 類の土器に比定される。口径約25.5㎝を測る。67と同様に布目が残る刻目突帯を貼付する。内外面ともにナデを施す。外面には全体的に煤が付着する。70～72は脚部であり，X1C 類の土器に分類される。いずれも工具や指によるナデを施す。

73～78は壺形土器である。73・74は，X2A 類の土器に分類される。73は，頸部から上部分を欠く壺形土器である。胴部最大径を中位にもち，尖底を呈する。内外面は工具によるナデと中位には縦方向にミガキを施す。74は肩部～胴部である。73と同様に最大径を胴部中ほどにもつ。内面は工具や指によるナデを施す，胴部中ほど以外は，風化もしくは摩耗により器面が剥落している部分が多いが，外面はナデ後縦方向のミガキを施す。胴部には煤が付着することから，煮沸具として使用したことがわかる。75はX2B 類の土器に相当する。少なくとも１条の刻目突帯を貼付する。外面には焼成時の破裂痕が確認できる。76は胴部で内外面供に工具用によるナデで仕上げる。外面には煤が付着することから，煮沸具として使用されたことがわかる。77・78は底部である。79は鉢形土器で，X4類の土器である。外に開き口縁部はやや外反する。内外面ともにハケメを施し，口縁部は横ナデで仕上げる。

80～82は高坏形土器である。83はX3C 類の土器に分類される。椀部にかけての屈曲部分には少なくとも１か所に外から内に向かって棒状の工具で穿孔する。80は，坏～脚筒部である。坏部は底面がほぼ平らであり，脚部の内面には中空に仕上げる際に絞り込むように外面から力を加えて成形したことによりヒダ状の凹凸が残存して



第61図　土器集中２号

おり，その後工具で調整を加えている。坏部の内外面および脚部外面は丁寧なナデ調整とミガキ調整が施されている。脚部の外面に１点要の圧痕が検出された。81・82は，X3d 類の土器に分類される。81は器壁が薄い高坏の脚部である。内面は工具によるナデを施し，外面は縦方向のミガキののち裾端部は横方向にミガキを施す。82は端部が強いナデにより二叉状を呈する。外面は縦位のミガキ，内面は横位のナデ調整が施される。

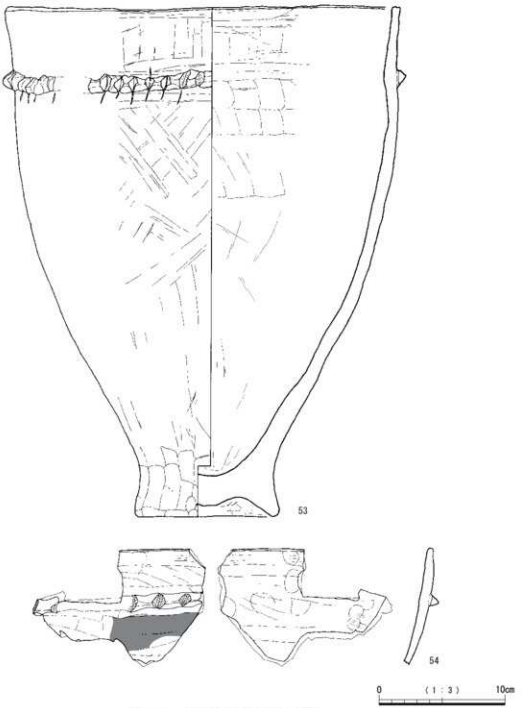
⑤　溝状遺構

Ⅳ層からは，６条検出された。Ⅴ層検出の溝状遺構と同様に，掘立柱建物跡が検出された調査区北側で，北東側の丘陵地の縁辺を囲むように溝状遺構が検出された。

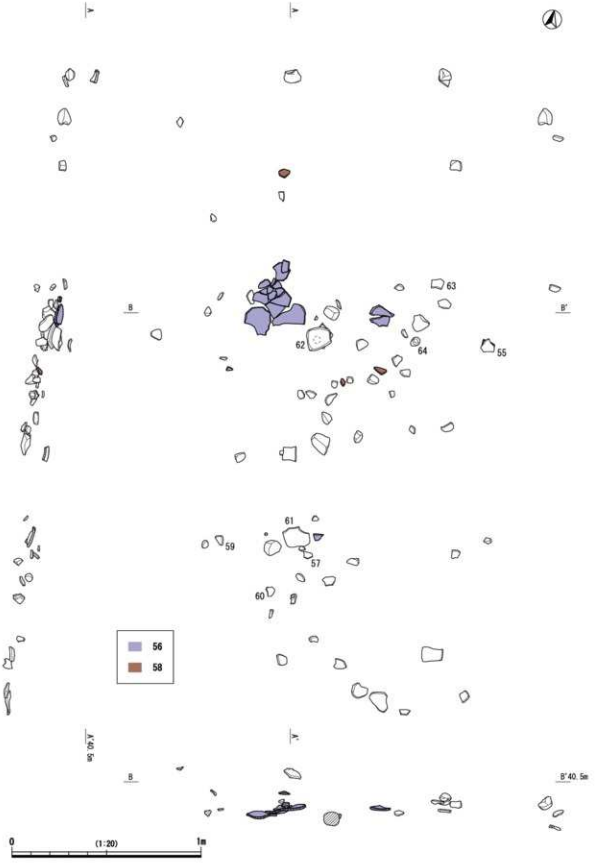
ア　中世以降の溝状遺構

溝状遺構12号（第69図）

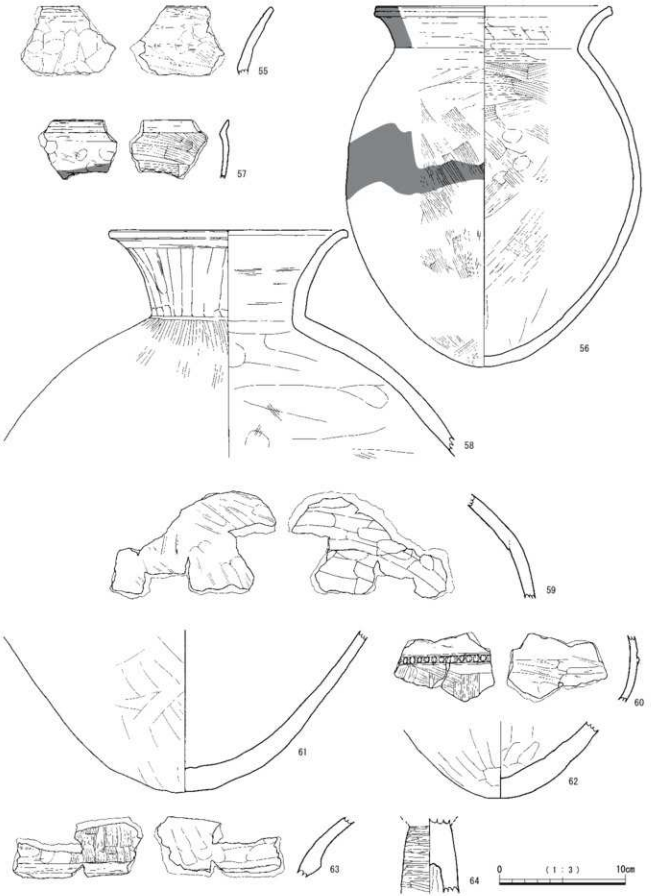
H−12・13区のⅣa 層で検出された。谷部のやや南側に位置する。傾斜に直行する形で掘り込まれ，南西方面のＣ地点側へと伸びていく。検出範囲で長さ約1.5m，幅約1.1mの規模で，検出面からの深さは約12cmである。



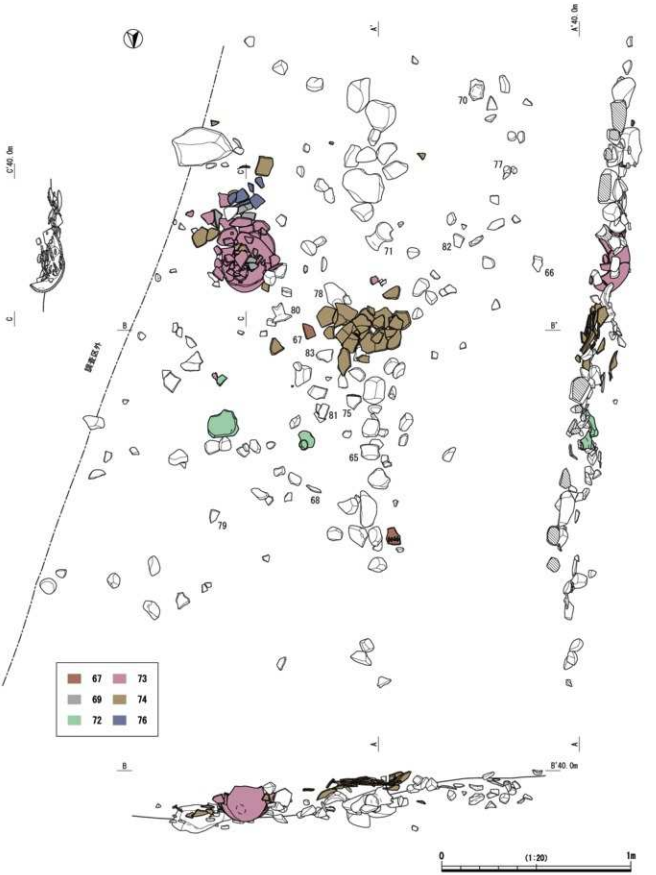
第62図　土器集中２号出土遺物



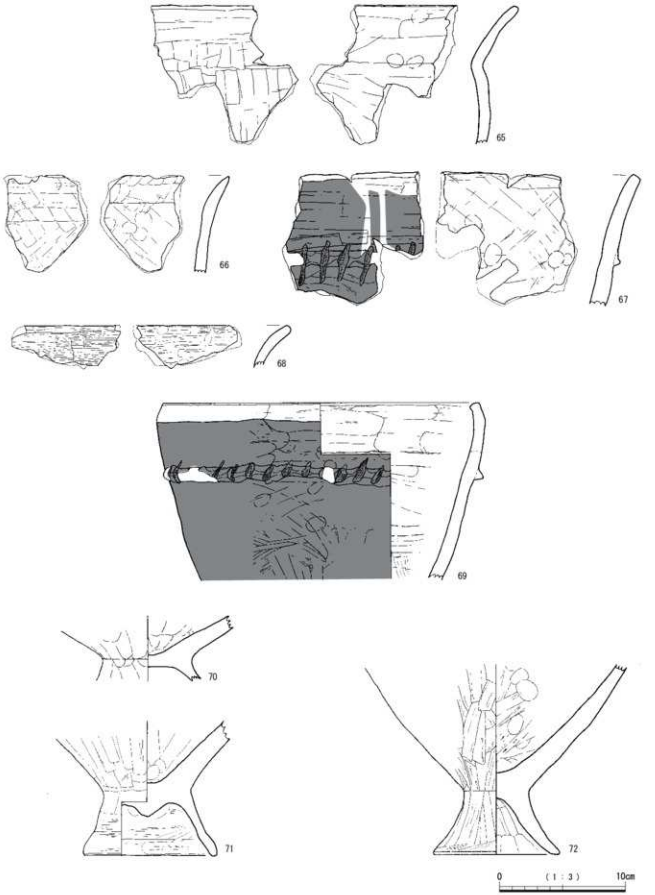
第63図　土器集中３号



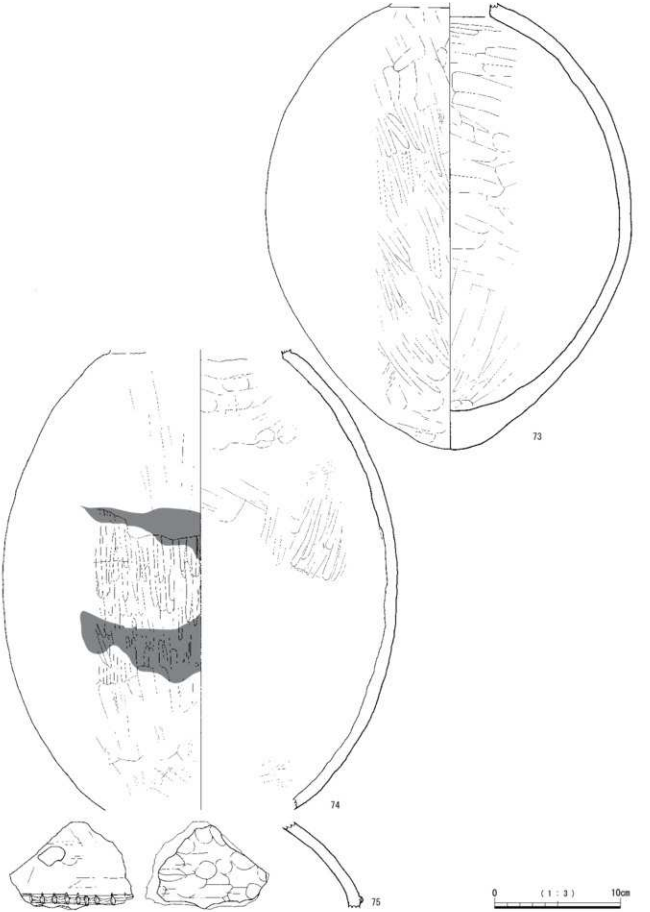
第64図　土器集中３号出土遺物



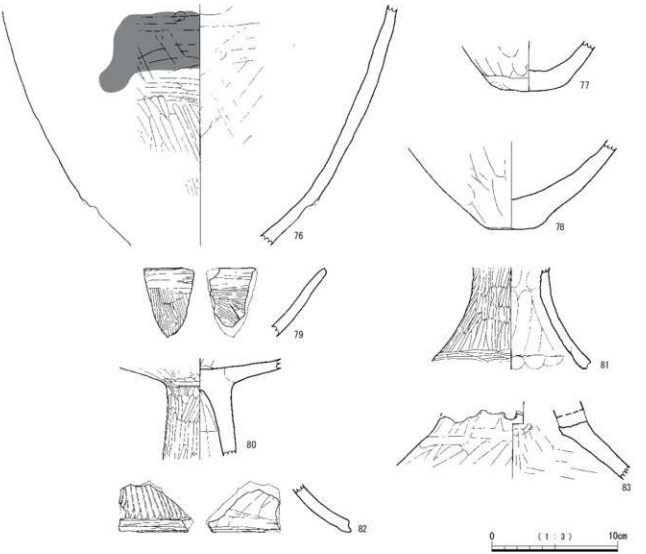
第65図　土器集中４号



第66図　土器集中４号出土遺物１



第67図　土器集中４号出土遺物２



第68図　土器集中４号出土遺物３

埋土は黒褐色土で，しまりがあり，粘性がややある。

溝状遺構13号（第69図）

Ⅰ-14区のⅣa層で検出された。谷部南端の谷底部分に位置する。検出範囲で長さ約4.5m，幅約0.7mの規模で，検出面からの深さは約30cmである。埋土は黒褐色土で，粘性・しまりともにあり，炭化物を多く含む。

溝状遺構14号・15号（第70・71図　84～97）

F・G-14～18区のⅣa層で検出された。掘立柱建物跡の検出された，調査区北東側の丘陵地の縁辺を囲むように検出された。掘立柱建物跡のすぐ近くであり，丘陵地の落ち際に沿うような形で掘り込まれていることから，何らかの区画を分けるための溝である可能性が高い。

溝状遺構14号の規模は，検出範囲で長さ約38.5m，幅約1.8m，検出面からの深さは約12cmである。

溝状遺構15号の規模は，検出範囲で長さ約30.3m，幅約1.1m，検出面からの深さは約15cmである。

埋土は２層に分層され，①は黒褐色土で，粘性・しまりともにややある。②は暗褐色土で粘性がややあり，しまりはない。

84・85は甕形土器の脚台部分である。充実脚台で，Ⅷ類の土器に相当する。86～89は甕形土器の口縁部である。X1A類の土器に比定される。内外面工具によるナデで仕上げる。90は刻目突帯を少なくとも１条貼付する胴部である。91～93は壺である。91は壺の肩部で刻目突帯を１条貼付する。92・93は底部で，X2C類の土器に分類される。93は凸レンズ状を呈し，92は丸底を呈する。92の胎土は２mm～３mm大の褐色粒を多量に含む。94は東播系須恵器で，捏ね鉢の口縁部である。外面最大径部分に自然釉が付着する。95・96は鉄滓である。95は，上面にガラス質の滓が付着する。上面にはバブル状に割れた痕跡が確認できる。96は，鉄塊が付着してる部分や，木炭のはまっていた痕跡が確認できる。

97は，埋土中から出土した打製石斧である。基部側を欠損するほか，裏面も広く剥脱している。裏面の左下端

には擦痕が観察され，そこに対応する刃部は摩耗して軽く光沢を帯びる。出土状況等から，溝との関連性は薄いと考えられる。硬質頁岩製で，長さ10.3cm，幅7.4cm，厚さ1.9cm，重さ138ｇである。

溝状遺構16号（第72図　98）

G−17区のⅣa 層で検出された。掘立柱建物跡の検出された，調査区北東側の丘陵地の傾斜に直行する形で掘り込まれている。溝状遺構14・15号と溝状遺構17号に切られているため，これらのものよりも時期が古い。検出範囲で長さ約4.6m，幅約0.5mの規模で，検出面からの深さは約16cmである。埋土は，①黒褐色土と②暗褐色土の２層に分層され，②はアカホヤブロックが混在する。

98は，頁岩のやや平盤な小円礫の周縁や正面に多数の刻線が刻まれた線刻礫である。周縁の刻線は，正面または裏面に対し直交するように稜線上に短く刻まれており，長いもので１cm弱，短いもので２，３mm程度と長さは様々であるが，同程度の長さの刻線は方向と間隔が概ね揃っている。深さについては，長さに対応しているようである。刻線は，単体でみれば縄文時代後期頃から出土する切目石錘の切目部分に類似するが，対になっていないなど，全体としてはまったく異なっている。また，正面には断面レンズ状のごく浅い刻線も観察される。なお，礫表面には研磨などの加工はみられず，被熱痕跡も観察されない。

この他，上下端にはわずかに敲打痕も認められ，下端の敲打痕には刻線を潰している部分と刻線に切られている部分と両方観察される。長さ4.7cm，幅4.4cm，厚さ1.9cm，重さ48.8ｇである。

溝状遺構17号（第72図）

G−16〜18区のⅣa 層で検出された。掘立柱建物跡の検出された，調査区北東側の丘陵地の縁辺を囲むように検出された。溝状遺構14号・15号に沿うような形で，さらに傾斜の下側に位置する。検出範囲で長さ約14.4m，幅約0.9mの規模で，検出面からの深さは約12cmである。埋土は３層に分層される。①が黒褐色土で，②と③はいずれも硬化面である。②の硬化面を③の硬化面が切っている。

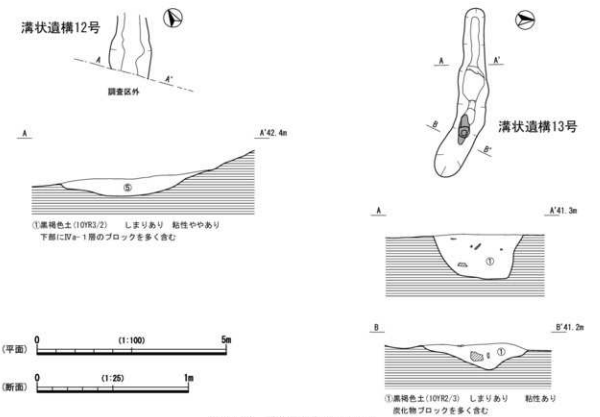
⑥　道跡

道跡については，硬化面を持ち，筋状に一定方向に形成されたものを道跡とした。Ⅳ層では，道跡を７条検出した。その中で，残存状況が良いものを３条のみ平断面を図化した。その他の道跡は，遺構配置図に平面図のみ掲載している。

ア　中世〜近世の道跡

道跡１号（第73図）

F・G−12・13区のⅣa 層で検出された。谷部中央の谷底部分に位置する。谷底を北西から南東へと緩やかに下っている。検出した部分は３か所に分かれてしまっているが，検出範囲で長さ約23.2m，幅約0.7mの規模で，硬化面の厚さは約７cmである。A−A’断面部分のみ，



第69図　溝状遺構12・13号

硬化面が二層に分層される。

道跡２号（第73図）

Ⅰ-16区のⅣ層で検出された。谷部南端の谷底付近に位置する。谷部の傾斜に直行するように北に伸びている。検出範囲で長さ約3.3m，幅約0.6mの規模で，硬化面の厚さは約10cmである。

道跡３号（第74図　99）

H・Ⅰ-14区のⅣ層で検出された。谷部南端の谷底部分に位置する。道跡１号からは，12mほど下ったところにあるが，谷筋に直交する形で検出された。検出範囲で長さ約9.3m，幅約0.6mの規模で，硬化面の厚さは約５cmである。

99は，深鉢の口縁部である。ＩＣ類の土器に分類される。口唇部には刻みが施される。口縁部外面には横位の貝殻条痕，やや下には斜位の貝殻条痕が確認できる。内面はナデで仕上げられる。

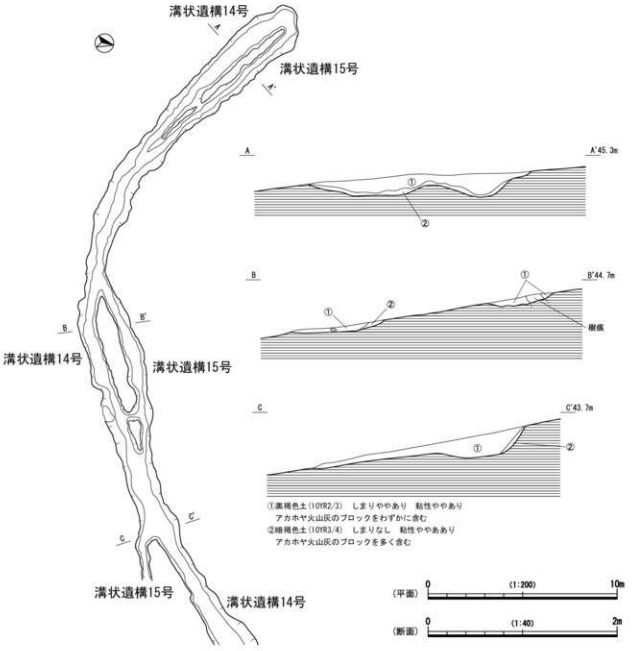
(2)　遺物

①　土器

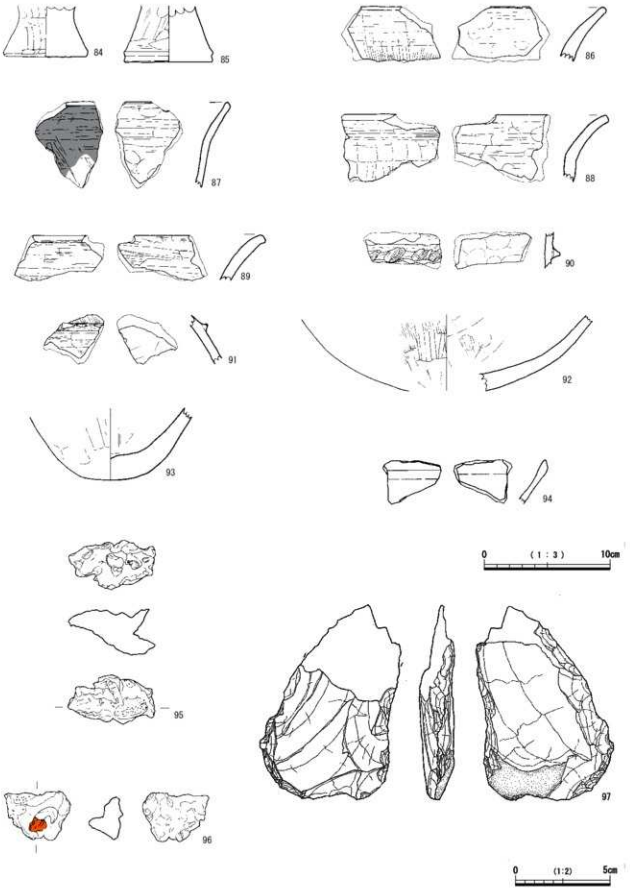
Ⅳ層からは，縄文時代早期から中世の遺物が出土した。

特に縄文時代晩期と古墳時代の土器が多く出土した。また，古代と中世の時期区分が困難な遺物が数点あったため，それらの遺物に関しては，「古代から中世の時期」と表記する。

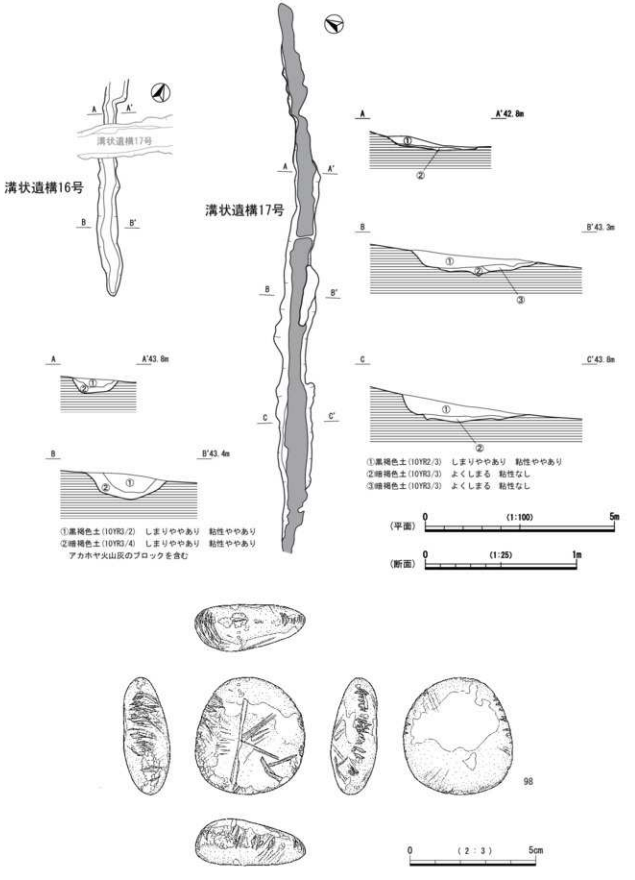
縄文時代の遺物としては，深鉢形土器，浅鉢形土器，鉢形土器が出土し，精製，粗製また半粗製のものが出土した。弥生時代は小破片の資料が多かったため，細かく



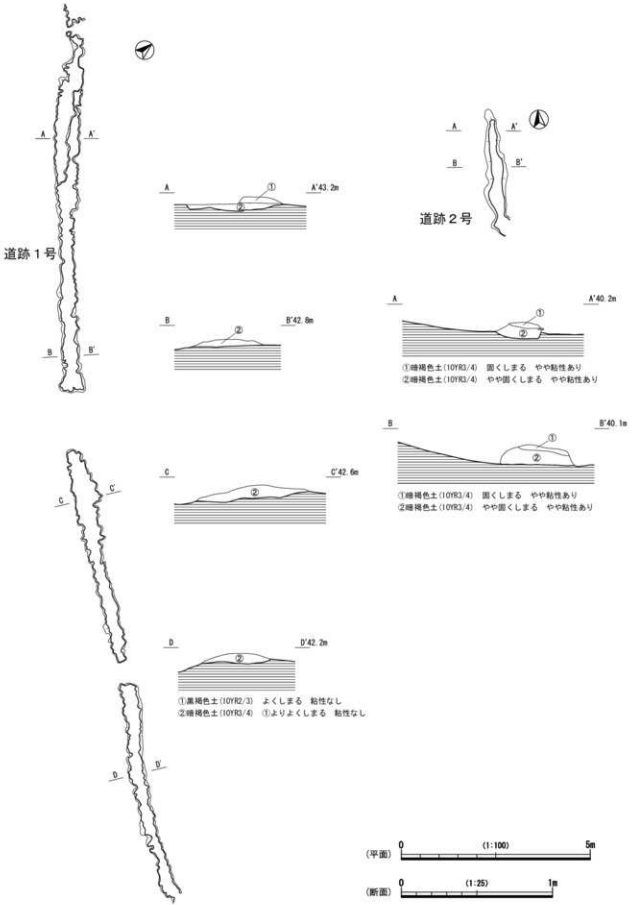
第70図　溝状遺構14・15号



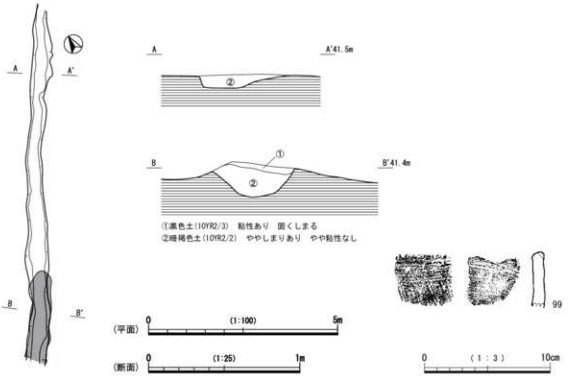
第71図　溝状遺構14・15号出土遺物



第72図　溝状遺構16・17号・出土遺物


道跡１号
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
A'43.2m
B'42.8m
C'42.6m
D'42.2m
①
②
①褐色土(10YR2/3)　よくしまる　粘性なし
②暗褐色土(10YR3/4)　①よりよくしまる　粘性なし
道跡２号
A'40.2m
B'40.1m
①暗褐色土(10YR3/4)　固くしまる　やや粘性あり
②暗褐色土(10YR3/4)　やや固くしまる　やや粘性あり
(平面)
0
(1:100)
5m
(断面)
(1:25)
1m

第73図　道跡１・２号



第74図　道跡３号・出土遺物

分類することが困難であった。古墳時代の遺物は，甕，壺，高坏，鉢，坩等が出土し，Ⅳ層出土遺物のほとんどが古墳時代の遺物と考えられる。中には宮崎平野部出土遺物の胎土と近似する甕，壺，古式土師器が数点出土した。古代から中世の遺物は，土師器埦，坏，皿が出土した。既存の研究に基づく土器形式また様式を基本に，器形，文様形態により分類した。

ア　ⅠA類土器（第75図　100・101）

100・101は深鉢である。いずれも内面は工具により横もしくは斜位方向にナデを施す。外面は，沈線で区画した後に撚糸文で施文し，沈線より外側にはみ出た施文部分はナデ消している。

イ　Ⅲ類土器（第75図　102）

102は深鉢の口縁部である。ほぼ直行する器形で，口唇部に粘土を貼付け，その上から棒状工具で上から押さえこむようにして刻みを施すいわゆる小波状口縁を呈する。外面には横方向に凹点が施され，それに加え棒状工具による凹線が引かれる。同一工具によるものかは不明である。内面はナデ仕上げがされるが不十分で，接合痕が段差で残り，そのため内傾接合されることを観察することができる。これらの特徴から，時期は縄文時代中期頃と考えられる。

ウ　Ⅳ類土器（第75図　103～106）

103はやや内湾する口縁形態で，口唇部に粘土を貼り付けて口縁部を作るが，ナデが不十分のため，接合痕が明瞭である。貼り付けた粘土の上には沈線を横位に１条引く。口縁部内面には凹線を巡らせる。外面は粗いナデだが，内面は外面よりは丁寧なナデを施す。胎土には雲母を多量に含み，その他には１㎜大の白色鉱物や赤色鉱物も少量含む。104は，口縁部に沈線を２条巡らせ，内面には段を有する。胴部には少なくとも１条の凹線を巡らせる。外面は斜位方向にナデを施し，内面は横方向にナデを施す。胎土には雲母を含み，１㎜～３㎜大の白色鉱物を多く含む。105は，外反する口縁部で，口唇部は平坦を有する。外面は丁寧に横方向にミガキを施し，内面は工具による横方向のナデを施す。106は胴部である。屈曲部に向かって外に開く形態を呈する。外面は横方向のナデ，内面も同じく横方向にナデを施すが，屈曲部分には粗いナデを施すものである。

エ　Ⅳe類土器（第75図　107）

107は底部に木葉痕が確認できる。網状脈の広葉樹の木葉で，１枚の木葉の切り合いの痕跡なのか，数枚重ねた木葉の切り合いなのか判断することは困難であったが，少なくとも主脈の向きは３方向確認できる。主脈の伸びる方向は，①７時－９時方向に主脈が伸びる葉②10時－４時方向に主脈が伸びる葉③３時－９時方向に主脈が伸びる葉であり，さらに①→②→③の順番に古いことが分かった。つまり，数枚重ねた木葉の切り合いであると仮定した場合，一番下層に①の葉を敷き，次に②，最後に③の葉を敷いてその上に木葉痕が残るくらい乾燥が

不十分な土器を置いた可能性があると考える。

オ　VA1類土器（第78図　108～112）

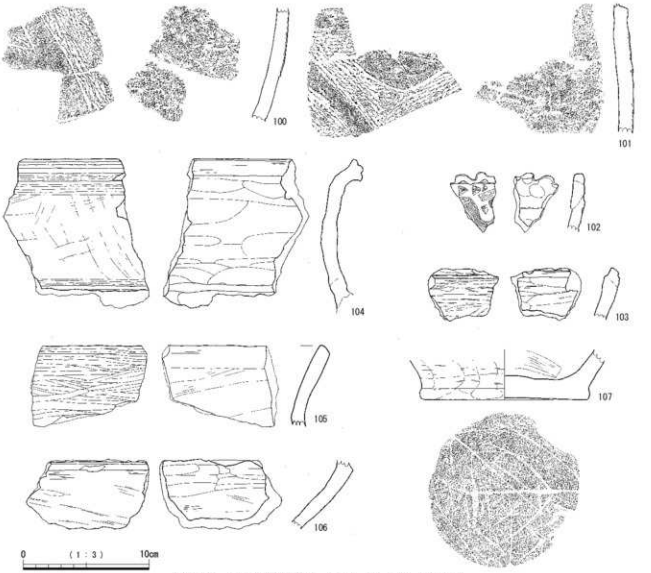
108～111は，深鉢の口縁部であり，器壁が薄いのが特徴である。108～110は，外傾しながら伸びる口縁部が口唇部で内湾する形態である。口縁部外面の先端付近には1条の沈線を巡らせる。口唇部は平坦に仕上げる。内外面ともに横方向の丁寧なナデを施す。111は，口縁部が外傾しながら伸びる。口唇部の一部をつまみ出し，突起状の張り出しを作出している。張り出し部分以外の口唇部はナデ調整により平坦面をなしている。内外面とも丁寧な横位のナデ調整であり，胎土には1㎜～3㎜大の白色鉱物を多く含む。112は口縁部をやや肥厚させた上に外面に，幅約1㎜～2㎜の粗い3条の沈線を巡らせる。

カ　VA2類土器（第78図　113～117）

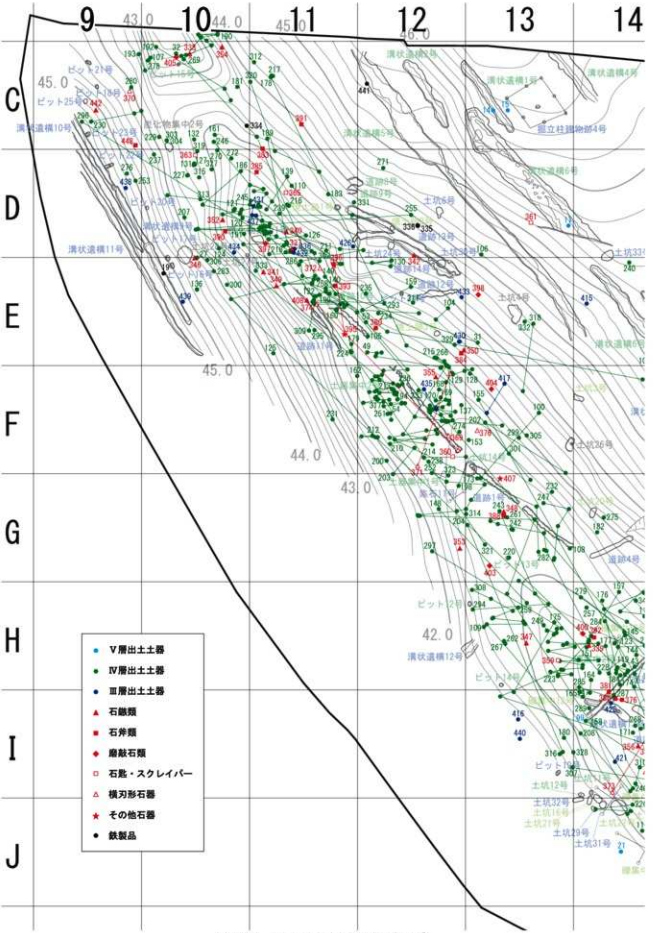
113～116は，浅鉢形土器である。113・114は口縁部が長く直線的に開く。胴部での屈曲が鋭角であることから稜線がはっきりと入り，丸みをもたない。内外面ともに入念にミガキがされる。113・114の口唇部は短く外反する。115は口縁部を欠くが，同様の形態を呈すると思われる。116は口縁部が短い。117はやや厚めの器壁で，鋭角的に屈曲する胴部である。外面は丁寧なナデ，内面はミガキを施す。

キ　VB1類土器（第79・80図　118～132）

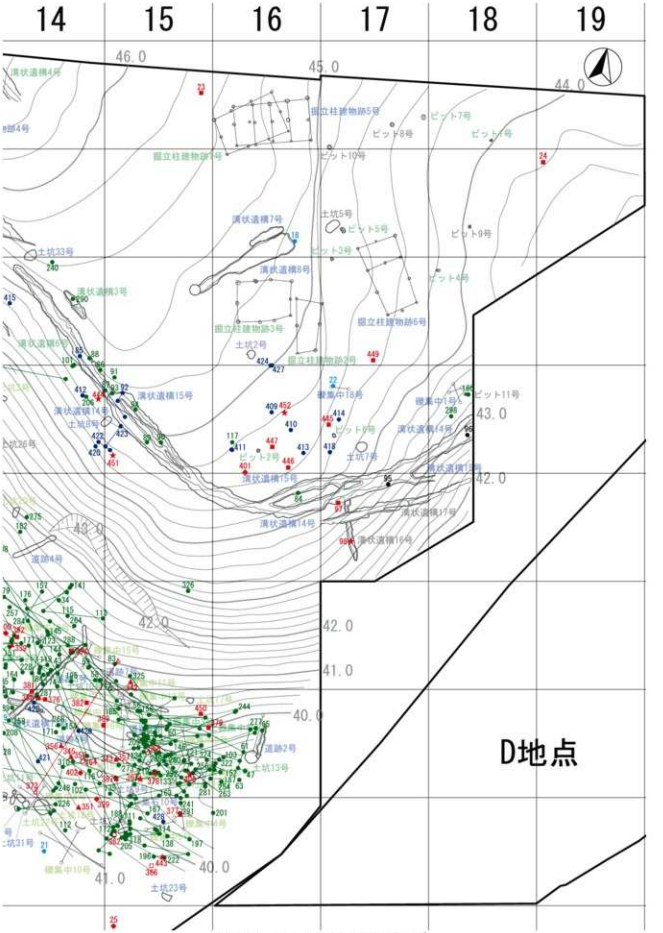
118～127は深鉢形土器である。118～121は口縁部がやや外反しながら開くもので，118は，やや丸みを帯びた胴部屈曲部から一旦わずかにすぼまり口縁部は外に開く。口唇部は断面舌状，もしくは丸く整える。復元口径約33cmを測る。内外面ともに，屈曲部より上は横方向の貝殻条痕を施し，屈曲部より下は粗くケズリをした後ナデで仕上げる。内面は，屈曲部以外は横方向のケズリ後ナデを施し，屈曲部より上はナデを施す。119は，118より直線的に開く口縁部をもち，復元口径は約21.6cmを測る。また，口縁部内面に屈曲部をもち，外面よりも内面に明瞭な稜線が入る。口縁部には一部つまみ出し状の突



第75図　Ⅳ層出土遺物1（ⅠA，Ⅲ，Ⅳ，Ⅳe類）



第76図　Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ層遺物分布図①



第77図　Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ層遺物分布図②

起を作出する。胴部が張る器形を呈するが，内外面はともに粗いナデで仕上げる。120・121は，口縁部は緩やかに外反し，口唇部にかけて先細りに伸びる。屈曲より上は，内外面ともに横位の貝殻条痕がみられる。屈曲より下は，ケズリ後ナデを施す。122は口縁部がやや内湾しながら伸び，口唇部には粗い沈線を1条巡らす。屈曲部から胴部にかけても口縁部同様やや丸みを帯び，屈曲部より下位は器壁を薄く仕上げる。口径に対して器高が低いものと思われる。内外面ともに粗いナデを施す。123は，やや内湾しながら開く口縁部で，口唇部は平坦を呈するが，一部に山形のつまみ出しが付く。内外面ともにナデを施す。124は外反する口縁部で，口縁端部が薄く丸く突出する。内外面貝殻条痕を施す。125はやや内湾しながら直線的に外反する口縁部で，124と同じく貝殻条痕を施す。126は，123のようにやや内湾しながら開く口縁部で，先端部分に粘土を継ぎ足して成形し，その部分のみ外反する。口唇部は，平坦を呈する。内外面ともにナデで仕上げており，口縁部内面ナデを施したことによって，口唇部外面には粘土溜まりが垂れた状態。127は直線的に伸びて先端部分のみ外反する口縁部で，器壁が厚いのが特徴的である。外面は貝殻で縦や横位のナデを施し，内面は横方向に粗いナデを施す。128・129は内湾して端部のみが直口し肥厚させる口縁部をもち，内外面ともに粗くミガキを施す。

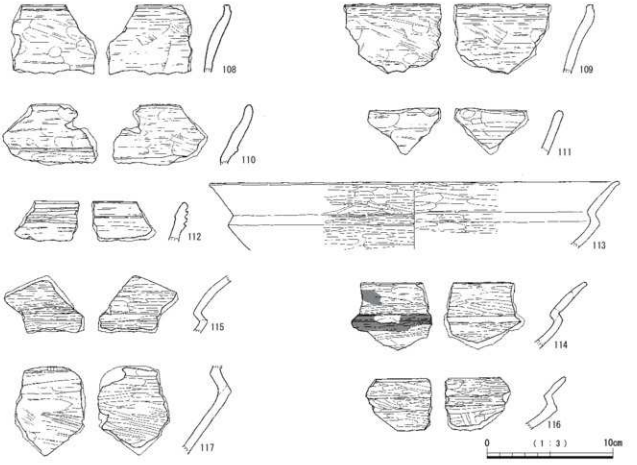
130は直線的に外傾する口縁部である，器壁が厚く，内外面ナデを施す。胎土には1㎜～2㎜大の雲母を多量に含む。131・132は器壁の厚い胴部である。内外面ともに粗くナデを施す。外面には煤付着。

ク　ⅤB2類土器（第80図　133～135）

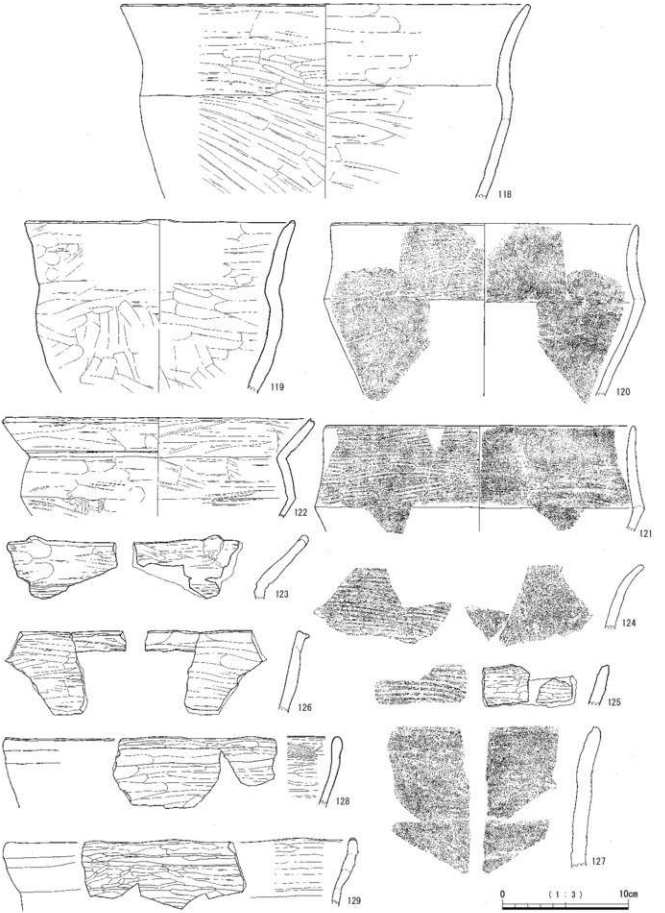
133～135は鉢形土器である。口縁部外面は，粘土帯を貼付するかのように肥厚させるが，よくナデ付けられる。133・134は内外面ともにミガキを粗く施す。135は，133・134よりは丁寧にミガキを施す。

ケ　ⅤB3類土器（第80・81図　136～162）

136～139は粗製浅鉢である。136～138は口縁部が緩く内湾しながら伸びる。外面はナデ，内面は横位もしくは斜位方向の丁寧なミガキを施す。139は，胴部である。外面は貝殻条痕で粗くナデる。胎土には1㎜～3㎜大の白色鉱物や石英，また雲母を多く含む。140は底部付近である。器壁は薄く，外面は粗くナデを施すが，内面は丁寧に横方向にミガキを施す。141～156は精製浅鉢である。中でも141～147は口縁部が外に向かって広く開く浅鉢である。141は器壁が薄く，口唇部は玉縁状を呈する。内外面とも丁寧なミガキ調整で仕上げられる。胎土は精製。全体的に赤褐色の色調を呈する。142も141と同様の口縁部である。胎土も似ており同一個体の可能性がある。



第78図　Ⅳ層出土遺物2（ⅤA1，ⅤA2類）



第79図　Ⅳ層出土遺物３（Ⅴ81類）

143は内外面ともに色調が黒褐色で口縁端部内面に粘土紐を１条巡らせた後，ミガキを丁寧に施す。144～146は外反して開く口縁部形態を呈する。口唇部に粘土紐を貼付する。内外面ともに横方向にミガキを施す。147は直線的に伸びる口縁部である。口唇部にナデを施すことによって稜線が明瞭な平坦面が作出されている。口唇部内面には平坦面を作出した際の粘土が重なっている。148・149は，口縁部がやや内湾する。148は，口唇部に粘土紐を貼付するが，ナデが不十分なことから，内面に張り付け痕が確認できる。口縁部断面は玉縁状を呈する。外面は横位のミガキ調整である。内面は斜位のナデ調整であり，口唇部の張り付け部付近はヘラ状工具によりナデ付けた痕跡が確認出来る。胎土に微細な石英を多く含み，全体的に砂質である。149は，148よりも器壁が厚く，内面はナデを丁寧に施す。外面は風化もしくは摩耗により調整は不明瞭である。外面煤付着。150・151も同様に粘土紐を巡らせている。ミガキが内外面丁寧に施されており，150は内面に，151は内外面にそれぞれ沈線を１条，巡らせる。152は，リボン状突起を貼り付ける。口唇部から内面にかけて，わずかであるが赤色顔料が残存している。内外面とも横位・斜位の丁寧なミガキ調整である。153・154は口縁部に貼付したリボン状突起である。155は，141・142と類似する胎土やミガキ調整を施すものである。156は，胴部に屈曲を持つ胴部である。157は，頸部で屈曲し，胴部が丸みを帯びて張る。口唇部の一部がつまみ出されたようにわずかに盛り上がっており，２か所ないしは４か所程度の小突起を作出している可能性がある。内外面とも丁寧な横位のミガキ調整である。また，内面には一部に条痕状の調整がみられる。158は157と同じく胴部が丸く張る胴部である。159・160は，外反もしくは外湾する口縁部をもたず，口縁端部外面に粘土紐を貼付し，十分にナデを施した後にミガキを丁寧に施す。内面も外面と同様にミガキを丁寧に施す。161・162は内湾する口縁部で，161は，一部に短い粘土紐が貼付される把手状突起が羽釜状に巡る口縁部である。内外面丁寧にミガキが施される。162は横位のナデをきわめて丁寧に施す口縁部で，口唇部に沈線を１条巡らせる。

コ　ⅤC類土器（第82図　163～165）

163～165は組織痕土器である。163は底面の全体に繊維圧痕が確認できる。また外面はナデが不十分なことから，土器製作時に，粘土紐を中心から左回りの渦巻き状に接合していることが観察できる。内面はミガキを施す。164・165は底部付近で，網目状の組織痕が確認できる。接合点は無いが，同一個体の可能性がある。

サ　ⅤD類土器（第82図　166～171）

166～170は深鉢かもしくは中華鍋型を呈する鉢形土器と思われる。口縁部外面やや下に粘土紐を横位に１条貼付して，工具による刻目を連続して施す。166は口縁端部外面下に，１条の爪形の工具による刻目突帯を巡らせる。突帯の上下端はナデ調整により整えられている。外面はやや摩滅しているが，内外面ともナデ調整である。胎土には１㎜～２㎜大の白色鉱物を含む。167はヘラ状工具で刻みを施す。胎土は166と似ている。168は，ヘラ状工具で浅く刻みを巡らせる。外面はナデ，内面は横方向に密にミガキを施す。168は169と口縁部形態，調整，胎土が非常に似ていることから同一個体の可能性がある。170は168・169よりも口唇部がやや細く，外反する形態である。刻目は棒状工具によるものである。外面はナデ，内面は密にミガキを施す。縄文時代終末ごろと思われる。171は横位の一条の突帯とその下に，ハの字状に２つの突帯を展開し，全ての突帯上に刻みを施している。胴部は横位のミガキ調整で，調整後に突帯を貼り付けている。外面の上位には煤がわずかに付着している。

シ　Ⅴe類土器（第83図　172～177）

172～177は底部である。残存状態の良い個体を図化した。器壁の厚みは様々であるが，いずれも円盤状の底部で端部を突出させたりさせなかったりする。

ス　Ⅵ類土器（第84図　178）

178は壺形土器である。178は，頸部～肩部である。内外面ともにミガキを施すが，特に外面は丁寧に仕上げる。外面は，頸部は縦方向，肩部は斜位方向に密に丁寧にミガキを施すが，内面のナデ及びミガキは横方向に施されるが不十分であり，頸部と肩部の境には粘土帯の接合痕が確認できる。また，器壁は頸部の方が肩部よりも厚い。時期は弥生前期ごろと考えられる。

セ　Ⅶ類土器（第84図　179）

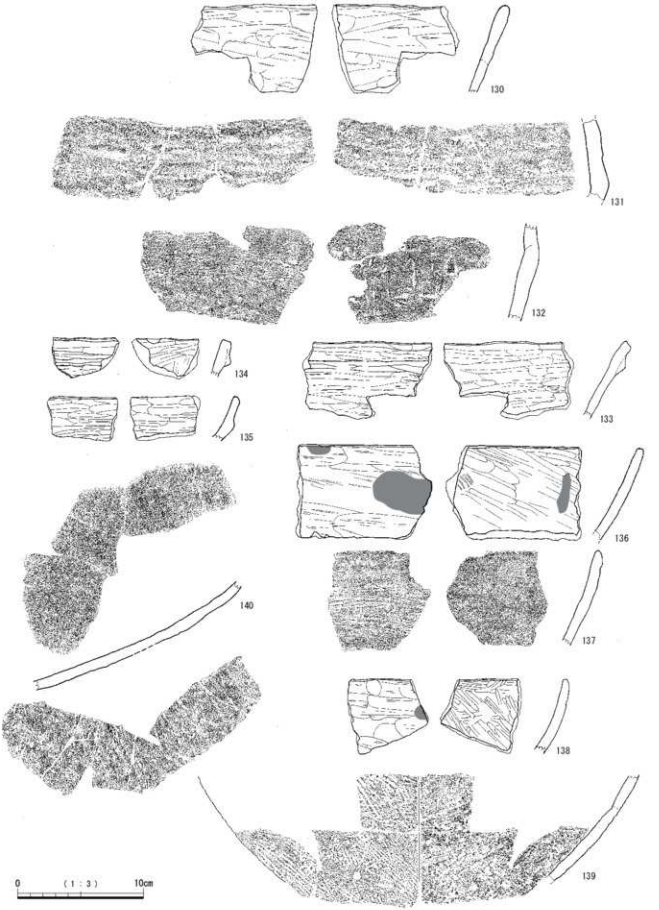
179は甕形土器の胴部～底部である。平底を呈する。外面は縦方向にミガキを施し，内面はナデを施す。

ソ　Ⅸ類土器（第84図　180～185）

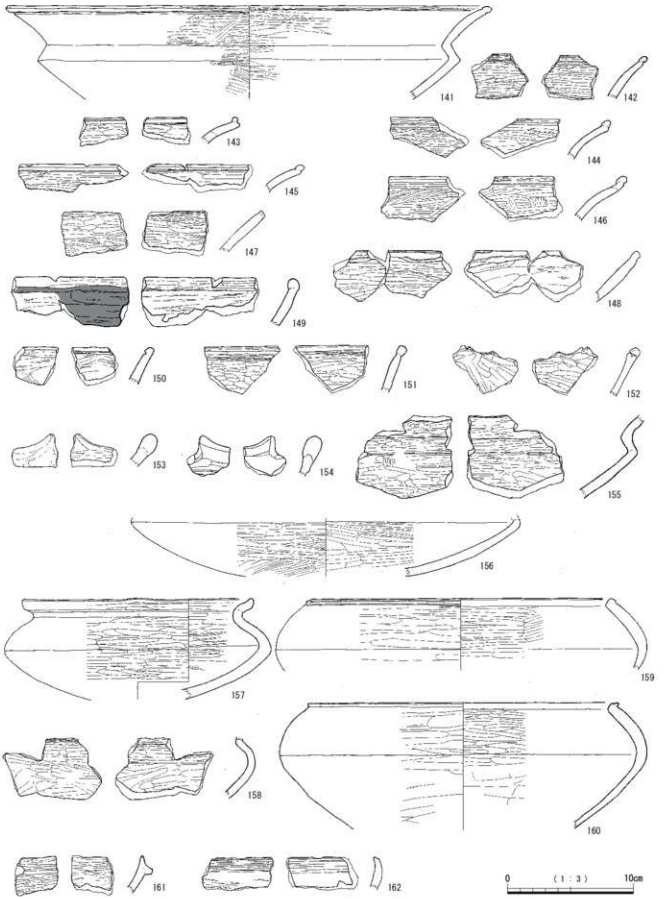
180は，壺の肩部である。沈線が少なくとも３条巡る。内外面風化が顕著で，調整不明である。胎土には１㎜～２㎜大，また３㎜大の白色鉱物を含む。181は小型の壺の上げ底気味の底部である。底部の器壁が薄いのが特徴的である。内外面ナデで仕上げる。182は鉢形土器である。口唇部は平坦を呈する。内外面ナデで仕上げる。183・184は蓋形土器である。183は内外面ナデが施され，口縁部内面に煤が薄く付着する。184は把手部分である。スカート状に開く形態で，183と同じく外面はナデが確認できるが，内面は風化及び摩耗が顕著で調整は不明瞭である。185は脚台を持つ甕もしくは鉢形土器のミニチュア土器である。胎土には雲母を多く含む。

タ　Ⅹ1a類土器（第85・86図　186～204）

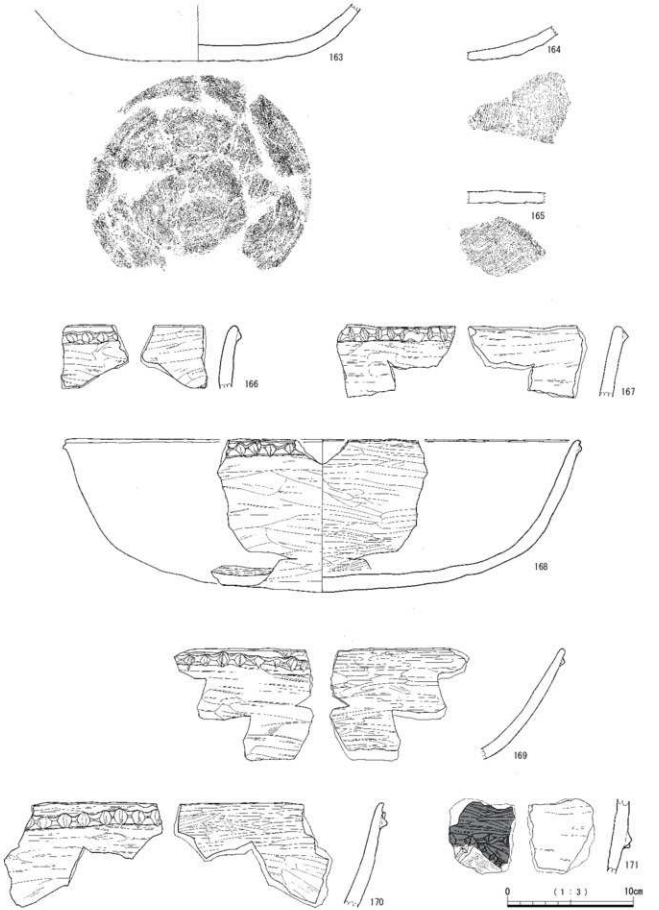
186～204は，口縁部が外反もしくは外湾する甕形土器である。中でも186～195はロ縁部に屈曲部をもち，186～194はいわゆるカキアゲ調整を施すものであり，板状工具の打ち込み痕の部分に稜線が入る。口唇部は強めの



第80図　Ⅳ層出土遺物４（ⅤB1，ⅤB2，ⅤB3類）



第81図　Ⅳ層出土遺物５（ⅤB3類）



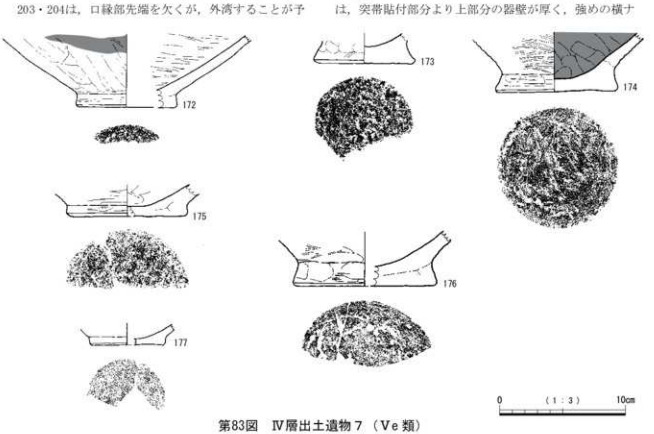
第82図　Ⅳ層出土遺物６（VC，VD類）

横ナデにより平坦を呈する。186は，内外面ともに胴部の上位に斜位方向のナデを施す。外面に煤が付着する。187は，外面のハケメが明瞭である。内面は横方向にナデを施す。胎土に２㎜～３㎜大の褐色粒を含む。188は内外面強めのハケメを施す。189は弱いハケメを施す。内外面ともに斜位方向のナデを施す。外面煤付着。190は，口縁部～胴部にかけて縦方向にハケメを施す。内面は，口縁部は横ナデを施し，胴部は斜位方向のナデを施す。191は，内外面工具によるナデを施す。胎土には１㎜～２㎜大の石英を多く含む。192・193は，口唇部に１条の沈線を巡らせる。194は，細い三角突帯を貼付する。口縁部外面には縦方向にハケメを施すが，突帯下部から胴部にかけてはナデを施す。内面には斜位方向のハケメを施す。195は，細かく刻んだ刻目突帯を貼付する。内外面ナデ調整を施す。196は，緩やかに外反する口縁部を持ち，口縁部は横ナデ，胴部は内外面ともに工具によるナデを施す。外面には一部煤が付着する。197は196と同じくらいの傾きで，口唇部形態が酷似している。内外面の調整はナデ調整で仕上げる。198～202は，刻目突帯を貼付する口縁部である。その中でも202は，貼付される突帯の刻みの間隔が広く浅いのが特徴的である。胎土は白っぽく，黒色粒を多く含む。199は，外傾しながら伸び，先細りになる口縁部である。刻目突帯を１条貼付する。201は，直線的に伸びる口縁部で，刻目突帯を１条貼付する。刻みには布を巻き付けた板状工具が使用されたことが確認できる。外面には全体的に煤が付着する。

203・204は，口縁部先端を欠くが，外湾することが予測できる形態をもつ。203は，細かい刻みを施す突帯を１条貼付する。口縁部は横ナデ，突帯下部は斜位方向のナデを施す。内面は，工具により横方向に丁寧にナデを施す。204は，器壁が厚く外湾する。突帯には細めの刻みを施す。外面は縦方向の，内面は横方向の工具ナデを施す。

チ　Ⅹ1b 類土器（第87・88図　205～217）

205～212は，直口縁もしくは内湾する口縁部形態をもつ。205は，胴部からまっすぐ伸び外湾するものの，先端部では内湾する形態のため，Ⅹ1b 類に分類した。布目圧痕の刻目突帯を１条貼付する。口縁部は横ナデ，胴部は内外面ともに工具によるナデを施す。内面の突帯貼付部付近には指頭圧痕が連続して確認できる。206は，器壁が厚くまた刻目突帯の幅も広い重厚なつくりである。直線的に伸び，口唇部は平坦面をもつ。内外面ナデ調整で仕上げる。また外面には煤が付着し，吹きこぼれの痕跡が確認できる。207は，直線的に上方向に伸びる口縁部で，幅が広く厚みの薄い刻目突帯を１条貼付するが刻みの間隔は狭く，また浅いことが特徴的である。内外面ともに工具によるナデまた指によるナデの痕跡も確認できる。外面に煤が付着する。208は，外に開きながら伸び，先細りになる口縁部である。内外面ともに横方向のナデを施す。刻目突帯を１条貼付するが刻みは浅い。209はやや外傾しながら伸びる口縁部で，口縁端部はやや細い。外面は丁寧に横方向にミガキを施し，内面も丁寧にナデを施す。外面には煤が厚く付着する。210は，突帯貼付部分より上部分の器壁が厚く，強めの横ナ



第83図　Ⅳ層出土遺物７（Ⅴe 類）

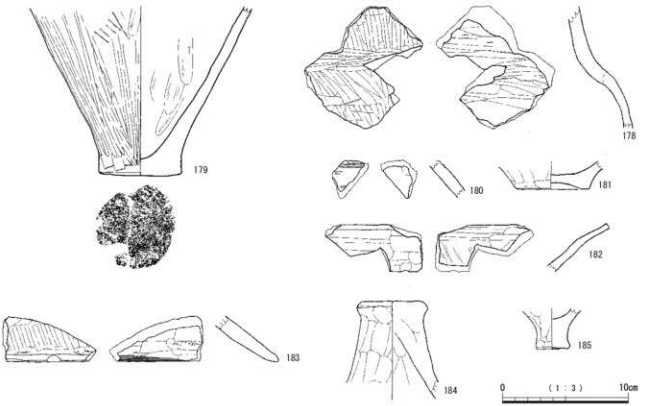
デにより口唇部は平坦面を持つ。貼付される刻目突帯は布目状の圧痕が確認できる。外面に煤が付着する。211は，やや内湾しながら伸びる口縁部である。口唇部はやや丸みを帯びる。布目痕の確認できる刻目突帯を１条貼付する。内外面ともにナデ，もしくは横ナデを施す。212は，やや内湾しながら開く口縁部である。内外面工具によるナデを施す。１条の布目痕のある刻目突帯を貼付する。外面には全体的に煤が付着する。213～215は，内湾口縁で口縁部は短い。213・215は布目痕のある刻みで，215は特に刻みの間隔が狭いのが特徴的である。214は，突帯を貼付時のナデが不十分であることから，突帯がはがれ落ち，口縁部の外傾接合の痕跡を観察することができる。内面は丁寧にナデを施す。外面には煤が付着する。216は，浅い刻みの刻目突帯を１条貼付する。外面は工具による粗めのナデを縦方向に施す。内面は横方向のナデで仕上げる。217は布目痕の確認できる刻目突帯を１条貼付する。内外面ともにナデ調整を施す。外面には厚く煤が付着する。

ツ　X1c 類土器（第89図　218～237）

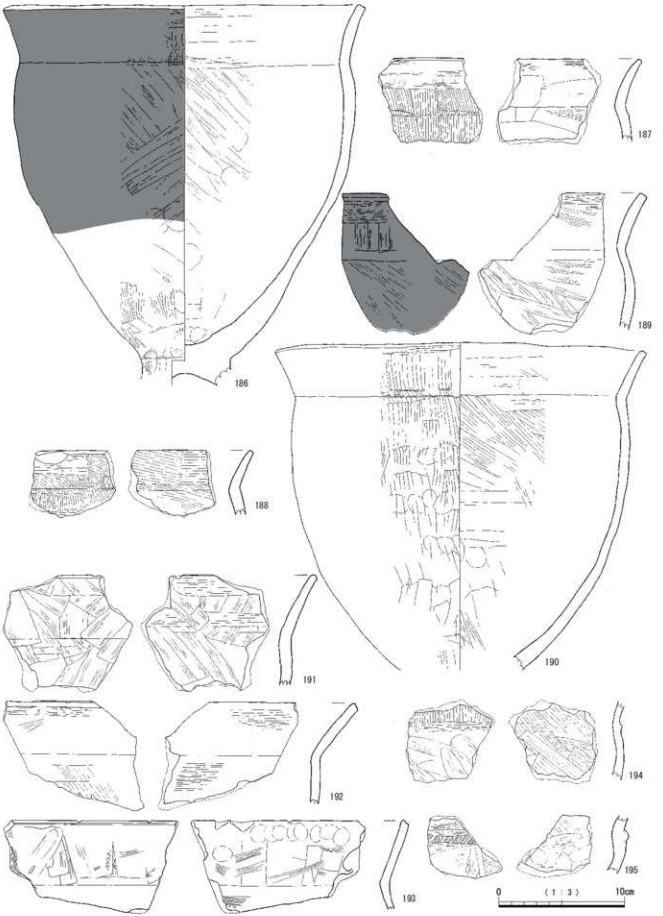
218～237は底部である。218はスカート状に開き，端部は平坦面をもつ。219～221は外面に縦方向のハケメを施すものである。また，221・222は緩やかに湾曲しながら開く。223～226は内湾しながら開く。226は外面のくびれ部分に横方向のミガキを施すのが特徴的である。227～237は低い脚台をもつ個体か，もしくは上げ底気味の底部形態を呈する個体である。

テ　X2a 類土器（第90図　238～248）

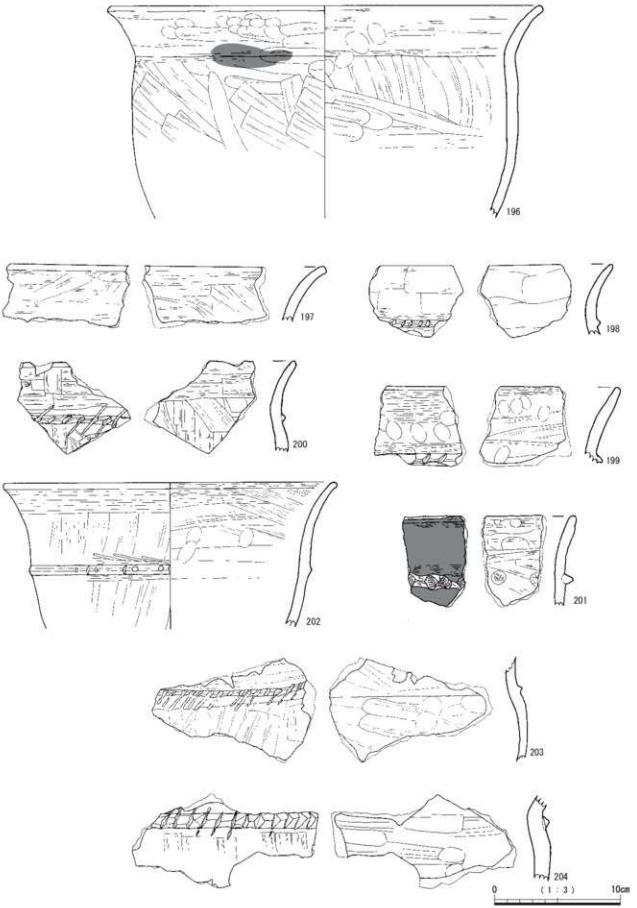
238～248は，肩部の張りが弱い，なで肩の形態を呈する壺形土器である。238・239はラッパ状に開く口縁部である。238・239は丁寧な横ナデで仕上げる。240は，大きく外に開く口縁部形態で，口唇部は平坦を呈する。内外面ともに横ナデを施す。胎土には0.5㎜～１㎜大の白色鉱物を多く含む。241は，内外面工具によるナデが施される。胎土に白色鉱物や角閃石を多く含む。242は外面にハケメが明瞭に残る肩部である。243も242同じように外面にはハケメが施されるが，243の方が木目幅は狭く，また胎土の色調は黄色みが強く器壁が薄い。内面はナデを施す。244は，胴部に２条の突帯を貼付し，同時に浅く刻みを入れる。内外面ナデを施す。245は，外面はハケメを施した後にナデ消し，内面はナデを施す。胴部最大径部分に刻目突帯を貼付する。外面には吹きこぼれの痕跡が確認できる。煤が帯状に付着し，吹きこぼれが垂れた痕跡から想定すると，水平ではなく斜めに傾けた状態で煮沸具として使用したことがわかる。246は，肩部である。最大径部分に刻目突帯を１条貼付する。外面には工具によるナデを横位また斜位方向に施す。247は，外面に縦方向のハケメを施し，内面は工具ナデを施す。248は，頸部屈曲部付近から胴部である。内外面ともにナデ調整が施されるが，ゆがみが顕著で，特に内面の輪積痕が明瞭であることが特徴的である。



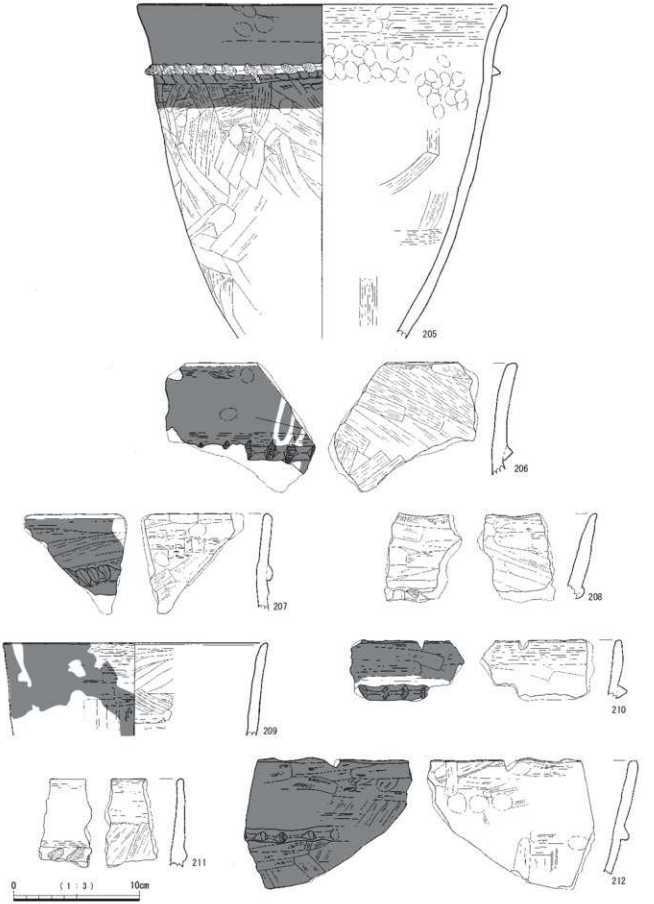
第84図　Ⅳ層出土遺物８（Ⅵ～Ⅷ，Ⅸ類）



第85図　Ⅳ層出土遺物９（Ⅹ1a 類①）



第86図　Ⅳ層出土遺物10（Ⅹ1a 類②）



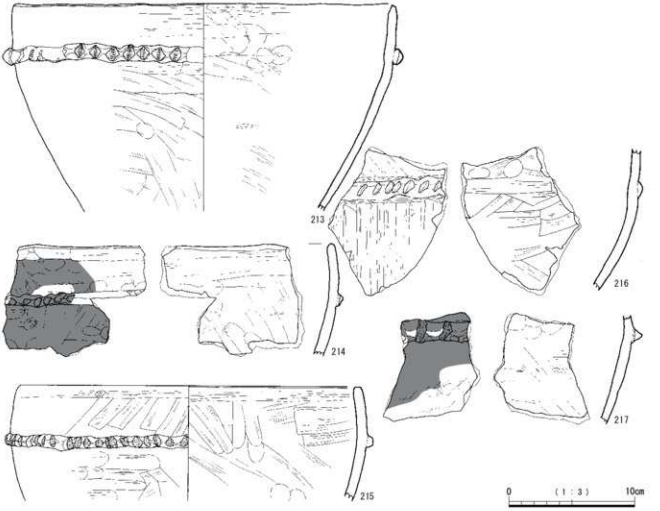
第87図　Ⅳ層出土遺物11（Ⅹ1b 類①）

ト　X2b 類土器（第91図　249～258）

249は頸部から上部分を欠く壺で，胴部下半のゆがみが顕著で，特徴的なことからその部分は断面を２か所図化した。尖底を呈する。胴部の下方には少なくとも１か所に穿孔が確認できる。穿孔部分の割れ具合から，焼成後に外から中に向かって棒状工具で穿たれたことがわかる。胴部最大径部分に刻目突帯を１条貼付する。外面は工具による縦横方向のナデが施される。内面は工具によるナデが施される。250は頸部屈曲部外面に刻目突帯を１条貼付する。251は内外面ともに工具ナデを施す。252の口唇部は丸みを帯びる。外面は，口縁部～肩部にかけては縦方向にハケメを施すが，それ以下の部分は横方向にハケメを施す。内面は横方向に丁寧なナデを施す。253は外面に幅約２㎝の突帯を貼付し，沈線を入れた後，鋸歯状に刻みを入れる。内外面ともに丁寧にナデを施す。254は１条の細い突帯を貼付し，施す刻みも切り合うほど密に入れる。255は，内外面ハケメを施し，外面はその後に斜位方向にまばらにミガキを施す。256は外面は風化により調整が不明瞭であり，内面は横方向にナデを施す。粘土紐のつなぎ目には指頭圧痕が残る。257は外面に縦方向のハケメを丁寧に施し，内面は丁寧な横方向のナデを施す。外面には少なくとも１条の三角突帯を貼付する。258は胎土中に３㎜～５㎜大の白色鉱物を多く含む。254・258はやや小型の壺の胴部である。

ナ　X2c 類土器（第92図　259～273）

259～273は底部である。259はやや尖り気味の丸底で，外面にはハケメを施した後赤色顔料を塗布する。260は外面全体に煤が付着する。261は外面に工具によるナデを施した後胴部には横方向のミガキをまばらに施す。262は，底部にやや厚みのあるもので，外面は工具によるナデを施す。263・264はやや小型の壺で，丸底を呈する。264は外面に丁寧なミガキを施す。265～273は平底かもしくは平坦面を持つ底部形態を呈する。265は内外面工具によるナデを施す。266は外面に横方向のミガキを施す。267・268は内外面ともに工具によるナデを施す。269は平坦面を持つ底部で，縦方向にまばらにミガキを施す。内面は工具によるナデである。270は内外面工具によるナデを施す。271はナデ調整が不十分な底部



第88図　Ⅳ層出土遺物12（X1b 類②）

である。胎土に３㎜大の白色鉱物や雲母を含む。272・273は底部屈曲の稜線が強く入る。

ニ　X3a 類土器（第93図　274～281）

274～277は坏部に屈曲を持つ高坏形土器である。274は器壁が薄く，胎土の色調は橙で角閃石や黒色粒を多く含む。275は外反するロ縁部をもつ。内外面ともに工具によるナデを施す。胎土には２㎜～３㎜大の褐色粒を含む。276の外面は縦方向，内面は横方向のミガキを施す。277は，内外面ともに工具によるナデを施す。278は，坏部外面の屈曲が緩やかで稜線は入らないが，内面は段を有し稜線が入る。外面は工具によるナデを施し，内面は屈曲部より上部には横方向のミガキを施す。279はやや厚みのあるロ縁部である。280も，厚みのあるロ縁部で，278と同じように内面にのみ稜線が入る。内外面ともにナデ調整を施す。281は坏底部付近で，外面は縦方向にミガキを施す。

ヌ　X3b 類土器（第93図　282～284）

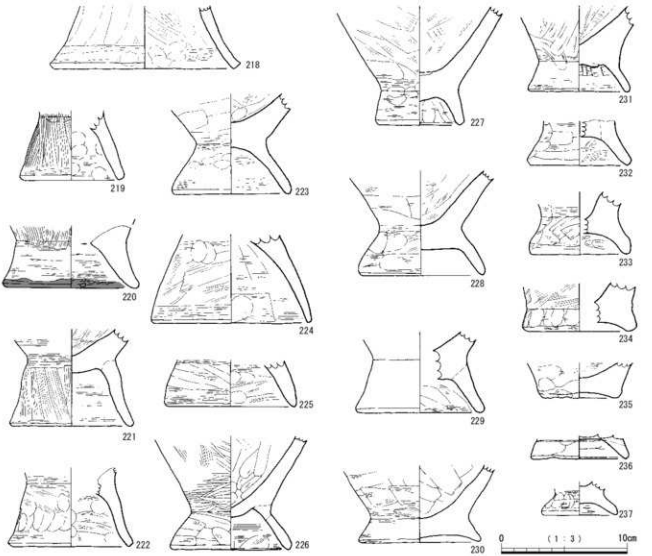
282は，浅めの坏部で，坏部が内湾するものである。外面は横方向に丁寧にミガキ，内面はロ縁部先端にのみミガキを施す。283・284は制作時，坏部と脚部を接合する際，充填に用いた粘土塊である。X3a 類かX3b 類かどちらに分類されるかは不明である。

ネ　X3c 類土器（第93図　285・286）

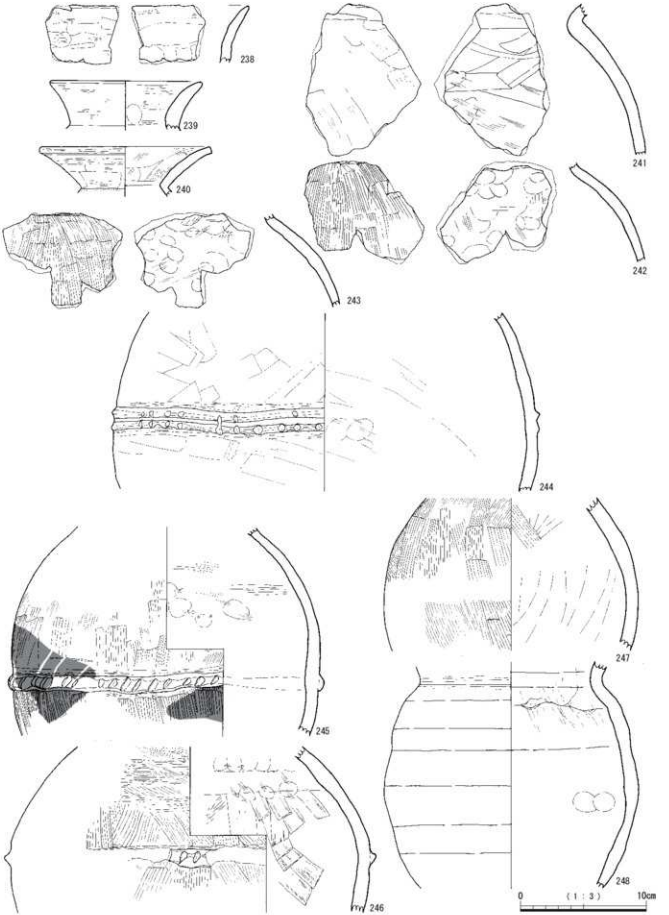
285・286は脚筒部がエンタシス状を呈するかもしくは裾部分で湾状に広がる高坏の脚部である。285は脚筒部がまっすぐで裾部では埦状に膨らみを持つ形態を呈する。穿孔は少なくとも２か所確認できる。286はエンタシス状に膨らむ脚筒部を呈する。内外面ともに工具ナデで仕上げる。

ノ　X3d 類土器（第93図　287～295）

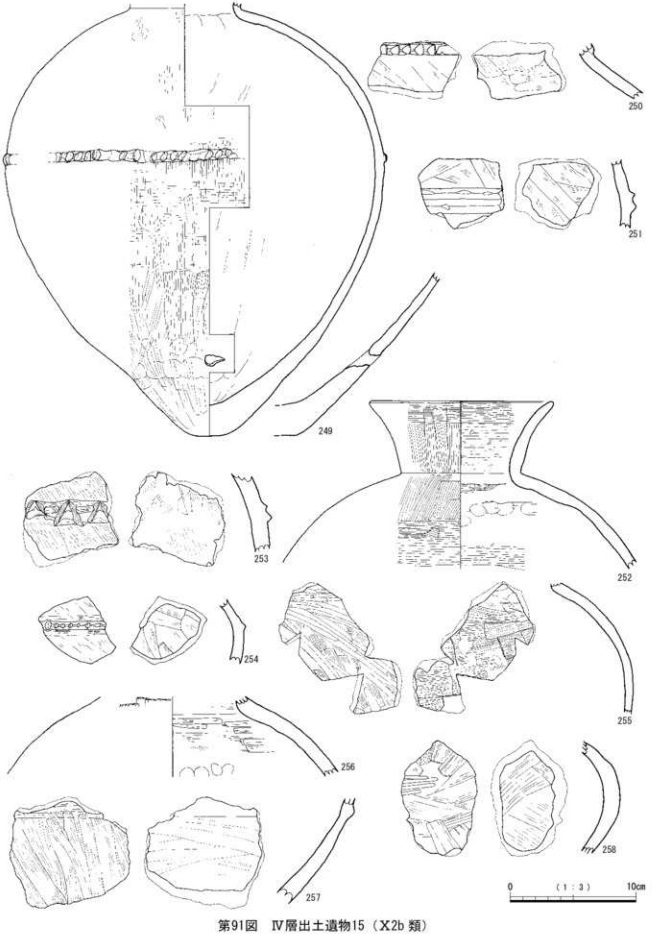
287は，脚筒部で外面に縦方向のミガキが施される。288・289は，287よりも裾部分にむかって開く形態を呈する。288は，直径８㎜程度の幅をもつ工具により穿孔を施す。外面から内面に向かって水平気味に少なくとも２か所に穿つことが確認できる。内外面ともに工具ナデを丁寧に施す。289は，288よりやや小さいサイズの高坏



第89図　Ⅳ層出土遺物13（X1c 類①）



第90図　Ⅳ層出土遺物14（X2a 類）



第91図　Ⅳ層出土遺物15（X2b 類）

である。穿孔は，直径幅６㎜程度の工具で，外面から内面に向かって器壁に対して垂直気味に穿つ。少なくとも３か所に確認できる。内外面ともに工具によるナデを施す。290は外面はナデ後ミガキで赤色顔料を塗布する。内面は工具によるナデを施す。291は小型の脚筒部である。内外面ともに工具ナデを施す。292は脚筒部で，外面はミガキを施し内面はナデを施す。293・294はスカート状に開く脚裾部である。293は外面は縦方向にミガキを施し，内面は工具ナデで仕上げる。295は裾端部である。強めの横方向のナデでロ唇部は平坦面を有す。

ハ　X4類土器（第94図　296～298）

296～298は鉢形土器である。296は口縁部である。直線的に外反し，刻目突帯を１条貼付する。内外面ともに工具によるナデを施す。外面に煤が付着する。297は上げ底の底部形態を呈する。内外面ともに工具によるナデを施す。298は小型で平底を呈する。内面に縦方向の工具ナデを丁寧に施す。外面に煤が付着する。

ヒ　X5a 類土器（第94図　299～302）

299～301は外反するロ縁部形態をもつ坩形土器である。299は，外反して伸びるロ縁部である。内外面横ナデを施す。300は内外面ともに丁寧なナデを施す。301は，外頻しながら伸びる。外面は横方向のミガキ，内面は横ナデで仕上げる。302は，300と同じく直線的に外頻しながら伸びるロ縁部である。外面は縦方向のミガキ，内面は横方向の工具ナデで仕上げる。外面に縦方向のハケメを施す。また，胎土に白色鉱物を多く含む。

フ　X5b 類土器（第94図　303～309）

303～306は，口縁部が直行もしくは内湾する坩形土器である。303は，最大径箇所を肩部にもち，ゆがみはあるものの丸みを帯びながら底部へ向かってすぼまる形態を呈する。底部先端は突起状に突出する。内外面ともに工具によるナデを施す。304は，303の口縁部と同じで上方に伸びるロ縁部だが，器壁が薄く，やや内湾ぎみな点が異なる。また，外面は縦方向の幅広めのミガキ，内面は横方向にナデを施す。305は内湾して伸びるロ縁部で，先端付近は上方に伸びる形態を呈する。外面は斜位方向のミガキを施し，内面は斜位方向にナデを施す。外面煤付着。306は，内外面横ナデ調整で仕上げる。

307・308はともに扁球状の胴部形態を呈する。307は，外面に縦方向や斜位方向のハケメを丁寧に施す。内面は横方向の工具ナデを施す。308は，307よりも扁球具合が弱い胴部形態である。頸部から口縁部に伸びる境目の屈曲は鋭角的で，強い稜線が入る。内外面ともに工具ナデで仕上げる。309は，306のような内湾口縁を持つことが予想される。

ヘ　X5c 類土器（第94図　310～319）

310～316は，303と同じように，底部に突起状の張り出しをもつ底部である。310は内面に絞って成形したような痕跡が確認出来る。310～314の突起状底部はゆがみがあり，水平ではないが平坦面をもつ。315は303同様尖り気味の底部である。316は坩形のミニチュア土器である。外面はミガキ，内面はナデで仕上げる。318は上げ底気味の底部である。外面はミガキ，内面は横方向のナデで仕上げる。319は，やや丸みを帯びた平底を呈する。外面は工具ナデ，内面はナデで仕上げる。

ホ　X6類土器（第95図　320～323）

320・321は器壁が薄いことや色調，調整痕，またその形態から，他地域の影響を受けた甕であることがわかる。320は外面には木目の間隔が細かなハケメを入れ，内面は強めのナデで器壁をケズリとるように調整する。321も同じようにケズリで器壁を薄く仕上げる。322は屈曲部が緩やかな二重口縁壺である。胎土には赤色粒が含まれる。323は壺胴部で，外面には細かいハケメが施される。

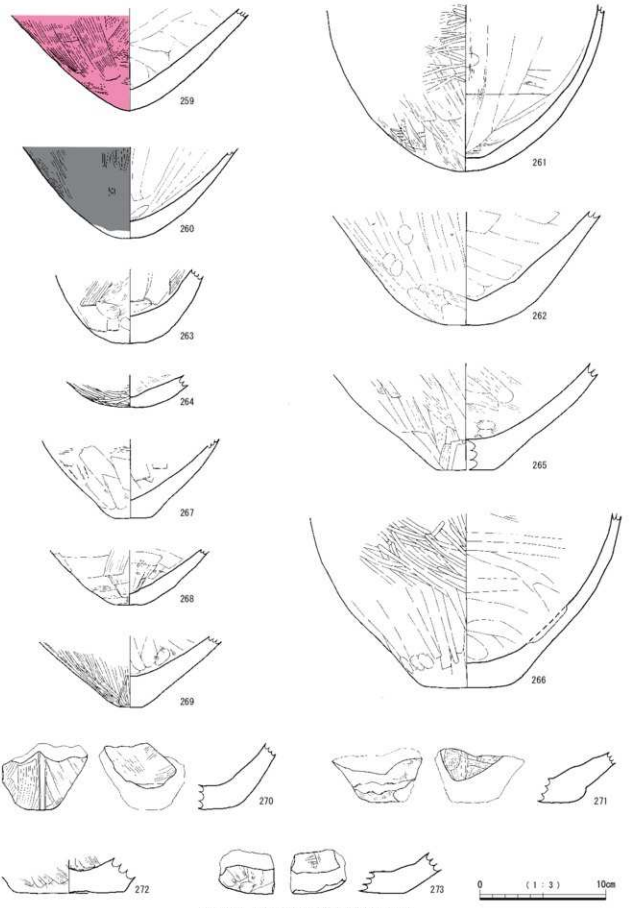
マ　X7類土器（第95図　324～327）

324・325は壺の胴部付近である。324は器面が剥落しており調整不明瞭であるが，内外面ともに横方向のナデを施す。胎土に赤色粒を多く含む。325も２㎜～３㎜大の角の取れた褐色粒を多く含む。326・327は底部である。326は屈曲が弱いが平底と呈する。327は屈曲が明瞭で，やや上げ底ぎみな底部形態を持つ。

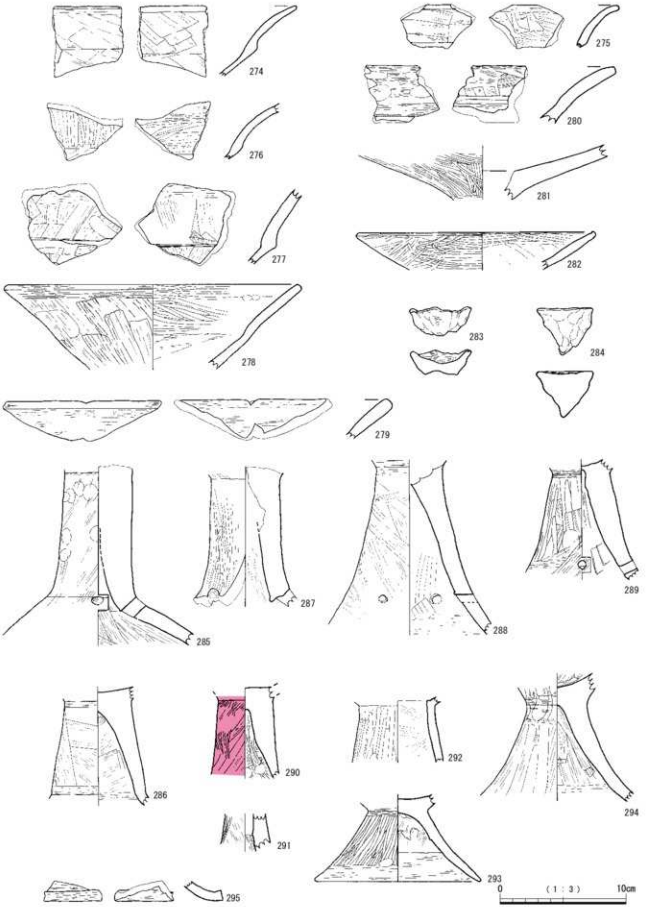
古代～中世の出土遺物（第96図　328～336）

328～331は土師器である。328は埦の底部で黒色土器Ａ類である。内外面ともに回転ナデで仕上げる。時期は古代と考えられる。底径約7.8㎝を測る。329は，坏もしくは埦の口縁部で，外頻して開く。外面は回転ナデで，内面はナデの後に横位のミガキ調整が施される。また口縁部内面にのみいぶしも観察できる。時期は古代から中世と考えられる。330は皿である。腰部外面には１条の焼成前擦痕が沈線状にみられ，口縁部内面中位に成形時の調整による凹みがある。また，底面にはミガキが施され光沢がみられる。ミガキにより詳細は不明だが，底部はヘラ切りと想定される。復元口径約11.7㎝，復元底径約9.8㎝，復元器高約2.1㎝を測る。時期は古代から中世と考えられる。331は完形の坏で，外面の上部１か所に墨書が書かれる。文字の判別はできないが，恐らく「美」「春」等の一文字が考えられる。また，墨書の周辺には赤色顔料も塗布される。見込みには焼成後に十字に刻書される。時期は中世と思われる。332は，備前焼大甕の口縁部である。口縁部を折り返して玉縁状をなす。口縁部上部～内面と肩部には自然釉がみられる。時期は中世鎌倉期以降と考えられる。333は白磁碗の底部である。高台脇から外底面まで露胎とし，高台脇はかきとりを施す。畳付は削り出しで成形する。

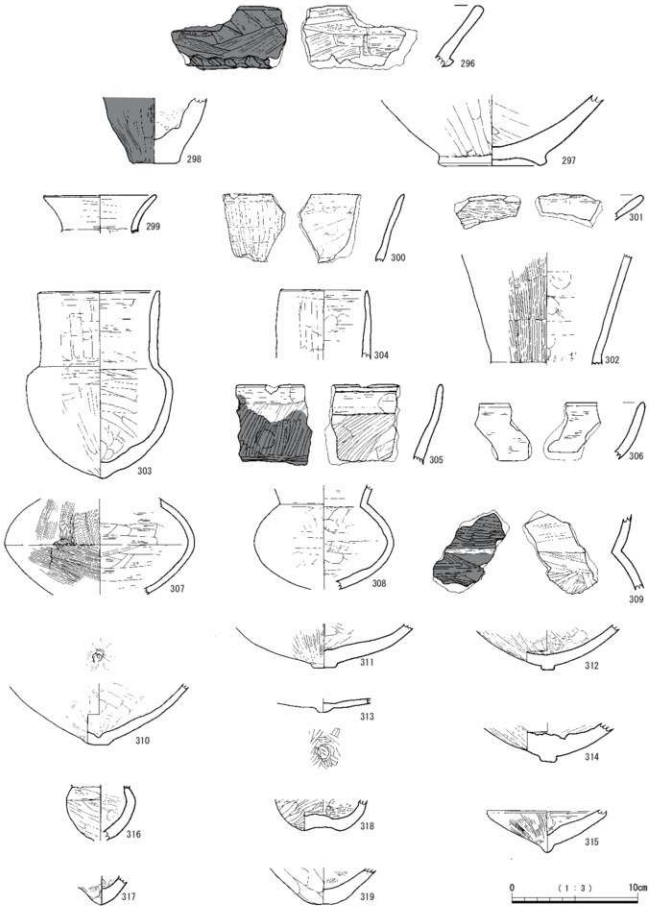
334～336は鉄製品である。誘着していたためそのまま実測した。334は，有茎式三角形鏃である。鏃身部は，



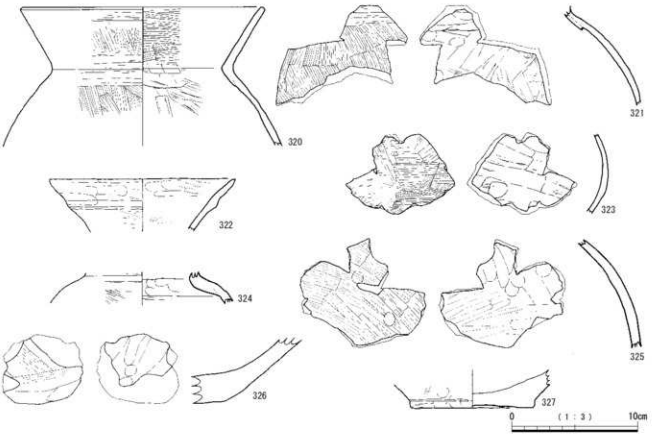
第92図　Ⅳ層出土遺物16（X2c 類）



第93図　Ⅳ層出土遺物17（X3a，X3b，X3c，X3d 類）



第94図　Ⅳ層出土遺物18（X4，X5a，X5b，X5c 類）



第95図　Ⅳ層出土遺物19（XI，XII類）

左右対称の三角形を呈する。身部と茎部の厚みはほぼ同じで，左の返しが一部欠損する。335は釘である。断面は長方形をなす。時期不明。336は，刀子の切先部分と考えられる。刃部の詳細が銹により一部不明瞭であり，関部形態は欠損により不明。時期不明。

②　石器

Ⅳ層からは，打製石鏃14点，磨製石鏃６点，石匙・スクレイパー10点，十字型石器１点，横刃型石器８点，打製石斧14点，磨製石斧５点，石箆丁２点，磨・敲石類９点，石皿１点，石製品１点などが出土している。B・D地点では最も出土数が多かった。ただし，これらの遺物も基本的には流れ込み等により遺存したと考えられ，本来の帰属時期が異なる遺物が混在しているものと理解される。

ア　打製石鏃（第97図　337～350）

形状から，便宜上以下のとおり細分して報告する。

A類：平面正三角形で基部に抉りが入る

B類：平面二等辺三角形で基部に抉りが入る

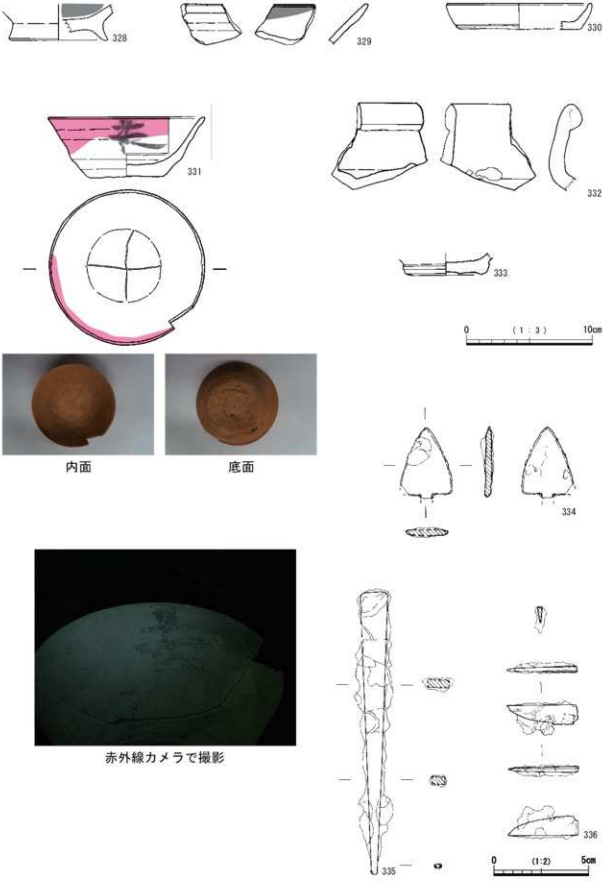
C類：ABに合致しない平面形状を有する

D類：未製品

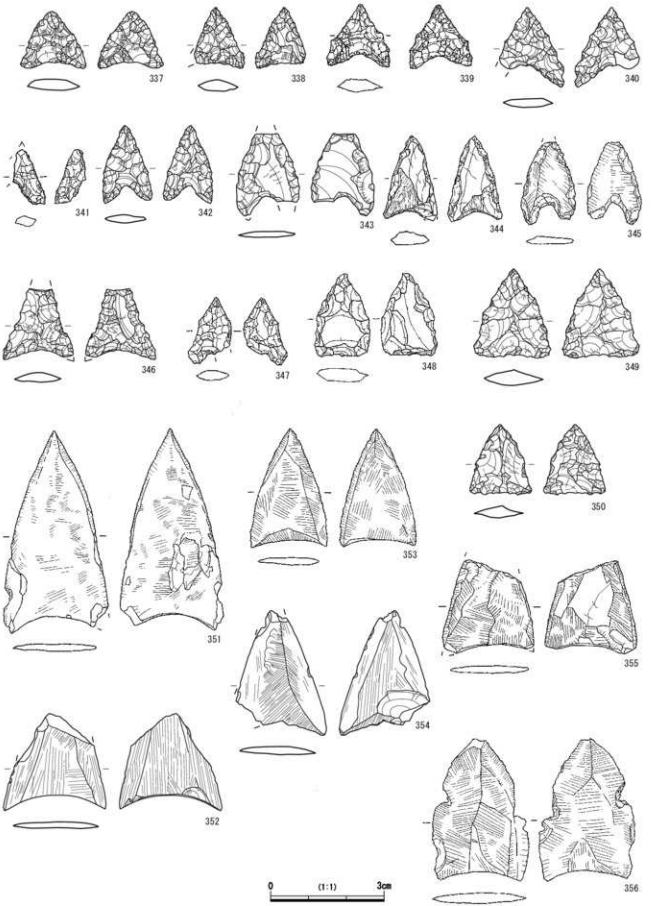
図にあるように，形態差による規格の顕著な違いはないが，B類がA類よりもわずかに大型となる傾向がある。また，使用石材と形態差については，A類はすべて黒曜石であるのに対し，B～D類は様々な石材を用いているという傾向を指摘できる。

A類（337～341）

337は完全品で，深い剥離による整形に加え，左側縁には微細な調整も施している。左の脚端部のみ，整形がやや粗い。抉りは浅く幅広く入れられている。長谷・小浜系の黒曜石製で，長さ1.5cm，幅1.7cm，厚さ0.3cm，重さ0.6ｇである。338は，左脚端を欠損する。裏面に主要剥離面を残すが，周縁からの丁寧な剥離によって全形を整えている。右脚外端の小突起は，意図的に作り出した可能性がある。抉りはごく浅い。石材は337と同じ長谷・小浜系の黒曜石で，長さ1.6cm，幅1.3cm，厚さ0.3cm，重さ0.4ｇである。339は，全周からほぼ均等に剥離を施して形状を整えている。両側縁の脚部付近には，小さい突起を作出している可能性がある（その場合は，変則的な五角形鏃（C類）となるか）。抉りは浅く幅広く入れられている。上牛鼻産の黒曜石製で，長さ1.6cm，幅1.7cm，厚さ0.3cm，重さ0.6ｇである。340は，深めの剥離で整形し，先端のみ微細な調整を加えている。微細



第96図　Ⅳ層出土遺物20（古代～近世の遺物）



第97図　Ⅳ層出土遺物21（石器①）

な調整は両脚端にも施されていると考えられるが欠損しているため詳細は不明である。抉りは大きく，縁辺は直線的に作出されている。黒曜石の薄い剥片を素材としている。長さ2.1cm，幅1.7cm，厚さ0.2cm，重さ0.6gである。341は，左半身を欠損するが，細かく丁寧な剥離で全形を整え脚端は丸く仕上げる。抉りは深く，縁辺は側縁とほぼ並行する。黒曜石製で，長さ1.5cm，幅0.6cm，厚さ0.3cm，重さ0.2gである。

B類（342～346）

342は完形品で，全形を深めの剥離で整え，先端と基部縁辺に微細な調整を加えて仕上げている。わずかに左右非対称になっているが，意図性は低いと考えられる。抉りは深く，縁辺は途中で角度が変わる。淡白石の薄い剥片を素材とし，長さ2.0cm，幅1.3cm，厚さ0.2cm，重さ0.5gである。343は，先端及び右脚部を欠損する。表面の劣化が著しく詳細な観察ができないが，正裏面ともに主要剥離面を残し，縁辺部の調整剥離で整形まで済ませているとみられる。抉りは深く略V字形を呈すると考えられる。安山岩製とみられ，素材は薄い。表面の劣化については，全面に極微細な気泡が観察されることから被熱した可能性もある。長さ2.2cm，幅1.7cm，厚さ0.2cm，重さ0.8gである。344は，抉りを研磨により作出しているのが大きな特徴である。正裏面とも主要剥離面を残し，縁辺の剥離はごく浅い位置で止まっており，そのため側縁の角度は極めて鈍い。全形に比して厚みがある。頁岩製で，長さ2.2cm，幅1.5cm，厚さ0.4cm，重さ1.0gである。345も，頁岩の薄い剥片を素材としている。正裏面とも主要剥離面がほぼそのまま残り，縁辺への微細な剥離だけで加工を済ませている。側縁の角度は鈍い。正面側の主要剥離面のみ，摩耗痕のように表面の微細な凹凸や稜線の角がとれて鈍く光沢を帯びている。抉りは略U字状に深く入る。長さ2.2cm，幅1.4cm，厚さ0.2cm，重さ0.7gである。346は，やや内弯した側縁部が特徴である。正面側への深い剥離で成形したのち，裏面側で全周に微細な調整剥離を施して全形を整える。やや左右非対称の形状をとる。抉りは浅く幅広く入れられる。安山岩の薄い剥片を素材とし，長さ1.9cm，幅1.9cm，厚さ0.3cm，重さ0.9gである。

C類（347）

やや変形しているが，いわゆる五角形鏃に含まれる。裏面左側に節理面があるにもかかわらず，細かく丁寧な剥離で作られている。抉りの形状はラッパ状を呈する。チャート製で，長さ1.5cm，幅0.9cm，厚さ0.3cm，重さ0.5gである。

D類（348～350）

この3点は，大きさと加工の状況からいずれも未製品と考えられる。素材は，348が粘板岩，349と350が安山岩である。なお，350については平基の完成品である可能性もある。

イ　磨製石鏃（第97図　351～356）

出土した磨製石鏃については，大まかには，平面二等辺三角形で浅い凹基という形状であるが，以下のとおり若干の差異が認められた。便宜上，その差異に即して報告する。

A類：側縁が直線的でB より大型

B類：側縁が直線的でA より小型

C類：側縁が外弯する

A類（351・352）

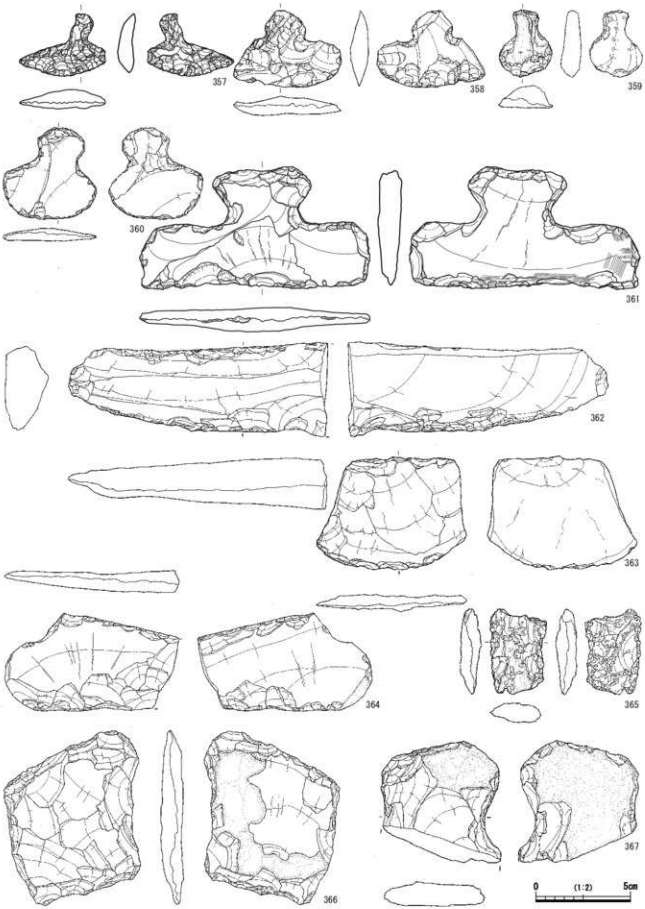
351は，頁岩製で，規格に比して厚みがかなり薄いのが特徴である。両脚端を欠損する。鏃は研ぎ出しておらず，両側縁から先端にかけてわずかに稜が観察できる程度である。側縁は鋭く研ぎ出している。石材の特性によるものか，研磨痕はあまり残っていない。長さ4.9cm，幅2.7cm，厚さ0.2cm，重さ3.2gである。352は同じく頁岩製で，先端部を欠損するが，規格や側縁を鋭く研ぎ出す特徴が351と類似する。異なる点は，両側縁からやや内側に中軸にやや深く入った辺りに明瞭な稜を形成している点と，中軸の基部付近をごくわずかに凹ませて厚みを調整している点である。また，こちらは正裏面とも研磨痕を観察できる。長さ2.6cm，幅2.7cm，厚さ0.2cm，重さ1.6gである。

B類（353～355）

353は，頁岩製の完形品である。基部縁辺を，両側縁と同じく鋭角に研ぎ出しているのが大きな特徴である。正裏面とも研磨痕が明瞭で，部分的にさらに磨かれて光沢を帯びている部分が観察されることから，研磨工程が工具を換えて行われたことがわかる。そのためか，鏃はみられず稜も断続的にしか観察されない。両側縁は研磨後に細かく破損している。長さ2.9cm，幅2.0cm，厚さ0.2cm，重さ1.5gである。354は，緑色頁岩製で，先端と左脚部を欠損する。両側縁を，もっとも直線的に整形しており，そのため脚部の突出が特に目を引く形状となっている。稜は，側縁とほぼ並行して中軸よりの深い部分に観察される。また，正裏面とも，稜を境に中軸部には研磨痕が明瞭に観察されるが，両側縁部はさらに磨かれて平滑な面が形成されている（縁辺は鋭角に研ぎ出す）。353と同様，研磨工程が工具を換えて行われたことがわかる。長さ3.3cm，幅2.4cm，厚さ0.2cm，重さ0.8gである。355は，頁岩製で先端部を欠損する。両側縁は鋭く研ぎ出されているが，稜の形成がＭ規則なのが特徴で，さらに正裏面とも中央部には素材の剥離面を残す。研磨作業が不安定であったことを示すと考えられる。長さ2.3cm，幅2.4cm，厚さ0.3cm，重さ1.8gである。

C類（356）

356は，頁岩製で側縁や先端をわずかに欠損する。鋭く研ぎ出された両側縁が外弯する点が，大きな特徴であ



第98図　Ⅳ層出土遺物22（石器②）

る。先端に鏃を研ぎ出すほか，中軸の基部付近を研磨してわずかに凹ませており，352と同様の特徴を示す。また，鏃や側縁沿いに形成された稜はとがっておらず，磨かれたように丸みを帯びている。長さ3.5cm，幅2.5cm，厚さ0.3cm，重さ2.9gである。

ウ　石匙（第98図　357～361）

357は，つまみ部の左上端と刃部の右端を欠損するが，全体に丁寧な加工で仕上げている。針尾産黒曜石の厚みのある剥片を用いており，正面側つまみ部の上端と裏面中央にわずかに主要剥離面を残すが，刃部には均等に調整剥離を施し，やや角度を鈍くしている。長さ3.3cm，幅4.6cm，厚さ1.0cm，重さ8.2gである。358は，姫島産黒曜石の寸詰まりの剥片を用いた完全品である。主に背面への加工により成形を行い，刃部やつまみ部との境界となる抉り部にのみ腹面へも調整を加えている。つまみ部の作出は，この抉りと若干の調整のみで行っているため，ややバランスに欠ける形状である。長さ4.1cm，幅5.7cm，厚さ1.0cm，重さ16.0gである。359は，長谷・小浜系黒曜石の分厚い剥片を使用している。整形も含め，調整はほぼ腹面側からのみで済ませており，刃部角は極めて鈍い。また，刃部に観察される刃毀れは，微細なものを含めほとんど腹面側からの力によって生じており，使用方法等が想像できる。長さ3.6cm，幅2.7cm，厚さ1.2cm，重さ9.2gである。360は，安山岩の薄い剥片を用いている。つまみ部を含め，縁辺に施した微細な剥離だけで整形している。形状に比してつまみ部が大きいため，刃部は再生している可能性もある。長さ4.8cm，幅4.9cm，厚さ0.7cm，重さ15.5gである。361は，D-13区から出土した。ホルンフェルスの大型板状剥片を素材とし，360と同様に縁辺への微細な剥離で全形を整えているが，つまみ部上端には，わずかに敲打痕が観察される。他方，刃部の稜線には摩耗している箇所が中央部を中心に正裏面に看取され，さらに裏面には摩耗部に刃部と平行する擦痕も重複して観察される。長さ6.5cm，幅12.2cm，厚さ1.3cm，重さ94.9gである。

エ　スクレイパー（第98図　362～366）

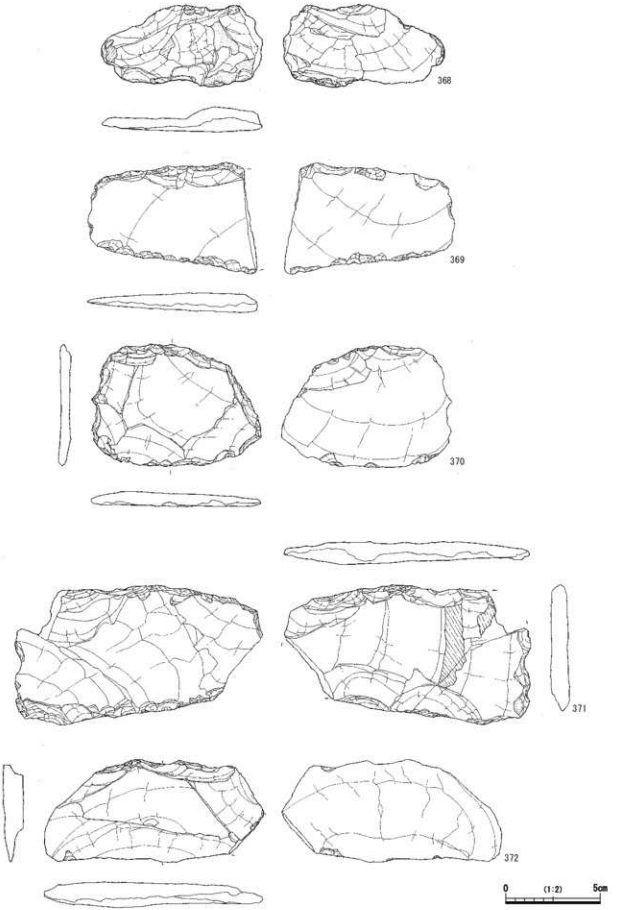
362は，ホルンフェルスの肉厚の横長剥片の下縁に簡易な刃部加工を施している。下縁右端は小突起状になっているが，目視する限りでは使用痕は発見できない。下縁左側は稜線が潰れて摩耗している。他方，上縁は，左側は調整剥離があるだけだが，より厚みのある右側端部には敲打痕が集中している。左側と同じ調整加工に過ぎないが，敲打具としても使用したか想定が難しい。なお，剥片の破断は腹面側からの力による。長さ4.9cm，幅13.7cm，厚さ2.7cm，重さ190.2gである。363は，硬質頁岩の薄い剥片を利用し，上下縁に簡易な刃部調整を行っている。刃部はわずかに摩耗しており，摩耗部には微細だが刃部に平行する擦痕を観察できる。マンガンが付着して詳細に観察できないが，両側縁は欠損している可能性がある。長さ5.9cm，幅7.9cm，厚さ0.9cm，重さ40.3gである。364は，ホルンフェルスの薄い剥片を利用し，363と同様に上下縁に簡易な刃部調整を行っており，下縁の刃部には，正裏面ともに左端から中心に左側縁の一部まで摩耗部を観察できる。ただ，擦痕は目視では発見できなかった。上縁側からの力により破断している。長さ5.1cm，幅9.2cm，厚さ1.2cm，重さ53.6gである。365は安山岩の不定形剥片の左側縁に刃部加工を施している。長さ4.5cm，幅2.9cm，厚さ1.1cm，重さ13.6gである。366は，ホルンフェルスの不定形剥片を用い，上下縁と左側縁端部に沿ってわずかではあるが摩耗部を長く観察できる。長さ7.2cm，幅9.2cm，厚さ1.2cm，重さ91.4gである。

オ　十字型石器（第98図　367）

367は，顕著な摩耗部が，正面右上端の平坦面と主な稜線並びに裏面の主要剥離面全面と主な稜線に広く観察できる上，縁辺も軽く摩耗しているのが大きな特徴である。しかし特定の擦痕は目視では発見できない。ホルンフェルス製である。

カ　横刃型石器（第99・100図　368～375）

368は，下縁にごく簡易な加工がみられ，両側縁には剥離が観察されない。下縁から左側縁にかけては，端部にわずかな摩耗を看取できる。また，正面中央部には，刃部と平行する擦痕を残す平坦面が部分的に観察できる。当該面の稜も摩耗していることから，完成後の使用に伴う痕跡と考えられる。硬質頁岩製で，長さ4.3cm，幅8.5cm，厚さ1.3cm，重さ44.7gである。369は，上縁に簡易な調整と敲打を施して縁辺を整え，下縁に簡易な加工で刃部を形成している。何らかの理由で，裏面がほぼ全面にわたって大きく剥落している。そのため，側縁部は加工状況の詳細が不明である。ホルンフェルス製で，長さ8.9cm，幅5.6cm，厚さ0.9cm，重さ57.9gである。370は，上下縁に簡易な加工を施し，両側縁には整形剥離を加えている。硬質頁岩製で，長さ6.4cm，幅8.9cm，厚さ0.7cm，重さ49.8gである。371は，接合資料であるが，状況から人為性は低いと考えられる。左下端を欠損する。刃部右半には顕著な摩耗を観察できる。ホルンフェルス製で長さ7.4cm，幅13.1cm，厚さ1.2cm，重さ134.0gである。372は，上縁の他には顕著な調整加工を観察できないが，下縁には刃毀れ状の微細な剥離とそれを覆う摩耗がみられることから，この器種に分類した。硬質頁岩製の横長剥片を素材とし，長さ5.4cm，幅11.6cm，厚さ1.3cm，重さ89.9gである。373は，ホルンフェルスの横長剥片を使用しているが，あまり顕著ではないものの摩耗痕の状況や剥離の入れ方などから，剥片の打点側を刃部に利用していたと考えられる。長さ6.9cm，幅14.9cm，厚さ1.9cm，重さ205.3gである。374は，下

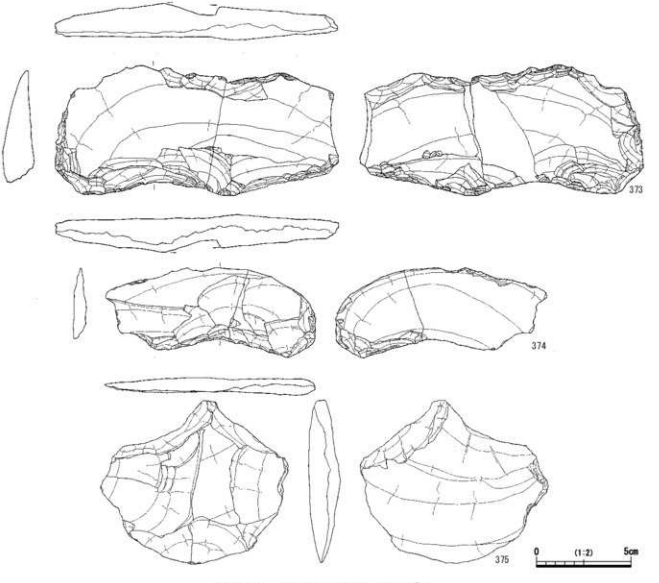


第99図　Ⅳ層出土遺物23（石器③）

縁にのみ加工が観察されるが，何らかの理由で裏面が広く剥落してしまったものと考えられる。そのため確実ではないが，本来は「石鎌」だった可能性もある。硬質頁岩製で，長さ4.7cm，幅10.5cm，厚さ0.8cm，重さ45.1gである。375は，ホルンフェルスの剥片の両側端と，つまみ状を呈する上端右側にわずかな調整を加えている。長さ8.6cm，幅9.9cm，厚さ1.7cm，重さ115.3gである。

キ　打製石斧（第101・102図　376～389）

376は，比較的小型の基部である。正面に主要剥離面がわずかに残るが，縁辺からの丁寧な剥離で整形している。裏面右上端からの広い剥離は，何らかの理由により剥落している。硬質頁岩製で，長さ7.1cm，幅4.6cm，厚さ1.4cm，重さ61.0gである。377は，素材の形状を生かして微細な調整で整えた基部である。両側縁は，調整剥離に加えて縁辺のみ研磨している。ホルンフェルス製で，長さ8.8cm，幅4.7cm，厚さ1.5cm，重さ73.7gである。378は，右下端の節理面に摩耗痕がわずかに観察されることから，破損後も何らかの理由ですぐに廃棄されなかった可能性がある。正裏面及び両側縁は剥離後に研磨して整形されており，正裏面には横方向の，両側縁には縦方向の研磨痕がわずかに残る。ホルンフェルス製で，長さ4.9cm，幅9.2cm，厚さ1.5cm，重さ87.8gである。379は，上下端を欠損する，全長の短い資料である。刃部が裏面で大きく剥離しているが，再生作業を失敗した可能性があり，本資料の廃棄の原因になったと想定される。擦痕や摩耗部は観察されない。ホルンフェルス製で長さ8.8cm，幅5.8cm，厚さ1.9cm，重さ138.0gである。380は，刃部再生を繰り返した左右非対称となる広刃型の欠損品である。裏面並びに基部端を大きく欠損する。刃先がやや摩耗しているほか，正面中央の平坦面には刃部に略直交方向に走る擦痕がわずかに残る。頁岩製で，長さ9.1cm，幅10.7cm，厚さ2.0cm，重さ176.5gで



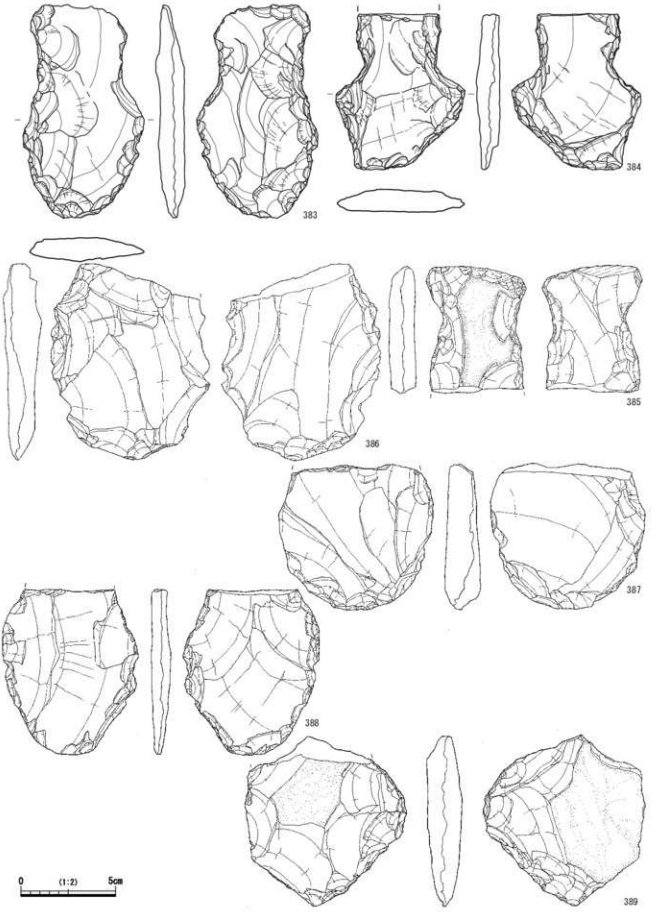
第100図　Ⅳ層出土遺物24（石器④）

第101図　Ⅳ層出土遺物25（石器⑤）

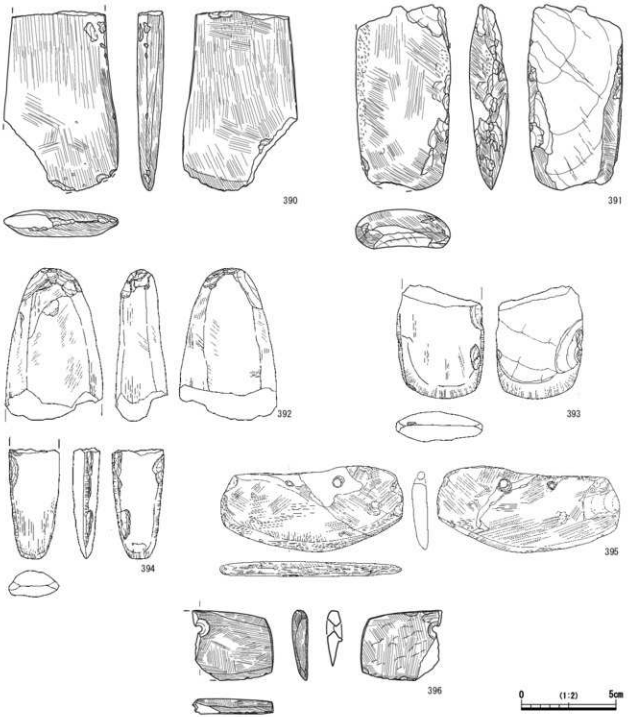
ある。381は，基部と刃部の大部分を破損するが，残存部の形状から撥型を呈していたと想定される。大きさに比してやや薄く，側縁への細かい剥離で形状を整えている。擦痕や摩耗部は観察されない。硬質頁岩製で，長さ6.5cm，幅7.4cm，厚さ1.5cm，重さ84.6gである。382は，基部を欠損する。ホルンフェルスの平盤な転礫を素材とし，側縁を粗く整形している。刃部残存部には，細かい刃毀れを観察できる。長さ8.3cm，幅6.4cm，厚さ1.4cm，重さ92.2gである。

383～389は，刃部がやや尖る形状を呈し，またはその基部に抉りが入る有肩形または両耳形が想定される。

383は，ホルンフェルスの横長剥片の縁辺に簡易な加工を施して全形を整えている。刃部や稜線各部に摩耗部は観察されない。裏面左上端は剥脱している。長さ11.3cm，幅6.4cm，厚さ1.3cm，重さ110.5gである。384は，刃部再生が徹底している。表面が風化しているため，擦

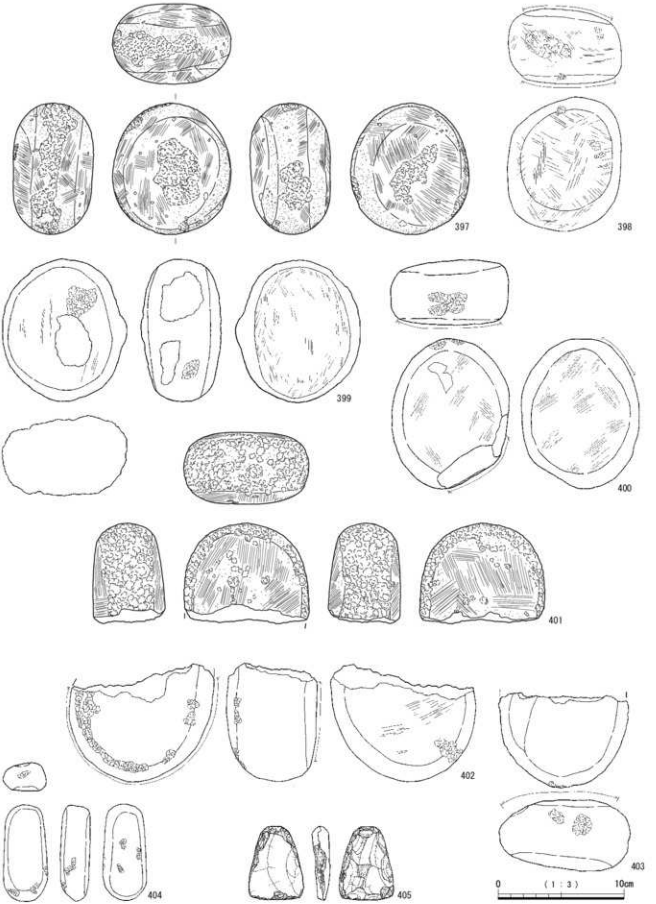


第102図　Ⅳ層出土遺物26（石器⑥）



第103図　Ⅳ層出土遺物27（石器⑦）

痕等の観察ができないが，刃部先端は摩耗している可能性がある。基部端も欠損する。頁岩製で，長さ8.3cm，幅6.8cm，厚さ1.2cm，重さ82.4gである。385は，刃部を大きく欠損する。両側縁に浅く抉りをいれているが，抉りの刃部側上端付近，及び双方を結ぶ線上に位置する稜線に摩耗部がある。頁岩製で，長さ6.7cm，幅5.1cm，厚さ1.4cm，重さ66.1gである。386は，基部を欠損するが，比較的大型である。形状は，主に背面側へのやや粗い剥離で整えている。刃先に摩耗部を観察できるほか，中軸とほぼ平行する擦痕もわずかながら看取できる。硬質頁岩製で，長さ10.3cm，幅8.3cm，厚さ1.9cm，重さ170.5gである。387は，円刃と称することも可能な刃部形状をしているが，整形剥離と先端に集中する刃潰れによるものと考えられる。また，裏面は広く剥離しているが，使用に伴う剥落とみられる。硬質頁岩製で，長さ7.7cm，幅8.1cm，厚さ1.9cm，重さ141.8gである。388



第104図　Ⅳ層出土遺物28（石器⑧）

も，裏面が広く剥離し，正面は広く平滑になっている（研磨痕は観察されない）。刃先には摩耗部がわずかに観察されるほか，正面には右下から左上に延びる擦痕もわずかに観察できる。頁岩製で，長さ8.7cm，幅7.2cm，厚さ1.1cm，重さ74.4gである。389は，肩部から先の基部と刃部の左半を欠損する。残存する右の刃先は軽く摩耗しているほか，裏面も摩耗して広く平滑になっており，さらに右下から左上に延びる擦痕を観察できる。頁岩製で，長さ9.1cm，幅8.5cm，厚さ1.9cm，重さ142.1gである。

ク　磨製石斧（第103図　390～394）

390は，基部と刃部左端を欠損する。良質な安山岩の盤状礫を素材とし，平面形は撥形に，刃部は緩い外弯刃にしている。体部各面の研磨は徹底しており，素材時の表面を残していない。刃部は体部と角度を変えて研ぎ出している。部分的に欠けているが，単発であり使用に伴うものか判然としない。長さ9.8cm，幅5.0cm，厚さ2.1cm，重さ110.4gである。391は，剥離と敲打により成形したのち，やや外弯させた刃部を中心に体部は軽く研磨して仕上げている。裏面には使用に伴う大きな剥離面がある。また，刃部にはそれ以前に形成された顕著な刃潰れが観察されるが，裏面の剥離に繋がった可能性がある。硬質頁岩製で，長さ9.5cm，幅6.1cm，厚さ1.4cm，重さ143.0gである。392は，やや大型な資料と想定される。両側縁に剥離と敲打を行い，その後研磨して整形しているが，正裏面はごく軽く研磨する程度で，素材表面を残している。硬質頁岩製で，長さ8.0cm，幅5.2cm，厚さ2.9cm，重さ157.5gである。393は，刃部である。やや小型だが厚みがあったと想定され，使用時に破断したものと考えられる。刃毀れはなく，刃部角は正裏面で異なっており，片刃状に整形されていたとみられる。また，破断面の先端が摩耗しており，当該部分を利器に転用したと考えられる。硬質頁岩製で，長さ6.0cm，幅4.6cm，厚さ1.6cm，重さ49.1gである。394は，石斧というよりもノミ状工具と称するべき石器である。側縁を剥離で，正面を敲打で成形したのち刃部周辺と側縁に研磨を加えて整形している。裏面は平坦な素材面を残す。刃部は，平面形をやや外弯させるほか，刃部側からみると若干正面側に弯曲させている。刃部裏面側に刃部からの剥離痕を観察できることからも，素材の形状を生かしてノミ状に仕上げたものとみられる。刃部角も正面側がより鈍くなっている。硬質頁岩製で，長さ5.9cm，幅2.8cm，厚さ1.3cm，重さ27.7gである。

ケ　石庖丁（第103図　395・396）

395は，頁岩製で刃部を外弯させ，端部を方形に整形する。孔は1か所しか残存していないが，裏面破断部端に孔の外端をかろうじて観察できる。刃部は，全体的に正面側の刃部角がより鈍い片刃状を呈する。長さ4.6cm，幅9.7cm，厚さ0.8cm，重さ44.1gである。396は，端部を含め各面を研磨により丁寧に仕上げ，刃部も正面側が鈍い片刃状を呈するものの，刃先はより鋭く研ぎ出している（やや刃毀れもみられる）。背側の厚みに対応して，孔も径が大きい。頁岩製で長さ3.7cm，幅4.3cm，厚さ0.8cm，重さ17.9gである。

コ　磨・敲石類（第104図　397～405）

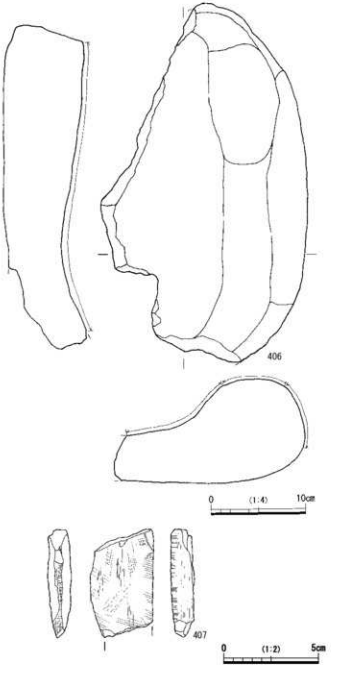
397は，砂岩製の敲石である。正裏面にある敲打部は，すり鉢状ではなく，それぞれ右上から左下方向に切り傷状に形成されている。同様の敲打部は，右側縁や上端の敲打部にもみられるほか，左側縁下部には線状痕が見られる。長さ10.3cm，幅9.4cm，厚さ6.2cm，重さ903.0gである。398は安山岩製の磨石である。主な作業面は正面で，裏面は左半と右端に軽く磨面を認める程度である。側面に磨面は見受けられない。長さ10.6cm，幅8.6cm，厚さ6.0cm，重さ933.0gである。399は安山岩製磨・敲石で，磨面は正裏面に確認できるが，結晶の脱落が多いため敲打部は看取しにくい。脱落が特に集中する範囲に敲打部があると想定されるが確証はない。長さ11.2cm，幅9.8cm，厚さ6.4cm，重さ803.0gである。400は，良質な砂岩製の磨・敲石である。右側縁下部は節理面等で剥落しており，そこにもわずかに磨面がある。長さ11.8cm，幅9.3cm，厚さ5.2cm，重さ840.0gである。401は安山岩製の磨・敲石で，欠損しているが，いわゆる「石鹸型」である。長さ8.0cm，幅10.0cm，厚さ5.7cm，重さ664.0gである。402も安山岩製の大形の磨・敲石で，磨面は正裏面に認められるが，正面は凸面，裏面は平面になっている。長さ11.5cm，幅9.3cm，厚さ7.3cm，重さ1067.0gである。403は安山岩製の磨石で，正面には磨面が2面形成されている。裏面にも平滑な磨面がある。長さ102.5cm，幅67.8cm，厚さ50.8cm，重さ494.0gである。404は，砂岩製の棒状敲石である。上端に凹んだ敲打部が看取される。長さ7.6cm，幅3.4cm，厚さ2.3cm，重さ87.0gである。405は，硬質頁岩製磨製石斧の基部の破損品を敲石に転用したものと考えられる。厚みはないが，刃部側の破断面を敲打部として利用している。長さ5.8cm，幅4.3cm，厚さ1.5cm，重さ41.5gである。

サ　石皿（第105図　406）

406は，花崗岩製で全体の約半分を欠損しているが，平面形が楕円もしくは水滴型を呈すると考えられる。作業面は，平面形にあわせて深く凹み，掻き出し口にむけて漸移的に浅く細くなっている。他の面も軽く磨いて整える丁寧な作りをしているが，正面の掻き出し口横の範囲と側面を面取り整形しているのが本資料の特徴である。接地面も平滑に仕上げており，使用時は安定していたと想定される。なお，作業面周辺に敲打部や凹み部はみられない。長さ38.9cm，幅21.7cm，厚さは中心部が4.8cm，縁の最厚部が10.6cm，重さ10.84kgである。

シ　石製品（第105図　407）

407は，G-13区で出土した。上下端と裏面を欠損しており全形は不明だが，左側面の形状が外弯していることから，平面形は半楕円形を呈していた可能性がある。良質な頁岩を用いており，正面及び両側面は，わずかに研磨痕を認めるものの全体として磨かれて光沢を帯びている。また，正面と両側面の角部はおよそ直角に整形されているが，右側面の角部が鋭角になっているのに対し，左側面の角部は鈍角になっている。全体の形状が不明であり，擦痕がないことや面が光沢を帯びることなどから石製品とした。長さ5.8cm，幅3.3cm，厚さ1.3cm，重さ29.9gである。



第105図　Ⅳ層出土遺物29（石器⑨）

第３節　Ⅲ層以降の調査

１　調査の概要

Ⅲ層の調査は，10m四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。Ⅲ層からは古墳時代から近世までの遺構・遺物が出土し，層序により明確な時代区分ができなかった。遺物や埋土状況との関連で時代が特定できた遺構もある。

遺構は，道跡が検出された。道跡については，硬化面を持ち，筋状に一定方向に形成されたものを道跡と認定した。調査区の北西方向から南東方向に傾斜する谷に沿って，ほとんどの道跡が検出されている。Ⅲ層では７条検出した。出土した遺物や検出状況等から時期の特定を行った。

遺物は，数は少ないものの，縄文時代晩期から近世の遺物が出土した。

２　Ⅲ層（第106図～第111図）

(1)　遺構

①　道跡

ア　古墳時代の道跡

道跡８号（第106図）

D-11・12区のⅢ層で検出された。谷部北側の中腹に位置する。規模が小さくはっきりとしたことは分からないが，検出範囲で長さ約1.3m，幅約0.8m，硬化面の厚さは約６cmである。硬化面は暗褐色土である。

道跡９号（第106図）

D-11区のⅢ層で検出された。谷部北側の中腹に位置する。規模が小さくはっきりとしたことは分からないが，検出範囲で長さ約0.8m，幅約0.4m，硬化面の厚さは約５cmである。硬化面は暗褐色土である。

道跡10号（第106図）

E-11・12区のⅢ層で検出された。谷部北側の谷底部分に位置する。すぐ隣には道跡11号が検出されているが，埋土の違いから時期差があると考えられる。検出範囲で長さ約5.0m，幅約0.6m，硬化面の厚さは約４cmである。硬化面は暗褐色土である。

イ　中世の道跡

道跡11号（第106図　408）

E-11区のⅢ層で検出された。谷部北側の谷底部分に位置する。検出範囲で長さ約7.1m，幅約0.7m，硬化面の厚さは約５cmである。硬化面は黒褐色土である。

408は，先端部をわずかに欠損する打製石鏃である。黒曜石製で，平面形は正三角形状で基部を浅く抉る。正面側の深い剥離と全周に施された細かい調整剥離で形状を整えており，裏面側には主要剥離面をやや広く残す。長さ1.2cm，幅1.5cm，厚さ0.2cm，重さ0.3ｇである。

道跡12号（第106図）

E-12区のⅢ層で検出された。谷部北側の中腹に位置する。検出範囲で長さ約3.8m，幅約0.6m，硬化面の厚さは約９cmである。硬化面は黒褐色土である。

道跡13号・14号（第107図）

D・E-11・12区のⅢ層で検出された。谷部北側の中腹に位置する。方向的には，北西から南東へのびており，掘立柱建物跡が検出された調査区北東側の丘陵地につながっていた可能性もある。道跡14号が道跡13号に切られている。

道跡13号は，検出範囲で長さ約12.0m，幅約1.1m，硬化面の厚さは約10cmである。

道跡14号の規模は，検出範囲で長さ約11.9m，幅約1.3m，硬化面の厚さは約８cmである。

(2)　遺物

①　土器

Ⅲ層は，遺物数はすくないものの，縄文時代晩期から近世の遺物が出土した。既存の研究に基づく土器型式また様式を基本に，器形，文様態により分類した。

ア　VB1類土器（第108図　409～411）

409は，深鉢形土器で，VA1類とVB1類の間くらいの器形と思われるが，ここではVB1類と一緒に掲載する。算盤玉状にゆるく張る胴部から直線的にひろく口縁部に至る。口縁部は肥厚しないが，胴部と口縁部の端の屈曲部外面には接合痕と指頭圧痕が確認できる。意図的な所作と考えられる。外面は全体的に煤が付着し，吹きこぼれの痕跡が確認できる。410は，口縁部～胴部である。口縁部下がやや膨らみ，胴部に向かって緩やかにすぼまる器形と考えられる。口縁部付近には内外面ともに横位のナデ調整が明瞭に観察できる。また，口縁部外面には口唇部の整形時の調整痕と思われる沈線が１条残る。411は，直線的に開く口縁部である。外面は横位の貝殻条痕調整が明瞭に残存し，内面から口唇部にかけては横位の丁寧なナデが施される。口唇部のナデ調整で押し出された粘土が外面の貝殻条痕部分に重なっていることから，条痕後に内面のナデ調整が施されたことがわかる。

イ　VB3類土器（第108図　412～415）

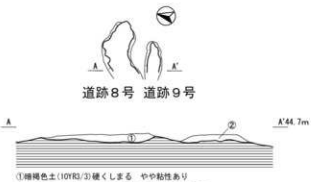
412・413は粗製浅鉢と考えられる。412は，内湾する口縁部をもち，内外面ともにナデを施す。413は口縁部をカマボコ状に肥厚させ，口唇部のみ鋭角に整える。内外面はナデを施す。414・415は半粗製浅鉢と考えられる。414は口縁部を断面三角形に肥厚させる。内面はミガキを施し，外面は工具による横位のナデを施す。415は，口縁部外面に断面三角形の突帯を貼付する。外面には横位のミガキを施し，内面は丁寧にナデを施す。

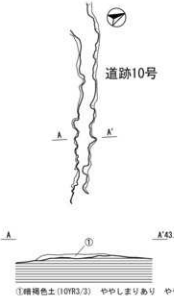
ウ　VD類土器（第108図　416）

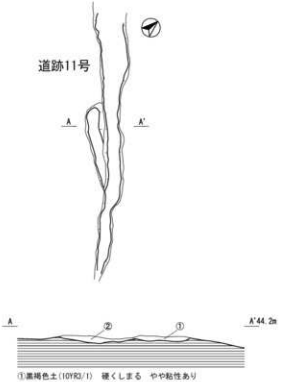
416は，鉢または深鉢の口縁部で，口縁部下に刻目突帯文を巡らせる。内外面ともにナデを施す。器壁は薄い。

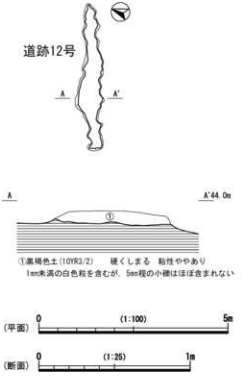
エ　Ⅶ類土器（第108図　417）

417は甕の口縁部である。口縁部は斜め上方に伸び，口唇部には１条の沈線を巡らせる。内外面ともに横ナデ

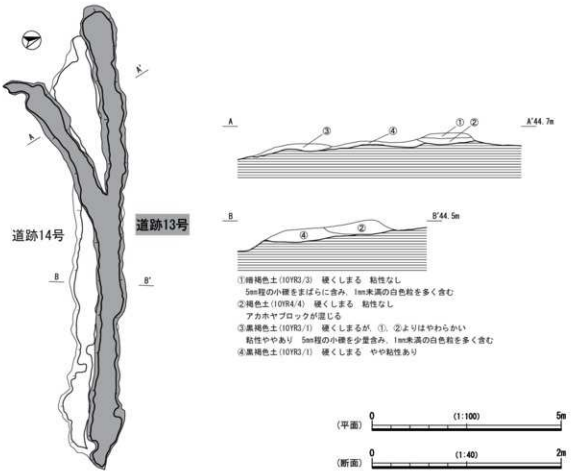








第106図　道跡８～12号・出土遺物



第107図　道跡13・14号

で仕上げる。胎土には，角閃石を少量と，雲母を多く含む。

オ　Ⅷ類土器（第108図　418）

418は，甕の脚部である。充実脚台であり，先端部には１条の沈線を巡らせる。胎土には417と同様に，雲母を多く含むが角閃石は確認出来ない。

カ　Ⅸ類土器（第108図　419）

419は，広口壺の口縁部である。小型の可能性がある。内外面ともに横方向のナデを施し，端部は平坦面を有する。

キ　X1a 類土器（第108図　420）

420は，緩やかに外湾する口縁部で，先端に向かうにつれて先細りを呈する。内面には弱い稜線が入る。内外面ともに工具ナデを施す。外面には全体的に煤が付着する。

ク　X1b 類土器（第108図　421・422）

421は，まっすぐ上方に伸びる口縁部で，刻目突帯を１条貼付する。内外面ともに工具によるナデを施す。422は内湾する口縁部形状を呈する甕形土器と予想される。三角突帯を１条巡らせたあと，浅く刻みを施す。胎土には１㎜～２㎜大の白色鉱物を多く含む。

ケ　X2c 類土器（第108図　423）

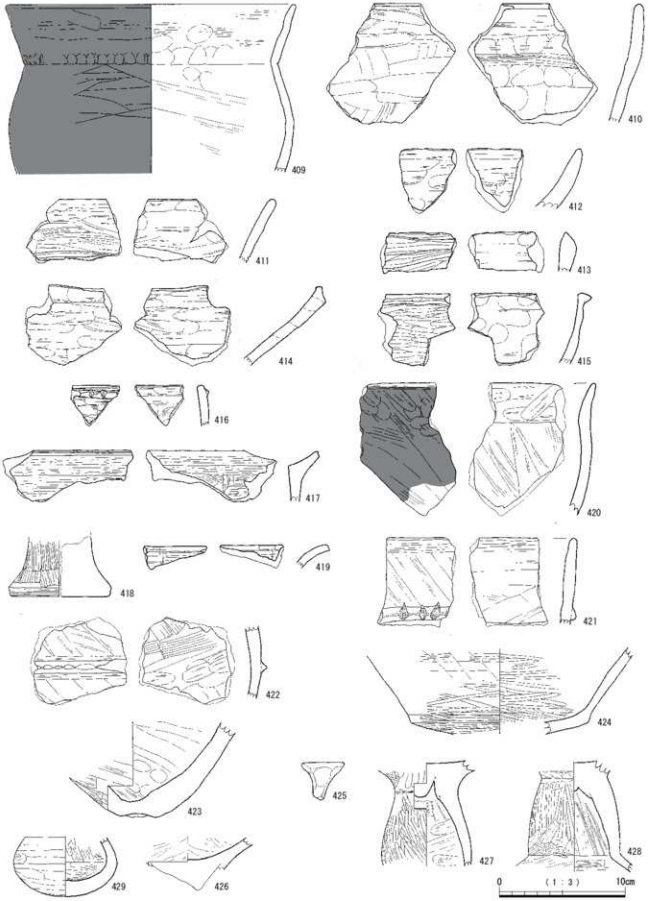
423は，接地面を上げ底気味に整形しているのが特徴的な壺形土器の底部と考えられる。内外面ともにナデ調整で仕上げる。

コ　X3a 類土器（第108図　424～426）

424は坏部口縁に屈曲をもつ高坏形土器と考えられる。坏の外面下方に粘土を貼付して，明瞭な屈曲部をつくる口縁部は直線上に外傾する。外面は横方向に丁寧なミガキを施し，内面もミガキで丁寧に仕上げる。425は坏部と脚部の接合時に，脚部の中空部を充填した粘土塊である。坏部内底面中央にあたる上面は，ナデが丁寧に施される。426は，坏部の粘土充填部分が425よりやや多く残る個体である。同じように内面のみ丁寧にナデ調整を施す。

サ　X3c 類土器（第108図　427・428）

427・428は，脚筒部が下端がふくらむエンタシス状を呈するものである。427は外面には縦方向の丁寧なミガキを施す。内面は工具による斜位方向のナデを施す。428は，427よりも坏部との境に屈曲線が明瞭に入る。内



第108図　Ⅲ層出土遺物１
（ⅤB1，ⅤB3，ⅤD，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ1a，Ⅹ1b，Ⅹ2c，Ⅹ3a，Ⅹ3c，Ⅹ5c類）

外面ともに工具によるナデを施す。

シ　X5c 類土器（第108図　429）

429は扁球状を呈する坩形土器の胴部～底部である。外面は工具による横位のナデを施す。内面は工具や指等で丁寧なナデで仕上げる。器高のわりに器壁が厚い。胎土には雲母を含む。

ス　古代～近世の出土遺物（第109図　430～441）

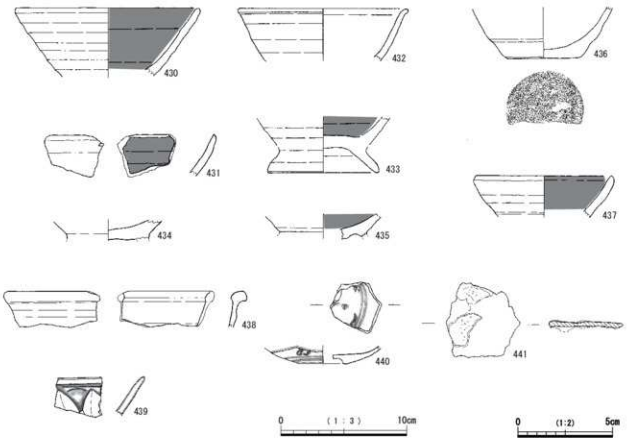
430～437は土師器である。430・431・432・433・434・435は埦である。430・431は内湾する口縁部を呈する。430は，内面に横位のミガキ調整を施し，いぶしは疎らである。復元口径約14.7cmを測る。431は，内面に横位，縦位のミガキ調整を施し，いぶしは内面から口唇部まで広がる。口縁部はやや内湾して立ち上がる。432は口縁部先端がやや外反する。内外面ともに横位の回転ナデ痕が残るが，内湾はナデ調整がやや丁寧である。口唇部は玉縁状を呈する。433・434・435は高台部分である。436は坏である。腰部が凹み，柱状高台に近い器形を呈する。見込に線刻あり。底面はヘラ切りと思われる。摩耗のため底器面はなめらかである。焼成は良好。437は皿である。口縁部がやや内湾して立ち上がり，外面には段を有する。431と胎土等が酷似していることから，同一個体の可能性がある。430・431・433・435・437は黒色土器Ａ類に該当する。438は，薩摩焼の片口鉢である。口縁部は外面に折り，さらに内面に折り返して丸くおさめる。胎土は緻密で灰褐色を呈する。全体に鉄釉をかけ，口唇部は釉剥ぎをする。苗代川系堂平窯跡の製品で，時期は17世紀後半と思われる。439は青磁の鎬連弁文の碗である。440は青花の基筒底の皿である。441はほぼ平坦な鉄片であり，鋳造鉄鍋の破片の可能性が考えられるが，詳細は不明。

②　石器

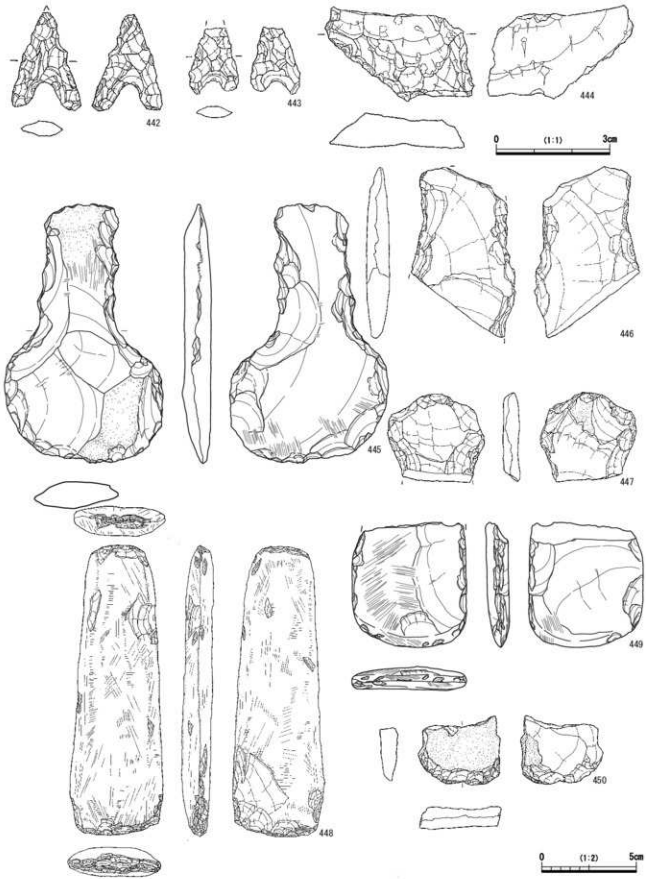
Ⅲ層からは，打製石鏃，打製石斧，磨製石斧などに加え，砥石が２点出土している。

ア　打製石鏃（第110図　442・443）

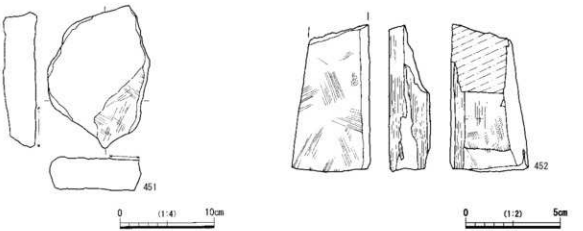
442は完形品で，平面形はややいびつな二等辺三角形状を呈し，基部にはU字状の抉りが深く入る。やや厚みのある剥片を素材とし，深めの剥離で全形を整えており，細かい調整は施されない。こうした点から，鋭くない先端も欠損ではない可能性もある。珪質頁岩製で，長さ2.6cm，幅1.8cm，厚さ0.4cm，重さ1.2ｇである。443は，平面が二等辺三角形状を呈し基部にはU字状の抉りが浅く入る。442と同様に深めの剥離で全形まで整えているが，剥離は不規則である。先端部のほか，右脚端も欠損している。安山岩製で，長さ1.7cm，幅1.3cm，厚さ0.3cm，重さ0.6ｇである。



第109図　Ⅲ層出土遺物２（古代～近世の遺物）



第110図　Ⅲ層出土遺物３（石器①）



第111図　Ⅲ層出土遺物４（石器②）

イ　使用痕剥片（第110図　444）

444は，ややいびつな縦長剥片の左下縁に，腹面側から形成された微細な剥離が観察される。スクレイパーのような用途に使われたと考えられる。素材は，不純物の入り具合から長谷産の黒曜石と想定される。長さ2.3cm，幅3.6cm，厚さ0.9cm，重さ8.9ｇである。

ウ　打製石斧（第110図　445～447）

445は，基部の長さに比して刃部がやや小振りであるが，ラケット形の完全品である。また，正面側からみて，刃部の中心軸に対して基部のそれがややや左にずれている。ホルンフェルス製で，主な成形は裏面側からの剥離によって行い，細かい調整で整形している。刃部には，正裏面ともに刃部に対しおおむね直交方向の擦痕が観察される。長さ13.7cm，幅8.4cm，厚さ1.9cm，重さ169.9ｇである。446は，撥型の打製石斧の基部と考えられる。硬質頁岩の横長剥片を用い，側縁に浅い整形剥離を施している。長さ9.0cm，幅5.6cm，厚さ1.2cm，重さ71.4ｇである。447は，両耳形の基部と考えられるが，形状からは小型だったと想定される。また，小型だったとしても厚みが薄い。長さ4.7cm，幅5.1cm，厚さ0.9cm，重さ27.6ｇである。

エ　磨製石斧（第110図　448～450）

448は，全長に比して厚みが薄いが，完形品である。全面を軽い光沢がみられるほど丁寧に研磨しているが，前工程の剥離整形の痕跡が全体に散見される。やや片刃状を呈していたであろう刃部には，顕著な刃潰れが生じている。また，基部端にも刃潰れのような研磨後に生じた細かい剥離が観察される。ホルンフェルス製で，長さ15.4cm，幅9.9cm，厚さ1.5cm，重さ181.5ｇである。449は，扁平なホルンフェルスの剥片を用いている。刃部はやや左右非対称に外弯するが，刃部再生による可能性がある。しかし他に顕著な刃潰れは観察されない。刃部以外では両側縁と正面に整形時の研磨を確認できるが，全体的には，あまり研磨していない。長さ6.6cm，幅6.1cm，厚さ1.3cm，重さ76.6ｇである。450は，石英の盤状剥片を素材にしている。加工は，主に刃部に確認されるのみである。刃部の角度から，スクレイパーではなく石斧に類する石器と想定し報告したが，詳細は不明である。

オ　石皿（第111図　451）

451は，花崗岩の盤状礫を用いている。欠損品であるため詳細は不明だが，主要な磨域面は正面側に確認され，顕著な平坦面が形成されている。裏面側には正面と同等の作業面はないが，正面側と同じ部位にわずかに回む滑らかな面が形成されている。また，作業面以外の面の色調が淡紅色を呈していることから，素材獲得に際し加熱した可能性がある。なお，周縁には剥離面も観察されるものの，全形が不明のため加工・整形がなされたかについては確証を得られない。長さ15.0cm，幅10.9cm，厚さ3.5cm，重さ856.0ｇである。

カ　砥石（第111図　452）

452は，頁岩製で，左辺並びに上部を欠損する。主な砥面は正面及び裏面であるが，右側面にも研ぎ痕が看取されることから，砥面として用いられたことがわかる。また，この右側面は三角形状を呈していることから，この資料の砥面は少なくとも４面存在することになる，特徴的な形態である。長さ7.8cm，幅4.2cm，厚さ2.2cm，重さ93.8ｇである。

3　Ⅰ層（第112図　453～470）

(1)　遺物

①　土器

ア　ⅤA2類土器（第112図　453）

453は浅鉢である。口縁部は外反しながら立ち上がり，口唇部は玉縁状を呈する。内外面ともに丁寧なミガキ調整であり，屈曲部の稜線は明瞭である。胎土精製。

イ　ⅤD類土器（第112図　454）

454は外反しながら伸びる口縁部資料下端は，胴部屈曲部直上で割れている。口縁部直下には刻目突帯を１条貼付する。内外面工具によるナデを施す。丁寧な仕上げである。

ウ　Ⅶ類土器（第112図　455）

455は甕の口縁部である。口縁部が斜め上方に伸びる。口唇部には１条の沈線が巡る。口縁部下に，無刻目の三角突帯が１条残存する。

エ　Ⅹ1b類土器（第112図　456・457）

456は直線的に伸びる口縁部である。端部にいくにつれて先細りになる。外面は縦方向のハケメを施す。内面は横方向の工具ナデを施す。外面には薄く煤が付着する。

457は，壺の肩部である。三角突帯を少なくとも１条巡らせ，内外面ともに工具によるナデを施す。破片が小さく，細分は困難である。

オ　Ⅹ2c類土器（第112図　458）

458は，丸みを帯びるが接地面にわずかに平坦面をもつ底部である。外面には赤色顔料を塗布する。

カ　Ⅹ3a類土器（第112図　459～461）

459・460は坏部に屈曲を持つ高坏である。どちらも口縁部が外反して伸びる形態で，口唇部は丸みを帯びる。459は，内外面ともに横ナデで仕上げる。器壁が厚く，大型の可能性あり。460は，内外面ともに工具によるナデを施す。461は，屈曲部を強調させた坏部破片である。口縁部先端を欠く。内外面工具によりナデを施すが，内面は丁寧なナデを施す。

キ　Ⅹ3d類土器（第112図　462）

462は，高坏の脚部である。裾部に向かってスカート状に開く形態を呈する。外面は縦方向の工具ナデで，内面は斜位方向のナデを施す。脚高は比較的低いと想定される。

ク　Ⅹ5a類土器（第112図　463）

463は外反する口縁部をもつ坩形土器である。内外面横ナデで仕上げる。

ケ　古代～近世の出土遺物（第112図　464～470）

464・465は東播系須恵器の捏ね鉢と思われるが，小破片資料のため詳細は不明である。466は，土師皿である。底部は糸切り。467・468は青磁である。467は束口碗である。草花文とその下に劍先連弁文がみられる。時期は14世紀前半～後半頃と思われる。468の胎土は灰色がかっており，底面付近が赤みを帯びる。高台裏～畳付は，釉を粗く掻き取る。高台中央が一部ケズリ等により露呈する。見込みにスタンプ文あり。時期は15世紀頃と思われる。469は青花の碗である。口縁は玉縁状に仕上げる。外面高台付近に釉だまりが目立つ。畳付周辺にガラス質の砂目材が顕著に付着する。砂目は見込にも若干確認できる。畳付から高台裏は露胎である。時期は16世紀頃。470は，製鍊滓（塊形滓）である。鉄塊が所々に含まれる。時期不明。

②　石器

Ⅰ層から出土した石器については，器種を特定できたものの中からある程度の図化が可能なものを選別し掲載した。以下に概略について説明する。

ア　打製石斧（第113図　471～474）

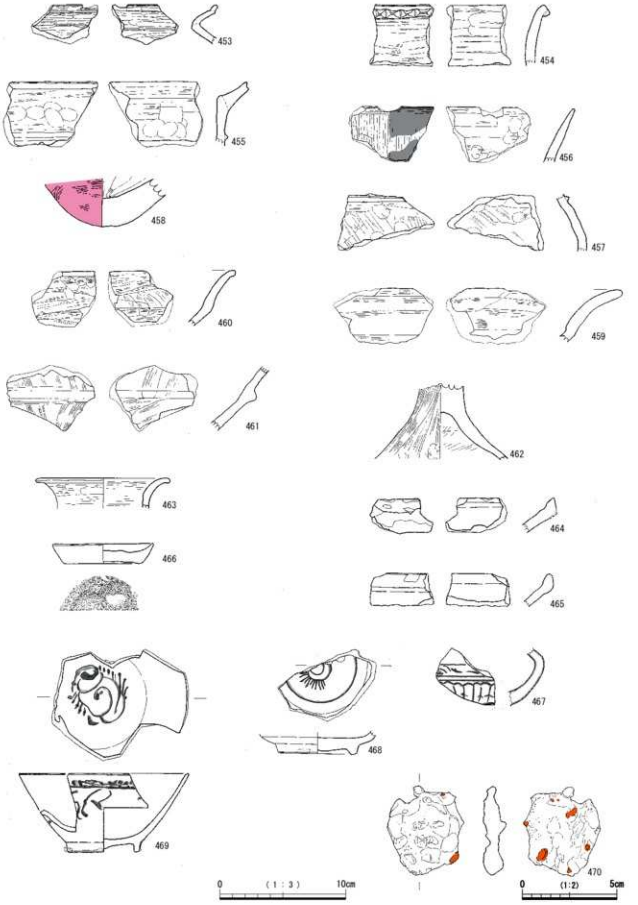
471は，ホルンフェルス製で，基部端を欠損するが，短冊形である。刃部には軽い潰れと摩耗を観察でき，刃部を再生している可能性がある。長さ12.4cm，幅5.1cm，厚さ1.6cm，重さ140.0ｇである。472は，ホルンフェルス製で，長さは短いが撥型と考えられる。基部端を欠損しているがその程度はごくわずかと考えられる。刃部には，正面に刃部に対し直交方向に残る擦痕をわずかながら観察できる。長さ8.3cm，幅4.9cm，厚さ1.5cm，重さ91.5ｇである。473は，硬質頁岩製で刃部を大きく欠損する両耳形の基部と考えられる。上端の稜線には摩耗している箇所が散見される。長さ7.1cm，幅5.6cm，厚さ2.5cm，重さ136.0ｇである。474は，刃部を大きく欠損しているが，ラケット形と想定される。裏面の広い剥離は，面の風化度が異なっていることから，廃棄後に偶然生じたと考えられる。長さ9.0cm，幅5.5cm，厚さ2.1cm，重さ98.7ｇである。

イ　磨製石斧（第113図　475・476）

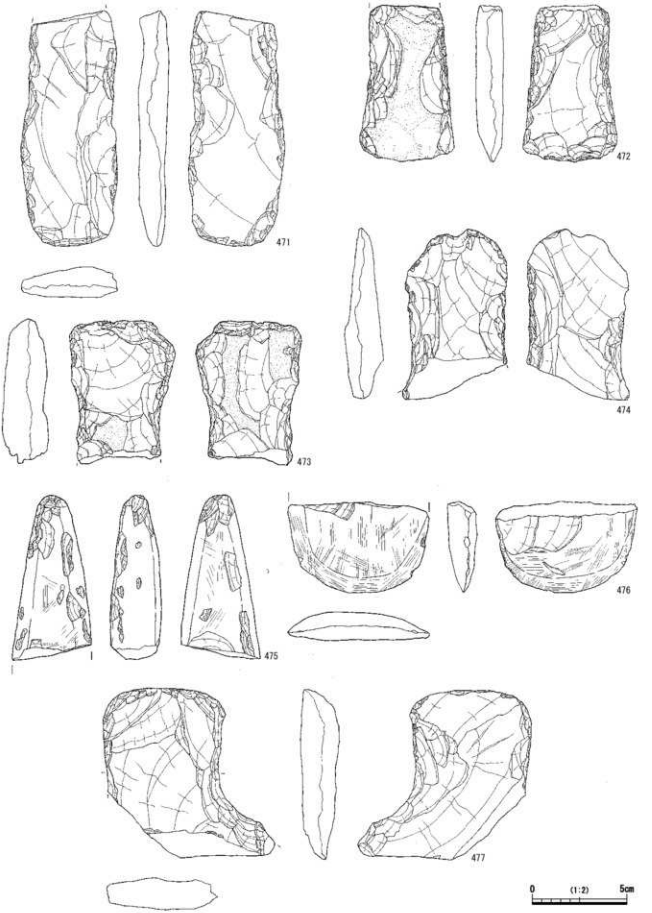
475は，硬質頁岩製で，刃部を大きく欠損する。成形剥離後，全面を敲打して整えている。研磨については，正裏面とも軸部にわずかに観察できるのみである。基部端には，敲打後に生じた小剥離が中軸方向に延びる。長さ8.7cm，幅4.3cm，厚さ2.9cm，重さ125.1ｇである。476も硬質頁岩製で，丸く突出した刃部と正裏面非対称な横断形状が特徴的な資料である。全面研磨されているが，裏面は主要剥離面を残す。観察される擦痕は製作時のものばかりで使用による擦痕や摩耗部分は観察されない。また，大きさのわりには厚みが薄い。長さ7.4cm，幅4.8cm，厚さ1.5cm，重さ72.5ｇである。

ウ　十字型石器（第113図　477）

477は，残存部の特徴から十字型石器の破片と想定した。縁辺部に細かく丁寧に施された浅い剥離で整えられている。潰れや摩耗は，資料右端のごく一部にわずかに観察できるのみである。長さ8.9cm，幅9.1cm，厚さ2.1cm，重さ153.7ｇである。



第112図　Ⅰ層出土遺物１
（ⅤA2，ⅤD，Ⅶ，Ⅹ1b，Ⅹ2c，Ⅹ3a，Ⅹ3d，Ⅹ5a 類，古代～近世）



第113図　Ⅰ層出土遺物２（石器）

第４表　Ｂ地点　遺構観察表１

検出番号	掲載番号	出遺構番号	区	検出面	埋土	大きさ（cm）			掲載遺物	遺物等	時代	備考
						長軸	短軸	深さ				
9	土坑1号	土坑23	D-17	8	①黒褐色土	83	70	18		～	縄文早期	
	集石1号	集石44	F-16	7a	～	82	28	～		石器	縄文早期	
11	集石2号	集石18	E-16	6	～	215	103	～		石器	縄文早期	
	集石3号	集石28	E-16	6	～	200	81	～		礫　縄片	縄文早期	
12	集石4号	集石29	D-14	6	～	398	230	～		石器	縄文早期	
	集石5号	集石24	E-16	6	～	53	42	～		礫　縄片	縄文早期	
13	集石6号	集石25	D-14	6	～	61	31	～		石器	縄文早期	
	集石7号	集石27	E-16	6	～	75	53	～		石器	縄文早期	
	集石9号	集石17	C-13-14、D-13	6	～	105	89	～		土器	縄文早期	
14	集石9号	集石43	F-D-16-17	7a	～	460	404	～	1	石器、土器	縄文早期	
15	土坑墓1号	土坑160	F-16	6	①黒褐色土②黒褐色土③褐色土	155	53	～	2～8	土器、石器、鉄器、炭化物	中世以降	
19	掘立柱建物跡1号	掘立23号	D-D-15-16	5c	a.黒褐色土　b.褐色土	～	～	～		～	古墳	
20	掘立柱建物跡2号	掘立22号	E-16	5a	b.褐色土	～	～	～		～	古墳	
	掘立柱建物跡3号	掘立31号	E-16	5a	a.褐色土　b.褐色土	～	～	～		土器	古墳	
21	掘立柱建物跡4号	掘立32号	C-12	5a	a.黒褐色土　b.褐色土	～	～	～	11	～	中世	
22	掘立柱建物跡5号	掘立24号	D-16	5c	a.黒褐色土	～	～	～		～	中世	
23	掘立柱建物跡6号	掘立26号	D-E-17	5a	a.黒褐色土　b.褐色土	～	～	～		～	中世	
24	土坑2号	土坑179	E-16	5a	①褐色土②褐色土③褐色土④褐色土⑤褐オリーブ褐色土⑥褐灰黄色土	82	71	88		土器	縄文晩期	
	土坑3号	土坑196	F-13-14	5a	①褐色土	94	47	14		～	縄文～古墳	
	土坑4号	土坑173	E-13	5a	①褐色土	168	105	45		土器	縄文以降	
25	土坑5号	土坑169	D-17	5a	①褐色土②黒褐色土③褐色土④黒褐色土⑤にぶい黄褐色土⑥褐色土	143	79	63		土器、石器	縄文以降	
	土坑6号	土坑173	D-12	5a	①黒褐色土	106	62	15		～	中世以降	
	土坑7号	土坑191	F-17	5a	①褐色土②にぶい黄褐色土	101	89	41		土器	中世以降	
26	土坑8号	土坑187	F-14-15	5a	①黒褐色土	108	66	98		～	中世以降	
	焼土跡1号	焼土跡3	D-11	5a	①褐色土	62	53	143		炭化物	縄文～古墳	
	焼土跡2号	焼土跡2	D-12	5a	①褐色土②褐色土	40	38	28		土器、炭化物	縄文～古墳	
	焼土跡3号	焼土跡4	E-12	5a	①褐色土②褐色土	54	48	25	12	石器、炭化物	縄文～古墳	
27	ピット1号	ピット2910	D-18	5a	不明	26	21	29		礫	古墳	
	ピット2号	ピット3172	F-16	5a	①褐色土	31	31	30		礫	古墳	
	ピット3号	ピット3051	E-17	5a	不明	28	26	31		礫	古墳	
	ピット4号	ピット3104	E-18	5a	不明	34	21	29		礫	古墳	
	ピット5号	ピット3029	D-17	5a	①褐色土	34	35	29		礫	古墳	
	ピット6号	ピット3432	F-17	5a	①褐色土	40	30	46		土器、鉄石	古墳	
	ピット7号	ピット2900	D-17	5a	①黒褐色土②褐色土③褐色土④褐色土	49	39	41		～	古墳	
	ピット8号	ピット2885	D-17	5a	不明	34	33	59		土器、石器、礫	中世	
	ピット9号	ピット3082	D-18	5a	不明	20	24	51		土器、礫	中世	
	ピット10号	ピット2861	C-D-17	5a	不明	41	36	29		土器、石器、礫	中世	
	ピット11号	ピット3075	E-18	5a	①黒褐色土	27	23	40	13	～	中世	
28	礫集中1号	集石37	F-18	5a	～	112	95	～		石器	中世	
29	溝状遺構1号	溝19	D-12-13	5a	①褐色土	796	75	22	14-15	土器、礫、縄類、青磁	古墳	
	溝状遺構2号	溝26	D-12	5a	①褐色土	725	108	10		土器	古墳	
	溝状遺構3号	溝28	E-14	5a	①にぶい黄褐色土	315	80	14		土器	古墳	
	溝状遺構4号	溝18	D-13-14	5a	①褐色土②にぶい黄褐色土	585	117	21		土器	古墳	
30	溝状遺構5号	溝22	C～E-12～14	5a	①褐色土②にぶい黄褐色土	3380	194	10	16	土器	古墳	
	溝状遺構6号	溝21	C～F-12～15	5a	①褐色土	3320	223	15	17	土器、礫	古墳	
31	溝状遺構7号	溝16	D-16	5a	①黒褐色土②褐色土	345	67	5	18	石器、鉄片	中世	
	溝状遺構8号	溝17	B-E～15-16	5a	①褐色土	954	160	5		土器、縄類、石器	中世	
32	溝状遺構9号	溝23	C～E-9-10	5a	①黒褐色土②黒色土③黒褐色土	2100	79	20	19	鉄、礫	中世以降	
	溝状遺構10号	溝24	C-D-9-10	5a	①黒色土②黒褐色土	985	58	20		礫	中世以降	
	溝状遺構11号	溝25	C-E～9-10	5a	①黒色土②黒褐色土	2070	71	20	20	土器、鉄	中世以降	
34	埋設土器1号	埋設土器1	I-15	4a-2	①褐色土	45	33	56	26	土器、石器、炭化物、鉄	古墳	
37	土坑9号	土坑189	I-J-15	4a-2	①褐色土	80	40	90		土器	縄文晩期	
	土坑10号	土坑188	H-I-15	4a-2	①褐色土	38	36	44		土器、石器	古墳	
	土坑11号	ピット2685	I-14	4a-2	①黒褐色土	46	34	10		～	古墳	
	土坑12号	ピット2586	I-14	4a-2	①黒褐色土	54	36	31		土器、鉄	古墳	
	土坑13号	土坑180	I-16	4a-2	①褐色土②黒褐色土	120	118	22		土器、炭化物	古墳	
	土坑14号	土坑203	F-G～12-13	4a-2	①にぶい黄褐色土②褐色土③にぶい黄褐色土	135	124	33		土器、炭化物	古墳	
38	土坑15号	土坑213	I-14	4a-3	①褐色土	58	47	12		土器、鉄	縄文～古墳	
	土坑16号	土坑211	I-J-14	4a-2	①褐色土	81	39	24		鉄	縄文～古墳	
	土坑17号	土坑203	I-15	4a-3	①褐色土②にぶい黄褐色土、明黄褐色土③明黄褐色土④褐褐色土	67	55	63		土器、炭化物	縄文～古墳	
39	土坑18号	土坑195	J-14	4a-2	①褐褐色土	94	36	22		礫	縄文～古墳	
	土坑19号	土坑208	I-15	4a-2	①褐色土	68	66	22		土器	縄文～古墳	
	土坑20号	土坑194	G-14	4a-2	①褐色土	100	50	49		土器、鉄	縄文～古墳	
40	土坑21号	土坑189	I-J-14	4a-2	①褐褐色土	89	53	36		土器、石器、礫	縄文～古墳	
	土坑22号	土坑200	J-14	4a-2	①黒褐色土②褐褐色土	160	137	10		土器、鉄	縄文～古墳	
41	土坑23号	土坑202	J-15	4a-2	①黒褐色土	90	55	21		礫	中世	
	土坑24号	土坑159	D-12	4	①暗色土②褐褐色土、黒褐色土③黒褐色土	72	56	28		炭化物	中世	
	土坑25号	土坑177	J-15	4	①褐褐色土	112	36	12		～	古墳以降	

第５表　Ｂ地点　遺構観察表２

検出番号	掲載番号	出遺構番号	区	検出面	埋土	大きさ（cm）			掲載遺物	遺物等	時代	備考
						長軸	短軸	深さ				
41	土坑26年	土坑26	F-13	4a-3	①暗色土	127	69	6		土器	古墳以降	
	土坑27年	土坑163	D-10	4	①暗褐色土	26	25	22	27・28	土器、石器	古墳以降	
42	土坑28年	土坑159	D-E-10	4	①暗褐色土②黒褐色土③暗褐色土	164	132	36		土器、石器、炭化物	古代以降	
	土坑29年	土坑212	J-14	4a-2	①黒褐色土	56	40	17		土器、鏡	中世以降	
	土坑30年	土坑194	E-12	4	①黒褐色土	90	72	12		土器	中世以降	
	土坑31年	土坑212	J-14	4a-2	①黒褐色土	66	62	30		鏡	中世以降	
43	土坑32年	土坑201	I-J-13-14	4a-2	①黒褐色土	105	39	78	29	土器、鏡	中世以降	
	土坑33年	土坑153	D-E-14	4	①黒褐色土	115	87	41		土器	中世以降	
44	炭化物集中1年	炭化物集中1	D-11	4	①暗褐色土	99	64	26	20・21	土器、鞍石、鏡	古墳以降	
	炭化物集中2年	炭化物集中2	C-D-10	4	①暗褐色土	81	34	8		炭、鏡	古墳以降	
—	炭化物集中3年	炭化物集中3	D-11	4	①暗褐色土	—	—	—		炭化物	不明	
45	ピット12年	ピット4224	H-13	4a-3	①暗褐色土	44	37	39		土器、石器	古墳	
	ピット13年	ピット4224	G-13	4a-3	①暗褐色土	36	35	38		石器	古墳	
	ピット14年	ピット4187	H-13	4a-3	①暗褐色土	36	32	14		土器、石器	古墳	
	ピット15年	ピット2220	C-10	4	①暗褐色土	35	25	28	22	土器、石器	古墳	
	ピット16年	ピット2998	E-10	4	①黒色土	34	28	21		土器、鏡	中世	
	ピット17年	ピット2998	D-E-10	4	①黒色土	51	40	28	22	土器、鏡	中世	
	ピット18年	ピット2788	C-9	4	①黒色土	40	27	49		鏡	中世	
	ピット19年	ピット4175	I-13	4a-2	①黒褐色土	54	34	43		土器、石器	中世	
	ピット20年	ピット2998	D-10	4	①黒色土	34	31	28		鏡	中世	
46	ピット21年	ピット2778	C-9	4	①黒色土	56	31	67		鏡	中世	
	ピット22年	ピット2803	D-9	4	①黒色土	95	31	85		鏡	中世	
	ピット23年	ピット2796	C-9	4	①黒色土	52	39	119		鏡	中世以降	
	ピット24年	ピット3108	E-12	4	①黒褐色土	33	31	80		土器、鏡	中世以降	
	ピット25年	ピット2793	C-9	4	①黒色土	39	38	95		鏡	中世以降	
47	集石16年	集石33	I-J-15	4a-2	—	71	45	4		鏡、鞍片	鎌倉既期	
	集石17年	集石100	G-12	4	不明	153	78	13		—	鎌倉既期	
48	礫集中2年	集石34	H-14	4a-2	—	58	58	—	34	土器、石器	縄文～古墳	
	礫集中3年	集石42	I-15	4a-2	—	121	115	—		石器	縄文～古墳	
	礫集中4年	集石32	J-15	4a-2	—	207	72	—	35	土器、石器	縄文～古墳	
49	礫集中5年	集石31	J-15	4a-2	—	252	149	—	36	土器、石器	縄文～古墳	
50	礫集中6年	集石50	I-15	4a-2	—	260	125	—		石器	縄文～古墳	
51	礫集中7年	集石41	I-15	4a-2	—	268	249	—	37～39	土器、石器	縄文～古墳	
52	礫集中8年	集石48	I-J-14	4a-3	—	357	268	—	40	土器、石器	縄文～古墳	
53	礫集中9年	集石35	I-15	4a-2	—	404	328	—	41～46	土器、石器	縄文～古墳	
54	礫集中10年	集石46	J-14	4a-2	—	617	310	—		土器、石器	縄文～古墳	
55	礫集中11年	集石29	I-15	4a-2	—	41	34	—	47・48	土器、石器	縄文～古墳	
	礫集中12年	集石39	H-I-13-14	4a-2	—	130	63	—		石器	縄文～古墳	
	礫集中13年	集石44	I-15	4a-3	—	218	152	—		石器	縄文～古墳	
56	礫集中14年	集石30	I-14-15	4a-2	—	184	180	—		石器	縄文～古墳	
57	礫集中15年	集石45	H-14	4a-3	—	170	162	—		土器、石器	縄文～古墳	
58	礫集中16年	集石24	H-14	4a-3	①暗褐色土	32	30	94		石器、鏡	縄文～古墳	
	礫集中17年	集石47	H-I-15	4a-2	①暗色土	94	73	28		土器、石器	縄文～古墳	
59	礫集中18年	集石34	F-17	4	①黒褐色土	100	80	30		土器、石器	中世	
60	土器集中1年	土器集中14	F-G-12	4	—	115	81	—	49～52	土器、石器	古墳	
61	土器集中2年	土器集中13	F-12	4	—	150	136	—	53・54	土器、石器	古墳	
63	土器集中3年	土器集中7	I-15	4a-2	—	341	219	—	55～64	土器、鏡	古墳	
65	土器集中4年	土器集中6	I-16	4a-2	—	244	201	—	65～83	土器、石器、鏡	古墳	
69	溝状遺構12年	溝64	H-12-13	4a	①黒褐色土	153	110	11		土器	中世以降	
	溝状遺構13年	溝55	I-14	4a-2	①黒褐色土	432	72	30		土器、石器	中世以降	
70	溝状遺構14年	溝34	F-G-14～16	4	①黒褐色土②暗褐色土	2084	181	12	86～87	土器、鞍深、石器、鏡	中世以降	
	溝状遺構15年	溝33	F-G-14～18	4	①黒褐色土②暗褐色土	3035	105	15		土器、石器、鏡	中世以降	
72	溝状遺構16年	溝52	G-17	4a	①黒褐色土②暗褐色土	486	52	18	98	土器、石器		
	溝状遺構17年	溝50	G-16～18	4a	①黒褐色土②暗褐色土③暗褐色土	1440	93	11		土器、石器		
73	溝跡1年	溝B402	F-G-12-13	4a	①黒褐色土②暗褐色土	2320	73	7		土器、石器	中世～近世	
	溝跡2年	溝B402	I-16	4	A-A' ①暗褐色土②暗褐色土 B-B' ①暗褐色土②暗褐色土	326	56	10		—	中世以降	
74	溝跡3年	溝B417	H-I-14	4	①黒色土②暗褐色土	936	62	22	99	土器	中世以降	
—	溝跡4年	溝B421	G-14	4	①黒褐色土	435	37	—		—	中世以降	
—	溝跡5年	溝B419	I-15	4	①黒褐色土	481	42	—		—	中世以降	
—	溝跡6年	溝B418	I-14-15	4	①黒褐色土	1015	83	—		—	中世以降	
—	溝跡7年	溝B420	H-I-14-15	4	①黒褐色土	1207	37	—		—	中世以降	
106	溝跡8年	溝B7	D-I-11-12	3	①暗褐色土②暗褐色土	128	79	18		—	古墳	
	溝跡9年	溝B9	D-11	3		76	44	30		—	古墳	
	溝跡10年	溝B12	E-I-11-12	3	①暗褐色土	502	59	13		—	古墳	
	溝跡11年	溝B8	E-11	3	①暗褐色土②黒褐色土	700	73	24	408	土器、石器	中世	
	溝跡12年	溝B10	E-12	3	①黒褐色土	360	64	19		土器	中世	
107	溝跡13年	溝B11	D-E-11-12	3	①暗褐色土②暗色土③黒褐色土④黒褐色土	1200	112	26		土器、石器	中世	
	溝跡14年	溝B11	D-E-11-12	3		394	129	25		土器	中世以降	

第６表　Ｂ地点　掘立柱建物跡　観察表

掘立柱建物跡１号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	26	24	30	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 2	24	22	30	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 3	20	18	30	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 4	20	18	10	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 5	24	22	20	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 6	28	26	36	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 7	26	26	22	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 8	24	22	34	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 9	26	26	50	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 10	24	22	18	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 11	24	22	18	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N60°E	桁行	P1－P10	210
		P9－P10	204
		P8－P9	180
		P3－P4	192
		P4－P5	198
		P5－P6	210
	梁行	P1－P2	198
		P2－P3	198
		P7－P8	174
		P6－P7	174

掘立柱建物跡２号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	22	22	47	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 2	28	26	21	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 3	30	28	34	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 4	36	33	61	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 5	29	17	30	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 6	30	29	39	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N3°W	桁行	P1－P6	270
		P5－P6	202
		P2－P3	189
		P3－P4	246
	梁行	P1－P2	264
		P4－P5	171

掘立柱建物跡３号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	43	41	46	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 2	45	22	60	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 3	33	31	40	a	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 4	22	32	41	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 5	27	23	22	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 6	25	23	32	a	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 7	28	27	39	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 8	29	29	35	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 9	37	37	37	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし
P 10	37	32	40	b	暗色土（10YR4/4）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N72°E	桁行	P1－P2	183
		P2－P3	144
		P3－P4	198
		P8－P9	222
		P7－P8	156
		P6－P7	174
		P9－P10	198
	梁行	P1－P10	210
		P5－P6	168
		P4－P5	186

掘立柱建物跡４号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	29	28	21	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 2	26	26	22	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 3	26	25	39	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 4	31	27	22	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 5	42	33	23	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 6	28	27	48	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 7	28	28	28	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 8	35	23	14	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N46°W	桁行	P3－P4	210
		P4－P5	192
		P1－P7	240
	梁行	P1－P2	216
		P2－P3	156
		P5－P6	216

掘立柱建物跡５号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	34	26	30	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 2	28	24	28	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 3	24	22	22	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 4	16	16	7	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 5	20	19	10	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 6	24	22	8	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 7	22	22	11	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 8	26	28	26	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 9	32	28	42	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 10	27	26	14	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 11	40	34	32	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 12	44	30	46	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 13	36	32	24	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 14	27	26	56	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 15	24	24	24	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N75°E	桁行	P1－P12	192
		P11－P12	168
		P10－P11	156
		P9－P10	180
		P3－P4	186
		P4－P5	168
		P5－P6	162
		P6－P7	174
	梁行	P1－P2	192
		P2－P3	192
		P8－P9	168
		P7－P8	228

掘立柱建物跡６号

№	柱穴 (cm) 長径	短径	深さ		埋土
P 1	30	30	20	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 2	28	24	16	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 3	28	24	12	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 4	22	20	8	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 5	24	22	30	b	暗褐色土（10YR3/3）、しまり弱い、粘性なし
P 6	22	22	28	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 7	30	28	24	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 8	30	22	30	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 9	24	24	8	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 10	16	16	10	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし
P 11	26	20	44	a	黒褐色土（10YR2/2）、しまり弱い、粘性なし

主軸	方向	柱穴	柱間距離 (cm)
N24°W	桁行	P1－P10	225
		P9－P10	222
		P8－P9	252
		P3－P4	225
		P4－P5	231
		P5－P6	252
	梁行	P1－P2	183
		P2－P3	186
		P7－P8	162
		P6－P7	171

第７表　Ｂ地点　土器観察表１

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器面	胎土	角閃石	長石	石英	雲母	砂粒	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
16	7	－	深鉢	F-15	6	口縁部	○	○	－	○	－	－	－	－	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR6/1 褐灰	長胴状文 横ナデ	工具痕 横ナデ	22326	煤付着
	8	－	深鉢	F-17	6	口縁部	－	○	－	○	－	－	○	輝石	10YR3/1 黒褐	2.5Y3/1 黒褐	横ナデ	横ナデ	22867	
21	11	－	壺	C-13	－	頸部	－	○	○	－	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	指圧痕 工具ナデ ナデ	ナデ 指頭圧痕	一括	
27	12	ピット11号	坩	F-18	－	口縁部～底部	－	○	－	－	○	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	P3575-1・2・3・4・5・6	
29	14	－	壺	C-13	－	底部	－	○	－	○	－	○	○	橙	7.5YR5/2 にぶい褐	10YR6/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	17426	
	15	－	鉢	C-13	－	頸部～底部	－	－	－	－	－	－	－	－	10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	指転ハケ有り		16851	見込に草文
30	16	－	鉢	C-12	－	底部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y4/1 黄灰	網目痕	ナデ ミガキ	17629	
	17	－	壺	B-13	－	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	指圧痕 ナデ	ナデ	17440	
31	18	－	鉢	B-16	－	高台	－	－	－	－	－	－	－	－	2.5Y5/1 黄灰	5Y5/2 灰オリーブ			16848	
32	20	清状遺構11	壺	D-9, D-C-10	－	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/2 灰黄褐	ハケメ	指頭圧痕	清況-57	
33	21	－	深鉢	J-14	5a	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR3/1 黒褐	7.5YR4/3 褐	長胴無文	指頭圧痕	53340	
	22	－	浅鉢	F-17	5a	口縁部	－	○	○	○	－	－	－	炭化	10YR4/1 褐灰	N2/10 暗灰	ミガキ	ミガキ	22647	
34	26	埋設土器１号	壺	I-15	－	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	埋設土器1一括	煤付着
41	27	土坑27号	壺	D-10	－	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	指ナデ	ヘラナデ	DK163-10, 18825	
	28	土坑27号	壺	D-10	－	胴部	－	○	－	○	－	○	○	チャート粒	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	刺毛	DK163-8	
43	29	土坑32号	壺	I-J-12-14	－	胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	DK201-3	
44	30	炭化物集中1号	壺	D-11	－	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	指圧痕 ナデ	ナデ	炭化物集中1-1-2	
	31	炭化物集中1号	壺	D-10-11-12, E-11-13	－	頸部～底部	○	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ハケメ	ハケメ	炭化物集中1, 18653, 18117, 18210, 18467, 18662, 19985, 19837, 19894, 17476, 19315, 19261, 19263	
45	32	ピット15号	浅鉢	G-10	－	頸部～底部	○	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	指ナデ	ナデ	P3223-3・14, 18807	
	33	ピット17号	壺	B-E-16	－	口縁部	○	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/2 にぶい褐	7.5YR5/2 にぶい褐	横ナデ 指圧痕	横ナデ	一括	
47	34	縄集中2号	浅鉢	H-14	－	口縁部～頸部	－	○	－	－	○	－	－	－	10Y3/1 オリーブ黒	10YR4/1 褐灰	ヘラミガキ	ヘラミガキ	集石30-20, 20852, 37第一括	
48	35	縄集中4号	壺	J-15	－	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5YR4/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ	工具ナデ	集石32-7	
49	36	縄集中6号	壺	J-15	－	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	指圧痕 横ナデ	横ナデ	集石31-21	
51	37	縄集中7号	浅鉢	I-15	－	頸部	－	○	－	○	○	○	－	海石	2.5Y4/1 黄灰	10YR 黒黄褐	ナデ	ナデ	集石41-60	煤付着
	38	縄集中7号	壺	I-15	－	底部	－	○	－	○	－	○	○	雲母粒	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ ヘラ磨痕	ナデ	集石41-36	
	39	縄集中7号	壺	I-15	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	集石41-11-56	
52	40	縄集中8号	深鉢	J-14	－	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR3/1 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ケズリ ナデ	ナデ	集石49-53-54-57-58-60-63-66	煤付着
53	41	縄集中9号	壺	I-15	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐	指圧痕 横ナデ	横ナデ	集石35-27-87	
	42	縄集中9号	壺	I-15	－	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/4 にぶい赤褐	指圧痕 ナデ	ナデ	集石35-82	
	43	縄集中9号	壺	H-14, I-15	－	頸部	－	○	－	○	－	○	○	雲母粒	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR4/4 にぶい褐	ナデ 三角突帯 沈線		集石35-4, 21363	
	44	縄集中9号	壺	I-15-16	－	頸部	－	○	○	○	－	○	－	小礫	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ 指圧痕		集石35-31-93, 第第一括	
	45	縄集中9号	高坏	I-15	－	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/2 にぶい褐	ハケメ	工具ナデ	集石35-68	
	46	縄集中9号	高坏	I-15	－	脚部	－	○	－	○	－	○	○	雲母粒	10YR5/4 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ナデ	集石35-72	
55	47	縄集中11号	坩	I-14-15-16	－	頸部～底部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄褐	6.ガキ ナデ	ナデ	集石29-4-6, 21248, 20826, 21225, 20636, 22547, 第土一括, 第第一括	
	48	縄集中11号	坩	I-15	－	頸部	－	○	○	○	－	○	○	－	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	3.ガキ ナデ	ナデ 指圧痕	集石29-7	
60	49	土器集中1号	壺	E-F-9-12	－	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	三角突帯 工具ナデ 横ナデ	工具ナデ 横ナデ	土器集中14-8-20, 47731, 49065, 19864, 18391, 18398, 18388, 47733	
	50	土器集中1号	壺	F-G-12	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5YR5/4 明赤褐	ナデ	ナデ 指圧痕	土器集中14-22	
	51	土器集中1号	壺	F-G-12	－	頸部	－	○	○	○	○	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	横状突帯 ナデ	ナデ ミガキ	土器集中14-2	
	52	土器集中1号	壺	F-G-12	－	底部	－	○	○	○	○	○	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR4/4 にぶい褐	ナデ	ナデ 指圧痕	土器集中14-12-26	
62	53	土器集中2号	壺	F-12	－	完形品	－	○	－	○	－	○	○	雲母粒	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/3 にぶい褐	指圧痕 横ナデ 指ナデ	指ナデ	土器集中13-2-4-5-8-10-11-16-18-19-20-32-35-38-39-40-45-47-50-51-53-54-55-56-65-70-72-73-74-75-76-77-79-81-82-83-85-87-91-98-106-170-17, 47680, 47686, 47738, 48032, 48301, 48409, 49172, 49175, 49344, 49353, 49674, 49675, 49676, 49969, 49990, 49991, 49992, 49994, 49996, 50006, 50007, 50701, 50702, 50704, 50849, 51195, 52414, 一括	
	54	土器集中2号	壺	F-12	－	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5YR4/1 黄灰	7.5YR4/3 褐	横ナデ 指圧痕	横ナデ 指圧痕	土器集中13-24, 47702, 第土一括	煤付着
64	55	土器集中3号	壺	I-15	－	口縁部	－	○	○	－	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	横ナデ	横ナデ	土器集中3-10	

第８表　Ｂ地点　土器観察表２

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	胎土 雲母	石英	角閃石	長石	白石	黒色鉱物	砂粒鉱物	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
64	56	土器集中3号	壺	H-1.J-15.I-16	－	完形品	－	○	○	○	－	○	○	小礫	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤橙	ハケメ 磨ナデ	ハケメ ナデ 指頭圧痕 ケズリ	集石41-41、土器集中7-13-14-19-20-21-22-23-24-25-26-27-28-29-30-31-34-48-50、20446、21252、21361、21582、21371、21590、21528、21539、21532、21533、21526、21547、21585、21586、21587、21590、21592、21593、21594、21596、21598、21602、21614、21615、21664、21666、21667、21668、21707、21754、21764、21767、21808、21801、遺構一括、貯蔵一括、表土一括	煤付着
	57	土器集中3号	鉢	I-15	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR4/1 黒褐	7.5YR6/2 灰黄	ハケメ	磨ナデ ナデ	土器集中7-90	煤付着
	58	土器集中3号	壺	H-14.I-15	－	口縁部～頸部	－	○	○	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい橙	ミガキ	ナデ 指頭圧痕	集石35-51、集石41-9-40、土器集中7-2-37-63-82、20503、20560、20563、21359、21860、20525、20600、21007、21414、20730、21379、21553、22403	
	59	土器集中3号	壺	H-14.I-15	－	頸部	－	○	－	－	○	○	－	－	5YR4/4 にぶい赤褐	10YR3/1 黒褐	ナデ	ナデ	土器集中7-54、21365、21386、20800、21660	
	60	土器集中3号	壺	I-15	－	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR4/4 にぶい赤褐	ナデ ハケメ 刺目突帯	ナデ	土器集中7-91、21254	
	61	土器集中3号	壺	H-14.I-14・15-16	－	頸部～底部	－	○	○	○	－	○	○	酸化鉄	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい橙	工具ナデ ナデ		土器集中7-35、集石35-25、20504、21066、22215、22539	
	62	土器集中3号	壺	I-15	－	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR5/2 にぶい黄褐	5YR2/4 にぶい赤褐	ナデ	ヘラナデ	土器集中7-17	
	63	土器集中3号	高坏	I-15	－	坏部	－	○	－	○	○	○	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ハケメ	ナデ	土器集中7-7、20594	
	64	土器集中3号	高坏	I-15	－	脚柱部	○	○	－	○	－	－	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい橙	ミガキ	ヘラケズリ	土器集中7-12	
66	65	土器集中4号	壺	I-16	－	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ	工具ナデ	土器集中6-22、20428	
	66	土器集中4号	壺	I-16	－	口縁部	○	○	－	○	－	○	○	－	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	工具ナデ	工具ナデ	土器集中6-55	
	67	土器集中4号	壺	I-16	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	強度砂粒	7.5YR5/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ 刺目突帯	ナデ	土器集中6-2-102	煤付着
	68	土器集中4号	壺	I-16	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR4/2 褐	10YR5/3 にぶい黄褐	磨ナデ	磨ナデ ケズリ	土器集中6-36	
	69	土器集中4号	壺	I-16	－	口縁部	－	○	○	○	－	○	○	－	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	土器集中6-196-197-240-251-101-182	煤付着
	70	土器集中4号	壺 底部	I-16	－	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	指ナデ	指頭圧痕	土器集中6-84	
	71	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部～胴部	－	－	－	○	－	○	－	強度砂粒	7.5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	土器集中6-119	
67	72	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/6 明赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	工具ナデ	工具ナデ 指頭圧痕	土器集中6-41-94-95	
	73	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 にぶい黄橙	ミガキ ナデ	ナデ	土器集中6-128-129-140-142-151-153-162-167-176-183-185-186-187-188-189-190-191-192-193-194-195-244-248	
	74	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	○	小礫	2.5YR5/6 明赤褐	10YR6/2 にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	土器集中6-54-66-67-68-70-73-74-76-77-78-82-87-97-99-100-101-102-107-108-109-110-112-127-180-211-227-229-241-245-246-250-260	煤付着
68	75	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	ナデ 刺目突帯 磨製痕	指頭圧痕 ナデ	土器集中6-27	
	76	土器集中4号	壺	I-16	－	頸部	－	○	○	○	－	○	○	－	7.5YR4/3 褐	10YR5/2 灰黄褐	ナデ ミガキ	ナデ	土器集中6-141-199-200-201-239-242-242	煤付着
	77	土器集中4号	壺	I-16	－	底部	－	○	○	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 褐	ナデ 指頭圧痕		土器集中6-64	
	78	土器集中4号	壺	I-16	－	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/6 明赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ		土器集中6-111	
	79	土器集中4号	鉢	I-16	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	磨ナデ ハケメ	磨ナデ ナデ	土器集中6-51	
	80	土器集中4号	高坏	I-16	－	坏～脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ ミガキ 工具ナデ	ナデ ミガキ	土器集中6-112	
	81	土器集中4号	高坏	I-16	－	脚部	－	○	－	○	－		○	－	5Y4/1 灰	7.5YR4/1 褐灰	ミガキ	ナデ	土器集中6-42-43	
	82	土器集中4号	高坏	I-16	－	脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ミガキ	ナデ	土器集中6-59	
71	83	土器集中4号	高坏	H-15.I-16	－	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	土器集中6-89、21089	穿孔
	84	－	壺	G-16	－	頸部	○	○	－	○	－	○	○	－	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	ナデ		20466	
	85	－	壺	E-14.F-15	3	頸部	○	○	－	－	－	○	○	輝石	2.5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ		2022S20005	
	86	－	壺	F-14	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	磨ナデ ナデ	ナデ 指頭圧痕	20214	
	87	－	壺	F-15	－	口縁部	－	○	○	－	－	○	○	－	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR4/4 にぶい赤褐	磨ナデ ナデ	磨ナデ	20333	煤付着
	88	－	壺	E-14	－	口縁部	○	○	－	○	－	－	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ 指ナデ	指ナデ	20210	
	89	－	壺	F-15	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい橙	磨ナデ	磨ナデ	20271	
	90	－	壺	F-15	－	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ 刺目突帯	指頭圧痕	20233	
	91	－	壺	F-15	－	頸部	－	○	－	－	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ハケメ ナデ 刺目突帯		20331	
	92	－	壺	F-15.J-14	3	底部	－	○	○	－	－	－	－	シャモット	7.5YR5/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	20263、20362、表土一括	
	93	－	壺	F-15	－	底部	○	○	○	－	○	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR6/4 にぶい黄橙			20224	

第９表　Ｂ地点　土器観察表３

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器面	形態	角度	長形	口縁部	底部	胴部	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
71	94	－	縄文土器	F-15	－	口縁部	－	○	－		－	○	－	－	10YR4/1 褐灰	5YR4/1 灰	横ナデ	横ナデ	20269	
74	99	－	深鉢	I-14	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	貝殻条痕文	ナデ	23015	
75	100	－	深鉢	F-9-13	4,4a-5	胴部	○	○	－	○	－	－	－	－	2.5Y4/4 オリーブ褐	7.5YR5/3 にぶい褐		ナデ	54616,49372	
	101	－	深鉢	F-14	4	胴部	○	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR4/2 灰褐	10YR4/2 灰黄褐			20747,20748,20961	
	102	－	深鉢	I-14	4a-3	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ	指頭圧痕 横ナデ	24146	
	103	－	深鉢	I-16	4a-2	口縁部	○	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	横ナデ	横ナデ	22971	
	104	－	深鉢	E-12	4	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	－	○	輪形	7.5YR4/1 褐灰	10YR4/1 褐灰	横ナデ ナデ	ナデ	19286,19744	
	105	－	深鉢	E-12	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR4/1 褐灰	10YR5/3 にぶい黄褐	ミガキ ナデ	ナデ	19685	
	106	－	深鉢	D-13	4	胴部	○	○	○	○	－	－	○	－	7.5YR5/2 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	ナデ	ナデ	7292	
	107	－	深鉢	C-10	4	底部	－	○	－	○	－	○	－	脚化鼎	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR4/2 灰黄褐		ナデ	19645	木葉痕
78	108	－	深鉢	G-13	4	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	5YR4/3 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	横ナデ	横ナデ	48316	
	109	－	深鉢	H-13	4	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y4/2 暗灰黄	横ナデ	横ナデ	51233	
	110	－	深鉢	D-11	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR4/1 褐灰	10YR4/2 灰黄褐	ナデ	横ナデ	19651	
	111	－	深鉢	J-15	4a-3	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR2/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	23468	
	112	－	深鉢	I-14	4a-2	口縁部	－	○	－	○		○	－	－	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ナデ	23718	
	113	－	浅鉢	H-14	4	口縁部～胴部	－	○	－	－	○	○	－	－	10YR3/1 黒褐	2.5Y3/1 暗赤灰	ミガキ	ミガキ	21304,20540,20551	
	114	－	浅鉢	J-15	4a-3	口縁部～胴部	－	○	－	－	－	－	－	－	5YR3/1 黒褐	2.5Y3/1 暗赤灰	ミガキ	ミガキ	23630,23631	煤付着
	115	－	浅鉢	H-14	4	胴部	－	○	－	○	○	○	○	－	2.5Y2/2 極オリーブ黒	7.5YR4/2 灰褐	ミガキ	ミガキ	20965	
	116	－	浅鉢	I-14	4a-3	口縁部～胴部	－	○	－	－	○	－	－	－	5Y4/1 暗灰黄	10YR3/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	24260	
	117	－	浅鉢	F-16	4	胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR3/1 黒褐	ナデ ケズリ	ミガキ	20416	
79	118	－	深鉢	J-15	4a-3	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	－	○	－	10YR4/2 灰黄褐	2.5YR4/1 黄灰	ケズリ ナデ 貝殻条痕	貝殻条痕	23533,23534,23535,23536,23537,23591,23592,23594	
	119	－	深鉢	H-14	4a-3	口縁部～胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR5/4 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	23484,23422,23483,23485	
	120	－	深鉢	D-10-11, E-10	4	口縁部～胴部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	2.5Y4/1 黄灰	ケズリ ナデ	貝殻条痕 ナデ	19515,19557,19655,19556, ガ間一括	
	121	－	深鉢	D-10-11	4	口縁部	－	○	－	○	○	－	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/1 褐灰	貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	19372,19671	
	122	－	深鉢	E-11	4	口縁部～胴部	－	○	－	○	○	－	－	－	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	横ナデ	横ナデ	19692,19673,19869	
	123	－	深鉢	H-14	4a-2-3	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR3/1 黒褐	10YR2/1 黒褐	横ナデ	横ナデ	22604,23410	
	124	－	深鉢	D-11,D-10	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR4/3 灰褐	2.5Y4/1 黄灰	貝殻条痕文	ナデ	19675, ガ間一括	
	125	－	深鉢	E-11-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR3/1 黒褐	N2/0 暗灰	貝殻条痕文 横ナデ	ミガキ	19638, ガ間一括	
	126	－	深鉢	D-11	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	－	－	10YR4/1 褐灰	10YR2/3 にぶい黄褐	ナデ 指ナデ	ナデ	19655,19634	
	127	－	深鉢	D-10	4	口縁部～胴部	○	○	－	○	－	○	○	－	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒褐	ナデ 貝殻条痕文	横ナデ	19794,19855	
	128	－	深鉢	F-12	4,4a	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR2/1 黒褐	N3/0 暗灰	ミガキ	ミガキ	52411, ガ間一括	
	129	－	深鉢	F-12-13	4	口縁部	－	○	－	○	○	－	－	－	10YR3/1 黒褐	10YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	51107,49358,49681	
80	130	－	深鉢	E-12	4	口縁部	○	○	－	○	○	○	－	－	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐	横ナデ 指頭圧痕	ナデ	19537,19561,19706	
	131	－	深鉢	D-10	4	胴部	－	○	－	○	○	○	○	－	10YR3/1 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	19656,19657	煤付着
	132	－	深鉢	C-10	4	胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR2/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	ナデ 細縄痕	ナデ	19621	煤付着
	133	－	鉢	I-15	4a-3-4	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	N3/0 暗灰	10YR2/1 黒褐	ミガキ 横ナデ	ミガキ	23573,23453	
	134	－	鉢	I-15	4	口縁部	－	○	－	－	○	－	○	－	10YR3/1 黒褐	10YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	22466	
	135	－	鉢	I-15	4a-3	口縁部	－	○	－	○	－	－	○	－	5YR4/2 灰褐	10YR4/2 灰黄褐	ミガキ	ミガキ	23769	
	136	－	浅鉢	E-10	4	口縁部	－	○	－	○	－	○		－	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/1 褐灰	横ナデ	ミガキ	18624,18863	煤・コゲ付着
	137	－	浅鉢	F-12	4a-3	口縁部～胴部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	貝殻条痕文 横ナデ ナデ	ミガキ	53352	
	138	－	浅鉢	J-15	4a-3	口縁部～胴部	－	○	○	○	－	○	－	－	10YR3/1 黒褐	7.5YR4/3 褐	横ナデ	ミガキ	23632	煤付着
	139	－	浅鉢	D-11	4	胴部	○	○	－	○	－	－	－	－	2.5Y3/1 黒褐	7.5YR4/3 褐	貝殻条痕文		19596,19618,19920	
	140	－	浅鉢	E-11	4	胴部	－	○	－	○	○	○	○	小鉢	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ミガキ	19636,19615,19800,19753,20604	
81	141	－	浅鉢	H-14	4,4a-2-3	口縁部～胴部	－	○	－	－	－	－	○	－	5YR4/2 灰褐	10Y3/2 オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	22537,23663,23546,21196,22135,20466,23409, ガ一括	
	142	－	浅鉢	H-14	4a-3	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR2/1 暗赤褐	5YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	22678	
	143	－	浅鉢	H-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	2.5Y4/3 赤灰	10Y3/1 オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	ガ間一括	
	144	－	浅鉢	H-14	4a-3	口縁部	－	○	－	－	－	○	－	－	7.5YR4/1 褐灰	10YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	22407	
	145	－	浅鉢	H-14	4,4a-3	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	ミガキ	ミガキ	21442,22870	
	146	－	浅鉢	I-15	4a-3	口縁部	－	○	－	－	－	－	－	－	7.5YR4/1 褐灰	10YR2/1 黒褐	ミガキ 赤彩文	ミガキ	23694	

第10表　B地点　土器観察表４

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	胎土							色調		調整・太様		取上番号	備考
							雲母	石英	角閃石	長石	白石	赤色粒	黒色粒	その他	外面	内面	外面	内面		
81	147	—	浅鉢	1-14	4a-3	口縁部	—	○	—	○	—	—	—	黒褐石	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 褐	ミガキ 横ナデ	ミガキ	23751	
	148	—	深鉢	B-12,H-13	4	口縁部	○	○	○	○	○	—	—	—	10YR4/1 褐灰	2.5YR4/1 黄灰	ミガキ	横ナデ	49140,52527	
	149	—	深鉢	E-11, I-15	4	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ケズリ	横ナデ	19753,21760	煤付着
	150	—	浅鉢	1-15	4a-3	口縁部	—	○	—	○	—	○	—	—	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR4/3 褐	ミガキ	ミガキ	BV a-3類一括	
	151	—	浅鉢	H-14	4a-3	口縁部	—	○	—	○	—	—	○	—	5YR4/1 褐灰	10YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	23635	
	152	—	浅鉢	1-16	4	口縁部突起	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR3/4 にぶい褐	10YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	22343	
	153	—	浅鉢	F-13	4	口縁部突起	—	○	—	○	—	○	—	—	10YR5/2 灰黄褐	5Y4/1 黄灰	ナデ	横ナデ	47631	
	154	—	浅鉢	1-14	4	口縁部突起	—	○	—	○	—	○	—	—	10YR2/1 黒褐	5Y2/1 オリーブ黒	ミガキ	ミガキ	22141	
	155	—	浅鉢	F-13,H-1-14, I-15	4, 4a-2-3	胴部	—	○	—	○	—	○	○	—	2.5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/2 にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ	24445,21495,21966,53362, BV a-2類一括	
	156	—	浅鉢	1-15	4a-2-3	胴部	○	○	—	—	—	—	○	—	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/2 灰黄褐	ミガキ	ミガキ	23596,23615, BV a-2類一括, BV a-3類一括	
	157	—	浅鉢	H-14	4, 4-2	口縁部～底部	—	○	—	—	—	○	○	—	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/3 にぶい赤褐	ミガキ	ミガキ	21213,24102,23571,23636,23637, 53136	マリ刻
	158	—	浅鉢	J-15	4a-3	胴部	—	○	—	—	—	○	○	—	10YR3/1 黒褐	7.5YR2/2 黒褐	ミガキ	ミガキ	23464,23386,23541	
	159	—	浅鉢	E-12	4	口縁部～胴部	—	○	—	○	○	—	—	—	2.5YR4/2 暗灰黄	7.5YR5/2 灰黄褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	19465,19391,19208	マリ刻
	160	—	浅鉢	E-F-11	4	口縁部～胴部	—	○	—	—	—	—	○	—	2.5YR4/1 黄灰	10YR4/1 褐灰	ミガキ	ミガキ	19208,19692,19870,19838,19910, 19871,19893,19872	マリ刻
	161	—	浅鉢	D-10	4	口縁部	—	○	—	—	○	—	—	—	10YR3/1 黒褐	2.5YR4/2 暗灰黄	ミガキ	ミガキ	19669	マリ刻
	162	—	深鉢	F-11	4	口縁部	○	○	—	○	—	—	—	—	7.5YR4/1 灰	5YR4/3 にぶい赤褐	ケズリ ナデ	ケズリ ナデ	50703	
82	163	—	浅鉢	J-14-15	4a-2-3	胴部～底部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR5/3 にぶい褐	褐褐色 ケズリ ミガキ	褐褐色 ケズリ ミガキ	ヘラミガキ	3596,23285,23439,23472,23474, 23504,23538,23549,23542,23543, 23586,23791,23264,ka-2類一括	
	164	—	鉢	H-1-14	4, 4a-3	胴部	—	○	—	○	—	○	—	—	5YR5/2 灰褐	10YR5/3 にぶい黄褐	褐褐色 ケズリ	ミガキ	22409,23567	
	165	—	鉢	I-14	4a-2	胴部	—	○	—	○	—	○	—	—	10YR5/2 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐	褐褐色	ナデ	23281	
	166	—	深鉢	F-13	4	口縁部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR4/2 灰褐	5YR4/3 にぶい赤褐	横ナデ	横ナデ	21943	
	167	—	深鉢	I-14-15, J-15	4, 4a-2	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	23072,22424,21725	
	168	—	浅鉢	F-12	4, 4a, 4a-2	口縁部～底部	○	—	○	○	○	○	—	強度小穴	7.5YR5/3 にぶい褐	N2/0 暗灰	横ナデ 横褐色	ミガキ	52417,52418,52559,54640,49662, 53263,52419,53354	
	169	—	浅鉢	F-12	4, 4a-3	口縁部～胴部	—	○	○	○	—	—	黒色粒	2.5YR4/1 黄灰	10YR2/1 黒褐	強度圧痕 横ナデ	横ナデ	ミガキ	51299,53356,53357, BV類一括	
	170	—	浅鉢	F-12	4, 4a-2	口縁部～胴部	—	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	横ナデ	ミガキ	51296,53356,54642	
	171	—	壺	I-14	4a-3	胴部	—	○	—	—	—	○	—	強度小穴	10YR2/1 黒褐	7.5YR4/4 褐	横ナデ 刻目突帯	ナデ	23696	煤付着
83	172	—	深鉢	J-15	4b	底部	—	○	—	○	—	○	—	—	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	23753	煤付着
	173	—	深鉢	G-13	4	底部	—	○	○	○	—	○	○	—	7.5YR4/4 にぶい褐	10YR4/1 黒褐	ナデ	ナデ	49279	
	174	—	深鉢	H-14	4a-3	胴部～底部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y4/3 オリーブ褐	ナデ	ナデ	23629,23697	煤・コゲ付着
	175	—	深鉢	H-1-13	4	底部	—	○	○	○	○	○	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	ナデ	指頭圧痕	49107,49692	
	176	—	深鉢	H-14	4	底部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR5/2 にぶい黄褐	貝殻条痕文 ナデ	ナデ	22923,21214	
	177	—	深鉢	H-1-14	4a-3	底部	○	○	—	○	○	—	—	—	7.5YR4/1 褐灰	10YR4/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	22698,23566	
84	178	—	壺	C-10,E-F-12	4	頸部～胴部	—	○	—	—	—	○	○	—	5YR5/4 にぶい赤褐	10YR5/1 褐灰	工具ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	6769,21781,18320,47739,47851, 47598,47853,47854,—類	
	179	—	壺	E-11	4	胴部～底部	—	○	○	○	—	○	—	—	5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ミガキ	ナデ	19698,20000	
	180	—	壺	I-13	4	頸部	—	○	—	○	—	○	○	小穴	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐			49698	
	181	—	壺	D-10	4	底部	—	○	○	○	—	○	—	—	5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ	ナデ	19604	
	182	—	鉢	B-14	1, 4	口縁部	—	○	—	○	—	○	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/4 にぶい褐	横ナデ	横ナデ	20624,青土一括	
	183	—	壺	D-11	4	頸部	—	○	—	—	—	○	○	—	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	ナデ	横ナデ	19214	煤付着
	184	—	壺	H-14	4	頸部～胴部	—	○	○	○	—	○	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	22020	
	185	—	ミニチュア	I-15	4	底部	○	○	—	○	—	—	○	—	10YR5/2 黄褐	10YR4/2 灰黄褐	指頭圧痕 ナデ		20692	
85	186	—	壺	B-10-11, E-11-12, E-14	2, 4	口縁部～胴部	—	○	○	○	—	○	○	—	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR4/2 灰褐	ヘラナデ ナデ 指頭圧痕	横ナデ 指頭圧痕	6364,11015,17013,17080,18554,18656, 18713,18714,18750,18797,19798,18802, 18881,18920,18896,19011,19012,19013, 19014,19016,19052,19053,19054,19151, 19247,19392,20196, BV類一括	煤付着
	187	—	壺	I-15	4a-2	口縁部	○	○	—	—	—	—	○	—	5YR6/6 橙	10YR5/2 灰黄褐	ハケメ ナデ	工具ナデ ナデ	22642	
	188	—	壺	J-15	4	口縁部	—	○	—	○	—	—	○	—	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ	20921	
	189	—	壺	B-10-11, E-11	4	口縁部～胴部	—	○	○	—	○	○	○	—	7.5YR4/3 褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	19654,19669,19692,19704	煤付着
	190	—	壺	B-10, E-11, H-14	4	口縁部～胴部	—	○	○	—	○	○	○	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ハケメ 刻目突帯	横ナデ ハケメ	SK101-1-3, 18474,18475,18663,19040,19137,19201, 19401,19566,19568,19679,19680,21058, BV類一括	
	191	—	壺	B-10	4	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	19096	

第11表　B地点　土器観察表５

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	面							色調		調整・文様		取上番号	備考
							口縁	底	角・口	底・口	内面	胴・底	その他	外面	内面	外面	内面		
86	192	－	壺	C-9-10	3, 4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ ナデ	ナデ	4376, 19135, 19723	北縁
	193	－	壺	C-9-10	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/2 灰黄褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	19713, 19715	北縁
	194	－	壺	F-12	4	頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	ハケメ 指ナデ ナデ 沈線装飾	工具ナデ ハケメ	49866	
	195	－	壺	I-14	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ 刺目装飾	ナデ 指頭圧痕	21944	
	196	－	壺	J-15	4, 4a-2	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	20918, 21724, 22946, 22948, 22979, 23070	煤付着
	197	－	壺	J-15	4a-2	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	22985, 21522	
	198	－	壺	G-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ 刺目装飾	ナデ	45066	
	199	－	壺	E-11	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰	ナデ 刺目装飾	ナデ 指頭圧痕	19117	
	200	－	壺	F-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ	49132	
	201	－	壺	J-16	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR4/2 灰褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ	21571	煤付着
	202	－	壺	F-12	4	口縁部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	47601, 49813	
	203	－	壺	F-12	4	頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	ナデ 指頭圧痕	49356, 49499	
	204	－	壺	I-9-13	4, 4a	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR6/3 にぶい褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ 指ナデ ナデ	47091, 50025	
87	205	－	壺	J-15-16	4	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	工具ナデ 指頭圧痕 刺目装飾	工具ナデ 指頭圧痕	20432, 20920, 20923, 21049, 27432	煤付着	
	206	－	壺	I-15	4	口縁部	－	○	○	○	－	○	○	－	10YR2/1 黒褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ 刺目装飾	工具ナデ	20794	煤付着
	207	－	壺	D-10	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR3/1 黒褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ 刺目装飾	ナデ 指頭圧痕	19246	煤付着
	208	－	壺	I-14	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ 刺目装飾	ナデ	23137	
	209	－	壺	I-15	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ミガキ 橙ナデ	橙ナデ	20870, 20969, 20969, 20967	煤付着
	210	－	壺	F-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR3/2 暗赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ 刺目装飾	ナデ	47658, 48655	煤付着
	211	－	壺	D-11	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ 刺目装飾	ナデ	17075	
	212	－	壺	F-12	4	口縁部	－	○	○	－	－	○	○	薄彩	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	49616, 49517, 49618, 49665, 一括	煤付着
88	213	－	壺	F-12-13	4	口縁部～頸部	－	○	－	○	○	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	橙ナデ 刺目装飾	ナデ	49646, 49651, 49652, 49805, 49407, 47717, 47718, 49554	
	214	－	壺	F-12-13	4	口縁部	－	○	－	○	－	－	○	輪形痕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	指頭圧痕 ナデ 刺目装飾	指頭圧痕 ナデ	46258, 46597, 47630	煤付着
	215	－	壺	E-F-12	4	口縁部	－	○	○	－	○	○	○	－	7.5YR4/3 褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ	17594, 46367, 19668, 46373, 46654, 46397, 18706	
	216	－	壺	D-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	工具ナデ ナデ 刺目装飾	工具ナデ 指頭圧痕	18737, 18738	
	217	－	壺	C-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい褐	刺目装飾	ナデ	17590, 17896	煤付着
89	218	－	壺	D-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	斜色痕	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ	指頭圧痕 ナデ	18466, 18120	
	219	－	壺	I-15	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR5/4 にぶい黄褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ハケメ ナデ	ナデ 指頭圧痕	21261	
	220	－	壺	G-13	4a-3	頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR4/4 にぶい褐	ハケメ ナデ	ナデ	52438	煤付着
	221	－	壺	I-15	4	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	ハケメ 工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	22196	
	222	－	壺	J-15	4a-2	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	5YR4/3 にぶい赤褐	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	22973, 23033	
	223	－	壺	H-13	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ	ナデ 指ナデ	53331, 53334, 53337, 53338	
	224	－	壺	E-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	輪郭痕	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	工具ナデ 刺目装飾	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	18205	
	225	－	壺	G-15-17	1	頸部	－	○	○	－	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	工具ナデ	ナデ 指頭圧痕	表土一括	
	226	－	壺	J-14	4a-2	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい褐	工具ナデ ミガキ ナデ	ナデ	23561, 22828, 22829, 22837, 一括	
	227	－	壺	D-10	4	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 にぶい褐	工具ナデ 指ナデ	ナデ 指ナデ	19272, 19273	
	228	－	壺	H-14	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	シャモット	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	工具ナデ	ナデ	20869	
	229	－	壺	C-10	4	頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐		ナデ	18902	

第12表　B地点　土器観察表６

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	胎土							色調		調整・文様		取上番号	備考
							雲母	石英	角閃石	長石	白石	黒色粒	赤色粒	その他	外面	内面	外面	内面		
89	230	－	壷 SB 跡	C-9-10	4	脚部	－	○	－	○	－	－	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR6/3 橙	工具ナデ	工具ナデ	17970, 17783, 17977	
	231	－	壷	F-11	4a-1	脚部	－	○	○	○	－	－	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	10YR6/2 灰黄褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	47130	
	232	－	壷	G-13	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR4/2 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	49086	
	233	－	壷	F-12	4	脚部	－	○	○	○	－	○	－	－	10YR5/2 にぶい黄褐	7.5YR4/3 褐	工具ナデ	ナデ	49048	
	234	－	壷	E-12	4	脚部	－	○	○	○	○	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/3 浅黄橙	指ナデ	ナデ	18270	
	235	－	壷	E-12	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	強発泡 地	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	ナデ	ナデ	19033	
	236	－	壷	F-12	4	脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	49085	
	237	－	壷	D-10	4	脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR4/3 にぶい赤褐	5YR4/2 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	17945	
90	238	－	壺	F-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	－	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ	指ナデ	47645	
	239	－	壺	D-11	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	横ナデ	横ナデ	18635	
	240	－	壺	E-14	4	口縁部	○	－	－	－	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ	ナデ	17145	
	241	－	壺	J-15	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	22170	
	242	－	壺	G-13	4	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ハケメ	指頭圧痕 ナデ	50030, 50031	
	243	－	壺	G-9-13-14	4	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	－	黒曜石	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ハケメ	指頭圧痕 ナデ	49170, 49301, 22220	
	244	－	壺	I-15-16	4	胴部	－	○	－	○	－	○	○	沸石	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ 刷目突帯	ナデ	20439, 20599, 21710, 22406, 22477	
	245	－	壺	D-E-11	4	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR4/3 褐	7.5YR4/3 褐	ハケメ ナデ 刷目突帯	ナデ 指頭圧痕	18614, 18621, 18311, 19312	煤付着
	246	－	壺	C-10-D-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ 指ナデ	工具ナデ 指ナデ	18745, 18746, 18795, 18807, 18808, 18815, 18916, 19046	
	247	－	壺	G-13-14	4	胴部	－	○	－	○	－	○	○	輝石	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ハケメ ナデ	工具ナデ	49076, 49413, 49414, 51215, 51219	
	248	－	壺	I-14-15	4	頸部～胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ	ナデ 指頭圧痕	21595, 21656, 21835, 22151	鉢類底
91	249	－	壺	B-F-12 G-H-1-12 H-1-14, I-15	1, 4, 4a 4a-2-3	胴部～底部	－	○	－	○	○	○	○	輝石 シャモット	7.5YR5/6 明赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ハケメ ナデ 刷目突帯	ナデ	20470, 20472, 21459, 21642, 21659, 22532, 22917, 47999, 52466, 52468, 52470, 52472, 52473, 52480, 52487, 52800, 53339, 53335, 原土一括 4層一括，ガ～J層一括 ガ～J層一括	厚孔
	250	－	壺	D-11	4	頸部	－	○	－	－	－	－	○	強発泡 地	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ 刷目突帯	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	一括	
	251	－	壺	F-12	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	2.5YR5/6 明赤褐	工具ナデ	工具ナデ ナデ	49676	
	252	－	壺	F-12 G-12-13 H-12, I-14	4	口縁部～頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/3 橙ナデ	ハケメ 橙ナデ	橙ナデ 指頭圧痕	21463, 49271, 49401, 49645, 49646, 49654, 50495, 50749, 50828, 50830, 50831, 51254	
	253	－	壺	D-9	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	シャモット 黒曜石	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	19253	
	254	－	壺	I-16	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	10YR4/2 灰黄褐	工具ナデ ナデ 刷目突帯	工具ナデ ナデ	22427	
	255	－	壺	F-12, D-10 D-11, D-12	4	頸部	○	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ミガキ ハケメ	ハケメ	49404, 18968, 19249, 原土一括	
	256	－	壺	I-15-16	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ 指頭圧痕	工具ナデ 指頭圧痕	22164, 22369, 22396	
	257	－	壺	H-14	4	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR5/3 にぶい橙	ハケメ ナデ 刷目突帯	ナデ	21079	
	258	－	壺	D-E-11	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	沸石	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ミガキ 工具ナデ ナデ	工具ナデ	19114	
	259	－	壺	H-12-14	4	底部	－	○	－	－	－	○	－	－	2.5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ハケメ	ハケメ	51202, 52513, 50058, 49614, 52514, 52526, 21438	赤色顔料
	260	－	壺	I-15	4	底部	○	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR4/4 褐	5YR5/4 にぶい赤褐		工具ナデ	21734	煤付着
	261	－	壺	G-13, H-14	4	胴部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	2.5YR7/1 黒灰	工具ナデ ミガキ	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	51223, 21640, 50023, 50024, 52435, 49640	赤色顔料
	262	－	壺	H-13	4	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	工具ナデ	工具ナデ	49434	
	263	－	壺	I-15	4	底部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/3 橙	工具ナデ	工具ナデ	21531	
	264	－	壺	H-14	4	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ミガキ	ナデ	20885	
	265	－	壺	I-15	4	底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	工具ナデ	ナデ 工具ナデ	21360	
	266	－	壺	E-F-12, G-13	3, 4	胴部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	工具ナデ	17865, 49375, 19967, 47738, 47759, 49625, 49653, 47852, 47859, 49869, 47733, 47876, 47902	
	267	－	壺	H-13	4	底部	－	○	○	－	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	52547	
	268	－	壺	I-14	4	底部	○	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	20553	
	269	－	壺	C-10	4	底部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ミガキ	指ナデ ナデ	19670, 19822	
	270	－	壺	D-9	4	底部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	工具ナデ	工具ナデ	6789	

第13表　B地点　土器観察表７

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器面	形成	角閃石	長石	白石英	黒色粒	赤色粒	その他	胎土	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
02	271	－	壺	B-12	4	遺跡	○	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい橙	指ナデ ナデ	指ナデ	7327	器種
	272	－	壺	B-10	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	○	雲母破砕粒	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR4/3 褐	ハケナデ	ハケナデ	16962	
	273	－	壺	J-15	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	○	雲母破砕粒	7.5YR5/3 にぶい橙	7.5YR4/2 灰褐			22465	
03	274	－	高坏	F-12, G-13	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 橙	ナデ	ナデ	49650	角閃石・黒色粒
	275	－	高坏	G-14	4	口縁部	○	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 浅黄橙	10YR6/4 浅黄橙	ナデ	ナデ	20531	
	276	－	高坏	G-9	4	坏部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	19044	
	277	－	高坏	I-16	4	坏部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ ミガキ	20430	
	278	－	高坏	C-10	4	坏部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ	ナデ ミガキ 指頭圧痕	19721	
	279	－	高坏	H-14-15	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	20870, 21237	
	280	－	高坏	C-9	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ 指頭圧痕	工具ナデ	19496	
	281	－	高坏	I-15-16	4, 4a-2	坏部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ミガキ ナデ	ナデ	22170, 22712, 22713, 22429, 22433	
	282	－	高坏	B-13	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	－	－	2.5YR5/6 明赤褐	7.5YR4/4 にぶい橙	ミガキ	ナデ ミガキ	49699	
	283	－	高坏	E-10	4	坏～脚部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙			18214	
	284	－	高坏	H-14	4	坏～脚部	－	○	○	－	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	20648	
	285	－	高坏	H-14, I-16	4, 4a-2	脚部	○	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/6 褐	ナデ 指頭圧痕	工具ナデ ナデ	22636, 22194	穿孔
	286	－	高坏	E-11	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	2.5YR5/6 明赤褐	10YR5/2 灰黄褐 7.5YR2/2 黒褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	17056	
	287	－	高坏	I-14	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	ミガキ	ナデ	21960	穿孔
	288	－	高坏	H-14	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR6/4 にぶい赤褐	5YR4/3 にぶい赤褐	ナデ	工具ナデ	21118, 21297	穿孔
	289	－	高坏	I-14	4	脚部	○	○	－	○	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR4/2 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	20890	穿孔
	290	－	高坏	E-14	4	坏～脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5YR4/4 にぶい赤褐	2.5YR4/1 赤灰	工具ナデ ミガキ	ミガキ 工具ナデ 指頭圧痕	17148	赤色顔料
	291	－	高坏	J-15	4	脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR4/4 にぶい橙	5YR4/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	20816	
	292	－	高坏	H-13, I-15	4	脚部	－	○	○	○	－	○	－	－	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/4 にぶい橙	ミガキ	ナデ	22373, ー括	
	293	－	高坏	E-11-12	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ ナデ	ナデ	18213, 18268, 18412, 19182	
	294	－	高坏	H-13	4	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/3 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	52450, 51287, 52462	
	295	－	高坏	E-11	4	脚部	○	○	－	○	－	○	－	－	2.5YR4/4 にぶい赤褐	10YR4/1 褐灰	ナデ	ナデ	17249	
04	296	－	鉢	C-9	4	口縁部	－	－	－	○	－	－	○	海石	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR5/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ 刻目突帯	工具ナデ ナデ	18500, 19796	煤付書
	297	－	台付鉢	G-12, H-13	4	脚部～底部	－	○	－	－	○	○	○	小礫 黒色粒	2.5Y4/1 黄灰	10YR4/2 灰黄褐	指ナデ	ナデ	47814, 47815, 49130	
	298	－	深鉢	F-10	4	遺跡	○	○	－	○	－	○	－	－	10YR4/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ 指ナデ	ナデ	21945	煤付書
	299	－	小型丸底壺	F-12	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	横ナデ	ナデ	48611	
	300	－	小型丸底壺	E-10	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ ナデ	横ナデ	18874	
	301	－	壺	F-13	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	49029	
	302	－	壺	B-11, E-11	4	口縁部付近～頸部	－	○	－	－	○	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい橙	10YR5/4 にぶい黄橙	ハケナデ ミガキ	ナデ	18696, 18814, 19058, 19465	
	303	－	壺	C-10	4	口縁部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/2 灰褐	ナデ ミガキ	ナデ 指頭圧痕	19469	
	304	－	小型丸底壺	C-10	4	口縁部	○	－	○	－	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい橙	横ナデ ミガキ	横ナデ	19469	
	305	－	壺	F-13	4	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 明橙	横ナデ ミガキ	横ナデ ミガキ	47618	煤付書
	306	－	壺	D-10	4	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR6/4 にぶい赤褐	5YR6/4 にぶい赤褐	ナデ	ナデ	17909	
	307	－	小型丸底壺	I-14	4, 4a-2	頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	ハケメ ナデ	ナデ	21483, 24885, ー括	
	308	－	壺	G-12, H-12-13	3, 4, 4a	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙 5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ ケズリ	ナデ	52522, 50047, 47112, 37原一括	
	309	－	壺	E-11	4	頸部～肩部	－	○	○	－	○	－	－	－	7.5YR4/1 褐灰	5YR5/4 にぶい赤褐	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	18464, 18939	煤付書
	310	－	壺	I-14, J-15	4	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	○	－	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	22177, 21746	
	311	－	壺	E-12	4	遺跡	－	○	○	○	－	○	－	－	10YR5/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	ナデ	ナデ	18280	
	312	－	壺	C-11	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	工具ナデ	ナデ	17552	
	313	－	壺	D-10	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	－	－	N3/0 暗灰	7.5YR6/3 にぶい橙	ミガキ	ナデ	18997	
	314	－	壺	B-13	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ		47787	
	315	－	壺	D-10	4	遺跡	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	ハケメ	ナデ	18853	

第14表　B地点　土器観察表８

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	面						色調		調整・文様		取上番号	備考
							口縁部	底部	角度	長石	白石	黒色粒	赤色粒	その他	外面	内面	外面	内面		
94	316	—	ミニチュア	I-13	4	胴部	—	○	—	○	—	○	○	—	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ミガキ	ナデ	49701	
	317	—	手捏ね	F-12	4	底部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ミガキ	ナデ	48387	
	318	—	甕	E-F-13	3.4	底部	—	○	—	○	○	—	—	—	5YR4/6 赤褐	10YR2/2 黒褐	ミガキ ナデ	ナデ	17805,48288	
	319	—	甕	D-9	4	底部	—	○	○	○	—	○	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	工具ナデ	ナデ	6792	
95	320	—	壺	C-10-11, B-11	4	口縁部～胴部	—	○	—	—	—	○	○	シャモット	10YR3/4 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ハケメ 横ナデ	ハケメ ヘラケズリ ナデ	18569,18472,18022,37置一括	
	321	—	壺	C-10, D-11, G-3	4	頸部～胴部	—	○	—	—	—	○	○	—	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5YR6/4 にぶい橙	ナデ ハケメ	ナデ ヘラケズリ	19523,50029,6763	
	322	—	壺	I-15-16	4	口縁部	○	○	—	○	—	○	—	シャモット	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	横ナデ	指頭圧痕 ナデ	21661,21574,37置一括	
	323	—	壺	F-11,G-12	4	胴部	—	○	—	—	—	○	○	シャモット	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ハケメ	工具ナデ	50637,一括	
	324	—	壺	I-15-16	4	頸部～胴部	—	○	—	—	—	—	○	シャモット	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	21544,22340,22085	
	325	—	壺	I-15	4	胴部	—	○	—	—	—	—	○	シャモット 雲母小礫	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ハケメ ナデ	工具ナデ	20664,21173,21242	
	326	—	壺	H-15	4	底部	—	○	○	○	—	○	○	—	7.5YR6/3 にぶい橙	2.5GY1/1 緑オリーブ灰	ナデ	ナデ	20753	
	327	—	壺	B-10	4	底部	—	○	—	○	—	—	—	シャモット 雲母小礫	10YR5/3 にぶい黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	ナデ		19731	
96	328	—	坩	I-14	4a-2	胴部～底部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR4/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	ナデ	ナデ	22842	黒色土器
	329	—	坩	E-12	4	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR6/4 にぶい橙	2.5Y5/3 暗灰黄	横ナデ	ナデ ミガキ	18326	黒色土器
	330	—	坩	E-12	4	口縁部～底部	—	○	—	○	—	○	—	砂粒	10YR5/3 にぶい黄褐	5YR4/4 にぶい赤褐		ミガキ	37置一括	
	331	—	坏	B-11	4	完形品	—	○	—	—	—	○	○	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	18801	赤彩・線彩・赤色土顔料
	332	—	大壺	E-12	4	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5YR4/2 灰褐	2.5YR4/1 黒灰	横ナデ	横ナデ	7268	
	333	—	坩	E-10	4	底部	—	—	—	—	—	—	—	—	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y6/2 灰黄		ケズリ	6339	
108	409	—	深鉢	F-16	1,3	口縁部～胴部	—	○	—	○	—	○	○	—	5YR5/3 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	工具ナデ ナデ 指頭圧痕	20116,黒土一括	煤付着
	410	—	深鉢	F-16	3	口縁部～胴部	—	○	—	—	—	○	○	小礫 水晶	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ハケメ ナデ	横ナデ ナデ	20128	
	411	—	深鉢	F-16	3	口縁部	—	○	—	—	○	—	○	—	5YR4/4 にぶい赤褐	7.5YR4/2 灰褐	貝殻条痕文	横ナデ	20178,20132	
	412	—	浅鉢	F-14	3	口縁部～胴部	—	○	—	○	○	○	○	—	10YR3/1 黒褐	7.5YR4/2 灰褐	横ナデ	横ナデ	20190	
	413	—	浅鉢	F-16	3	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	10YR5/2 にぶい黄褐	10YR6/2 灰黄褐	横ナデ	横ナデ	20163	
	414	—	浅鉢	F-17	3	口縁部～胴部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR4/3 褐	10YR4/1 褐灰	横ナデ ケズリ	ミガキ	21872	
	415	—	浅鉢	E-14	3	口縁部	—	○	—	○	—	—	○	—	7.5YR4/2 褐	2.5YR5/4 にぶい褐	ミガキ	指頭圧痕 ナデ	17269	
	416	—	深鉢	I-13	3	口縁部	—	○	—	○	○	○	—	—	10YR 4/2 灰黄褐	10YR4/3 にぶい黄褐	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	46507	
	417	—	壺	F-13	3	口縁部	○	○	○	—	○	—	—	—	7.5YR5/2 にぶい褐	7.5YR4/4 にぶい褐	横ナデ	横ナデ	46236,46254	
	418	—	壺	F-17	3	胴部	○	○	—	○	○	—	—	輝石	2.5YR4/4 褐	5YR4/4 にぶい赤褐	ナデ		21942	
	419	—	壺	I-16	3	口縁部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	32置一括	
	420	—	壺	F-14	3	口縁部～胴部	—	○	○	○	—	○	—	—	7.5YR4/2 灰褐	5YR5/8 明赤褐	工具ナデ 指ナデ	工具ナデ	20203	煤付着
	421	—	壺	I-14	3	口縁部	—	○	○	—	—	—	○	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	ナデ 刻目突帯	工具ナデ	20296	
	422	—	壺	F-16-15	3	胴部	○	○	—	○	○	○	—	黒曜石	5YR5/4 にぶい赤褐	2.5Y6/1 黄灰	工具ナデ ナデ 刻目突帯	工具ナデ ナデ 指ナデ	20186,20337	
	423	—	壺	F-15	3	底部	○	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	工具ナデ	指ナデ ナデ	20056,20049	
	424	—	高坏	F-16	3	坏部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	20072	
	425	—	高坏	I-14	3	坏～脚部	—	○	—	○	—	○	—	—	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	20277	
	426	—	高坏	B-11	3	坏部	○	○	—	○	—	—	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	ナデ	ナデ	16884	
	427	—	高坏	F-16	3	脚部	—	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ミガキ ナデ	工具ナデ	20073	
	428	—	高坏	J-15	3	脚部	—	○	—	○	—	○	—	—	5YR5/6 明赤褐	10YR6/3 にぶい黄橙	工具ナデ	工具ナデ	20315	
	429	—	坩	I-14	3	胴部～底部	—	○	—	○	—	○	—	—	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR2/2 暗赤褐	工具ナデ	ナデ	20324	
109	430	—	坩	E-12	3.4	口縁部～胴部	—	○	—	—	—	—	○	—	7.5YR6/4 にぶい橙	5Y4/1 灰	回転ナデ	ミガキ	17358,18337,32置一括	黒色土器
	431	—	坩	E-10	3	口縁部	—	○	—	○	—	○	○	—	7.5YR5/4 にぶい褐	N2/0 暗黒	横ナデ	ミガキ	6462	黒色土器
	432	—	坩	D-10	3	口縁部	—	○	—	○	—	—	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	横ナデ	横ナデ	6452,32置一括	
	433	—	坩	E-12	3	胴部～底部	—	○	○	○	—	○	○	—	10YR6/4 にぶい黄橙	5Y4/1 灰	回転ナデ		19035	黒色土器

第15表　B地点　土器観察表９

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	胎土							色調		調整・文様		取上番号	備考
							雲母	石英	角閃石	長石	白石	黒色鉱	赤色鉱	その他	外面	内面	外面	内面		
109	434	－	埋	C-2	3	頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ		6625	
	435	－	埋	F-12	3	頸部	－	○	－	○	－	－	○	－	N3/0 暗灰	7.5YR6/4 にぶい橙			4601.1, 46368	黒色土器
	436	－	坏	D-10	3	頸部～底部	－	○	－	○	－	○	－	輪形	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	6453	
	437	－	皿	D-10	2, 4	口縁部～頸部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	N3/0 暗灰	回転ナデ	ミガキ	6763, 6669, 並器一括	黒色土器
	438	－	片口鉢	C-8	2	口縁部	－	－	－	－	－	－	－	－	N5/0 灰	N5/0 灰	回転ナデ		6667	
	439	－	埋	D-9	2	口縁部～頸部	－	－	－	－	－	－	－	－	5YR6/1 オリーブ灰	7.5YR5/1 灰			6649	
	440	－	皿	I-13	3	頸部～底部	－	－	－	－	－	－	－	－	5Y7/1 明緑灰	2.5GY7/1 青白		二重圏線	46528	
112	453	－	注鉢	トレンチB3	1	口縁部	－	○	－	○	－	－	○	－	5YR3/1 黒褐	5YR2/1 黒褐	ミガキ	ミガキ	表土一括	
	454	－	深鉢	F-16	1	口縁部	－	○	○	－	－	○	○	－	10YR4/2 灰黄褐	2.5YR3/4 黄褐	横ナデ 斜位突帯	横ナデ	表土一括	
	455	－	壺	S	1	口縁部	○	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/3 にぶい黄褐	5YR5/4 にぶい赤褐	横ナデ 指頭圧痕 三角突帯	横ナデ 指頭圧痕	表土一括	
	456	－	壺	F-13	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	縦区画	10YR4/3 にぶい黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	ハケメ	工具ナデ	一括	横付着
	457	－	壺	S	1	頸部	－	○	－	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR4/3 褐	ナデ 三角突帯	ナデ	表土一括	
	458	－	壺	E-14	－	底部	－	○	－	○	－	○	－	砂質粘土	2.5YR4/4 にぶい赤褐	10YR5/3 にぶい黄褐	工具ナデ	工具ナデ	17755	赤色顔料
	459	－	高坏	E-14	－	口縁部	○	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐	横ナデ	横ナデ	17714	
	460	－	高坏	S	1	口縁部	－	○	－	－	－	○	－	－	5YR4/4 にぶい赤褐	5YR4/4 にぶい赤褐	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	表土一括	
	461	－	高坏	E-16	1	頸部	○	○	－	－	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ	工具ナデ 指ナデ	表土一括	
	462	－	高坏	H-16-17	1	脚部	－	○	○	○	－	○	○	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	工具ナデ 指頭圧痕	ナデ	表土一括	
	463	－	埋	G-17	－	口縁部	－	○	○	○	－	○	○	－	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/2 灰黄褐	横ナデ	横ナデ	一括	
	464	－	埋ね鉢	E-17-18	－	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	2.5YR4/1 黒灰	10YR6/2 灰黄褐	横ナデ	横ナデ	SK170-1	黒褐系
	465	－	埋ね鉢	B-2	1	口縁部	－	○	－	○	○	－	○	－	7.5YR4/1 褐灰	7.5YR6/2 灰褐	横ナデ	横ナデ	表土一括	黒褐系
	466	－	皿	C-16-17	－	口縁部～底部	○	－	－	－	－	○	○	－	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	一括	土師器・糸切り
	467	－	鍋	S	1	頸部	－	－	－	－	－	－	－	－	5GY7/1 明オリーブ灰	5GY7/1 明オリーブ灰			表土一括	青磁・龍口磁・常滑系・陶器連弁文
	468	－	鍋	B-2	1	底部	－	－	－	－	－	－	－	－	7.5GY6/1 緑灰	7.5GY6/1 緑灰			表土一括	青磁
	469	－	鍋	D-2	1	口縁部～底部	－	－	－	－	－	－	－	－	10GY1/1 黒緑灰	5GY1/1 黒緑灰		ケズリ	表土一括	青花

第16表　B地点　石器観察表１

掲載番号	掲載番号	遺構番号	器種	石材	出土区	層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	備考
14	1	集石9	線刻礫	安山岩	F-16-17	—	13.3	10.9	3.9	607.5	集石43-220	
16	9	—	打製石器	黒曜石	F17	6	2.1	1.8	0.5	1.0	22684	
	10	—	磨・敲石	輝石安山岩	F18	6	9.9	8.9	5.5	565.0	22596	
28	12	焼土28-3	打製石器	安山岩	E12	—	1.9	1.8	0.4	1.0	焼土4-1	
33	23	—	打製石斧	頁岩	C15	5a	6.2	4.5	1.4	45.5	19437	
	24	—	磨製石斧	砂岩	D19	5	5.4	4.8	1.8	67.7	19884	
	25	—	敲石	ホルンフェルス	K15	5a	14.5	5.6	2.9	368.0	23383	磨製石斧の転用
71	97	溝状遺構14	打製石斧	硬質頁岩	D17	—	10.3	7.4	1.9	136.8	溝34-22238	
72	98	溝状遺構15	線刻礫	ホルンフェルス		—	4.7	4.4	1.9	46.8	23852	
97	337	—	打製石器	黒曜石	D11	4	1.5	1.7	0.3	0.6	18281	
	338	—	打製石器	黒曜石	C10	4	1.6	1.3	0.3	0.4	19500	
	339	—	打製石器	黒曜石	H14	4	1.6	1.7	0.3	0.6	21643	
	340	—	打製石器	黒曜石	D11	4	2.1	1.7	0.2	0.6	18761	
	341	—	打製石器	黒曜石	E11	4	1.5	0.6	0.3	0.2	19612	
	342	—	打製石器	玉髄	D12	4	2.0	1.3	0.2	0.5	18345	
	343	—	打製石器	安山岩	I15	4	2.2	1.7	0.2	0.8	21327	
	344	—	打製石器	頁岩	I15	4a-3	2.2	1.5	0.4	1.0	23442	
	345	—	打製石器	頁岩	I14	4a-3	2.2	1.4	0.2	0.7	24448	
	346	—	打製石器	安山岩	E10	4	1.9	1.9	0.3	0.9	19522	
	347	—	打製石器	チャート	H13	4	1.8	0.9	0.3	0.5	52511	
	348	—	打製石器	粘板岩	D13	4	2.2	1.5	0.4	1.5	49807	
	349	—	打製石器	安山岩	E11	4	2.4	2.0	0.4	1.5	18581	
	350	—	打製石器	安山岩	E12	4	1.9	1.8	0.3	0.7	18793	
	351	—	磨製石器	頁岩	J14	4a-2	4.9	2.7	0.2	3.2	23023	
	352	—	磨製石器	頁岩	D10	4	2.6	2.7	0.2	1.6	19180	
	353	—	磨製石器	頁岩	G12	4	2.9	2.0	0.2	1.5	49126	
	354	—	磨製石器	緑色頁岩	C10	4	3.3	2.4	0.2	0.8	19623	
	355	—	磨製石器	頁岩	F12	4	2.3	2.4	0.3	1.6	49039	
	356	—	磨製石器	頁岩	I14	4	3.5	2.5	0.3	2.9	21826	
98	357	—	石匙	黒曜石	I15	4	3.3	4.0	1.0	8.2	21129	
	358	—	石匙	黒曜石	I14	4	4.1	5.7	1.0	16.0	21608	
	359	—	石匙	黒曜石	H13	4	3.6	2.7	1.2	9.2	53328	
	360	—	石匙	安山岩	F12	4	4.8	4.9	0.7	15.5	51300	
	361	—	石匙	ホルンフェルス	D13	4	6.5	12.2	1.3	94.9	石匙11-18726	
	362	—	スクレイパー	ホルンフェルス	J15	4a-3	4.9	13.7	2.7	196.2	23505	
	363	—	スクレイパー	硬質頁岩	D10	4	5.9	7.9	0.9	40.3	19827	
	364	—	スクレイパー	ホルンフェルス	I14	4a-3	5.1	9.2	1.2	52.6	25167	
	365	—	スクレイパー	安山岩	D11	4	4.5	2.9	1.1	13.6	19697	
	366	—	スクレイパー	ホルンフェルス	J15	4a-3	7.2	9.2	1.2	91.4	23441	
	367	—	十字形石器	ホルンフェルス	I15	4a-2	6.4	6.4	1.6	73.3	23044	
99	368	—	模刃型石器	硬質頁岩	I15	4a-3	4.3	8.5	1.3	44.7	24038	
	369	—	模刃型石器	ホルンフェルス	F12	4	8.9	5.6	0.9	57.9	49800	
	370	—	模刃型石器	硬質頁岩	C9	4	6.4	8.9	0.7	49.8	19648	
	371	—	模刃型石器	ホルンフェルス	F12	4	7.4	12.1	1.2	134.0	51190-47643	
	372	—	模刃型石器	硬質頁岩	E11	4	5.4	11.6	1.3	89.9	19334	
100	373	—	模刃型石器	ホルンフェルス	H15-I14	4-4a-3	6.9	14.9	1.9	205.3	23800-25296	
	374	—	模刃型石器	硬質頁岩	E11-F12	4	4.7	10.5	0.8	46.1	19446-47636	
	375	—	模刃型石器	ホルンフェルス	F12	4a-2	8.9	8.9	1.7	115.3	53351	
101	376	—	打製石斧	硬質頁岩	I14	4a-3	7.1	4.6	1.4	61.0	23490	
	377	—	打製石斧	ホルンフェルス	J15	4a-3	8.9	4.7	1.5	72.7	23462	
	378	—	打製石斧	ホルンフェルス	I15	4a-4	4.9	9.2	1.5	87.8	23575	
	379	—	打製石斧	ホルンフェルス	I15	4a-3	8.8	5.8	1.9	138.0	22728	
	380	—	打製石斧	頁岩	E12	4	9.1	10.7	2.0	176.5	19407	
	381	—	打製石斧	硬質頁岩	I14	4a-3	6.5	7.4	1.3	84.6	24326	
	382	—	打製石斧	ホルンフェルス	I14	4a-3	8.3	6.4	1.4	92.2	24117	
102	383	—	打製石斧	ホルンフェルス	C11	4	11.3	6.4	1.3	110.5	18912	
	384	—	打製石斧	頁岩	E12	4	8.3	6.8	1.2	82.4	18784	
	385	—	打製石斧	頁岩	D11	4	6.7	5.1	1.4	66.1	19089	
	386	—	打製石斧	硬質頁岩	I14	4a-3	10.3	8.3	1.9	170.5	23963	
	387	—	打製石斧	硬質頁岩	I15	4	7.7	8.1	1.9	141.8	22104	
	388	—	打製石斧	頁岩	D13	4a-3	8.7	7.2	1.1	74.4	54625	
	389	—	打製石斧	頁岩	I14	4a-3	9.1	8.5	1.9	142.1	24327	
103	390	—	磨製石斧	安山岩	D10	4	9.8	5.0	2.1	110.4	19736	
	391	—	磨製石斧	硬質頁岩	C11	4	9.5	6.1	1.4	142.0	18763	

第17表　B地点　石器観察表２

検図番号	掲載番号	遺構番号	器種	石材	出土区	層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	備考
103	392	－	磨製石斧	硬質頁岩	H14	4	8.0	5.2	2.9	157.5	20881	
	393	－	磨製石斧	硬質頁岩	E11	4	6.0	4.0	1.4	49.1	19574	
	394	－	磨製石斧	硬質頁岩	H14	4a-2	5.9	2.0	1.3	27.7	22526	
	395	－	石斧？	頁岩	E11	4	4.6	5.7	0.8	44.1	19476・19478	
	396	－	石斧？	頁岩	E11	4	3.7	4.3	0.8	17.9	19477	
104	397	－	敲・磨石	砂岩	D11	4	10.3	9.4	6.2	903.0	19144	
	398	－	敲・磨石	安山岩	E13	4	10.6	8.6	6.0	933.0	19674	
	399	－	敲・磨石	安山岩	J14	4a-3	11.2	9.8	6.4	833.0	24138	
	400	－	敲・磨石	砂岩	H14	4a-3	11.8	9.3	5.2	840.0	23639	
	401	－	敲・磨石	安山岩	F16	4	8.0	10.0	5.7	664.0	20755	
	402	－	敲・磨石	安山岩	J14	4a-3	11.5	8.3	7.3	1067.0	24241	
	403	－	敲・磨石	安山岩	G13	4	102.5	67.0	50.8	494.0	53350	
	404	－	敲石	砂岩	F12	4	7.6	3.4	2.3	87.0	47593	
	405	－	敲石	硬質頁岩	C10	4	5.6	4.3	1.5	41.5	19860	
105	406	－	石皿	花崗岩	I15	4a-3	38.9	21.7	10.6	10640.0	23605	
	407	－	石製品	頁岩	G13	4	5.8	3.3	1.3	29.9	48267	
106	408	遺跡11	打製石鏃	黒曜石	E11	－	1.2	1.5	0.2	0.3	遺跡4、17465	
110	442	－	打製石鏃	硬質頁岩	C9	3	2.6	1.8	0.4	1.2	6413	
	443	－	打製石鏃	安山岩	J15	3	1.7	1.3	0.3	0.4	22759	
	444	－	使用痕剥片	黒曜石	F-14	3	2.3	2.6	0.9	8.9	20869	
	445	－	打製石斧	ホルンフェルス	F17	3	13.7	8.4	1.9	189.9	21886	
	446	－	打製石斧	硬質頁岩	F16	3	9.0	5.6	1.2	31.4	20135	
	447	－	打製石斧	頁岩・粘板岩系	F16	3	4.7	5.1	0.9	27.6	20257	
	448	－	磨製石斧	ホルンフェルス	C8	3	15.4	9.9	1.5	181.5	6407	
	449	－	磨製石斧	ホルンフェルス	F17	3	6.6	6.1	1.3	76.6	21885	
	450	－	磨製石斧	石英	I-16	3	3.7	4.3	1.2	21.2	23615	
111	451	－	石皿	花崗岩	F15	3	15.0	10.9	3.5	956.0	20869	
	452	－	砥石	頁岩	F16	3	7.8	4.2	2.2	80.8	20126	
113	471	－	打製石斧	ホルンフェルス	H16-17	撹乱	12.4	5.1	1.6	140.0	カクラン一括	
	472	－	打製石斧	ホルンフェルス	I14	表土	8.3	4.9	1.5	91.5	一括	
	473	－	打製石斧	硬質頁岩	I16	撹乱	7.1	5.6	2.5	136.0	一括	
	474	－	打製石斧	頁岩・粘板岩系	H16-17	撹乱	9.0	5.5	2.1	98.7	カクラン一括	
	475	－	磨製石斧	硬質頁岩	J14-15	表土	8.7	4.2	2.9	125.1	表土一括	
	476	－	磨製石斧	硬質頁岩	－	表土	7.4	4.8	1.5	72.5	表土一括	
	477	－	十字型石器	頁岩・粘板岩系	F12	表土	8.9	9.1	2.1	153.7	一括	

第18表　B地点　鉄製品観察表

検図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
16	2	土坑墓１	F-16	－	一括	古銭	完形	－	－	－	－	太平通寶
	3	土坑墓１	F-16	－	一括	古銭	完形	－	－	－	－	淳化元寶
	4	土坑墓１	F-16	－	一括	古銭	完形	－	－	－	－	淳熙元寶
	5	土坑墓１	F-16	－	一括	古銭	完形	－	－	－	－	嘉定通寶
	6	土坑墓１	F-16	－	一括	古銭		－	－	－	－	洪武通寶
32	19	溝状遺構9	E-10	－	17740	釘		10.9	1.9	1.9	42.3	
71	95	溝状遺構14	B-17	－	22259	鉄滓		－	－	－	94.7	鉄滓
	96	溝状遺構14	F-18	－	22259	鉄滓		－	－	－	40.3	鉄滓
96	324	－	C-10	4	19165	有茎式三角形鏃		3.7	2.7	0.6	8.3	
	325	－	B-12	4	18947	釘		15.0	2.1	1.4	21.6	
	326	－	B-12	4	18732	刀子		－	1.7	0.6	3.4	
109	441	－	C-12	3	17086	鉄鏃		－	－	0.7	11.4	
112	470	－	F-18	表土	表土一括	鉄滓		－	－	－	80.8	鉄滓・鉄錆滓

D　地　点

第５章　発掘調査の成果（Ｄ地点）

第１節　Ⅳ層の調査

１　調査の概要

Ｄ地点についても，川久保遺跡Ｂ地点で前述したとおり，遺物・遺構ともに，発掘調査時の検出面・出土層に依拠し，掲載している。

Ｄ地点の調査区域は，Ⅴ層上面での地形をみると，その全域が北東から南西に登っていく谷部である。この谷は，調査区の西端で大きく蛇行し，北西へと向きを変え続いていく。この先には，川久保遺跡Ｂ地点の中央を貫く谷部があり，両地点の谷部はつながっている。

Ｄ地点の調査は，10ｍ四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。また，Ｄ地点は現道にまたがって調査区が設定されており安全対策等の徹底や排土処理等の現場運営の面から，幅の狭い調査区を２か年に渡って調査することとなった。谷部で地層の堆積が非常に厚かったこともあり，安全管理上，Ⅵ層以降の調査をすることはできなかった。

Ⅳ層からは，主に縄文時代晩期から古墳時代までの遺構・遺物が出土したが，層序の細分等によっても明確な時代区分ができなかった。ただし，遺物や埋土状況等との関連で時代の特定できた遺構もある。

遺構は，土坑，焼土跡，集石，遺物集中，道跡，ピットを検出した。遺構の時期認定については，発掘調査時に，検出状況・埋土の特徴・埋土中出土遺物などから行った。

土坑は，３基検出された。いずれも古墳時代の遺構である。このうち２基が，遺物集中が多く検出されたＧ・Ｈ-20区にあるが，関連を伺わせるような状況は確認できなかった。

焼土跡は，３か所検出された。そのうち２つは古墳時代の遺構で，残りの１つは時期不明である。どの焼土跡も用途の解明につながるような情報は得られなかった。

集石は，６基検出されている。そのうち５基は，谷地形の谷底部分で検出された。谷部では地層の堆積が厚く，Ⅳa 層・Ⅳb 層を細かく分層できた部分があり，６基中５基はⅣb 層の下部で検出された。

集石の形態分類については，川久保遺跡Ｂ・Ｃ地点同様に，Ⅰ～Ⅲの３タイプに分類した。

遺物集中は，９か所検出された。Ｄ地点では，完形に近い土器が出土したり，壺形土器が多く出土していることから，調査の段階から，墓域の可能性を考慮しながら，慎重に調査を進めた。しかし，墓域の可能性を裏付けるようなものは発見されず，整理作業でも判明しなかった。

道跡は，３条検出された。そのうち一つは，検出時点で硬化面がわずかしか残っておらず，断面の実測ができなかったので，遺構配置図にのみ掲載した。

ピットは，２基検出されたが，建物跡としてまとまるものはなかったので，平面図のみ遺構配置図に掲載した。

遺物は，古墳時代の土器が大部分を占めるが，縄文時代前期から近世までの遺物が出土している。前述した地形のため，平面上・垂直分布上のどちらの観点からも有意なまとまりは抽出するに至らなかった。詳しくは遺物の項に記す。

２　遺構

(1)　土坑

①　古墳時代の土坑

土坑１号（第116図）

Ｈ-20区のⅣb2層で検出された。長軸195cm，短軸114cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約50cmである。谷底部分で検出されており，長軸は谷筋とほぼ直交して掘られている。埋土は暗褐色土だが，砂礫の混在量で二層に分層される。遺物集中が近くにあることから，土坑墓の可能性も考慮し調査したが，積極的に認定する状況等はなかった。古墳時代の土器片が埋土中に混在する。

土坑２号（第116図）

Ｇ-20区のⅣb2層で検出された。長軸105cm，短軸85cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約40cmである。谷底部分で検出されており，長軸は谷筋の方向に沿っている。埋土は暗褐色土だが，砂礫の量で二層に分層される。土坑１号とほぼ同様の埋土であり，これら二つの土坑は，同時期に掘られたものの可能性が高い。土坑１号と同様に，土坑墓を意識して調査をしたが，用途の解明につながるような情報は得られなかった。古墳時代の土器片が埋土中に混在する。

土坑３号（第116図）

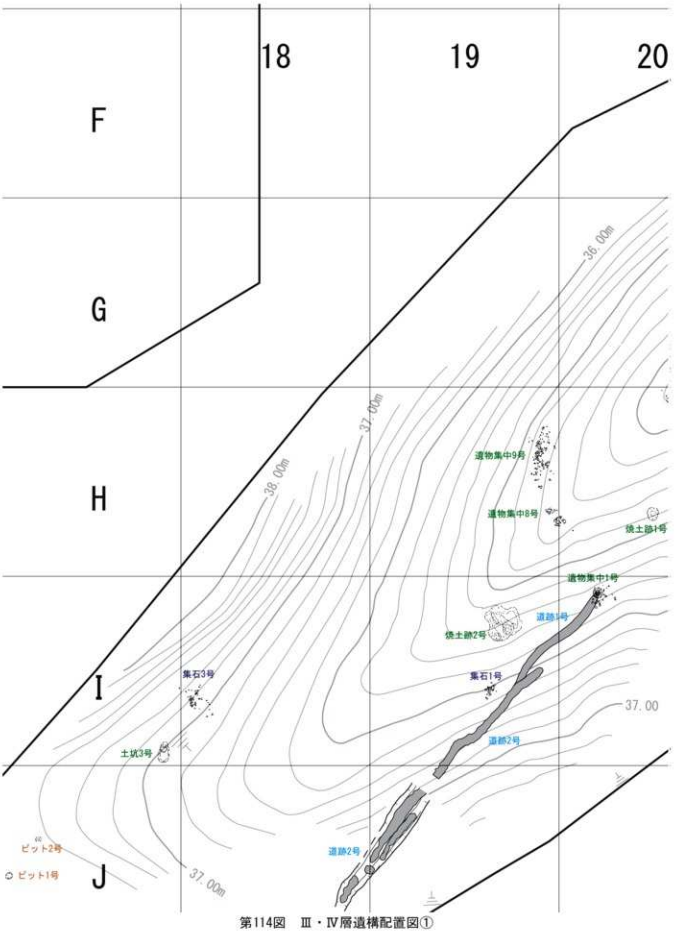
Ｉ-17区のⅣa 層で検出された。長軸110cm，短軸60cmの平面楕円形で，検出面からの深さは約30cmである。谷部中腹の斜面で検出されており，中央部は樹痕によって攪乱されている。埋土は三層に分層され，レンズ状に堆積する。床面付近から礫が出土しているが，使用された痕跡はなかった。

(2)　焼土跡

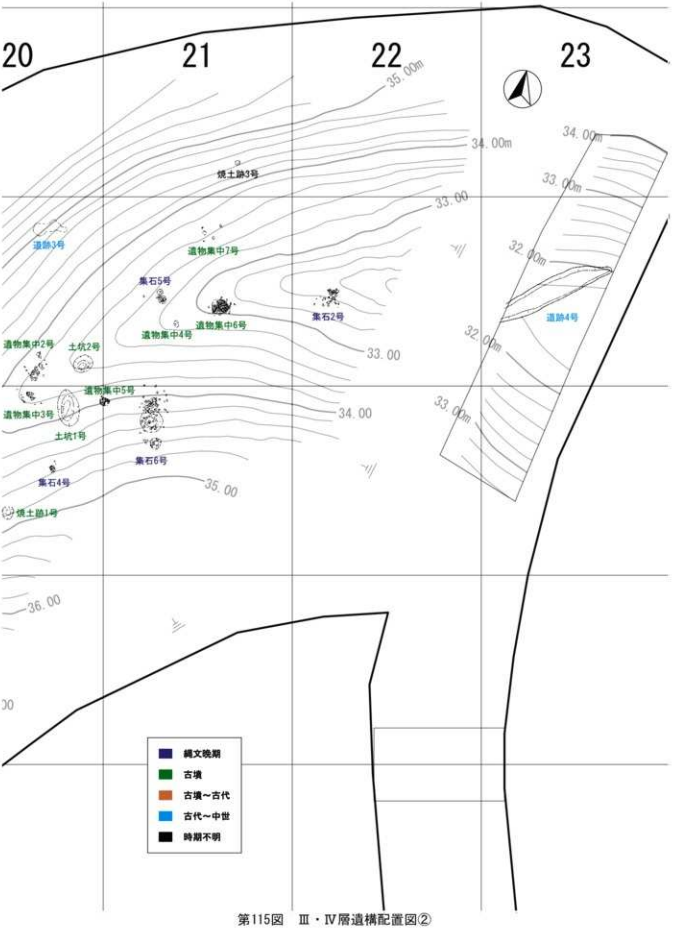
①　古墳時代の焼土跡

焼土跡１号（第117図）

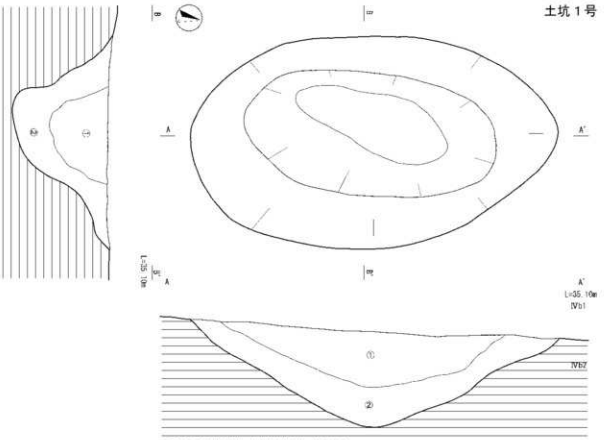
Ｈ-20区のⅣb1層で検出された。長軸68cm，短軸59cmのほぼ平面円形で，焼土の下に深さ約11cmの掘り込みをもつ。焼土の範囲は埋土①で，被熱し赤化している。また，埋土②はⅣ層を主体とする再堆積層で炭化物を多く含み，やや赤暗く変色している。鉄滓等は含まれず，用

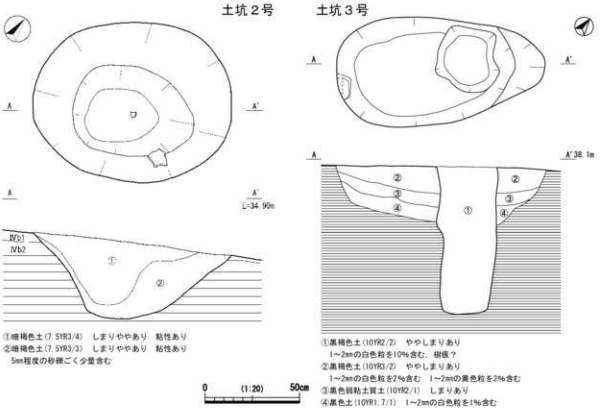


第114図　Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図①

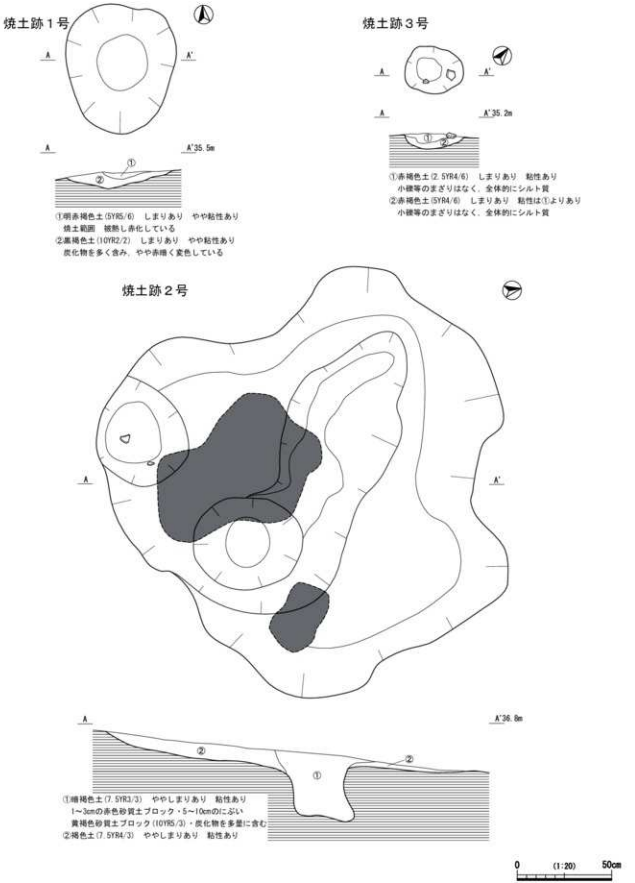


第115図　Ⅲ・Ⅳ層遺構配置図②

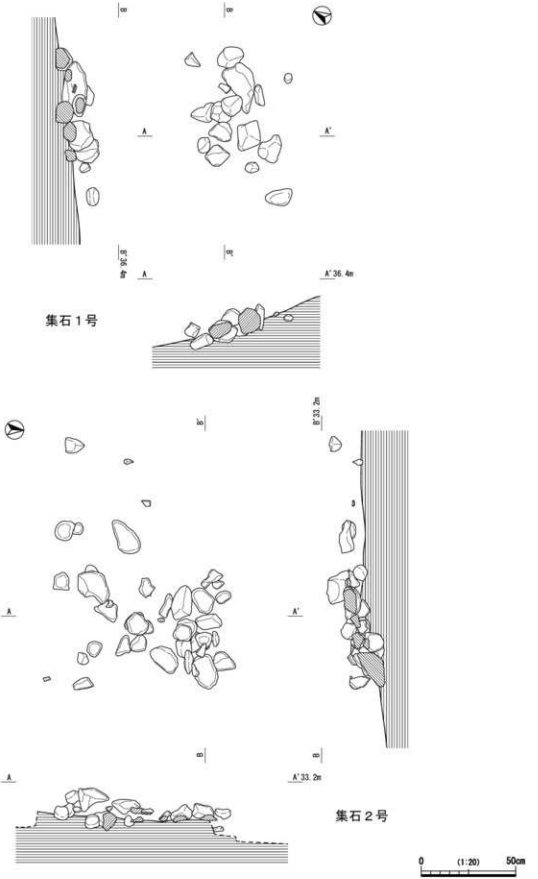

土坑１号
A
A'
L=35.10m
Ⅳb1
Ⅳb2
①暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりややあり　粘性あり
②暗褐色土(7.5YR3/3)　しまりややあり　粘性あり
5mm程度の砂礫ごく少量含む


土坑２号
土坑３号
A
A'
L=34.90m
A'38.1m
Ⅳb1
Ⅳb2
①暗褐色土(7.5YR3/4)　しまりややあり　粘性あり
②暗褐色土(7.5YR3/3)　しまりややあり　粘性あり
5mm程度の砂礫ごく少量含む
①黒褐色土(10YR2/2)　ややしまりあり
1～2mmの白色粒を10%含む，樹根？
②黒褐色土(10YR3/2)　ややしまりあり
1～2mmの白色粒を2%含む　1～2mmの黄色粒を2%含む
③黒色弱粘土質土(10YR2/1)　しまりあり
④黒色土(10YR1.7/1)　1～2mmの白色粒を1%含む
0　(1:20)　50cm

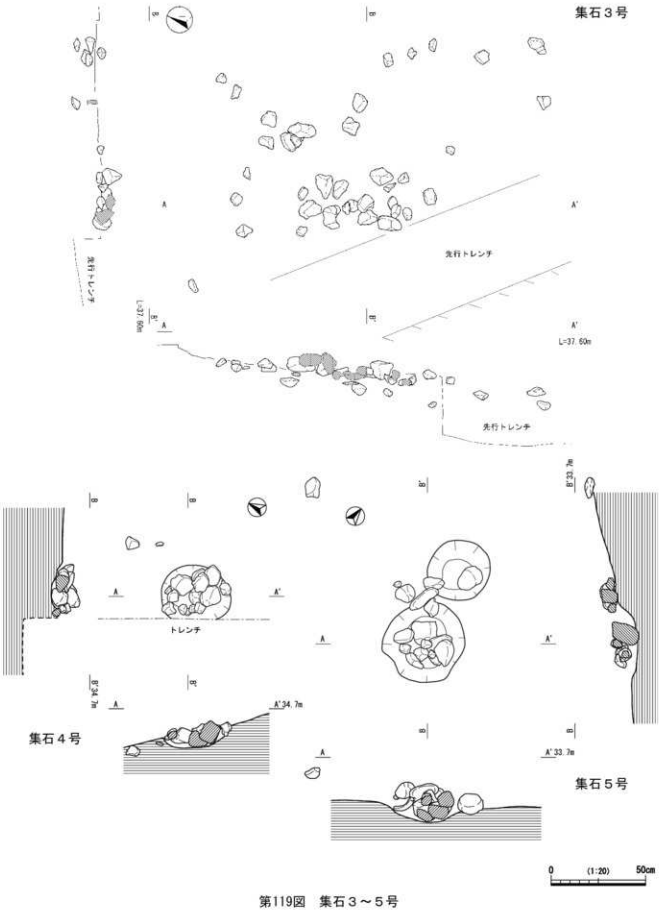
第116図　土坑１～３号



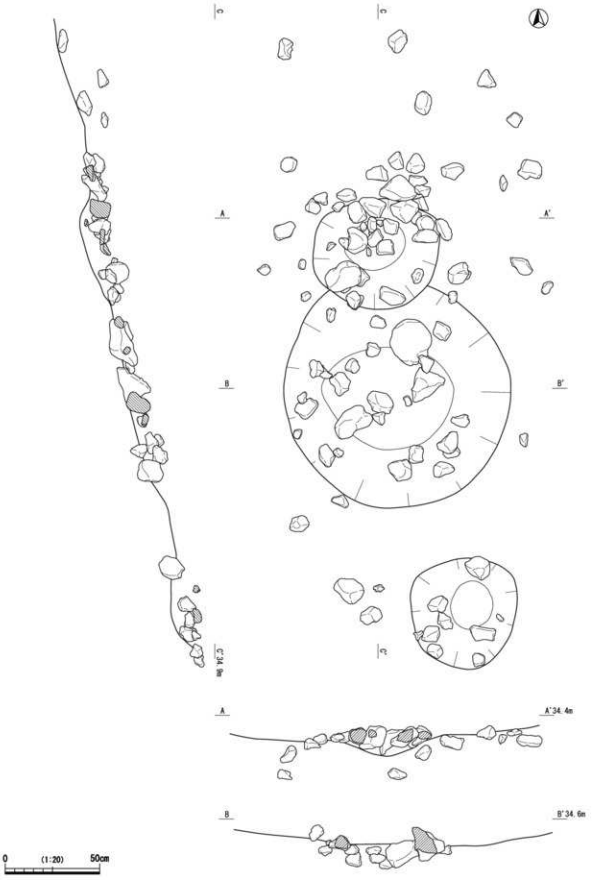
第117図　焼土跡１～３号



第118図　集石１・２号


集石３号
先行トレンチ
先行トレンチ
先行トレンチ
L=37.60m
A
A'
トレンチ
集石４号
集石５号
A'34.7m
A'33.7m
0
(1:20)
50cm

第119図　集石３～５号



第120図　集石６号

途不明である。

焼土跡２号（第117図）

Ⅰ-19区のⅣa 層で検出された。長軸226cm，短軸212cmの土坑の表面に，被熱し赤化した部分が２か所みられた。中央付近に検出面から深さ約35cmの落ち込みがあるが，底部が不定形で焼土との関係は不明である。

② 時期不明の焼土跡

焼土跡３号（第117図）

F-21区のⅣa 層で検出された。長軸31cm，短軸25cmのほぼ円形である。はっきりとした掘り込み部はみられず，炭化物もほとんど出土していないが，被熱し赤化した部分がみられたため，焼土跡と認定した。埋土からは，古墳時代の土器小片と礫が出土しているが，どちらも被熱痕は確認できなかった。

(3) 集石

① 縄文時代晩期の集石

集石１号（第118図）タイプⅡ

Ⅰ-19区のⅣb3層で検出された。85×57cmの範囲に15個の礫がまとまっている。谷部中腹の斜面で検出されており，道路２号のすぐ北側にある。10～15cm大の亜角礫が多く，礫構成は凝灰岩がほとんどを占める。被熱痕のある礫は確認できなかった。縄文時代晩期の土器小片が１点出土している。

集石２号（第118図）タイプⅡ

G-22区のⅣb3層で検出された。谷底部分にあり，135×103cmの範囲に，39個の礫が集中している。10～20cm大の亜角礫が多く，礫構成は凝灰岩と変成岩がほぼ半数ずつである。被熱痕のある礫は確認できなかった。縄文時代晩期の土器小片が２点出土している。

集石３号（第119図）タイプⅡ

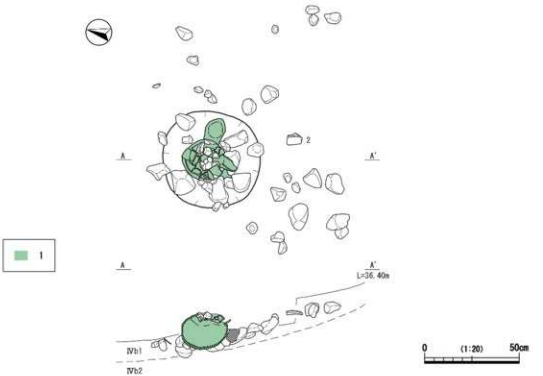
Ⅰ-17・18区のⅣb 層の中位で検出された。谷部中腹の斜面にあり，192×135cmの範囲に，37個の礫がまとまっている。10cm大の亜角礫が多く，礫構成は凝灰岩が26個と多い。周辺には炭化物が散在しているが，被熱痕のある礫は確認できなかった。縄文時代晩期の土器小片が２点出土している。

集石４号（第119図）タイプⅢ

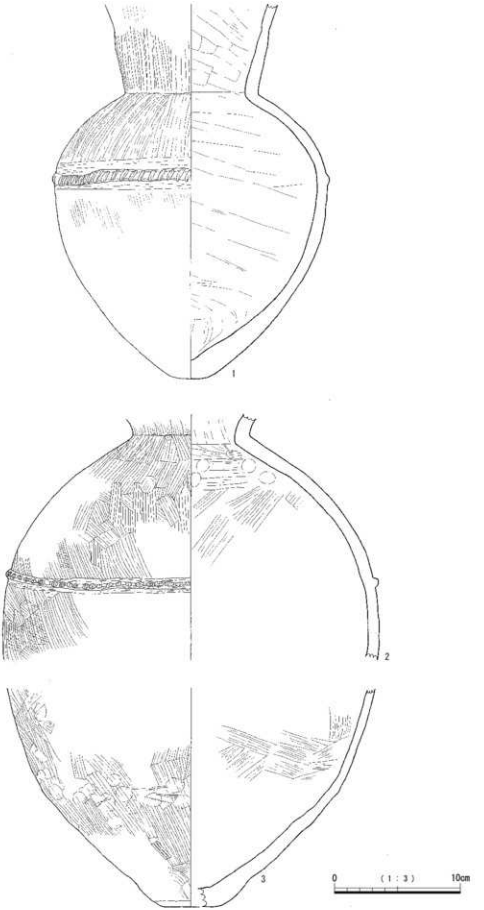
H-20区のⅣb3層で検出された。谷部中腹の斜面にあり，57×45cmの範囲に，16個の礫が集中している。掘り込みは，残存部で長径36cm，短径29cmの平面楕円形で，検出面からの深さは８cmである。10～20cm大の亜角礫が多く，礫構成は凝灰岩が14個で大部分を占める。炭化物や被熱痕のある礫は確認できなかった。

集石５号（第119図）タイプⅢ

G-21区のⅣb3層で検出された。谷底部分にあり，55×49cmの範囲に，17個の礫が集中している。掘り込みを２か所もつ。礫が集中する中央側の掘り込みは，長径43cm，短径41cmのほぼ円形で，検出面からの深さは10cmである。北東側にも，長径33cm，短径31cmの掘り込みが見られるが，礫の集中が見られないことから，この集石との関係は分からなかった。10cm大の亜角礫が多く，凝灰岩が10個と多いが，砂岩も４個と他の集石に比べ多い。炭化物や被熱痕のある礫は確認できなかった。



第121図　遺物集中１号



第122図　遺物集中１号出土遺物

集石６号（第120図）タイプⅢ

G・H−21区のⅣb3層で検出された。339×158cmの範囲に，93個の礫が集中して検出された。谷部中腹の斜面で検出されており，掘り込みが３か所確認できた。もっとも礫が集中する北側の掘り込みは，長径33cm，短径30cmのほぼ円形で，検出面からの深さは９cmである。出土状況から，この北側の掘り込みがこの集石の中心部分であると思われる。南側の掘り込みに伴う礫は，北側の中心と平面上やや離れており，北側とは異なる時期に使用された可能性がある。礫構成は，10cm大の亜角礫が多いが，20cmを超える大型の礫も数点見られる。また，凝灰岩が69個と大部分を占める。炭化物や被熱痕のある礫は確認できなかった。

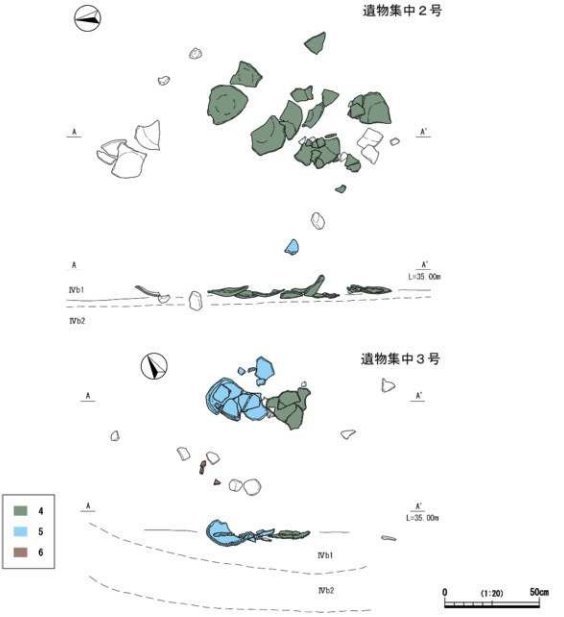
(4)　遺物集中

①　古墳時代の遺物集中

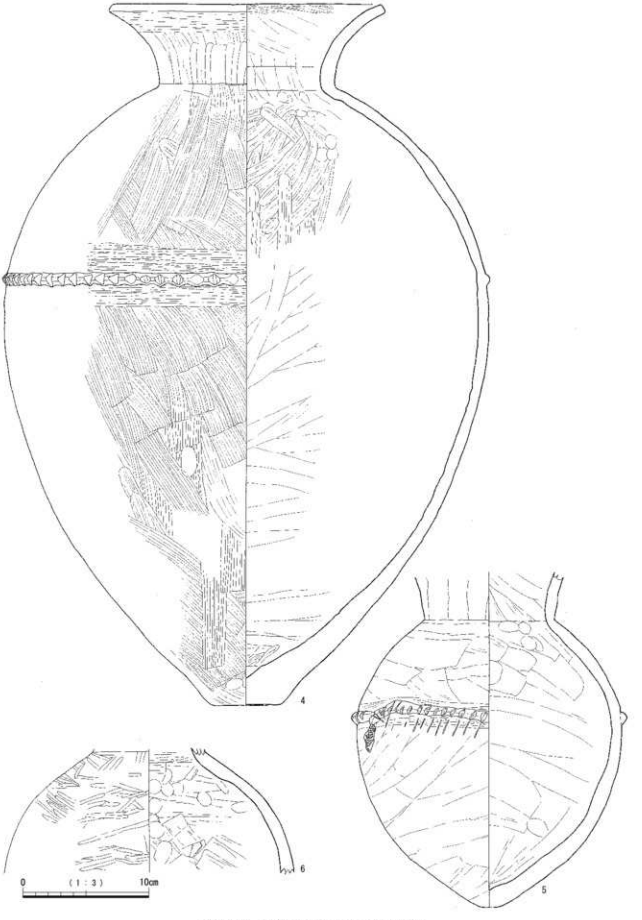
遺物集中１号（第121・122図　１～３）

I−20区Ⅳb1層で検出された。調査区の中央で検出された道跡１号に隣接する場所で検出された。132×108cmの範囲に土器や礫が集中しており，壺形土器１が横に倒れた状態で出土した。壺形土器の周囲には明確な掘り込みは見られないが，土器からやや離れたところに浅い掘り込みが見られた。

１はⅩ2b類に相当する中型の壺である。口縁部を欠くが，頸部が外傾しながら直線的に長く伸びる特異な形態である。胴部最大径は約22cmを測る。底部はすぼまるが小さい平坦面をもつ。外面は突帯から上位では頸部までハケメを縦方向に丁寧に施し，胴部下半は斜位方向に工具ナデを施す。内面は工具によるナデを斜位方向に丁



第123図　遺物集中２・３号



第124図　遺物集中２・３号出土遺物

寧に施す。2・3は，接点はないが，同一個体と考えられる。X2a 類に比定できる土器である。2は，最大径が胴部中程にあり，約30cmを測る。胴部最大径よりやや上方に刻目突帯を外面は縦方向のハケメを丁寧に施す。内面は，工具による斜位や横方向のナデを施す。3は，底部で分銅形の平底を呈す。底径が約4.8cmを測る。

遺物集中2・3号（第123・124図　4～6）

遺物集中2号は，G-20区Ⅳb 層で検出された。160×119cmの範囲に土器や礫が集中している。壺形土器4の破片が多く，接合した。

遺物集中3号は，H-20区Ⅳb 層で検出された。150×72cmの範囲に土器や礫が集中している。小型の壺5がつぶれたような形で出土している。

これら二つの遺構は，隣接しており，お互いの土器が接合していることから，同時期のものと思われる。どちらも，その周囲には明確な掘り込みは見られない。土坑1・2号がすぐ東隣にあることから，その関係性を考慮しながら調査を進めたが，それを伺わせるような状況は発見できなかった。

4・5は，X2a 類に比定する土器である。4は，器高約55.5cm，胴部最大径約38.5cmを測る大型壺である。口縁部はラッパ状に開き，肩部はなで肩を呈する。底部はやや上げ底状の平底を明確につくる。外面は縦方向のハケメを丁寧に施す。内面は，肩部付近はハケメ，胴部より下部分は工具ナデによる調整を施す。5は，1と全体的な器形が似ている中型の壺である。口縁部先端は欠くが，頸部は外傾しながら伸びる。肩部は張らず，胴部の中位ほどに最大径をもち，約21cmを測る。底部は丸みを帯びつつ実底を呈する。胴部最大径部分に，刻目突帯を貼付する。6は，やや肩部が張る形態を呈するが，詳細は不明である。外面は横方向や斜位方向のミガキを施す。

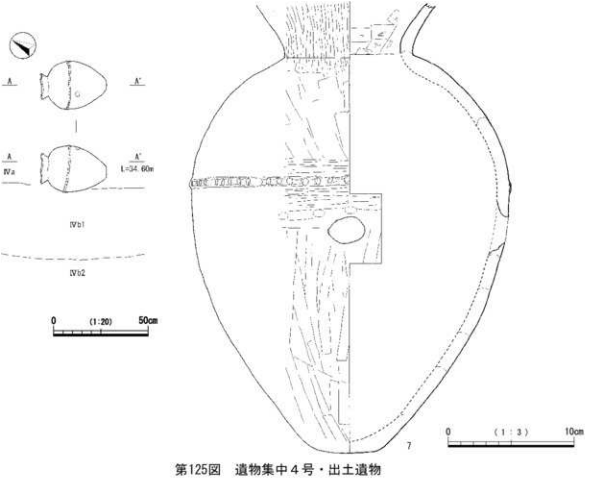
遺物集中4号（第125図　7）

G-21区Ⅳa 層で検出された。古墳時代の壺形土器7が完形で，横倒しになった状態で検出された。周囲に掘り込みなどは見られなかった。

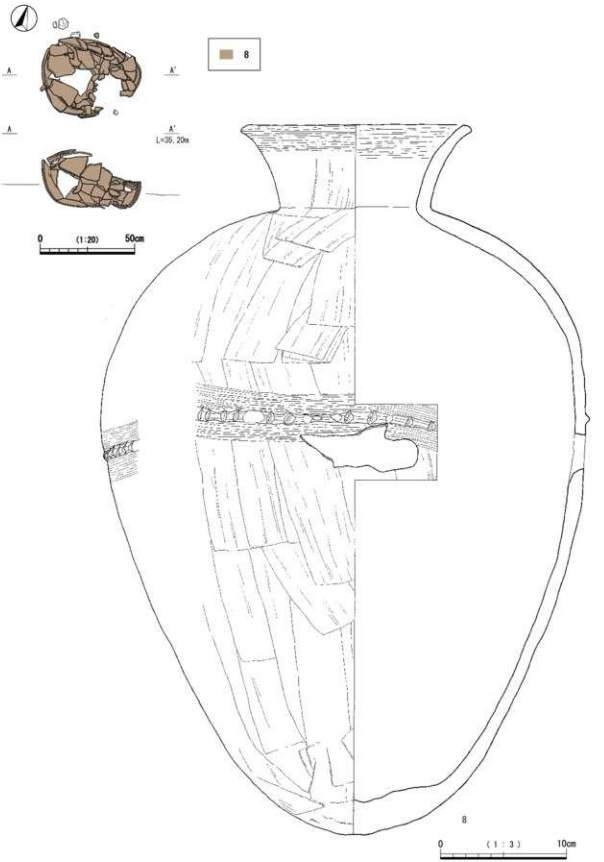
7は，X2a 類に相当する土器である。胴部最大径約25.5cmの中型の壺である。口縁部先端は欠くが，ラッパ状に開いて伸びる。また，肩部はナデ肩状を呈する。胴部最大径部分に細めの刻目突帯を1条貼付する。底部は丸みを帯びるが平坦面をもつ。外面調整は頸部以上が縦方向のハケメを施し，肩部から底部にかけては工具による縦方向のナデを施す。完形品のため，内面の調整は観察が困難であった。突帯直下には，穿孔が1か所あり，焼成後に外から中に向かって穿たれている。

遺物集中5号（第126図　8）

H-20・21区Ⅳa 層で検出された。谷部の谷底部分で，



第125図　遺物集中4号・出土遺物



第126図　遺物集中５号・出土遺物

大型の壺が横倒しになって，つぶれた状態で検出された。土坑１・２号がすぐ西隣にあるが，関連性を何わせるような状況は発見できなかった。周囲に掘り込みなどは見られなかった。

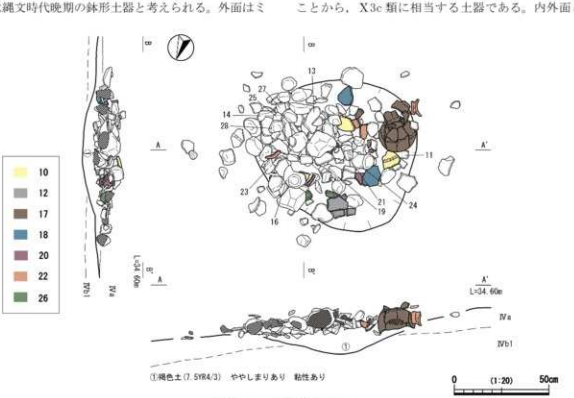
８は，Ｘ2b 類に比定できる土器である。器高が約56㎝，胴部最大径は約38.5㎝にもなる大型の壺である。外反しながら開く口縁部をもち，肩部は張る。胴部最大径は，肩部の直下あたりにあり，そのままあまりすぼまらずに厚みのある丸底の底部へいたる。そのため底部付近で器形の角度が急にかわる特徴的なプロポーションである。肩部よりやや下方に，上下にうねった刻目の突帯を１条巡らせる。胴部外面は工具による縦方向のナデを施す。内面は風化により剥落が顕著で，調整を確認することが困難であった。突帯の下方には１か所穿孔があり，穿孔は焼成後に外から中に向かって穿つ。割れ部分の右側部分は，７と同じような丸みのある穴を空けるため，穿孔と判断したが，左側部分は，一部接合帯に沿った割れ方をすることから，穿孔の過程で割れてしまった可能性がある。詳細は不明である。

遺物集中６号（第127～129図　９～28）

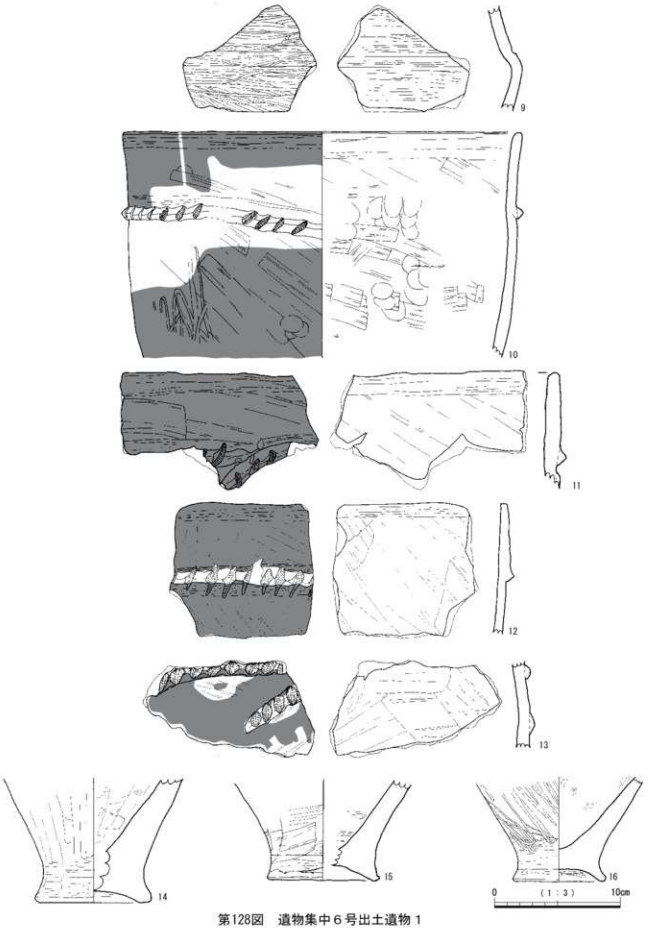
Ｇ-21区Ⅳa 層で検出された。谷底部分にあり，147×95㎝の範囲に土器や礫が集中している。掘り込みをもち，集中部の西側で壺形土器が横倒しになって，つぶれた状態で出土している。壺形土器の周囲には掘り込んだ跡はみられなかった。甕形土器，壺形土器，高坏形土器，坩形土器など多様な土器の破片が出土していることから，廃棄土坑の可能性もある。

９は縄文時代晩期の鉢形土器と考えられる。外面はミガキを施し，内面はよくナデを施す。

10～16は甕形土器である。10～12は直行する口縁部を有する。Ｘ1b 類に相当する土器である。10は，復元口径約31.5㎝を測る。外面調整は全体的には工具によるナデを施すが，部分的には縦方向のミガキを加える。内面は工具や指等によるナデを施す。外面は煤が全体的に付着し，さらに口縁部には一部ふきこぼれの痕跡も確認できる。11・12も外面には煤が付着する。13は口縁部を欠くが，胴部が内湾することから，Ｘ1b 類土器に含めた。外面に煤が付着する。14～16はＸ1c 類にあたる土器である。いずれも脚部は極めて短く，上げ底気味の形態を呈す。16は外面に縦方向のミガキを疎らに施す。17は，中型の壺である。Ｘ2a 類に比定する土器である。口縁端部を欠くが頸部はラッパ状に開きながら伸びる。胴部突帯貼付部に最大径をとり，突帯から頸部までを直線的につなぐ。突帯から下位の胴部はふくらみをもたせたつくりをする。内外面ともに工具によるナデを施す。また，外面には煤が付着する。18・19は，Ｘ2c 類土器にあたる。18は丸底で19は平底である。どちらも工具によるナデ調整で仕上げられる。20～24は，Ｘ4類に相当する土器である。20・21の口縁部は埦形を呈する。口縁部下には刻目突帯を１条貼付する。内外面ともに工具によるナデ後口縁部先端は横ナデで仕上げる。22～24は脚台付の鉢形土器と考えられる。22は口縁部は内湾し，口唇部は先細りを呈する。23も22と器形は類似するものと思われる。24は，内外面ともに，横方向のナデを丁寧に施す。25・26はエンタシス状を呈する高坏の脚筒部であることから，Ｘ3c 類に相当する土器である。内外面とも



第127図　遺物集中６号



第128図　遺物集中６号出土遺物１

にナデを施す。27・28はX5a類土器にあたる。内外面は横方向のナデで仕上げる。28は，胴部は丸みを帯び，底部には平坦面を有する。

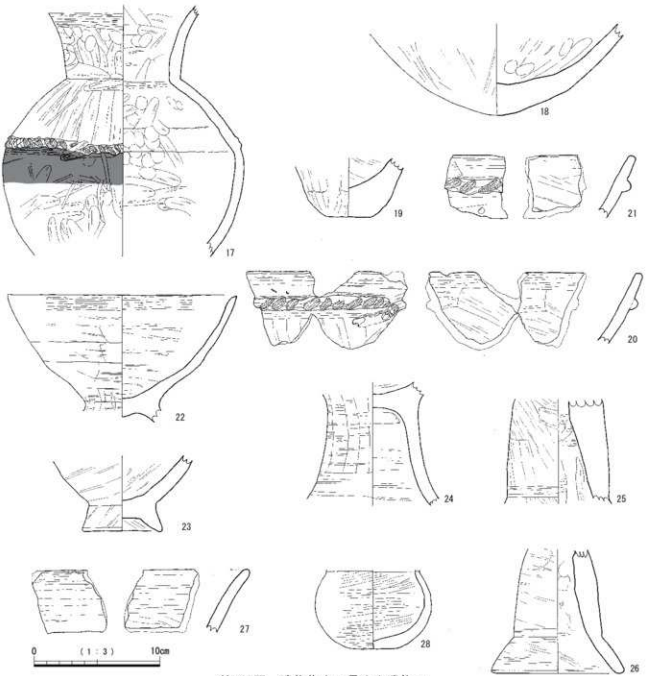
遺物集中７号（第130図　29）

G-21区Ⅳa層で検出された。古墳時代の壺形土器のほぼ完形品である。谷底部分で検出されており，横倒しになった状態で検出された。周囲に掘り込んだ跡は見られなかった。

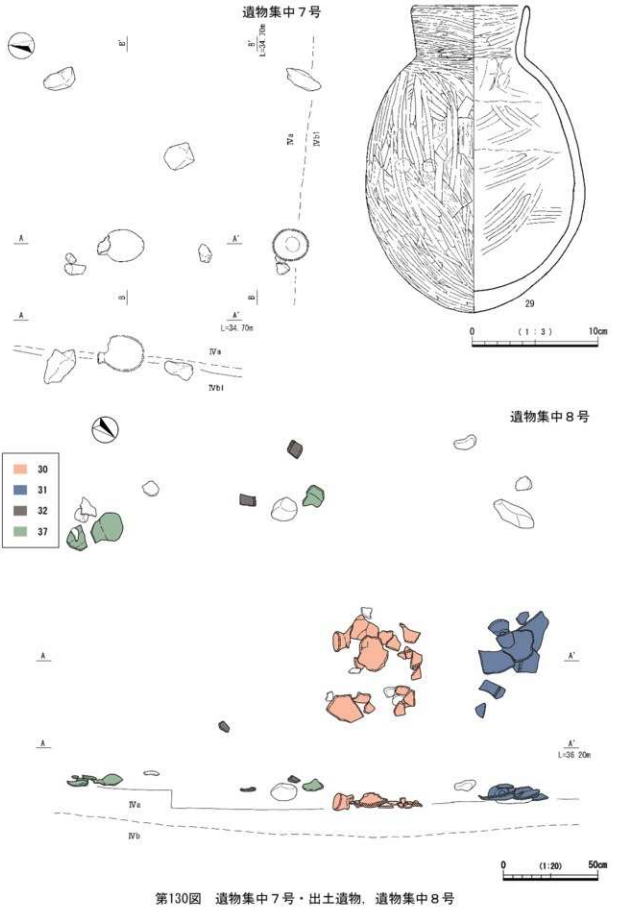
29は完形の小型の壺である。直口縁で肩部は張らず，胴部はやや下膨れとなり，丸底を呈する。X2a類に比定される土器である。口径約9.6cm，器高約24.5cmを測る。外面は口縁部には横方向，胴部には縦方向に丁寧なミガキを施す。内面は，口縁部には横方向のミガキを密に施し，胴部は斜位方向に工具ナデやミガキを不規則に施す。外面には黒色部分がある。（図版39参照）黒色部分は光沢があるため，ミガキが施されていることが分かる。また，肉眼観察の結果，煮沸具として利用した際に付着した煤ではなく，黒斑でもない。このことから，黒色はミガキ前に意図的に付着させたものである可能性がある。

遺物集中８号（第130～132図　30～37）

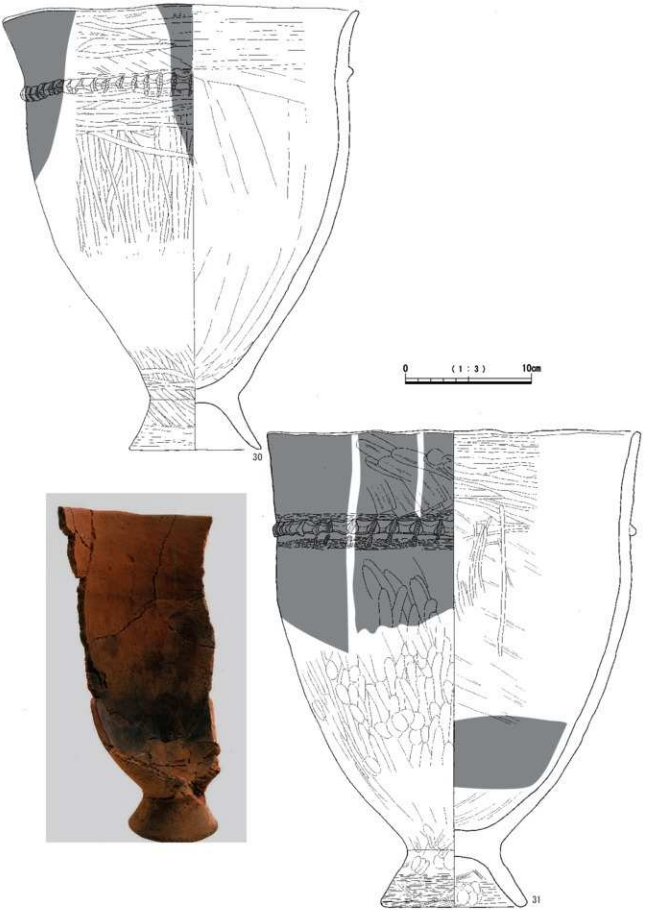
H-19・20区Ⅳa層で検出された。谷底部分にあり，256×158cmの範囲に，甕形土器や壺形土器の破片や礫が集中している。特に土器類は，その場でつぶれたような



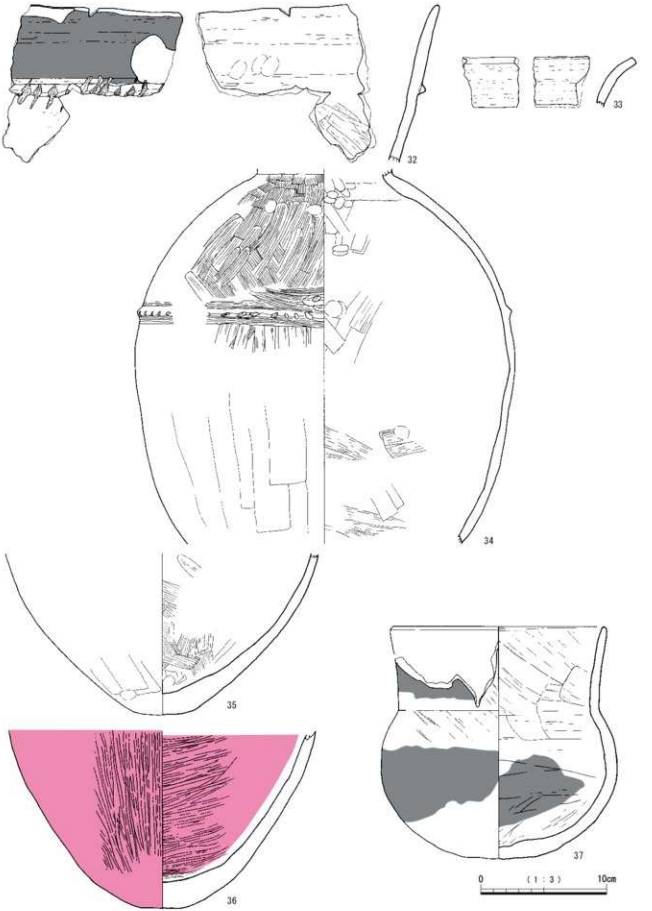
第129図　遺物集中６号出土遺物２



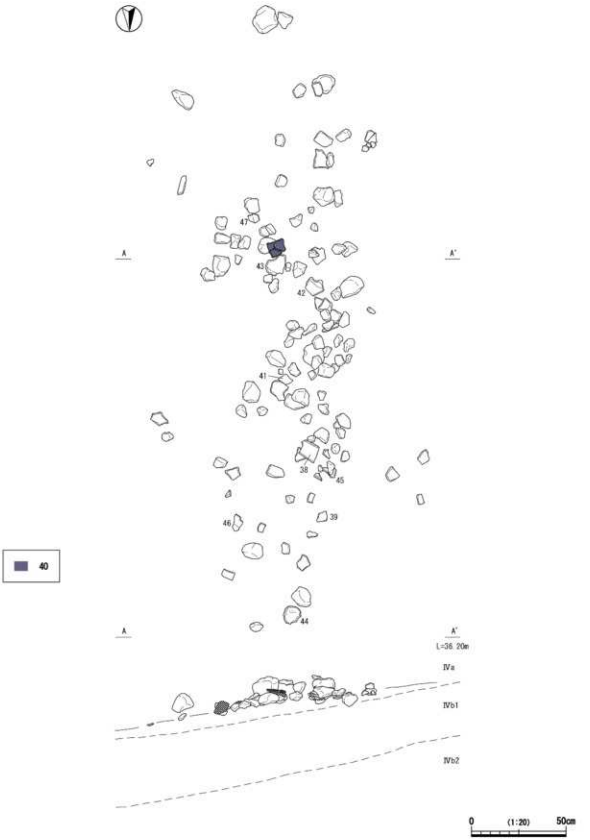
第130図　遺物集中７号・出土遺物，遺物集中８号



第131図　遺物集中８号出土遺物１



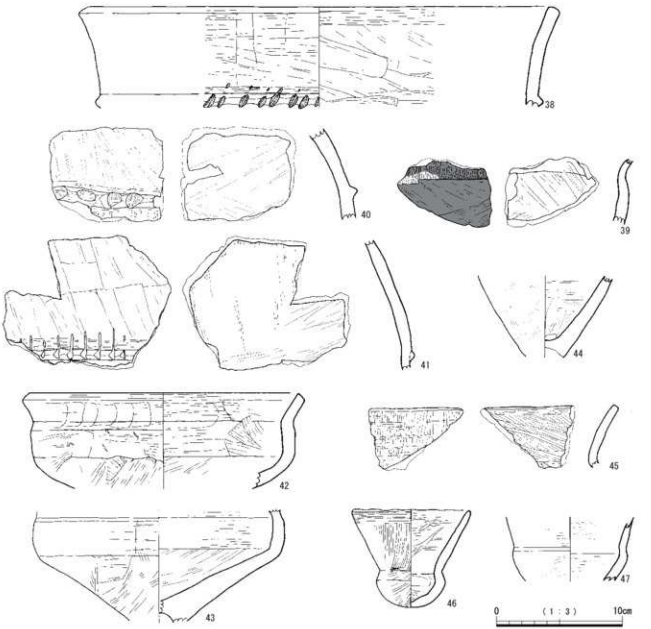
第132図　遺物集中８号出土遺物２



第133図　遺物集中９号

形で出土している。すぐ北側には遺物集中９号がある。

30～33は，甕形土器である。30は，Ⅹ1a 類に相当する。復元口径約28cmである。口縁部はわずかに外湾し，胴部はあまり張らず，脚端部は細く仕上げ，器形は長胴気味である。外面は，胴部には縦かもしくは斜位方向のミガキを丁寧に施した後，口縁部から刻目突帯の付近までは横方向のミガキを丁寧に施す。内面は，胴部は縦方向，口縁部は横方向のナデを施す。胴部最大径から口縁部かけて部分的に煤が付着する。31・32は，Ⅹ1b 類に属する土器である。31は，口縁部が直線的に上に伸びる。突帯直下がやや張るが，緩やかに底部にまで至る。外面は工具によるナデを縦か斜め方向に施す。内面は，口縁部に横方向のミガキ，胴部には縦方向に数本ミガキを施す。外面には煤が付着し，吹きこぼれ痕が観察できる。内面には焦げの痕跡がある。32は，口縁部が外傾する。内外面ともに工具によるナデで仕上げ，器壁が薄いのが特徴的である。口縁部外面の突帯より上部分に煤が付着する。33も外反傾向だが，先端部のみ残存のため詳細は不明である。32・33ともに内外面横ナデで仕上げ，口唇部は平坦面を有する。34はⅩ2a 類に相当する土器である。頸部より上を欠くが，胴部最大径よりやや上に刻目突帯を１条巡らせ，肩部は張らない。内外面調整はともに，ハケメや工具によるナデが施される。35はⅩ2c 類土器に当てはまる。わずかに平坦面をもつ底部である。外面調整は工具ナデ，内面調整はハケメを施す。36は内外面ともに丁寧にミガキを施す。また，赤色顔料も塗布する。37は口縁部形態から，Ⅹ5a 類に比定される。胴部は丸みを帯び，丸底を呈する。内外面ともに工具に



第134図　遺物集中９号出土遺物

よるナデを施す。外面には煤，内面にはコゲが付着していることから，煮沸具として使用されたことがわかる。

遺物集中９号（第133・134図　38～47）

H-19区Ⅳa 層で検出された。谷底部分にあり，330×148cmの範囲に５～10cm大の礫が集中しており，その中に，土器の破片が混ざるようにして出土している。すぐ南側には遺物集中８号がある。

38・39は，甕形土器の口縁部～胴部で，Ⅹ1a 類に相当する土器である。38は，復元口径は約37cmを測り，刻目突帯を貼付する。39は，38よりも外反度合いが強く，口縁部を欠くが器形から外反口縁であると予想できる。外面は口縁部にカキアゲ調整を施し，内面は斜位方向にナデを施す。外面は全体的に煤が付着する。40・41は壺の胴部である。どちらもナデ肩状で，刻目突帯を貼付するが，刻みの幅は違う。内外面の調整はいずれも工具ナデを施す。42・43は高坏形土器である。42は，復元口径約22.5cmを測る。口縁部は屈曲部から短く伸び，口唇部は平坦を有する。43と酷似した器形と胎土であることから同一固体の可能性がある。44はⅩ4類にあたる土器である。底部の凹部は接合痕である。45～47は，坩形土器である。45・46はⅩ5a 類に属する土器である。45は外反口縁であまり長く伸びない。内外面ともに細かなハケメが施されるのが特徴的である。46は復元口径約9.3cmを測る。外傾して開く口縁部に，口縁部より小さい丸底の体部をもつ。47は口縁部先端と底部を欠くため，詳細は不明だが，外傾しながら伸びる口縁部を持つと考えられる。内外面ともに工具ナデを施す。

(5)　道跡

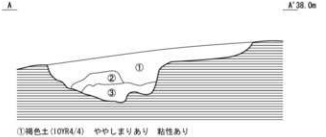
①　古代～中世の道跡

道跡１号（第135図）

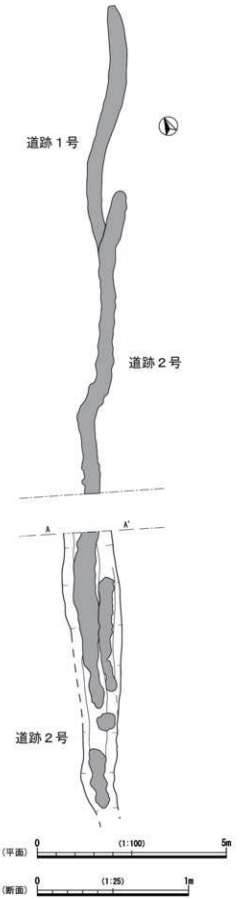
I-19・20区のⅣ層で検出された。検出範囲で長さ約6.5m，幅約0.5mの規模である。谷部の中腹に位置しており，北から南にかけて蛇行しつつ，緩やかに登っていく。道跡２号によって切られている。

道跡２号（第135図）

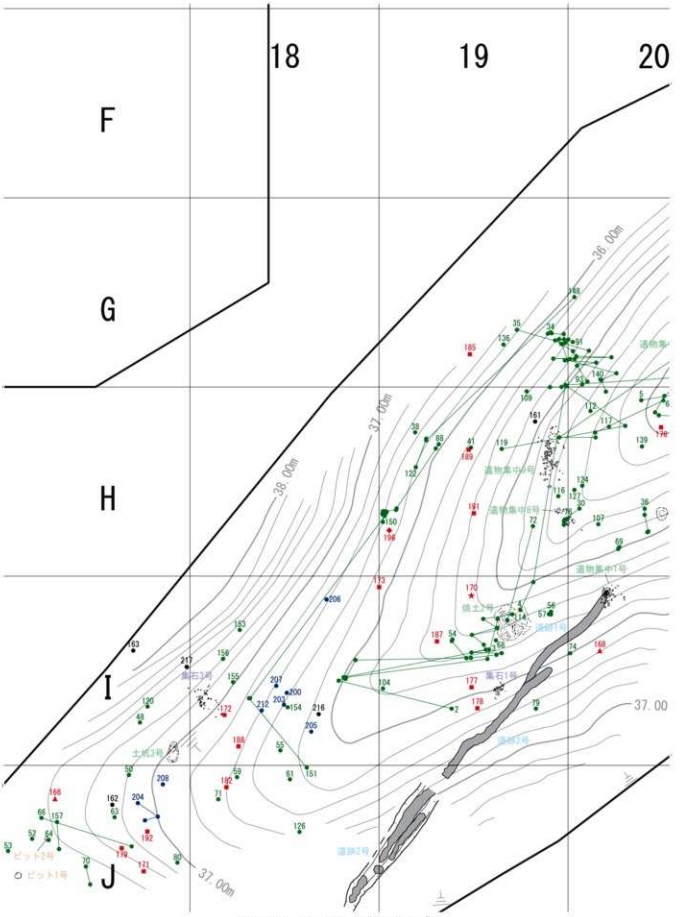
I・J-18・19区のⅣ層で検出された。規模は検出範囲で長さ約16.5m，最大幅約1.5mで，硬化面の厚さが7.5cmである。道跡１号を切って，北から南へと緩やか



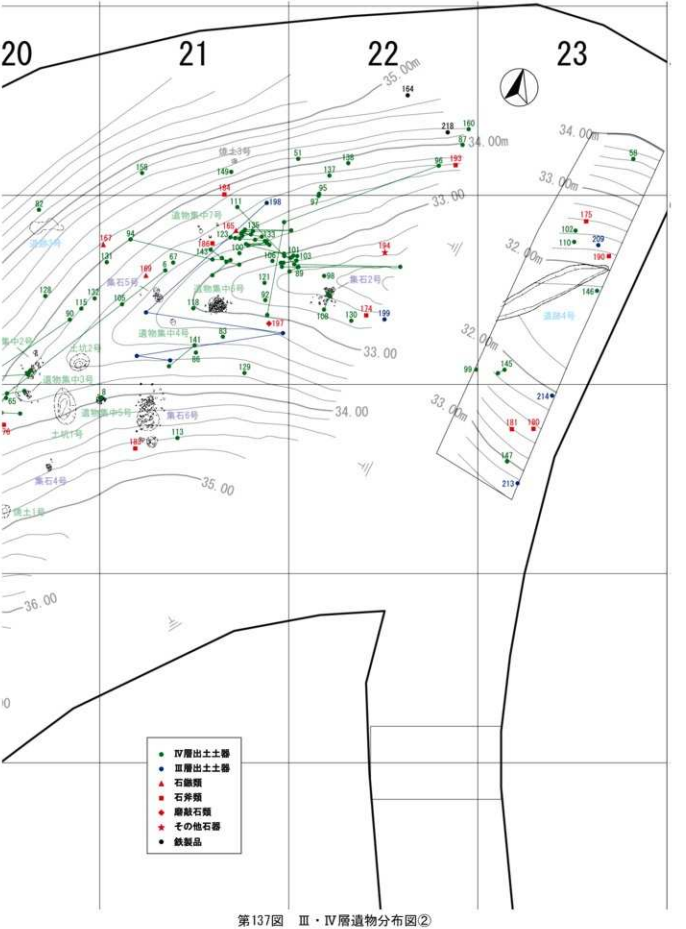
①褐色土(10YR4/4)　やわしまりあり　粘性あり
②にぶい黄褐色土(10YR4/3)　やわしまり強　やや粘性あり
①+③の混土層　ラミナ状堆積でブロック状に堆積する
③灰黄褐色砂質土(10YR4/2)　固くしまる　粘性なし
ラミナ状堆積で砂質強い



第135図　道跡１・２号



第136図　Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図①



第137図　Ⅲ・Ⅳ層遺物分布図②

に登っていく。途中，硬化面が２つに分かれるが，道跡１号との関連は不明である。

3　遺物

(1)　土器

Ⅳ層は，縄文時代早期から近世までの遺物が出土する包含層である。

①　Ⅱ類土器（第138図　48～50）

48～50は，接点は無いが，胎土の色調，厚み，胎土等から同一個体の可能性がある深鉢形土器である。48は，波状口縁を呈する内外面には棒状工具による刺突文を施文する。49・50は，胴部である。内面は粗い貝殻条痕，外面は貝殻連点文を縦に格子目状に施文する。

②　ⅣB類土器（第138図　51～53）

51は，屈曲する口縁部付近である。斜位の貝殻刺突は２段確認できる。胎土に雲母を含む。

52・53は，ⅣB類には比定されない胴部片である。２点は，胎土や色調から，同一個体と考えられる。外面には２条を単位とする波状文，丁寧な刻みを入れた突帯等が貼付される。内面にはヘラ状工具による横位のナデ調整がされる。突帯以下には薄く煤が付着する。

③　ⅣD類土器（第138図　54）

54は，復元口径約23.5cmを測る深鉢形土器である。最大径は口縁部にもち，口縁部外面には２条の沈線を巡らせる。また，胴部屈曲部にも沈線を１条巡らせる。外面は屈曲部より上部には丁寧なナデのち粗いミガキを施し，屈曲部より下は丁寧なナデ後粗い縦のミガキを施す。内面は横位のミガキに近いナデを施す。胎土には長石を多く含む。口唇は断面方形を呈する。胴部屈曲部より上には煤が付着し，内面にはコゲ痕が確認できる。

④　VA2類土器（第139図　55）

55は浅鉢形土器である。復元口径約27cmを測る。頸部でくの字状に屈曲する。口縁部は短く，口唇部は，口縁外面の器面調整を内面に施した１条の横位沈線によって玉縁状の仕上がりとなっている。外面は口縁部まで横方向のミガキを施し，頸部から下は丁寧なヘラナデを施す。内面の器面は丁寧な横位のナデを施す。

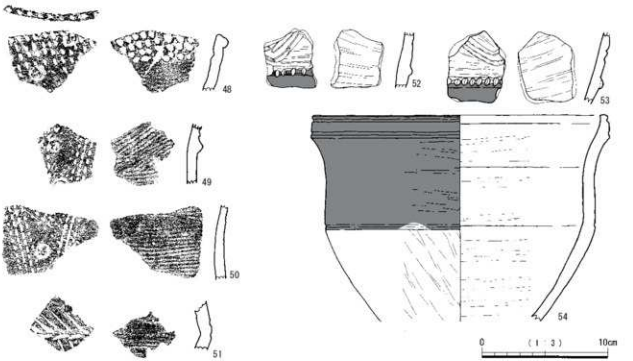
⑤　VB1類土器（第139図　56～58）

56は，深鉢である。外湾してのびる口縁部で口唇部は平坦に整える。外面は，横位の貝殻条痕の後口縁部下位から胴部は粗い縦方向のミガキを施し，口縁部は粗い横方向のミガキを施す。復元口径は約24cmを測る。内面は，横方向のミガキを施す。57は，直線的な外反する口縁部でロ唇部は平坦を呈する。内外面ともにミガキに近いナデを施す。58は，直線的に伸びる口縁部である。外面は粗い横位のナデを施す。内面は，上位に貝殻条痕を施し，その後下位にはヘラケズリで器面を整える。

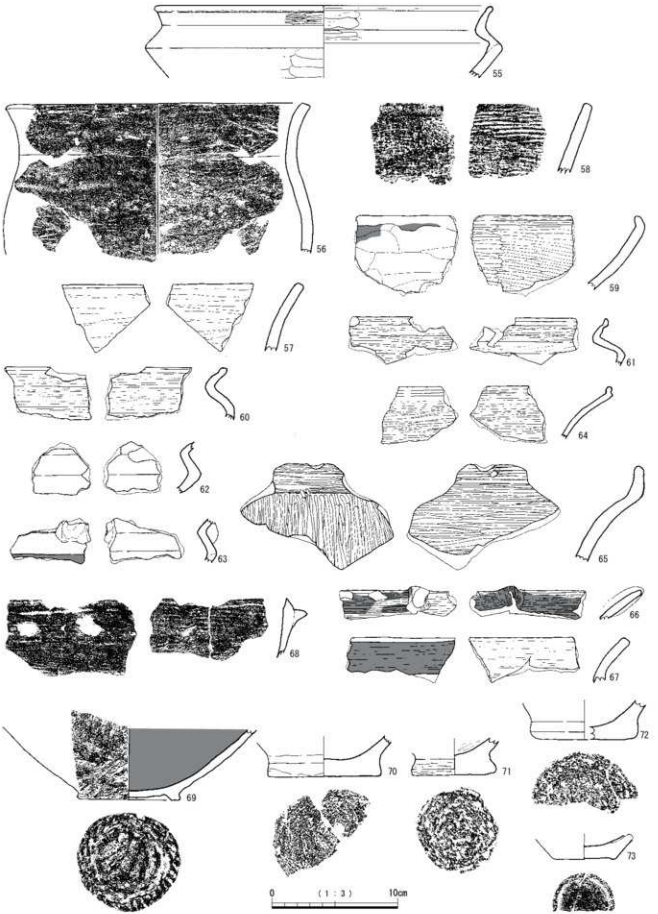
⑥　VB3類土器（第139図　59～68）

59は，半粗製の鉢である。胴部は内湾し，口縁部は端部が内側に屈曲する。外面は口縁のみ横ナデ，下位はヘラ状工具による粗いナデを施し，内面は端部まで横位の丁寧なミガキを施す。また外面には一部煤が付着する。

60～63は胴部資料も含まれるが，頸部から口縁部が短い資料と考えられる。60は胴部が湾曲し，頸部の屈曲も丸みを帯びる。内外面横位のミガキを丁寧に施す。61の口縁は玉縁状をなし，胴部は算盤玉状を呈す。内外面ともにミガキを施す。62は，算盤玉状に張る胴部資料であ



第138図　Ⅳ層出土遺物１（Ⅱ，ⅣB，ⅣD類）



第139図　Ⅳ層出土遺物２（VA2，VB1，VB3，Ve類）

る。63には頸部外面屈曲部付近にリボン状突起がみられる。外面屈曲部以下には煤が付着する。

64～67は口縁部または頸部が外反して伸びる資料である。64は，頸部で大きく外反して口縁部に至る器形で，内外面ともにミガキ調整を施す。65は，口縁部外面に大きく外反する胴部から，口縁部を短く直立させる。独特な器形を呈する浅鉢である。器面は口縁部～内面にかけては横方向のミガキで，外面は縦方向のミガキで丁寧に調整される。外面については，視覚的効果を意図している可能性がある。口縁部には上端と下端に１条ずつ横位の沈線で施文されるが，あまり丁寧ではなく，特に下端の沈線は引き直しを放置している。66は，内外面のミガキを念入りに施す。口縁部に縦方向に短い粘土紐を貼付する突帯がある。粘土紐はミガキ調整の後に貼付しており，紐を含め貼付部の調整は粗く，特異な印象を受ける。66・67はいずれも外面に煤が付着する。68は内湾する口縁部をもつ。口縁部外面に断面三角の大ぶりな突帯を１条貼付する。突帯下面はよくナデつけられるが，上部分は不十分で接合痕が確認出来る。内外面ともに貝殻条痕後にナデを施す。外面に煤が付着する。全形不明につき器形は不明。

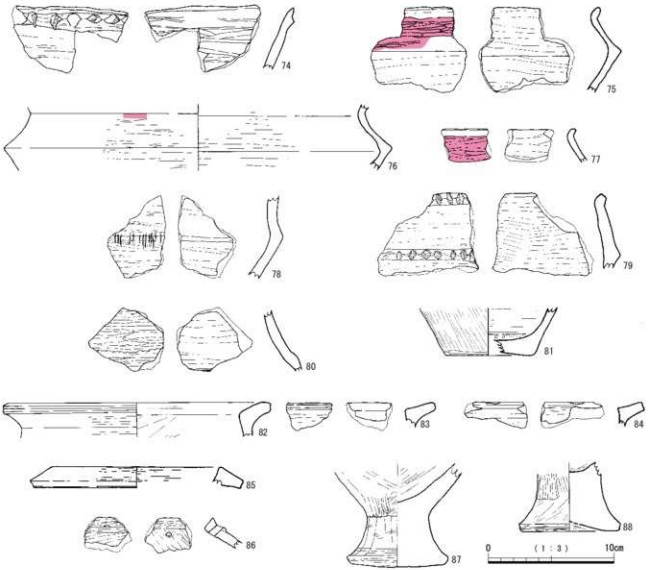
⑦　Ⅴe類土器（第139図　69～73）

69は内外面ともに粗いナデ調整を施す。内面にはコゲが厚く付着する。

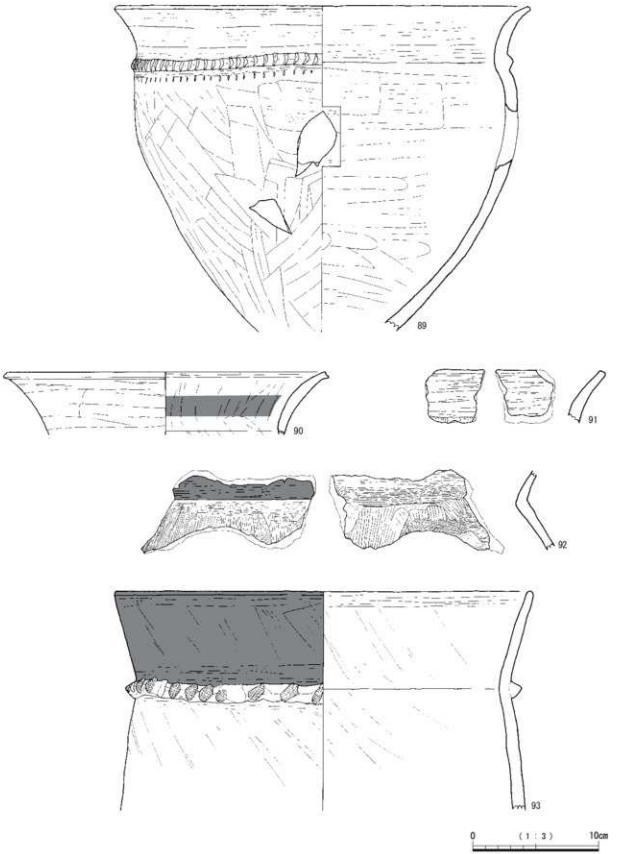
70～72は残存状態の良いものを図化した。厚みのある円盤状の粘土を貼り付けて製作したと思われる底部である。73は，上げ底状を呈する。壺形土器の可能性もある。

⑧　Ⅵ類土器（第140図　74～81）

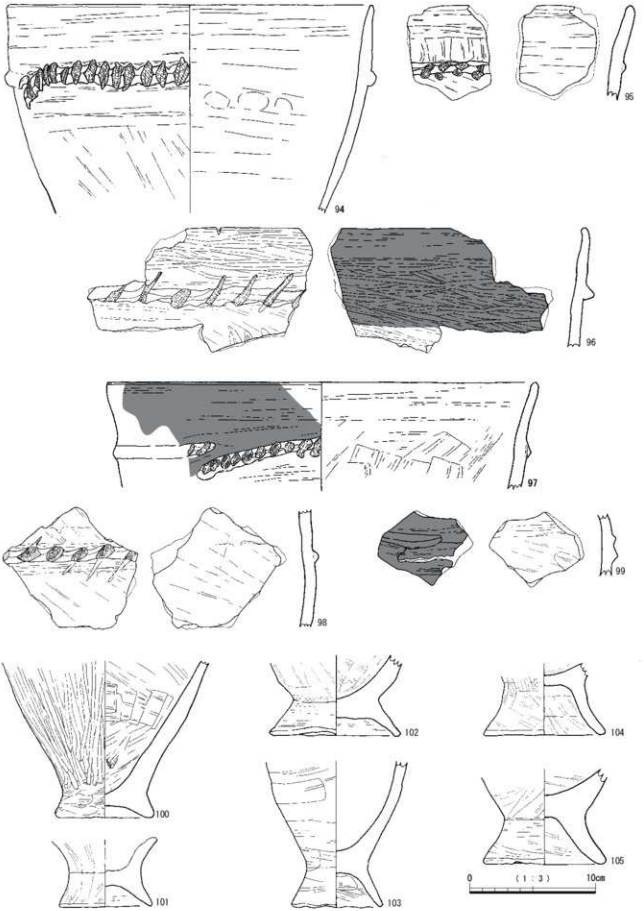
74～78は深鉢形土器である。74は口唇部に接して１条の突帯を貼付する。内面は丁寧な，ミガキにより平滑であるが，外面は粗いナデによるものである。75～77は胴部の屈曲が強く，断面や外面の接合痕から，突帯を貼付していないにしても，厚みをもたせて屈曲を強調させていることがわかる。頸部は大きく内傾する。75・77の口



第140図　Ⅳ層出土遺物３（Ⅵ，Ⅶ，Ⅷ類）



第141図　Ⅳ層出土遺物４（X1a 類）



第142図　Ⅳ層出土遺物５（Ⅹ1b，Ⅹ1c 類）

縁部は外側に折り返し状とする。どちらも，内外面ともにナデ調整がされる。また，外面には一部赤色顔料が塗布される。78は，胴部屈曲部に細かな刻みを入れる。内外面ともに横方向のナデを施す。79は，２条の突帯を持つ甕形土器である。下部突帯付近で屈曲し，器面調整は内外面ともに粗めのナデを施す。80・81は壺形土器である。80は，内傾しながらのびる頸部をもつ。外面は横方向に丁寧にミガキを施し，内面は横方向にナデを施す。81は，平底の底部である。内外面ともにミガキを密に施す。

⑨　Ⅶ類土器（第140図　82～86）

82～84は，甕形土器の口縁部である。口唇部には１条の沈線を巡らせ，横ナデ調整で仕上げる。いずれも胎土には雲母を含む。85・86は壺形土器である。85は，やや垂れ下がり気味の口縁部をもつ。復元口径約15.3cmを測る。調整は横ナデで仕上げる。86は，短頸壺である。口縁上面から焼成前に穿つ穿孔があり，孔の直下に三角突帯を巡らせる。内外面ともにナデ調整で仕上げる。胎土には雲母を含まず，色調も褐色を呈し，在地土器とは異なる。

⑩　Ⅷ類土器（第140図　87・88）

87は充実の脚台である。88は浅い上げ底の脚台である。端部には凹線を巡らせ，胎土には雲母を含む。87は外面に一部縦方向のミガキを施す。88はハケメを施す。

⑪　Ⅹ1a 類土器（第141図　89～93）

89は，復元口径約33cmを測る甕形土器である。外湾する口縁部は短く先細りで，胴部は口縁部直下が張る形態を呈す。屈曲部外面に貼付する刻目突帯には，幅の狭い工具による刻みを，狭い間隔で施す。胴部調整は，外面は横位や斜位方向に工具ナデ，内面は横方向に工具ナデを施す。内外面ともに横ナデで仕上げる。断面の形状から，外から内にむかって穿たれたと考えられる穿孔が少なくとも２か所ある。90は，外反する口縁部で，強い横ナデによりロ唇部が凹む。外面は工具による横方向のナデを施し，内面は縦方向にナデを施す。内面の中位にはコゲが帯状に薄く付着する。91は，外面の一部に縦方向のハケメが確認できる。内外面ともに横ナデで仕上げる。92は口縁端部を欠くが，屈曲部をもち外傾して開く口縁部と思われる。胴部は強く張り出し，内外面ともに明瞭なハケメを施す。口縁部は横ナデで仕上げる。口縁部外面の屈曲部から上には煤が付着する。93は，口縁部が強く直線的に外傾する。復元口径は約30cmを測る。屈曲部に刻目突帯を貼付する。内外面ともに工具による斜位のナデを施す。外面には屈曲部以上に煤が付着する。

⑫　Ⅹ1b 類土器（第142図　94～99）

94は，口縁端部がやや外に開くが，胴部から外へ開く口縁部である。復元口径約29.5cmを測る。外面の突帯には刻目を密に施す。口縁部から突帯貼付部分付近は横ナデ及び横方向のナデを施し，胴部は斜位方向の工具ナデを施す。内面は横方向のナデを全体に施す。95は，刻目を突帯の上下から別々に施し，１単位の刻みのようにみせているところが数か所確認できる。胎土には１mm以下の黒色粒を多く含む。外面は工具による縦方向のナデのち横ナデを施す。内面は，胴部には横方向のナデ，口縁部は横ナデを施す。96は，直線的に伸びる口縁部で，端部のみ内湾させる。外面には刻目突帯を貼付する。また内外面に横方向のミガキを施す。97は，直線的に伸びる口縁部である。復元口径約34.5cmを測る。外面には刻目突帯を巡らせるが，結合させずに貼付する。調整は外面は横方向のナデを施す。内面は，斜位方向の工具ナデ後横ナデを施す。外面には部分的に煤が付着する。98・99は口縁部を欠く。98は外面に刻目突帯を貼付する。内外面ともに工具によるナデを施す。胎土には角閃石を少量含む。

99はやや小型の甕である。貼付する突帯には刻みを施さない。内外面ともに横方向のナデを施す。外面には煤が付着する。

⑬　Ⅹ1c 類土器（第142図　100～105）

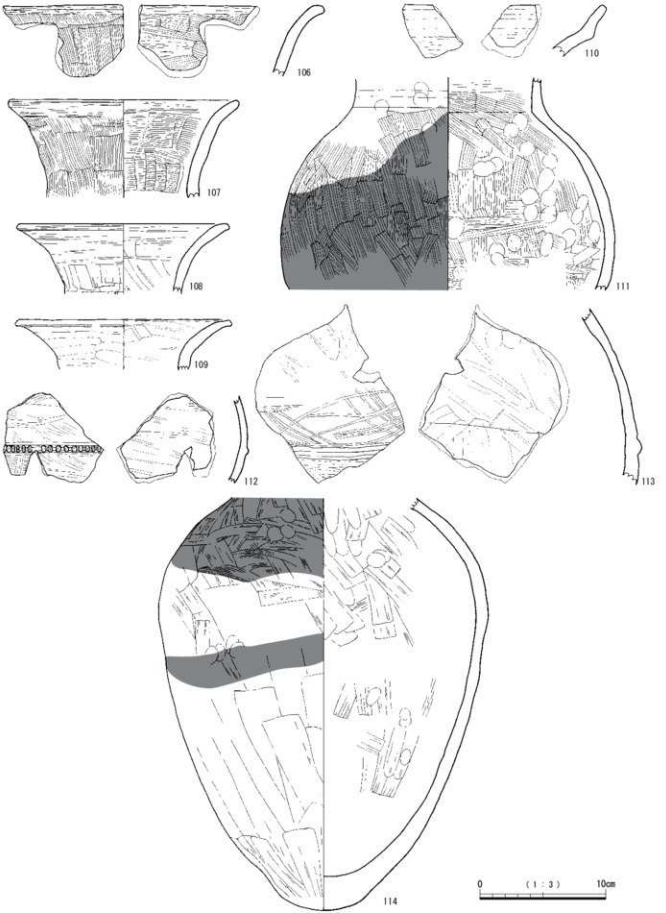
100・101は脚高が低い。100は，脚部製作時の粘土接合が甘くナデが不十分でいびつだが，外面に縦方向のミガキを密に施す。内面は斜位方向に工具ナデを施す。102・103はゆがみが顕著で，鉢の可能性も考えられる。調整は内外面ともに工具ナデを施す。104・105はハの字状に開く脚部である。内外面ともに工具ナデを施す。

⑭　Ⅹ2a 類土器（第143図　106～113）

106～109は壺の口縁部で，口縁部がラッパ状に開く。肩部形態は不明である。110は二重口縁壺の口縁部である。屈曲が緩やかであり，稜線は弱い。内外面ともに横ナデを施す。111は，胴部最大径は約26.5cmを測る中型の壺である。頸部は内面では明瞭に屈曲するが，外面は緩やかに立ち上がる。頸部の途中から口縁部を欠くが，外反口縁が想定される。外面の調整は丁寧なハケメ調整で，内面も同じくハケメや指頭圧痕が確認できる。外面には煤が付着する。112は，小型の壺の胴部で，細い刻みを均等に入れた突帯を１条貼付する。内外面ともに工具によるナデ調整を施す。113は，外面に無刻突帯を疎に貼付する。また，外面調整は横方向のミガキを施す。内面調整は工具ナデを施す。

⑮　Ⅹ2b 類土器（第143図　114）

114は，頸部から上を欠くが，肩部が張り底部へとすぼまる大型壺である。胴部最大径は，約24.5cmを測る。底部は分銅型で厚みを持つ。内外面ともに工具によるナデを縦方向に施す。また，外面の肩部より上部と，胴部に煤が付着する。



第143図　Ⅳ層出土遺物６（Ⅹ2a，Ⅹ2b 類）

⑯　X2c 類土器（第144図　115～121）

115は丸底を呈する。外面は工具ナデを施し，内面は工具ナデ後，底付近にミガキをまばらに施す。116・117は小型の壺底部である。内外面ともに工具ナデで仕上げる。118は底部分に平坦面を形成する。内外面ともに工具による丁寧なナデが施されるが，外面底端部は，ナデが不十分のため工具の打ち込み痕が確認できる。119～121は平底を呈す。119・120は内外面ともに工具ナデで仕上げる。121は分銅型の底部で，ややゆがみがある。胎土には5㎜大の赤褐色粒を含み，2㎜大の白色粒も多く含む。

⑰　X3a 類土器（第145図　122～126）

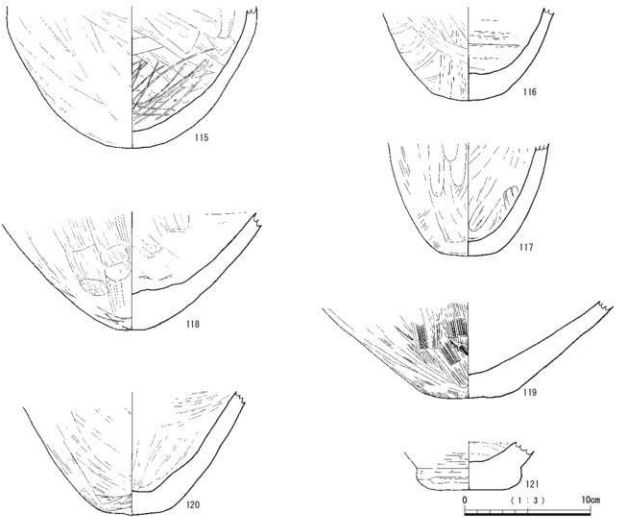
122は頸部の屈曲は明瞭だが，そこから口縁部までは短く外反しない。復元口径は約31.5㎝を測る。口唇部は平坦にまとめ，舌状とはならない。外面は縦方向の工具ナデ，内面は斜位方向のナデを施す。123は，122より緩やかに屈曲し立ち上がりも強い。内外面ともにナデを施す。124は，器壁にやや厚みがある口縁部である。内外面ともに横方向のナデを施す。125は，直線的に開く口縁部でロ唇端部は矩形を呈する。内外面ともにミガキを縦方向に施す。126は，緩く外反して開く口縁部である。屈曲部に弱い稜線が入り，外面は屈曲部以下を斜位方向に工具ナデし，屈曲部から上は横方向の工具ナデを施す。内面は全体的に横方向のナデを施す。

⑱　X3b 類土器（第145図　127）

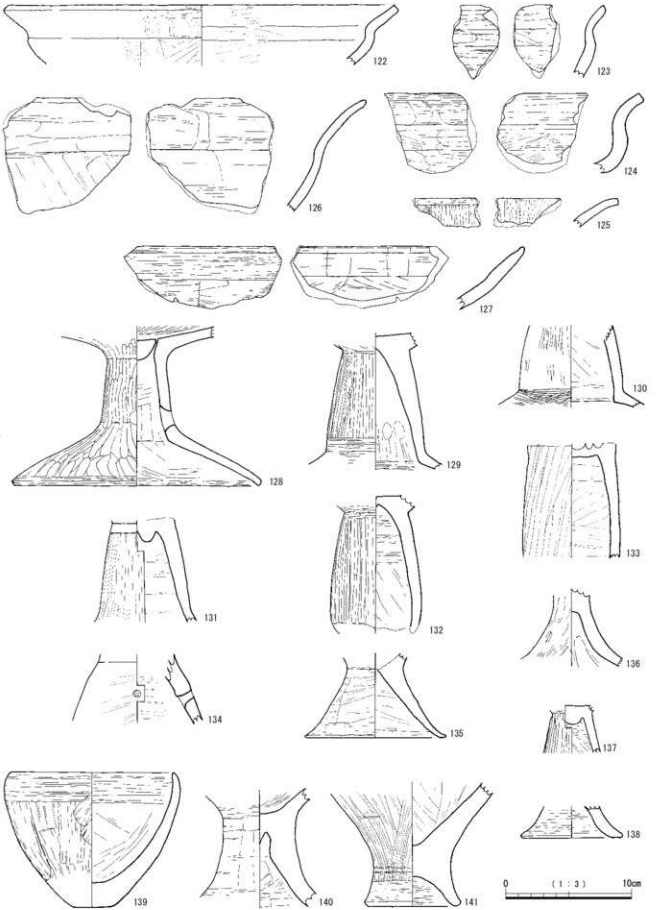
127は，内湾しながら開く口縁部である。口縁端部は先細りにして端部を直立させる。内外面ともに横方向のナデを施す。

⑲　X3c 類土器（第145図　128～134）

128は裾部がやや塊状に広がる。外面は縦方向に丁寧なミガキを施す。内面は工具によるナデを施す。坏底部内面も丁寧にミガキを施す。焼成前の穿孔は少なくとも1か所確認できる。129・130は筒部の膨らみが強く，裾部との境界が顕著に屈曲する。外面は縦方向のミガキを施す。130は裾部分には斜位方向のミガキを密に施す。内面は工具によるナデを施す。131は裾部との境に屈曲部をもつが，稜は形成しない。外面は縦方向のミガキ，内面は横方向のナデを施す。132～134は裾部分を欠くが



第144図　Ⅳ層出土遺物７（X2c 類）



第145図　Ⅳ層出土遺物８（X3a，X3b，X3c，X3d，X4類）

エンタシス状に膨らむ。134は焼成前の穿孔が少なくとも1か所ある。内外面はナデ調整で仕上げる。

⑳　X3d 類土器（第145図　135～138）

135は，スカート状に開き，裾端部は先細りとなる。136～138も同じく開く脚部と考えられる。137は縦方向にミガキを施す。内面は工具によるナデを施す。136・138はナデ調整で仕上げる。

㉑　X4類土器（第145図　139～141）

139は，復元口径約13.5cmの平底を呈する鉢形土器である。内外面ともに工具ナデを施し，口縁部は横ナデで仕上げる。140は台付鉢である。内外面ともに工具によるナデを施す。141は，台付鉢の底部の可能性もあるが，脚台部分の内面が丁寧なナデで調整されていることから，蓋形土器の把手部分の可能性もある。しかし，蓋形土器の場合は内面裾部分に煤が確認できるが，裾部分を欠くため，鉢形土器とした。外面は縦方向に工具による丁寧なナデを施す。内面は工具ナデで仕上げる。

㉒　X5b 類土器（第146図　142）

142は，外傾しながら開く先細りの口縁部である。外面は横方向のミガキを施し，内面は口縁部先端のみに横方向のミガキを施す。

㉓　X5c 類土器（第146図　143～147）

143は，丸底を呈する大きめの坩形土器である。外面は細かなハケメで丁寧に調整する。内面は工具による斜位方向のナデを施す。外面には斜めの帯状に煤が付着することから，煮沸具として利用する際に，一定の時間，傾けて使用したことが予想される。144は胴部が厚く，扁球状を呈するが，底部は平坦面をもつ。内外面ともに工具によるナデを施す。145は肩部が張るやや大きめの坩形土器である。外面は斜位方向に密なミガキを施す。内面は工具によるナデやや指ナデを丁寧に施す。146は小さめの坩形土器で器壁が厚く内外面ともにナデ調整を施す。147は，鉢形のミニチュア土器である。

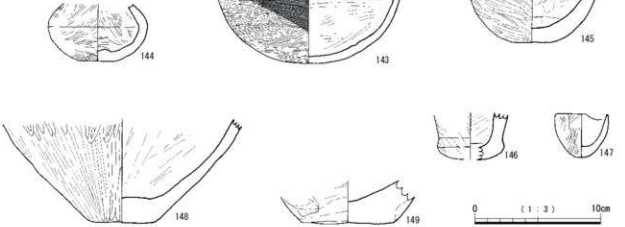
㉔　Ⅻ類土器（第146図　148・149）

148・149は，壺の底部である。148は，外面に縦方向のミガキを施す。内面は工具によるナデを施す。149は内外面ともに工具によるナデを施す。

㉕　古代～近世の遺物（第147図　150～164）

150～156は土師器である。150・151は，土師甕であり，胎土や器壁の厚み等から，同一個体と思われる。150は復元口径約25.2cm，151は最大径約24cmを測る。外面は縦方向のハケメ，横方向に帯状のナデを施す。内面はケズリにより器壁をやや薄く仕上げる。152は埦である。底径約7.8cmを測る。153は坏である。153は底部外面を面取りして多面多角形状に成形する。底部はヘラ切りである。底径は約6.9cmを測る。154は，やや大型の埦である。底径約5.1cmを測る。体部とは異なる赤色粘土でつくった高台を貼り付けた貼付高台である。いずれも内面を研磨された黒色に仕上げる黒色土器A類に相当する。155は，埦である。高台外側を強くなでる。底部はヘラ切りである。156は，坏である。回転ナデで成形する。底部はヘラ切りである。157は古代の須恵器で甕の胴部である。外面は，格子目タタキで，内面は丸い当て具痕が確認され，器壁が薄い。158は，輸入陶器の高台部分と思われる。時期は12世紀～13世紀前半頃と思われる。159は，小破片のため器種はよく分からないが，青磁の盤か香炉かもしくは壺の可能性が高いと思われる。内外面ともに施釉して，外面には算木を浮彫りで表す。時期は中世頃と思われる。160は，焙烙である。復元口径約20.4cmを測る。底部の器壁は極めて薄く仕上げる。

161～163は鉄製品である。161は手斧形を呈する鉄斧である。刃部はバチ形をなし，刃部幅は約4.5cm程度で，

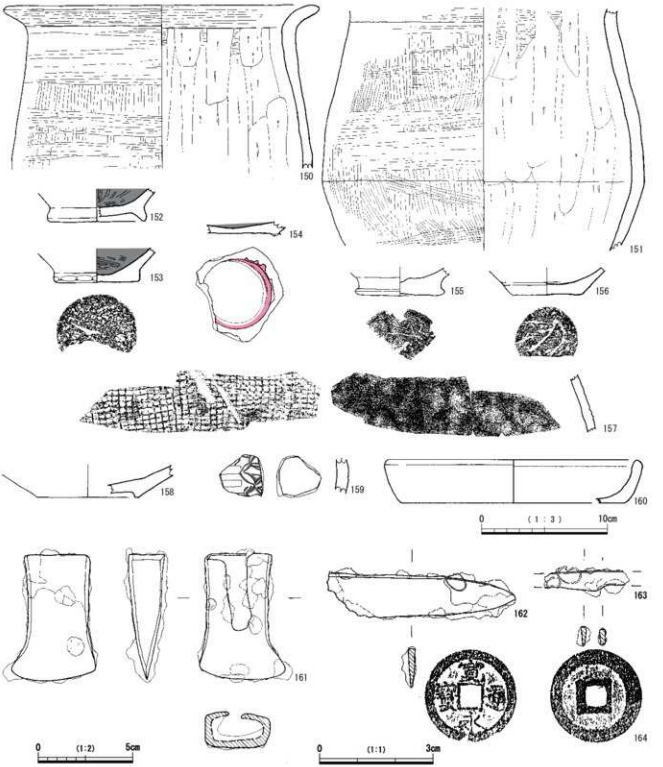


第146図　Ⅳ層出土遺物９（X5b，X5c，Ⅻ類）

基部は袋状である。時期の詳細は不明だが，銹部分が少なく鉄分の残りが良いことから，中世ごろの資料であると考えられる。162は，片刃の小刀の切先部分である。この形態の小刀は，古墳時代の後期には出現するが，包含層出土であることから時期不明とする。163は，刀子である。切先に向かってわずかに細くなる形状と思われるが切先を欠く。片関で，関部に最大幅をもつと思われる。茎部断面は台形状を呈す。時期の詳細は不明だが，あまり銹が付着しておらず，重みもあることから，中世～近世の資料である可能性が高い。164は寛永通寶である。1636年（寛永13年）から幕末まで鋳造された。

(2)　石器

Ⅳ層からは，石鏃，打製石斧，磨製石斧，磨・敲石類などが出土した。基本的な地形が段丘間の傾斜面である



第147図　Ⅳ層出土遺物10（古代～近世）

ことから，ほとんどは上位面のB地点からの流れ込みなどにより当該地点に遺存することとなったものと考えられ，出土層の違いに有意性はないと想定される。

本報告では，器種ごとに分類し，特徴について概説する。各器種における細分については，必要に応じて各項で述べる。

① 石鏃（第148図　165～169）

磨製石鏃１点，打製石鏃４点を図化した。

165は，頁岩製の磨製石鏃である。完成品だが基部側の下半を欠損する。側縁はわずかに非対称に仕上げているほか，峰は側縁よりも厚みを持たせている。鋒はみられない。裏面には素材剥離面が残る。長さ1.9cm，幅1.9cm，厚さ0.2cm，重さ0.9ｇで，Ⅳa 層から出土した。

166～169は打製石鏃である。それぞれ平面形が異なるが，浅い凹基のもの（166・167）と凹基で脚部を形成するもの（168・169）がある。

166は，安山岩製の完形品である。比較的大型で，深い剥離により整形までほぼ済ませており，刃部調整は簡便に行っている。長さ2.7cm，幅2.2cm，厚さ0.4cm，重さ1.6ｇで，Ⅳa 層から出土した。167は，黒曜石製で左下端のみ欠損する。石材は不純物をほとんど含まずほぼ透明だが縞模様がある。両側縁は丁寧な刃部調整が施されているため，ごく細かい鋸歯状になっている。長さ1.2cm，幅1.4cm，厚さ0.3cm，重さ0.4ｇで，Ⅳb 層から出土した。168は，安山岩製で右脚端のみ欠損する。平面形状は二等辺三角形だが，基部のほか両側縁も中央部を軽く凹ませる整形をしているため，峰と脚部をより突出させた形状に仕上げている。深い成形剥離で形状までほぼ整え，刃部調整は峰周辺の正面側と脚部に観察される。長さ2.6cm，幅1.8cm，厚さ0.3cm，重さ1.1ｇで，Ⅳb 層から出土した。169は，安山岩製で，脚部が非対称であるが完形品である。平面形は正三角形だが，基部を大きく抉り両側縁の中央部も凹ませる整形のために特徴的な平面形状に仕上がっている。素材の厚みを除去しきれていないほか，峰よりも脚部の方が丁寧に整えられている。長さ2.3cm，幅2.3cm，厚さ0.4cm，重さ0.9ｇで，Ⅳ層から出土した。

② ２次加工剥片（第148図　170）

170は黒曜石製で，縦長剥片が長軸方向に割れた（分割した？）ものを素材とし，右側縁の正面側に刃部加工を丁寧に施している。石材は，黒色で透明感のある黒曜石で不純物をほとんど含まない。長さ3.2cm，幅1.2cm，厚さ0.4cm，重さ1.2ｇで，Ⅳb 層から出土した。

③ 打製石斧（第149～152図　171～189）

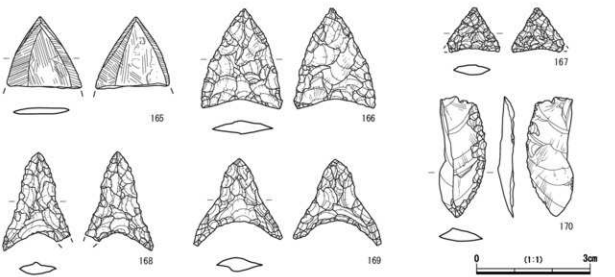
19点を図化した。平面形状をもとに細分して紹介するが，当然のことながら欠損品が多いため，分類には検討の余地を残す。

171～179は，撥形を呈すると考えられる。171は，ホルンフェルス製の完形品であるが，形状から，刃部については再生している可能性もある。横長剥片を素材としているが，正面には節理面を残すなど，成形剥離は周辺部のみにとどまる。基部の整形は丁寧に施される。摩耗については，裏面下半部の稜線でやや顕著に観察できる。長さ10.9cm，幅6.2cm，厚さ1.8cm，重さ143.0ｇで，Ⅳb 層から出土した。172は，大型の打製石斧の欠損品を再利用したものであるが，刃部の整形はごく簡易で，刃部周辺の稜線の摩耗等もさほど顕著ではない。ホルンフェルス製で，長さ9.2cm，幅6.2cm，厚さ2.5cm，重さ131.0ｇである。Ⅳb 層から出土した。173は，安山岩製で，厚みのない横長剥片をうまく利用している。調整は主に両側縁にのみ施される。刃部はごく簡易な加工で済ませており，使用に伴うと考えられる刃毀れを観察できる。摩耗については，刃部にわずかに認められたほか正裏面の中央部にわずかに観察できたが，下半部では正裏面ともにほとんど観察されなかった。長さ14.3cm，幅6.5cm，厚さ1.5cm，重さ150.0ｇで，Ⅳa 層から出土した。174は，ホルンフェルス製で，刃部に刃毀れを観察できるものの完形品である。横長剥片を素材とし，両側縁は直線的に整形し，基部は側縁加工の後に截断し軽く整えている。刃部は素材の形状をうまく利用して簡易な調整で仕上げている。刃毀れのほか摩耗も観察される。長さ12.0cm，幅5.9cm，厚さ1.8cm，重さ115.0ｇで，Ⅳb 層から出土した。175は，ホルンフェルス製の完形品である。横長剥片を素材とし，ほぼ全周から厚みを整える加工を加えたのちに細かな調整で全体を整えた丁寧な仕上げである。長さ10.4cm，幅5.8cm，厚さ1.5cm，重さ95.0ｇで，Ⅳa 層から出土した。176は，硬質頁岩製で，刃部右側を欠損するがそのまま利用している。両側縁は，調整加工のほか部分的に敲打も行い整形している。基部右側端には平滑な面が観察される。左側縁下部に顕著な摩耗面が観察されるほか，正面下半部も稜線や剥離面に摩耗部分を観察できる。長さ13.9cm，幅6.9cm，厚さ1.8cm，重さ153.0ｇで，Ⅳb 層から出土した。177は短冊形で，ホルンフェルス製で刃部を欠損する。上下の位置関係については逆の可能性もあるが，176と同じ側縁端に平滑な面が観察されたことから，図示した状態を正位と想定している。厚みのある横長剥片を素材とし，周辺加工のみで整形を済ませている。長さ9.1cm，幅5.4cm，厚さ1.8cm，重さ129.0ｇで，Ⅳb 層から出土した。178は，頁岩製で基部を欠損する。刃部は，非対称ながら体部よりやや幅広に丁寧に整形され凸刃となる。両側縁は直線状に整えられており，本来はやや大型だったと想定される。裏面側は，刃部中央に観察される擦痕のほか，稜線など広く摩耗が観察される。長さ10.8cm，幅7.1cm，厚さ1.9cm，重さ172.0ｇで，Ⅳb 層から出土した。179は，ホルンフェルス製だが素材の薄さが目を引

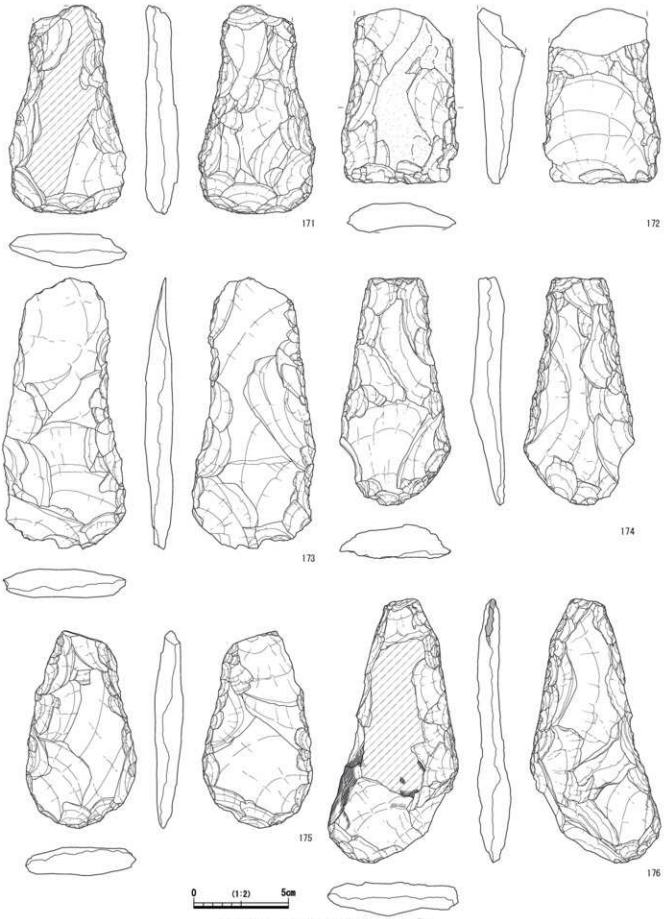
く資料である。基部側を大きく欠損しているが，他の資料と同様に素材の形状を生かして側縁の調整と刃部の簡易な加工で仕上げていると考えられる。刃部については研磨加工の可能性があるが，打製石斧に分類した。長さ6.9cm，幅6.9cm，厚さ1.1cm，重さ62.0ｇで，Ⅳb層から出土した。

180～183は，いずれも破損しているが両耳形と考えられる。180は，硬質頁岩製で刃部を欠損する。正裏面に広く磨面が観察されるのが特徴で，特に基部上端は稜線が丸くなって截断面も摩滅している。刃部側破断面には，正面側のみ微細な剥離が観察されるため，転用された可能性もある。長さ9.7cm，幅5.8cm，厚さ1.6cm，重さ107.0ｇで，Ⅳb層から出土した。181は，安山岩製で基部を欠損する。小型のラケット型である可能性もあるが刃部の平面形から両耳形に分類した。厚みは比較的薄いものの，刃部を中心に正裏面の広範囲で擦痕を顕著に観察することができ，刃毀れに擦痕が重複している部分もある。また，右側縁には擦り切りによる細かい刻み目が並行して6か所確認される。長さ8.6cm，幅6.9cm，厚さ1.5cm，重さ104.0ｇで，Ⅳb層から出土した。182は，頁岩製で基部を欠損する。この資料も素材の形状を生かして最低限の加工しか施さずに仕上げているようである。顕著な刃毀れや摩耗は観察されないが，刃部並びに正面側の剥離面や稜線にわずかな摩滅部を認める。長さ8.8cm，幅6.9cm，厚さ1.8cm，重さ98.0ｇで，Ⅳa層から出土した。183は，安山岩製で基部及び刃部を欠損する。整形加工は主に正面側に粗く施されており，その点から未製品の可能性も想定されるが，破断部の状況から製品と考えた。全体の形状は非対称だった可能性がある。長さ9.9cm，幅5.9cm，厚さ1.3cm，重さ90.0ｇで，Ⅳb層から出土した。

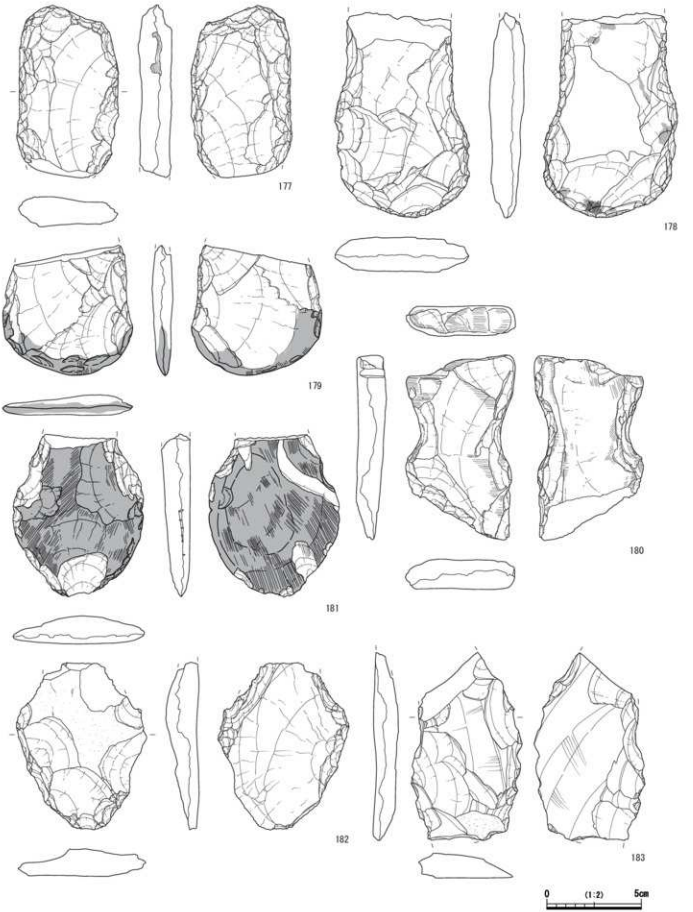
184～189は，有肩型もしくはラケット型を呈すると考えられる。184は，ホルンフェルス製で刃部側を大きく欠損する。微細な整形加工が全周に観察されるが，基部上端にはわずかに稜線の摩滅が観察されるため，当該部分も一時的になにがしかの用途に用いられた可能性がある。また，裏面には自然面や稜線に部分的ながら広く摩耗部が観察される。長さ10.1cm，幅6.4cm，厚さ2.0cm，重さ142.0ｇで，Ⅳa層から出土した。185は，安山岩製で基部端と刃部を広く欠損する。正面側の稜線は，全体的に摩滅している。また，刃部側破断面には右下端を中心に微細な調整が観察されるため，何らかの利器として転用されたと考えられる。長さ11.6cm，幅7.1cm，厚さ1.8cm，重さ134.0ｇで，Ⅳb層から出土した。186も，基部端と刃部を広く欠損するが，ラケット型とするとかなり大型だった可能性がある。ホルンフェルス製で，現状では非対称である。裏面側は，基部側と刃部側からの破断により広く剥脱している。長さ14.9cm，幅8.0cm，厚さ1.7cm，重さ240.0ｇで，Ⅳb層から出土した。187は，硬質頁岩製で基部と刃部左端を欠損する。現状非対称であるが，刃部には整形加工がほとんどみられないのに顕著な摩滅を観察できることなどから，繰り返し刃部を再生した結果の形状である可能性がある。正面には下半部に広く擦痕を観察できるほか，両側縁も摩滅している。長さ11.1cm，幅8.4cm，厚さ1.5cm，重さ254.0ｇで，Ⅳb層から出土した。188は，ホルンフェルス製で刃部を広く欠損する。基部端は，破損と考えられるが截断している可能性もある。ごく簡易な周辺加工で整形を済ませている。長さ10.3cm，幅7.1cm，厚さ1.6cm，重さ116.0ｇで，Ⅳb層から出土した。189は，剥離面の状況などから，未製品と考えられる。ただし，右側縁の浅い抉り部には摩滅部が観察されることから，何らかの利器に転用された可能性がある。長さ11.0cm，幅8.3cm，厚さ1.1cm，重さ94.0ｇの頁岩製で，Ⅳb層から出土した。



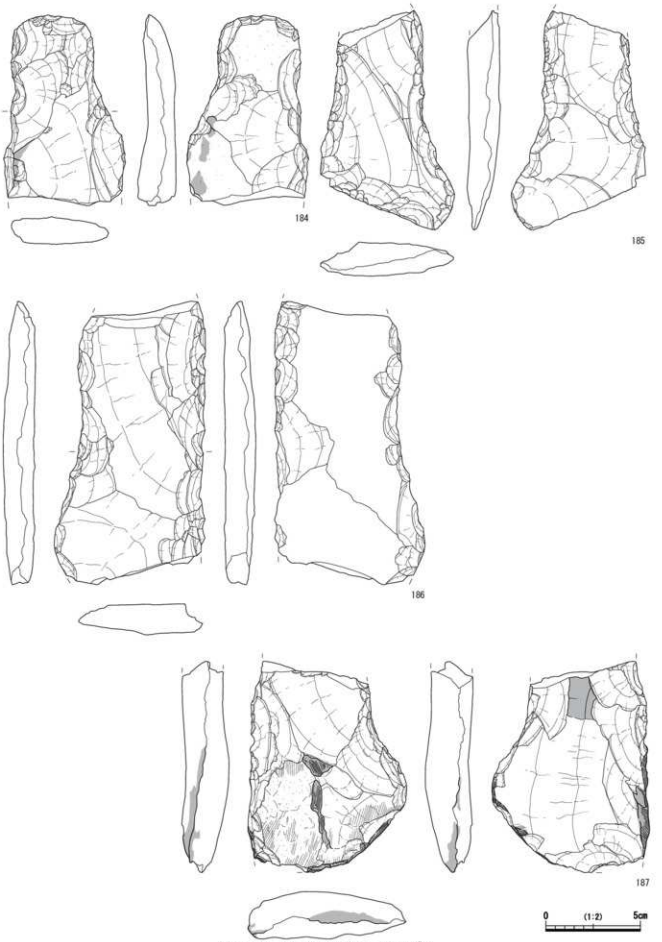
第148図　Ⅳ層出土遺物11（石器①）



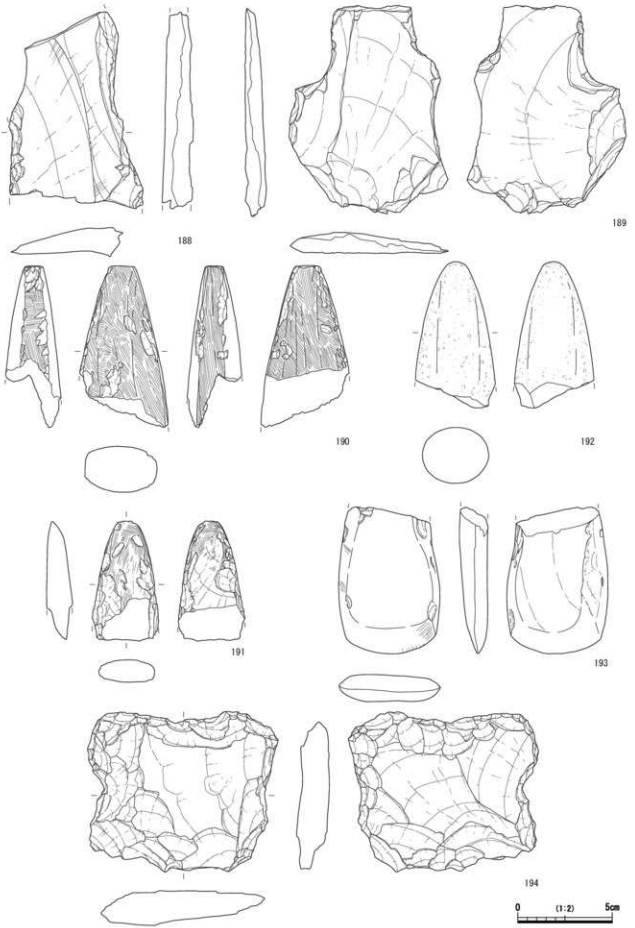
第149図　Ⅳ層出土遺物12（石器②）



第150図　Ⅳ層出土遺物13（石器③）



第151図　Ⅳ層出土遺物14（石器④）



第152図　Ⅳ層出土遺物15（石器⑤）

④　磨製石斧（第152図　190～193）

4点を図化した。すべて欠損品である。

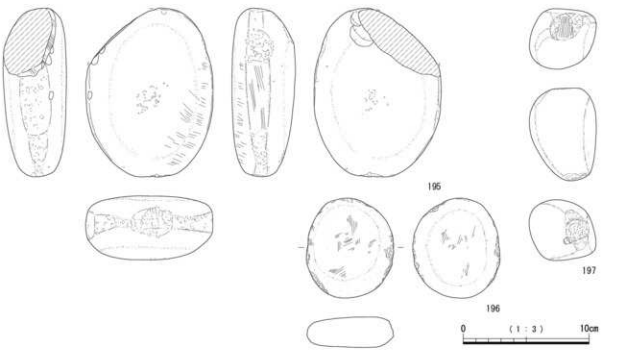
190，191は定角式の磨製石斧と考えられる。どちらも刃部を欠損するが，190は全面に研磨が及んでおり，191は剥離整形の痕跡を残す。基部端は，190はわずかな平坦面を作り出すが191は双刃状に仕上げる。190が長さ8.5cm，幅4.7cm，厚さ2.9cm，重さ91.0ｇ，Ⅳb層出土で頁岩製，191は長さ6.4cm，幅3.5cm，厚さ1.2cm，重さ37.0ｇ，Ⅳb層出土でホルンフェルス製である。192は，乳棒状を呈すると考えられる。緻密な砂岩製で，器面は研磨で仕上げているが敲打整形の痕跡がわずかに残る。長さ7.8cm，幅4.2cm，厚さ3.5cm，重さ136.0ｇで，Ⅳb層から出土した。193は扁平な刃部である。安山岩製で，刃部及び両側縁のみ研磨を施し整形し，正裏面も研磨しているが剥離面を残す。破断しているが刃部にはほとんど刃毀れがない。長さ7.8cm，幅5.3cm，厚さ1.4cm，重さ92.0ｇで，Ⅳb層から出土した。

⑤　礫器（第152図　194）

194は，硬質頁岩製である。おおむね方形に成形した剥片の上辺と左辺に浅い抉り加工を施している。右辺にもより浅く小さいが抉りが観察される。下辺は左半部にのみ正裏面から剥離加工を施している。打製石斧にみられたような摩滅部は観察されない。ややバランスは悪いが，十字型石器の未製品の可能性もある。長さ8.4cm，幅10.1cm，厚さ1.8cm，重さ199.0ｇで，Ⅳb層から出土した。

⑥　磨・敲石，叩き石類（第153図　195～197）

195は，砂岩製で正裏面に顕著な磨面が形成されているほか，右側面にも磨面が形成されている。さらに，正面右下には擦痕も観察される。また，左上面角部と下端の作業面には線状痕が観察されることから，叩き石や砥石としても利用されていた可能性が考えられる。長さ13.3cm，幅10.1cm，厚さ5.1cm，重さ1018.0ｇで，Ⅳb層から出土した。196は，花崗岩製で正裏面とも顕著な磨面が形成されている。特に裏面は中央がごく浅く凹むが，その形状に沿って磨面が形成されている。正面には，擦痕も一部観察できるがごく浅く不明瞭である。側面の敲打部もごく軽い使用頻度だったと考えられる。長さ7.9cm，幅6.9cm，厚さ2.4cm，重さ218.0ｇで，Ⅳb層から出土した。197は，均質な砂岩製の叩き石と考えられる。上下端にある作業面は，どちらも浅くU字状に凹む。そして，その凹みの軸線はおよそ90度ずれている。また，両作業面とも凹みの軸線に沿って細い線状痕が観察できる。長さ7.3cm，幅5.3cm，厚さ4.8cm，重さ264.0ｇで，Ⅳa層から出土した。



第153図　Ⅳ層出土遺物16（石器⑥）

第２節　Ⅲ層以降の調査

１　調査の概要

Ⅲ層の調査は，10m四方のグリッドを設定し，全面発掘調査を行った。Ⅲ層が残存している範囲は一部だが，そこからは古墳時代から近世までの遺構・遺物が出土している。層序によって，明確な時代区分ができなかった。Ⅳ層の時期には谷部だったところも，Ⅲ層の時期になると谷部の堆積が進み，傾斜面ではあるが，かなり平坦な地形になってきたことが想定される。

遺構は，道跡を検出している。しっかりとした硬化面をもち，調査区東端部のＡ地点との境で検出された。谷部が，かなり埋まった時期に形成されている。

遺物は，弥生から中世の遺物が多く，須恵器・土師器・青磁・白磁などが出土している。ただし，谷部にあるため，様々な時代の遺物が出土している。

２　遺構

(1)　道跡

①　古代～中世の道跡

道跡４号（第154図）

Ｇ-23区のⅢ層で検出された。調査区の東端にあり，検出範囲で長さ約6.3m，幅約1.2mの規模で，硬化面は厚さは約５cmである。Ⅳ層の埋土が谷を埋めた頃に，道として機能していたことが伺える。

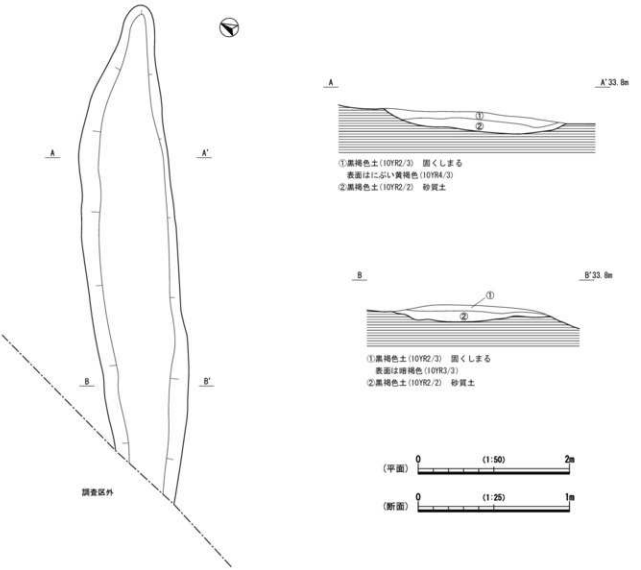
３　遺物

Ⅲ層は，弥生時代から中世の遺物が出土した。

(1)　土器

ア　Ⅵ類土器（第155図　198・199）

198は，口径約20.1cmを測る，広口の壺である。頸部から外反して伸びる口縁部形態である。頸部と胴部の境には段を有する。内外面はともに工具による横方向のナ

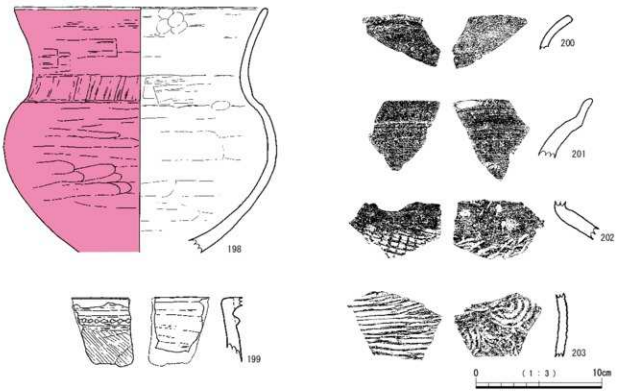


第154図　道跡４号

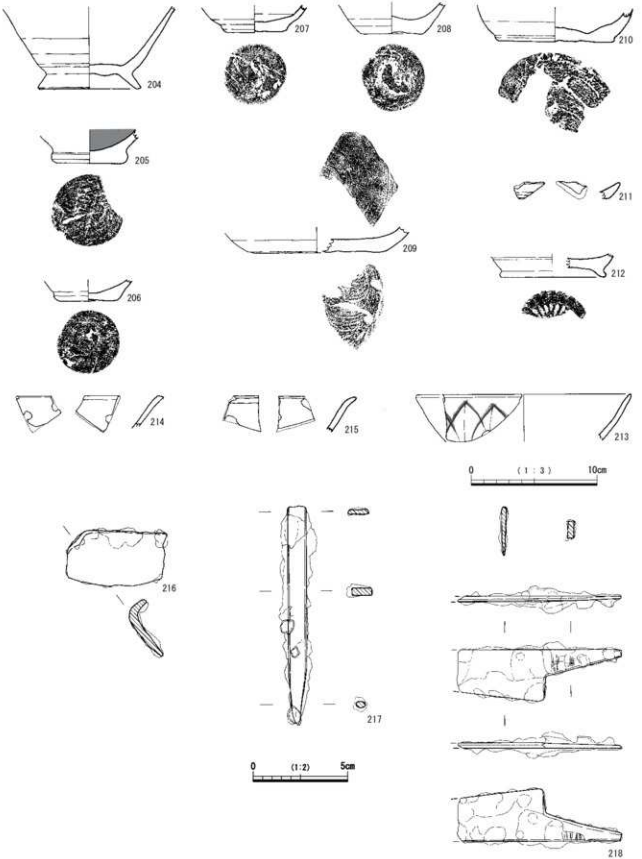
デを施すが，内面には接合痕が確認できる。外面は全体的に赤色顔料を塗布する。胎土は精製で角閃石の細粒をわずかに含む。搬入品の可能性がある。199は，甕形土器である。口縁部は逆L字状に屈曲し，水平に伸びるが，口縁部先端を欠くため，口唇部の形態は不明である。口縁部直下に突帯を１条貼付して，左から右側に向かって浅く密な刻みを施す。胴部外面は斜位方向にナデを施し，突帯部分は横方向にナデを施す。胎土には雲母を少量含む。

イ　古代～近世の遺物（第155・156図　200～218）

200～203は須恵器の甕である。200は外反口縁で，色調は明淡灰色で，器面には気泡が目立つ。風化が進んでいる。201は二重口縁を呈し，横ナデで仕上げる。胎土は褐色を呈し，焼成は良くない。口縁部内面に稜をつくる。202は，肩部で内外面ともにタタキ痕が確認できる。外面は格子目タタキ，内面は同心円タタキが確認できる。色調は赤褐色を呈し，焼成は悪い。時期は古代と考えられる。203は胴部で，外面平行タタキ，内面同心円タタキを施す。器壁は薄く色調は灰色で焼成良好。204～212は土師器である。204・205は埴である。204は，体部は直線的に開く。脚台は平面がやや楕円に仕上げられている。復元底径約8.4cmを測る。205は黒色土器A類で，底部はヘラ切りである。底径約６cmを測る。時期は古代と考えられる。206～208は，坏もしくは皿である。206・207の底部は上げ底の底部形態を呈し，206～208の底部はヘラ切りと思われるが摩耗が顕著のため詳細不明。206は底径約5.1cmを測り焼成良好。207は体部が底部から角度をかえて立ち上がる。内底面にも屈曲あり。復元底径約4.8cmを測る。208は，底部にやや厚みがあり，体部は底部から直線的に立ち上がる。胎土には赤色粒をわずかに含む。復元底径約5.1cmを測る。時期は古代～中世と思われる。209・210は坏かもしくは盤と思われる。それぞれ209は復元底径約10.8cm，210は約9.6cmを測る。底部は糸切りである。211は小皿の口縁部である。外面に沈線を２条巡らせる。時期は中世と思われる。212は坏もしくは埴と思われる。高台の見込みに放射状のミガキを施す。強めの回転ナデで整形される。213は青磁碗である。復元口径約17.1cmを測る。体部から口縁部にかけて内湾する。外面には鎬連弁文をもうける。釉は全体的に薄くかかり灰緑色を呈し，胎土色調は灰白を呈する。時期は13世紀前半頃である。214・215は白磁碗で端反口縁を呈し，全体に透明釉を施釉する。胎土の色調は灰白を呈する。いずれも時期は12世紀後半～13世紀前半である。216は鉄鎌の柄込部分と考えられ，左上部を折り曲げている。時期は古代～中世と思われる。217は釘である。銹に厚く覆われ，全体形状が不明瞭である。時期不明。218は刀子である。切先に向かって細くなる形状を呈する。閂部は片閂で，約1.3mm直角気味に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなり，茎断面は台形を呈する。柄部の木質が付着する。



第155図　Ⅲ層出土遺物１（弥生～古代・中世）



第156図　Ⅲ層出土遺物２（弥生～古代・中世）

第19表　D地点　遺構観察表

検出番号	掲載番号	出遺構番号	区	検出面	埋土	大きさ（cm） 長軸	短軸	深さ	掘載遺物	遺物等	時代	備考
116	土坑1号	SD427	H-20	4b2	7.暗褐色土2暗褐色土	185	114	50		縄文式	古墳時代	
	土坑2号	SD428	G-20	4b2	7.暗褐色土2暗褐色土	105	85	40		縄文式	古墳時代	
	土坑3号	SD441	I-17	4a	1.黒褐色土2黒褐色土3黒色弱粘土同土8黒色土	110	80	30		—	古墳時代	
117	焼土1号	SF052	H-20	4b1	1.明赤褐色土2黒褐色土	60	59	11		—	古墳時代	
	焼土2号	SF051	I-19	4a	1.暗褐色土，黄褐色砂質土2褐色土	226	212	35		—	古墳時代	
	焼土3号	SF053	F-21	4a	1.赤褐色土2赤褐色土	31	25	8		—	古墳時代	
118	集石1号	SS402	I-19	4b3	—	95	57	—		—	縄文晩期	
	集石2号	SS353	G-22	4b3	—	135	103	—		土器	縄文晩期	
	集石3号	SS405	I-17-18	4b	—	192	125	—		—	縄文晩期	
119	集石4号	SS386	H-20	4b3	—	57	45	8		—	縄文晩期	
	集石5号	SS387	G-21	4b3	—	55	49	10		—	縄文晩期	
120	集石6号	SS361	H-21	4b3	—	339	158	9		—	縄文晩期	
121	遺物集中1号	SC057	I-20	4b1	—	132	108	—	1～2	縄文式	古墳時代	
123	遺物集中2号	SC051	G-20	4b	—	185	119	—	4～8	縄文式	古墳時代	
	遺物集中3号	SC052	H-20	4b	—	150	72	—		縄文式	古墳時代	
125	遺物集中4号	SC049	G-21	4a	—	35	25	—	7	縄文式	古墳時代	
126	遺物集中5号	SC050	H-20・21	4a	—	54	53	—	8	縄文式	古墳時代	
127	遺物集中6号	SC053	G-21	4a	1.褐色土	147	95	—	9～23	縄文式	古墳時代	
130	遺物集中7号	SC054	G-21	4a	—	110	90	—	29	縄文式	古墳時代	
	遺物集中8号	SC055	H-19・20	4a	—	258	158	—	30～37	縄文式	古墳時代	
133	遺物集中9号	SC056	H-19	4a	—	330	146	—	38～67	縄文式	古墳時代	
135	溝跡1号	SM324	I-19-20	4	—	6500	500	—		—	古代～中世	
	溝跡2号	SM325	I-J-18-19	4	1.褐色土2にぶい黄褐色土3灰黄褐色砂質土	8000	500	—		—	古代～中世	
-	溝跡3号	SM325-2	G-20	4b	1.黒褐色土2褐色土	2100	750	1		—	縄文晩期～古墳	
-	ピット1号	P5532	J-16	4a	1.黒褐色土，褐色土	30	25	36		—	古墳～古代	
-	ピット2号	P5534	J-16	4a	1.黒褐色土，褐色土	30	26	39		—	古墳～古代	
154	溝跡4号	SM327	G-23	3	4-4.1.黒褐色土，黄褐色2黒褐色土 5-6.1.黒褐色土，暗褐色2黒褐色土	6300	1250	—		—	古代～中世	

第20表　D地点　土器観察表１

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	胎土 雲母	石英	角閃石	長石	白石英	黒色粒	褐色粒	赤色粒	色調 外面	内面	調整・文様 外面	内面	取上番号	備考
122	1	遺物集中1号	壺	I-20	—	頸部～底部	—	○	—	—	—	○	—	—	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ハケメ	ナデ	SC57-39・40・41・42・44・46・48・49	
	2	遺物集中1号	壺	G-20, H-1・18・19・20	4, 4a・b2, 4b1, 4b2	頸部～胴部	—	○	—	○	○	○	○	—	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/8 明褐	ナデ ハケメ 刻目突帯	ナデ	SC57-22, 94327, 94855, 94876, 94308, 94312, 外ヶ6?第一級，外12第一級，外12第一級	
	3	—	壺	H-1・18・19	4b1, 4b2	頸部～底部	—	○	—	○	○	○	○	—	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/8 明褐	ナデ ハケメ	ナデ	94311, 94326, 外10第一級，外10第一級	
124	4	遺物集中2・3号	壺	G-H-1・18, G-H-20	4, 4b1	口縁部～底部	—	○	○	○	—	○	○	○	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	ナデ ハケメ	ハケメ 工具ナデ 指頭圧痕	SC51・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・20・21・22・23・25・26・27・30・31・33・34・35・36, SC53・6・23・24・26, 94141, 94791, 94793, 94792, 94794, 94291, 94572, 外第一級	
	5	遺物集中2・3号	壺	G-20・21・22, H-20	2, 4, 4b1・2	頸部～底部	—	○	○	—	—	○	—	—	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ 刻目突帯	ナデ	SC51・29, SC52・1・2・3・4・5・6・7・8・10・11・29 一括, 94201, 94790, 首頸一級，外第一級，外12第一級	
	6	遺物集中3号	壺	H-20	4	頸部	—	—	—	—	○	○	○	—	10YR5/3 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	ナデ ミガキ	ナデ 指頭圧痕	SC52-18・19・20一括, 90719, 90802, 94188, 94192, 90869	
125	7	遺物集中4号	壺	G-21	4a	口縁部～底部	—	○	—	○	○	○	—	—	7.5YR6/8 橙	10YR7/6 明黄褐	工具ナデ ハケメ 刻目突帯	工具ナデ ナデ	SC49-1	穿孔
126	8	遺物集中5号	壺	G-20, H-21	4	口縁部～底部	—	○	○	○	—	○	○	—	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	工具ナデ 刻目突帯	ナデ	SC50-1・2・3・4・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・21・22・23・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・34・35・36・37・39・40・41・42・43・44, 90553, 90555, 外第一級	穿孔
128	9	遺物集中6号	鉢	G-21	—	頸部	—	○	○	—	—	○	—	—	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ナデ	SC53-123	
	10	遺物集中6号	壺	G-21	—	口縁部～頸部	—	—	—	○	—	○	—	—	5YR7/6 橙	10YR8/4 浅黄橙	ナデ ミガキ 指頭圧痕 刻目突帯	ナデ 指頭圧痕	SC53-7・93・111・114	煤付着
	11	遺物集中6号	壺	G-21	4a	口縁部～頸部	—	○	○	—	—	○	—	—	5YR7/8 橙	5YR7/6 橙	ナデ 刻目突帯	ナデ	SC53-152・173・184	煤付着

第21表　D地点　土器観察表２

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器種	石鏃	角錐状石器	石匙	石核	両面加工	剥片	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
128	12	遺物集中6号	壺	G-21	－	口縁部～胴部	－	○	○	○	－	○	－	－			ナデ 刻目突帯	ナデ	3C52-41・42・43	埋付書
	13	遺物集中6号	壺	G-21	－	胴部	－	○	○	－	－	－	○	－	10YR3/6 黄橙	7.5YR7/6 橙	ナデ 刻目突帯	ナデ	3C53-70	埋付書
	14	遺物集中6号	壺	G-21	－	胴部	－	○	○	－	－	－	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ	ナデ	3C53-43	
	15	遺物集中6号	壺	G-23	4a	胴部	－	－	○	－	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ	ナデ	3C53-146, 107407	
	16	遺物集中6号	壺	G-21	－	胴部	－	○	－	○	○	○	○	－	2.5YR5/4 にぶい赤橙	2.5YR6/6 橙	ナデ ミガキ	ミガキ	3C53-6	
129	17	遺物集中6号	壺	G-21	－	頸部～胴部	－	－	○	○	－	○	－	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	工具ナデ 刻目突帯	指頭圧痕 ナデ	3C53-168・170・171・174・175・176・177・187	埋付書
	18	遺物集中6号	壺	G-21	－	底部	－	○	○	－	－	○	○	○	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/8 明褐	ナデ	ナデ 指頭圧痕	3C53-82・100	
	19	遺物集中6号	壺	G-21	－	底部	－	○	○	－	－	－	○	－	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3C53-68	
	20	遺物集中6号	鉢	G-21	－	口縁部～胴部	－	○	○	○	－	○	－	－	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	横ナデ ナデ 刻目突帯	ナデ	3C52・59・99	
	21	遺物集中6号	鉢	G-21	－	口縁部	－	－	○	○	－	○	－	－	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	横ナデ 刻目突帯	横ナデ	3C53・76	
	22	遺物集中6号	鉢	G-21	4	口縁部～底部	－	○	－	－	－	－	－	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	3C53-15・17・92・104・105・116・164, 87第一括	
	23	遺物集中6号	壺 OR 鉢	G-21	－	胴部	－	○	○	－	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3C53-16	
	24	遺物集中6号	壺 OR 鉢	G-21	－	胴部	○	○	○	－	○	－	○	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ	ナデ	3C53-98	
	25	遺物集中6号	高坏	G-21	－	胴部	－	○	○	○	－	－	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	3C53-44	
	26	遺物集中6号	高坏	G-21	4	胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/6 にぶい橙	7.5YR6/6 にぶい橙	ナデ	指頭圧痕 ナデ	3C53-57・65・120・121・129・157, 87第一括	
	27	遺物集中6号	坩	G-21	－	口縁部	－	－	○	－	○	○	－	－	10YR5/4 浅黄橙	10YR6/4 浅黄橙	横ナデ	横ナデ	3C53-45	
	28	遺物集中6号	坩	G-21	－	胴部～底部	－	○	○	－	－	○	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 浅黄橙	ナデ	ナデ	3C53-32	
130	29	遺物集中7号	壺	G-21	－	完形品	－	－	－	－	○	○	○	－	5YR4/8 赤褐	5YR4/8 赤褐	ナデ 指頭圧痕 ミガキ	ナデ	3C54-6	
131	30	遺物集中8号	壺	H-19-20	4a, 4b1-2	ほぼ完形	－	－	○	－	○	○	○	－	5YR4/6 赤褐	7.5YR6/6 橙	ナデ ミガキ 刻目突帯	ナデ	3C55-2・4・5・8・9・10・12・24・25・26・27・28・29・30・31・32・33・45, 94008, 94009, 94011, 94012, 94013, 94081, BY 3第一括, BY 52一括	埋付書
	31	遺物集中8号	壺	H-1・19-20	4a, 4a-b2, 4b1-2, 4a2-b1	口縁部～底部	－	○	○	○	－	○	－	－	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	ナデ ミガキ 指頭圧痕	ナデ ミガキ 指頭圧痕	3C55-1・2・14・15・16・17・18・19・20	埋・コゲ付書
132	32	遺物集中8号	壺	H-19-20	－	口縁部	－	－	－	－	○	○	○	－	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	横ナデ ナデ 刻目突帯	横ナデ ナデ 指頭圧痕	3C55-27・38・46	埋付書
	33	遺物集中8号	壺	H-19-20	－	口縁部	－	－	○	－	－	－	○	－	10YR7/6 黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	横ナデ	横ナデ	3C55-＋	
	34	遺物集中8号	壺	G-19・19-20	4, 4b, 4b1, 4b1-2	頸部～胴部	○	○	－	○	－	○	－	－	10YR5/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄橙	工具ナデ ハケメ 刻目突帯	工具ナデ ハケメ 指頭圧痕	106444, 106537, 106568, 106640, 106649, 3C55一括, 94218, 94301, 94317, 87第一括, BY 3第一括, BY 51・52第一括	
	35	－	壺	G-19・19-20, 1-20	4b, 4b1, 4b1下, 4b1-2	底部	○	○	－	○	－	○	－	－	10YR5/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ	工具ナデ ハケメ 指頭圧痕	94133, 94212, 106147, 106386, 106520, BY 51・52第一括	
133	36	遺物集中8号	壺	H-19-20	4b1, 4b2	頸部～底部	－	○	○	○	○	○	－	－	5YR6/6 明赤褐	7.5YR6/6 橙	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	3C55一括, 94008, 94009, 94020, 94021, BY 51第一括, BY 52第一括	
	37	遺物集中8号	壺	H-19-20	4b2	口縁部～底部	－	○	○	○	○	○	－	－	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	ナデ	工具ナデ	3C55-35・40・44・BY 52第一括	埋付書
134	38	遺物集中8号	壺	H-19-20	4b, 4b1	口縁部～頸部	－	－	○	－	○	－	－	－	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	横ナデ ナデ 刻目突帯	横ナデ ナデ	3C56-92, 105780	
	39	遺物集中8号	壺	H-19-20	4b1, 4b2	口縁部～頸部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3C56-105	埋付書
	40	遺物集中8号	壺	H-19	－	頸部	－	－	○	－	○	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR6/6 橙	ナデ 刻目突帯	ナデ	3C56-18	
	41	遺物集中8号	壺	H-19	4a	頸部	－	○	○	○	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	工具ナデ 刻目突帯	ナデ	3C56-81, 105776	
	42	遺物集中8号	台付広口鉢 OR 高坏	H-19	－	口縁部	－	○	○	○	－	○	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙	工具ナデ ナデ	ナデ	3C56-55	
	43	遺物集中8号	台付広口鉢 OR 高坏	H-19	－	坏部	－	○	○	○	○	○	－	－	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	工具ナデ ナデ	ナデ	3C56-17	
	44	遺物集中8号	鉢	H-19	－	胴部	－	－	○	－	○	○	－	－	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	3C56-110	
	45	遺物集中8号	坩	H-19	－	口縁部	○	－	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ハケメ 横ナデ	ハケメ 横ナデ	3C56-100	
	46	遺物集中8号	坩	H-19.G-21	4a	口縁部～底部	－	○	－	○	－	○	－	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	横ナデ	横ナデ 工具ナデ	3C56-3, BY 4第一括	
	47	遺物集中8号	壺	H-19	－	口縁部	－	－	－	－	○	○	○	－	10YR4/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	3C56-26	
138	48	－	深鉢	I-17	4a	口縁部～胴部	－	○	－	－	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ 貝殻刺突文	ナデ 貝殻刺突文	107599	
	49	－	深鉢	I-19-20	4b1	胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ 貝殻連点文	貝殻条痕文	一括	
	50	－	深鉢	J-17	4a	胴部	－	－	－	○	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	ナデ 貝殻連点文	貝殻条痕文	106930	
	51	－	鉢	F-22	4b	胴部	○	－	－	－	－	－	－	－	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	ナデ 貝殻擬突文	ナデ	107598	
	52	－	深鉢	J-17	4a	胴部	－	○	○	○	○	○	－	－	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/6 明褐	ナデ 刻目突帯	ナデ	106423	埋付書
	53	－	深鉢	J-17	4a	胴部	－	○	○	○	○	○	－	－	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/6 明褐	ナデ 刻目突帯	ナデ	106425	埋付書
	54	－	深鉢	I-19	4b3	口縁部～胴部	－	○	－	○	○	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 褐	ナデ	ナデ	105118, 105119, 105110	埋付書

第22表　D地点　土器観察表３

検出面番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器面	胎土	角閃石	長石	白石	黒色粒	赤色粒	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
139	55	－	浅鉢	1-18	4b	口縁部～胴部	－	－	○	－	－	－	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄	工具ナデ ミガキ	磨ナデ	107607	
	56	－	深鉢	H-19	4b3	口縁部～胴部	－	－	○	－	○	－	－	－	7.5YR6/8 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	貝殻条痕文 ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	106056, 106057	
	57	－	深鉢	1-19	4b3	口縁部	－	－	－	○	○	－	－	－	10YR4/1 褐灰	10YR6/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	105058	
	58	－	深鉢	F-23	4a	口縁部	－	○	－	－	○	－	－	－	7.5YR2/3 黒褐	7.5YR4/4 褐	磨ナデ	貝殻条痕文 ヘラケズリ	107846	
	59	－	鉢	J-18	4a	口縁部	○	○	－	○	－	－	－	－	10YR2/2 黒褐	10YR5/3 にぶい黄褐	磨ナデ ヘラナデ	ミガキ	108147	煤付着
	60	－	浅鉢	J-18	4a	口縁部～胴部	－	○	－	－	○	○	－	－	10YR2/1 黒	10YR2/1 黒	ミガキ	ミガキ	108148	
	61	－	浅鉢	J-19	4b	口縁部～胴部	－	○	－	○	－	－	－	－	2.5Y3/1 黒褐	2.5Y5/3 黄褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	107604, Ⅳ b 第一類	
	62	－	浅鉢	H-19-20	4b1	胴部	－	－	－	－	○	○	－	－	7.5YR4/6 褐	7.5YR4/4 褐	ナデ	ナデ	Ⅳ b 第一類	
	63	－	浅鉢	J-17	4b	胴部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/8 橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	108534	煤付着
	64	－	浅鉢	J-17	4b	口縁部	－	－	－	－	○	○	－	－	10YR4/4 褐	10YR4/4 褐	ミガキ	ミガキ	108550	
	65	－	浅鉢	H-20	4, 4b3	口縁部～胴部	－	－	－	－	－	○	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	90832, 94601	
	66	－	浅鉢	J-17	4b	口縁部	－	－	－	○	－	○	－	－	10YR3/2 暗褐	10YR2/3 黒褐	ミガキ 刷毛	ミガキ	108584, 108497	煤付着
	67	－	浅鉢	G-21	4	口縁部	－	－	－	－	○	○	－	－	10YR4/2 灰黄褐	7.5YR5/4 にぶい橙	磨ナデ	磨ナデ	90656	煤付着
	68	－	浅鉢	I-19	4b3	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	10YR5/3 にぶい黄褐	貝殻条痕文 磨ナデ	ナデ	105067	煤付着
	69	－	浅鉢	H-20	4b1	胴部～底部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR2/1 黒	ナデ	ナデ	94625, 94626	煤付着, コゲ付着
	70	－	鉢	J-17	4a, 4b	底部	－	○	－	○	－	－	－	－	7.5YR5/6 明褐	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	108458, 108532	
	71	－	鉢	J-18	4a	底部	－	－	－	○	－	○	－	－	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ	ナデ	108144	
	72	－	鉢	H-1-19	4b2, 4b3	底部	－	－	－	○	○	－	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR4/1 褐灰			94586, 105076	
	73	－	浅鉢？	G-22	4b	底部	－	○	－	○	○	－	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/2 にぶい褐	ナデ	ナデ	Ⅳ b 第一類	
140	74	－	壺	H-1-19-20	4a-b2, 4b1	口縁部	－	○	－	○	－	○	－	－	2.5YR6/4 にぶい黄	2.5YR2/1 黒	ナデ 刷目突帯	ナデ ミガキ	94363, Ⅳ a 第一類, Ⅳ b2 第一類	
	75	－	鉢	I-19-20	4b1	口縁部～胴部	－	－	○	○	－	－	－	－	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y2/1 黒	ナデ ミガキ	ナデ	Ⅳ b 第一類	
	76	－	鉢	H-19	4b3	胴部	○	－	－	－	○	○	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5YR2/1 黒褐	ナデ ミガキ	ナデ	94593	
	77	－	鉢	H-1-19-20	4b1-2	口縁部	－	○	－	○	－	－	－	－	10YR2/1 黒褐	10YR4/1 褐灰	ナデ ミガキ	ナデ	Ⅳ b1-2 第一類	
	78	－	浅鉢	H-1-19	4b3	胴部	－	－	○	○	○	○	－	－	10YR4/2 灰黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	一括	
	79	－	壺	I-19	4b3	口縁部	－	○	－	○	○	－	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	105264	
	80	－	壺	J-17	4a	頸部	－	○	－	－	○	－	○	－	10YR3/1 黒褐	2YR2/2 黒褐	ナデ ミガキ	ナデ	108114	
	81	－	壺	G-21	4b3	底部	－	○	－	○	○	－	－	－	7.5YR2/1 黒褐	7.5YR2/1 黒褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	一括	
	82	－	壺	G-20	4a	口縁部	○	－	－	－	○	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	磨ナデ	磨ナデ	105580	
	83	－	壺	G-21	4a	口縁部	○	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	磨ナデ	磨ナデ	91101	
	84	－	壺	G-20	4	口縁部	○	－	－	－	○	○	○	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	一括	
	85	－	壺	I-18-19	4a	口縁部	○	－	○	－	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	磨ナデ	磨ナデ	一括	
	86	－	無頸壺	G-21	4	口縁部	○	－	－	－	○	－	－	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	90566	
	87	－	壺	F-22	4a	頸部	○	－	－	－	○	○	○	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ナデ ミガキ	ナデ	107765	
	88	－	壺	H-19	4a	頸部	○	－	－	－	○	○	○	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ハケメ ナデ	ナデ	105772	
141	89	－	壺	G-21-22	4a	口縁部～胴部	－	－	－	○	○	○	○	－	5YR6/8 橙	5YR6/8 橙	工具ナデ 刷目突帯	工具ナデ	90900, 90905, 90942, 90967, 90934, 91459, 91158, 91488, 91284, 91395, 91396, 91397, 91462, 91602, 91165, 91439, 91166, 90903, 91159, Ⅳ 類一括	
	90	－	壺	G-20-21, H-19-20	4, 4b1	口縁部	－	－	－	－	○	○	－	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	磨ナデ 工具ナデ	磨ナデ 工具ナデ	94614, 94211, 90705, Ⅳ 類一括	煤・コゲ付着
	91	－	壺	G-20	4a	口縁部	－	○	－	－	－	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	磨ナデ	磨ナデ	106031	
	92	－	壺	G-21	4b1	頸部～胴部	－	○	－	－	○	○	－	－	5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ハケメ ナデ	ナデ ハケメ	91617	煤付着
	93	－	壺	G-19-20, I-20	4a, 4b, 4b1, 4b1上, 4b1-2	口縁部～胴部	－	○	○	－	－	○	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ 磨ナデ 刷目突帯	磨ナデ	106216, 106436, 106438, 106144, 106134, 106394, 106206, 106211, 106139, 94234, 94237, 94340, 94327, 94228, 106259, Ⅳ b1 第一類, Ⅳ b1-2 一括	煤付着
142	94	－	壺	G-21	4, 4a	口縁部～胴部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 浅黄橙	7.5YR7/8 橙	磨ナデ ナデ 刷目突帯	磨ナデ ナデ	90729, 91131, 91664, 91447, Ⅳ 類一括	
	95	－	壺	F-22	4a	口縁部～胴部	－	○	○	○	○	－	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	磨ナデ ナデ 刷目突帯	磨ナデ ナデ	91586	
	96	－	壺	F-22, G-21	4a	口縁部～胴部	－	○	○	－	－	○	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ ミガキ 刷目突帯	ナデ ミガキ	91532, 91530, 107868	煤付着
	97	－	壺	G-22	4a	口縁部～胴部	－	○	○	○	－	○	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	ナデ 刷目突帯	工具ナデ	91367	煤付着
	98	－	壺	G-22	4a	胴部	－	○	○	－	－	○	－	－	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ 刷目突帯	ナデ	91027	

第23表　D地点　土器観察表４

検出番号	掲載番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器面	胎土	角閃石	長石	白石	黒色粒	赤色粒	その他	色調 外面	色調 内面	調整・文様 外面	調整・文様 内面	取上番号	備考
142	99	－	壺	0-22	4a	頸部	－	－	○	○	○	－	○	－			ナデ 突帯	ナデ	106830	煤付着
	100	－	壺	0-21	4a	頸部	－	－	○	－	○	○	○	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ヘラナデ ナデ	91168	
	101	－	壺	0-22	4a	頸部	－	○	－	○	－	○	○	赤色粒 雲母	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	90864	
	102	－	壺	0-23	4	頸部	－	○	－	○	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ヘラナデ ナデ	ナデ	107259	
	103	－	壺	0-22	4a	頸部	－	－	－	○	○	○	○	炭化	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	90865	
	104	－	壺	1-19	4a	頸部	－	○	○	○	○	－	－	－	10YR7/4 明黄褐	明黄褐	ヘラナデ	ナデ	94043	
	105	－	壺	0-21	4	頸部	－	○	－	○	○	○	－	－	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	ナデ	ナデ	90588	
143	106	－	壺	0-19-21	4,4a	口縁部	○	○	－	○	－	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ハケメ 磨ナデ	ハケメ 磨ナデ	91151	
	107	－	壺	0-20	4a	口縁部	○	－	－	－	－	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ハケメ 磨ナデ	ハケメ 磨ナデ	94002	
	108	－	壺	0-22	4a	口縁部	－	○	－	○	○	－	○	－	7.5YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	工具ナデ 磨ナデ ナデ	工具ナデ ナデ 磨ナデ	91046, 91558, 91251, 91041	
	109	－	壺	0-19	4b	口縁部	－	－	○	○	－	－	○	－	10YR6/4 浅黄橙	10YR6/4 浅黄橙	磨ナデ	磨ナデ	106049	
	110	－	壺	0-23	4a	口縁部	－	－	－	－	－	○	－	－	5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	磨ナデ	磨ナデ	107370	
	111	－	壺	0-21-22	4a, 4a下	頸部～肩部	－	－	－	○	○	－	－	－	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ハケメ 指頭圧痕	ハケメ 指頭圧痕	91296, 91609, 91611, 91610, 91683, 91571, 91569, 91567, 91566	煤付着
	112	－	壺	0-19-20	4b1, 4b1上	頸部	－	○	－	○	○	○	－	－	7.5YR5/6 明褐	5YR6/4 にぶい橙	ナデ ハケメ 刺目突帯	ナデ	94086, 97 B1第一類	
	113	－	壺	0-21	4	頸部	－	○	－	○	○	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	ナデ ミガキ 突帯	ナデ	90520	
	114	－	壺	0-19-20, 1-19-19	4b1, 4b1下, 4b2	頸部～底部	－	－	－	－	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5YR4/8 赤褐	工具ナデ 指頭圧痕	工具ナデ 指頭圧痕	94216, 94319, 94322, 94324, 94551, 94323, 94325, 94302, 94312, 94543, 94548, 94545, 97 b1-2第一類	煤付着
144	115	－	壺	0-20	4	底部	－	－	－	○	－	○	○	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	ナデ	ナデ ミガキ	90759, 90797	
	116	－	壺	0-19	4a下	底部	－	－	－	－	○	○	－	－	10YR5/4 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	94073	
	117	－	壺	0-20	4b	頸部～底部	－	○	○	○	－	○	○	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ナデ	ナデ	94306	
	118	－	壺	0-21	4	底部	－	－	○	－	－	○	－	－	5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい黄橙	工具ナデ ナデ	ナデ	90618, カクラン	
	119	－	壺	0-19, 0-19-20	4a-4b1	底部	－	○	○	○	－	－	－	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	94113, 92988, 94142	
	120	－	壺	1-17	4a	底部	－	－	○	－	○	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙		ナデ ハケメ	ナデ	106863	
	121	－	壺	0-21	4a	底部	－	○	－	○	○	○	○	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐	ナデ	ナデ	91146	
145	122	－	高杯	0-19	4a	口縁部	－	－	○	－	○	○	－	－	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	工具ナデ	ナデ	105786, 106079	
	123	－	高杯	0-21	4a下	口縁部	－	○	○	－	○	○	○	－	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	91686	
	124	－	高杯	0-20	4b1	口縁部	－	○	○	－	○	○	○	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	磨ナデ	磨ナデ	94170	
	125	－	鉢 OR 高杯	0-19-20	3-4	口縁部	－	－	－	○	○	○	－	－	5YR5/6 明赤褐	5YR6/4 にぶい赤褐	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	一括	
	126	－	高杯	0-20	4b1	口縁部～頸部	－	－	○	○	○	－	－	－	7.5YR6/6 浅黄橙	10YR7/6 明黄褐	磨ナデ ナデ	磨ナデ	94239	
	127	－	高杯	0-21, 0-20	4b1	口縁部	－	－	－	－	○	○	－	－	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	磨ナデ ナデ	磨ナデ	94185	
	128	－	高杯	0-20-21	1, 4	坏部～脚部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR7/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	90776, カクラン, B7第一類	穿孔
	129	－	高杯	0-21	4a下	脚部	－	○	○	－	－	○	－	－	5YR5/6 明赤褐	10YR7/4 にぶい黄橙	ミガキ ナデ	ナデ 指頭圧痕	91540	
	130	－	高杯	0-22	4a	脚部	－	○	－	○	－	○	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ナデ	91256	
	131	－	高杯	0-21	4	脚部	－	－	○	○	－	－	○	－	10YR6/3 浅黄橙	10YR6/3 浅黄橙	ナデ ミガキ	ナデ ミガキ	90696	
	132	－	高杯	0-20	4	脚部	－	○	－	○	－	－	－	－	5YR7/7 橙	5YR6/6 橙	ナデ ミガキ	ミガキ	90753	
	133	－	高杯	0-21	4, 4a	脚部	－	○	－	－	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ナデ	91161, 91236, 91484, B7第一類	
	134	－	高杯	0-1-20	4b1-2	脚部	－	○	○	○	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	一括	穿孔
	135	－	高杯	0-21	4a	脚部	○	○	－	－	－	○	－	－	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	91182	
	136	－	高杯	0-19	4a	脚部	－	－	○	－	－	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	ナデ ミガキ	ナデ	105876	
	137	－	高杯	F-22	4a	脚部	－	－	－	○	－	○	－	－	5YR6/6 橙		ナデ ミガキ	ナデ	107601	
	138	－	高杯	F-22	4a	脚部	－	－	－	－	○	○	－	－	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	107698	
	139	－	鉢	0-20	4b1上	口縁部～底部	－	○	－	○	○	○	○	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	磨ナデ ナデ	磨ナデ ナデ	93991	
	140	－	鉢	0-20	4b1	脚部	－	○	－	－	○	○	－	－	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい橙	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	94231	
	141	－	鉢	0-21	4	脚部	－	－	－	○	－	－	○	－	7.5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	ナデ	ナデ	90828, 90564	
146	142	－	壺	0-19-20	4b1	口縁部	－	○	－	○	－	○	○	－	7.5YR5/6 明褐	5YR5/6 明赤褐	磨ナデ	ミガキ ナデ	一括	
	143	－	壺	0-21	4a, 4a下, 4b1	頸部～底部	－	○	－	○	○	○	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ハケメ	ナデ	91570, 91638, 91672, 91844	煤付着
	144	－	壺	J-18	4a, 4b1	頸部～底部	○	○	－	－	－	○	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	ナデ	ナデ	一括	

第24表　D地点　土器観察表５

検出番号	掘起番号	遺構番号	器種	区	層	部位	器種	胎土							色調		調整・太様		取上番号	備考
								石英	角閃石	長石	白雲母	黒雲母	赤色粒	その他	外面	内面	外面	内面		
146	145	—	坩	G-23	4b	脚部～底部	—	—	○	○	—	○	○	—	7.5YR6/8 橙	7.5YR6/8 橙	ナデ ミガキ	ナデ	107442, 107317	
	146	—	坩	G-23	4a	脚部～底部	—	○	—	—	—	○	—	—	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	107427	
	147	—	壺	H-23	4b	口縁部～底部	—	○	—	—	—	○	—	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ナデ	107570	
	148	—	壺	G-H-I-20-H-19	4a, 4b1-2	底部	—	○	○	○	—	—	○	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ミガキ	ナデ	105968, 106071	
	149	—	壺	F-21	4b	底部	—	○	—	○	○	—	○	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	108334	
147	150	—	壺	G-H-18-19	3-4, 4a, 4b	口縁部～胴部	—	○	—	○	—	—	○	—	7.5YR5/6 明褐	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	105737, 105703, 105704, 105708, 105709, 105711, 105720, 105721, 105771, 並第一類，ア第一類	
	151	—	壺	H-I-18, I-J-18	4a, 4b	胴部	—	○	—	○	—	—	○	—	7.5YR5/6 明褐	10YR7/4 にぶい黄橙	ナデ ハケメ	ナデ ケズリ	105705, 105710, 105712, 105713, 105715, 105716, 105717, 106837, 106329, 106463, 106962, 107482, 107123, 一括	
	152	—	甕	I-J-18	4b1	底部	—	—	—	—	○	—	○	—	2.5YR5/3 にぶい赤褐	N2/1 黒	ナデ	ナデ ミガキ	一括	黒色土器
	153	—	坩	I-18	4a	底部	—	—	—	—	—	○	○	—	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR1.7/1 黒	ナデ	ナデ ミガキ	106960	黒色土器
	154	—	鉢	I-18	4a	底部	—	○	—	—	—	—	—	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR2/1 黒	ナデ	ナデ	106966	黒色土器・赤色高台
	155	—	鉢	I-18	4a	底部	—	○	—	—	○	○	—	—	10YR6/3 浅黄橙	10YR6/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	106968	
	156	—	坩	I-18	4a	底部	—	—	—	—	—	○	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	106991	
	157	—	壺	J-17	4a	胴部	—	—	—	—	—	○	○	—	7.5YR4/1 灰	7.5YR7/2 灰オリーブ	格子目タタキ	同心円タタキ	106714, 106716	
	158	—	鉢	F-21	4a	高台	—	—	—	—	○	—	○	—	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	ナデ	ナデ	105515	
	159	—	壺	F-22	4a	胴部	—	—	—	—	—	—	—	—	2.5GY8/1 灰白	2.5GY8/1 灰白			一括	
	160	—	鉢形	F-22	4a	口縁部～底部	—	—	○	—	—	○	—	—	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	107867	
155	196	—	壺	G-H-21, G-22	1, 2, 4, 4a, 4a下, 4b1	口縁部～胴部	—	○	—	○	○	○	—	—	2.5YR4/6 赤褐	7.5YR6/8 橙	橙ナデ	橙ナデ 工具ナデ	90440, 90580, 90590, 91582, 91550, ア第一類，ドア第一類，ガ b1第一類，並上一類	
	199	—	壺	G-22	3	口縁部	○	○	—	—	○	—	—	—	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄橙	ナデ ハケメ 刻目突帯	ナデ	90919	
	200	—	壺	I-18	3	口縁部	—	—	—	—	—	○	—	—	GY7/1 灰白	GY2/1 黒	橙ナデ	橙ナデ	106967	
	201	—	壺	G-22	3	口縁部	—	—	—	—	○	○	—	—	N6/0 灰	2.5GY5/1 オリーブ灰	橙ナデ	橙ナデ	一括	
	202	—	壺	G-21	3	頸部	—	○	—	—	○	○	—	—	7.5YR4/1 褐灰	5YR4/6 赤褐	格子目タタキ	同心円タタキ	91163	
	203	—	壺	I-18	3	胴部	—	—	—	—	—	○	—	—	5YR5/1 灰	5YR4/1 灰	平行タタキ	同心円タタキ	106957	
156	204	—	坩	J-17	2, 4a	胴部～底部	—	—	—	—	○	○	—	—	10YR6/6 黄橙	10YR6/6 黄橙	回転ナデ	回転ナデ	106896, 106883, 106884	
	205	—	坩	I-18	3	底部	—	—	—	—	○	○	○	—	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	106947	黒色土器
	206	—	坏 供膳	I-18	3	底部	—	○	—	○	○	○	—	—	10YR6/4 浅黄橙	10YR6/4 浅黄橙	回転ナデ	ナデ	107112	
	207	—	坏 供膳	J-18	3	底部	—	—	—	—	○	○	○	—	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	ナデ	ナデ	106965	
	208	—	坏 供膳	J-17	3	底部	—	—	—	—	—	○	○	—	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	回転ナデ	回転ナデ	106879	
	209	—	坏 供膳	G-23	3	底部	—	—	—	—	—	—	○	—	10YR6/3 浅黄橙	10YR6/3 浅黄橙	ナデ	ナデ	107150	
	210	—	坏 供膳	G-21	3	底部	—	—	—	—	—	—	○	—	10YR6/6 浅黄橙	10YR7/1 灰白	ナデ	ナデ	一括	
	211	—	小皿	G-21	3	口縁部	—	—	—	—	—	—	○	—	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	ナデ	ナデ	一括	
	212	—	坏 供膳	I-18	3	底部	—	○	—	—	○	○	—	—	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	回転ナデ ミガキ	回転ナデ	106962	
	213	—	青磁碗	H-23	3	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—	GY7/2 灰白	GY7/2 灰白	鎬蓮弁文		106698	
	214	—	白磁碗	H-23	3	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5Y ウ7/1 灰白	7.5Y ウ7/1 灰白			106696	
	215	—	白磁碗	G-22	3	口縁部	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白			一括	

第25表　D地点　石器観察表

検図番号	掲載番号	遺構番号	器種	石材	出土区	層位	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号	備考
148	165	－	石鏃	頁岩	G21	4a	(1.9)	1.9	0.2	0.9	91399	
	166	－	石鏃	安山岩	J17	4a	2.7	2.2	0.4	1.6	106495	完形
	167	－	石鏃	黒曜石	G21	4a下	1.2	(1.4)	0.2	0.4	92385	
	168	－	石鏃	安山岩	I20	4b2	2.6	1.8	0.3	1.1	94842	
	169	－	石鏃	安山岩	G21	4	2.3	2.2	0.4	0.9	90664	
	170	－	二次加工剥片	黒曜石	I19	4b3	3.2	1.2	0.4	1.2	105132	
149	171	－	打製石斧	ホルンフェルス	J17	4b	10.9	6.2	1.8	143.0	106504	完形
	172	－	打製石斧	ホルンフェルス	I18	4b	(9.2)	(6.2)	(2.5)	131.0	107368	
	173	－	打製石斧	安山岩	I19	4a	14.3	6.5	1.5	150.0	93851	
	174	－	打製石斧	ホルンフェルス	G22	4b2	12.0	5.9	1.8	115.0	92391	完形
	175	－	打製石斧	ホルンフェルス	G23	4a	10.4	5.8	1.5	85.0	107387	完形
	176	－	打製石斧	硬質頁岩	H20	4b3	13.9	6.9	1.8	153.0	94825	
150	177	－	打製石斧	ホルンフェルス	I19	4b1	(9.1)	5.4	1.8	129.0	94853	
	178	－	打製石斧	頁岩	I19	4b3	10.8	7.1	1.9	172.0	105174	
	179	－	打製石斧	ホルンフェルス	J17	4b	(6.9)	(5.9)	(1.1)	62.5	106584	
	180	－	打製石斧	硬質頁岩	H23	4b	9.7	5.8	1.4	107.0	107954	
	181	－	打製石斧	安山岩	H23	4b	(8.6)	(5.9)	(1.5)	104.0	107955	
	182	－	打製石斧	頁岩	J18	4a	8.8	6.9	1.8	98.0	106146	
	183	－	打製石斧	安山岩	H21	4b2	9.9	5.9	1.2	90.0	93030	
151	184	－	打製石斧	ホルンフェルス	F21	4a	10.1	6.4	2.0	142.0	106302	
	185	－	打製石斧	安山岩	G19	4b	11.6	7.1	1.8	134.0	106327	
	186	－	打製石斧	ホルンフェルス	G21	4b3	14.9	8.0	1.7	240.0	92957	
	187	－	打製石斧	硬質頁岩	I19	4b3	(11.1)	8.4	1.5	254.0	105147	
152	188	－	打製石斧	ホルンフェルス	I18	4b	(10.3)	(7.1)	(1.4)	116.0	107607	
	189	－	打製石斧	頁岩	H19	4b	11.0	8.3	1.1	94.0	106477	
	190	－	磨製石斧	頁岩	G23	4b	(8.5)	(4.7)	(2.9)	91.0	107965	
	191	－	磨製石斧	ホルンフェルス	H19	4b2	(6.4)	(3.5)	(1.2)	37.0	94896	
	192	－	磨製石斧	砂岩	J17	4b	(7.8)	(4.2)	(3.5)	136.0	108542	
	193	－	磨製石斧	安山岩	F22	4b	(7.8)	5.3	1.4	92.0	106319	
	194	－	棒状	硬質頁岩	G22	4b2	8.4	10.1	1.8	199.0	92390	
153	195	－	敲石	砂岩	J-18	4b	13.2	10.1	5.1	1010.0	第4一括	
	196	－	敲石	花崗岩	H19	4b	7.9	6.9	2.4	218.0	106326	
	197	－	叩き石	砂岩	G21	4a	7.3	5.3	4.8	264.0	91504	

第26表　D地点　鉄製品観察表

検図番号	掲載番号	遺構番号	出土区	層	取上番号	器種	部位	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
147	161	－	F-19	Ⅳ'a	94126	鉄滓	塊状	6.6	4.5	1.9	110.9	
	162	－	J-17	Ⅳ'a	106692	小刀	刀身	9.7	2.5	1.1	33.8	
	163	－	I-17	Ⅳ'b	106763	刀子	－	4.4	1.5	0.9	3.8	
	164	－	F-22	Ⅳ'b	108324	古銭	－	－	－	－	－	寛永通宝
156	216	－	I-18	面	106952	鉄	刀部	－	3.2	0.7	20.9	
	217	－	J-17	面	106592	釘	－	11.6	1.9	1.1	28.2	
	218	－	F-22	Ⅳ'a	107763	刀子	－	8.7	3.0	1.3	23.8	

第６章　自然科学分析

第１節　川久保遺跡Ｂ地点の放射性炭素年代

（株）加速器分析研究所

１　概要

鹿児島県に所在する川久保遺跡Ｂ地点の測定対象試料は，土器から採取した土器付着炭化物６点と焼土等から出土した炭化物４点の合計10点である（表27）。土器付着炭化物の採取部位は，No.１，４，６が体部外面，No.２が口縁部外面刺突内，No.３，５が口縁部下外面の突帯直下である。

２　化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い，土等の混入物，付着物を取り除く。

(2)　酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と表27に記載する。

(3)　試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4)　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5)　精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

(6)　グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

(1)　δ^{13}Cは，試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表27）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2)　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表27に，補正していない値を参考値として表28に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表27に，補正していない値を参考値として表28に示した。

(4)　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表28に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

５　測定結果

試料の測定結果を表27・表28に示す。

土器付着炭化物（No.１～６）の６点の^{14}C年代は，8790±30yrBP（No.２）から1700±20yrBP（No.６）の間にある。暦年較正年代（１σ）は最も古いNo.２が7942～7792cal BC（9891～9741cal BP）の範囲，最も新しいNo.６が265～386cal ADの間に２つの範囲で示される。No.１，４が縄文時代晩期前半頃，No.２が縄文時代早期

中葉頃に相当し（小林編 2008，小林 2017），No. 3，5，6が3世紀半ばから4世紀頃にまとまる。

炭化物（No. 7 ～10）の4点の^{14}C年代は，2380±20yrBP（No.10）から1280±20yrBP（No. 7）の間にある。暦年較正年代（1 σ）は，最も古いNo.10が480～400cal BCの間に2つの範囲，最も新しいNo. 7が683～766cal ADの間に2つの範囲でそれぞれ示される。No. 7が7世紀から8世紀頃，No. 8，9が弥生時代中期頃，No.10が弥生時代前期頃に相当する（藤尾 2009）。

試料の炭素含有率はいずれも49%以上の適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，9-54

小林謙一 2017 縄文時代の実年代 ―土器型式編年と炭素14年代―，同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第27表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

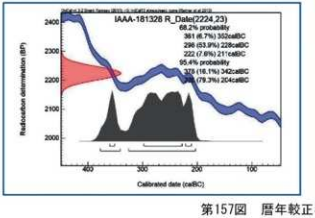
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C(‰)(AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-181321	No.1	131（取上No.19857他） 外面	土器付着炭化物	AaA	-25.75±0.18	2,910±20	69.65±0.21
IAAA-181322	No.2	7（取上No.22326） 外面	土器付着炭化物	AaA	-22.64±0.17	8,790±30	33.47±0.14
IAAA-181323	No.3	215（取上No.17884） 外面	土器付着炭化物	AaA	-24.25±0.16	1,740±20	80.52±0.24
IAAA-181324	No.4	132（取上No.19821） 外面	土器付着炭化物	AaA	-26.60±0.17	2,840±20	70.20±0.21
IAAA-181325	No. 5	214（取上No.48597） 外面	土器付着炭化物	AaA	-24.08±0.17	1,720±20	80.70±0.24
IAAA-181326	No. 6	217（取上No.17990） 外面	土器付着炭化物	AaA	-26.97±0.19	1,700±20	80.88±0.23
IAAA-181327	No. 7	土坑28号（SK158）出土炭化物	炭化物	AAA	-26.19±0.19	1,280±20	85.23±0.24
IAAA-181328	No. 8	焼土跡3号（SF4）出土炭化物	炭化物	AaA	-24.96±0.18	2,220±20	75.81±0.22
IAAA-181329	No. 9	焼土跡1号（SF3）出土炭化物①	炭化物	AaA	-24.50±0.15	2,210±20	75.92±0.23
IAAA-181330	No. 10	焼土跡1号（SF3）出土炭化物②	炭化物	AAA	-25.56±0.18	2,380±20	74.36±0.23

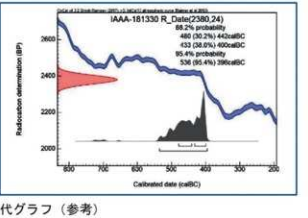
［IAA登録番号：#9290］

第28表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値，暦年較正用^{14}C 年代，較正年代）

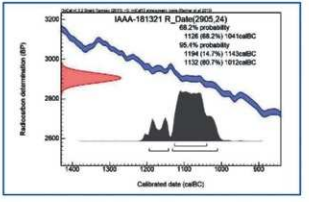
測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）	(yrBP)		
131 IAAA-181321	2,920±20	69.55±0.21	2,905±24	1126calBC－1041calBC（68.2%）	1194calBC－1143calBC（14.7%） 1132calBC－1012calBC（80.7%）
7 IAAA-181322	8,750±30	33.63±0.14	8,793±33	7942calBC－7792calBC（68.2%）	8167calBC－8123calBC（ 3.5%） 7978calBC－7729calBC（91.9%）
215 IAAA-181323	1,730±20	80.64±0.23	1,740±23	253calAD－304calAD　（48.0%） 313calAD－335calAD　（20.2%）	241calAD－358calAD　（90.9%） 365calAD－380calAD　（ 4.5%）
132 IAAA-181324	2,870±20	69.97±0.21	2,841±23	1030calBC－972calBC　（53.0%） 959calBC－939calBC　（15.2%）	1072calBC－1066calBC（ 0.8%） 1057calBC－920calBC　（94.6%）
214 IAAA-181325	1,710±20	80.86±0.24	1,722±23	258calAD－296calAD　（31.9%） 321calAD－353calAD　（27.0%） 367calAD－380calAD　（ 9.3%）	252calAD－386calAD　（95.4%）
217 IAAA-181326	1,740±20	80.55±0.23	1,704±23	265calAD－272calAD　（ 6.3%） 332calAD－386calAD　（61.9%）	256calAD－301calAD　（22.3%） 316calAD－399calAD　（73.1%）
土坑28号 IAAA-181327	1,300±20	85.03±0.24	1,283±22	683calAD－715calAD　（39.0%） 744calAD－766calAD　（29.2%）	670calAD－770calAD　（95.4%）
焼土跡３号 IAAA-181328	2,220±20	75.81±0.22	2,224±23	361calBC－352calBC　（ 6.7%） 298calBC－228calBC　（53.9%） 222calBC－211calBC　（ 7.6%）	378calBC－342calBC　（16.1%） 326calBC－204calBC　（79.3%）
焼土跡１号 IAAA-181329	2,200±20	76.00±0.23	2,213±24	358calBC－349calBC　（ 6.3%） 315calBC－276calBC　（26.8%） 258calBC－209calBC　（35.1%）	365calBC－203calBC　（95.4%）
焼土跡１号 IAAA-181330	2,390±20	74.27±0.22	2,380±24	480calBC－442calBC　（30.2%） 433calBC－400calBC　（38.0%）	536calBC－396calBC　（95.4%）

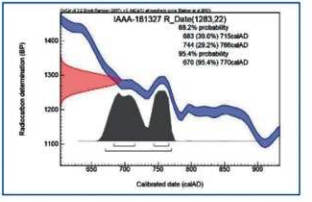
［参考値］

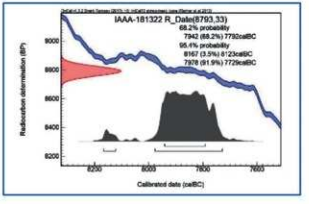


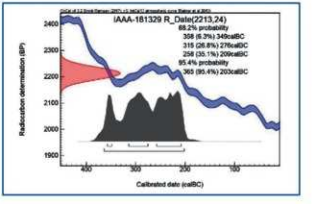


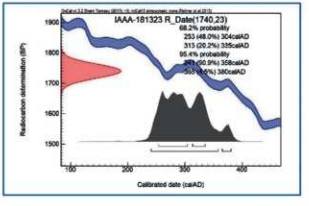
第157図　暦年較正年代グラフ（参考）

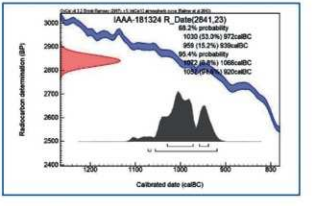


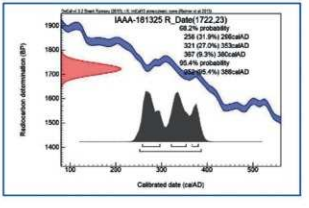


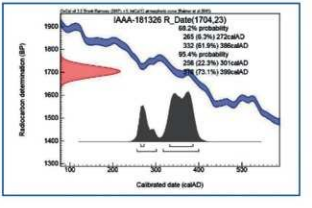












第158図　暦年較正年代グラフ（参考）

第２節　川久保遺跡Ｄ地点の放射性炭素年代および赤外分光分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　概要

川久保遺跡（鹿屋市串良町細山田所在）では，古墳時代の住居跡と鍛冶工房跡，中世の掘立柱建物跡などの遺構や，鍛冶関連遺物，土器などが出土している。今回は土器付着炭化物の年代測定と，土器（掲載番号７）に付着する黒色物質について，漆あるいはアスファルトなどの可能性を検証することを目的とし，有機化合物としての特性を調査する手法である赤外分光分析（フーリエ変換赤外線吸収スペクトル法，FT-IR）を実施した。

２　放射性炭素年代測定

(1)　試料

試料は，土器付着炭化物のNo.2（G21 SC53-73），No.3（掲載番号13），No.5（G21 SC53-160），No.6（掲載番号31），No.8（掲載番号69）の５点である。

(2)　分析方法

土器付着炭化物は，塩酸（HCl）や水酸化ナトリウム（NaOH）を用いて，試料内部の汚染物質を化学的に除去する（酸－アルカリ－酸（AAA）処理）。その後超純水で中性になるまで洗浄し，乾燥させる。なお，アルカリ処理は，0.0001M～１Mまで濃度を上げ，試料の状況をみながら処理を進める。いずれも炭化物の損耗が激しいため，アルカリを定法の濃度（１M）まで上げることができず，薄めた状態で処理を行う（AaA）。

上記した処理後の試料の燃焼，二酸化炭素の精製，グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１mmの孔にプレスし，測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置を用いて，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測定する。AMS測定時に，米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-Ⅱ），国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等），バックグラウンド試料（IAEA-C１）の測定も行う。

δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は，国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach,1977）。また，暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正は，OxCal4.3.2（Bronk, 2009）を使用し，１年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値および北半球の大気中炭素に由来する較正曲線（Intcal13；Reimer et al., 2013）を用いる。暦年較正結果は１σ・２σ（１σは統計的に真の値が68.2%の確率で存在する範囲，２σは真の値が95.4%の確率で存在する範囲）の値を示す。

(3)　結果

結果を第29表，第159図に示す。５点の土器付着炭化物は，いずれも化学的に脆弱であったため，アルカリの濃度を薄めた処理を行う（AaA）。

測定の結果，同位体補正を行った年代値は，No.2（G21 SC53-73）が1745±20BP，No.3（掲載番号13）が1720±20BP，No.5（G21 SC53-160）が1700±20BP，No.6（掲載番号31）が1705±20BP，No.8（掲載番号69）が2570±25BPであり，No.8以外は類似した年代値を示す。No.8は他の試料よりも年代値が古い。

暦年較正は，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正することによって，暦年代に近づける手法である。測定誤差２σの暦年代は，No.2（G21 SC53-73）がcalAD237～377，No.3（掲載番号13）がcalAD252～386，No.5（G21 SC53-160）がcalAD257～400，No.6（掲載番号31）がcalAD256～395，No.8（掲載番号69）がcalBC806～595であり，No.2，No.3，No.5，No.6が弥生時代末～古墳時代初頭，No.8が弥生時代初頭の年代値を示す。

３　赤外分光分析

(1)　試料

分析試料は土器（掲載番号７）の１点である。土器には黒色の付着物が確認される。

(2)　分析方法

有機物を構成している分子は，炭素や酸素，水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが，電磁波のようなエネルギーを受けることにより，その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は，その結合の種類によって，ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に，電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて），その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。有機物を構成している分子における結合の場合は，電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで，赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合，さまざまな結合を有する分子では，様々な波長において，赤外線の吸収が発生し，いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常，このスペク

トルは，横軸に波数（波長の逆数 cm−1 で示す），縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって，既知の物質において，どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ，その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し，これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより，未知物質の同定をすることもできる（山田，1986）。

(3) 赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した試料をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後，顕微 FT-IR 装置（サーモエレクトロン（株）製 Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaulus）を利用し，測定を実施した。なお，赤外線吸収スペクトルの測定は，作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み，アパーチャでマスキングした後，透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後，吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については，FT-IR スペクトルと共に図中に併記しているので，そちらを参照されたい。

(4) 結果

FT-IR スペクトルを第160図に示す。なお，図中には，比較資料として黒ボク土，漆，天然アスファルトの実測スペクトルを併記している。

付着黒色物質の赤外線吸収特性は，3400cm−1 付近の幅広い吸収帯のほか，1033cm−1 付近の極大吸収と1622cm−1, 1400cm−1 の吸収や798cm−1, 780cm−1, 690cm−1 の吸収によって特徴付けられる。なお，3400cm−1 付近の吸収帯は O-H 伸縮振動で，798cm−1, 780cm−1 のダブレット吸収と690cm−1 の吸収は石英特有の振動であることより，1033cm−1 付近の極大吸収は Si-O 伸縮振動と判断される。また，1622cm−1 の吸収は層間水の変角伸縮振動と予想される。

(5) 考察

パリノ・サーヴェイ（株）では試料の出所が既知の物質について，同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかあるが（未公表），遺跡で検出される有機質遺物の代表としては漆，天然アスファルト，松脂，動植物油，炭化物などの調査例がある。これらは，いずれも固有の吸収帯があり，漆では3400, 2930, 2860, 1720, 1620, 1450, 1270cm−1，天然アスファルトでは2960, 2920, 2860, 1700, 1610, 1460, 1380cm−1 と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また，松脂は1700cm−1，動植物油は1740cm−1 付近に特徴的な吸収帯があり，炭化物は3400cm−1, 1580cm−1, 1390cm−1 付近に見られる極大吸収によって特徴付けられる。

土器（掲載番号７）に付着した黒色物質では，比較資料として示した黒ボク土のように無機ケイ酸塩鉱物に基づく吸収が確認されるのみである。検出された無機ケイ酸塩が試料採取にあたって器面から混入した胎土に由来するものか，あるいは黒色物質に含まれる鉱物由来か言及は出来ないが，スペクトルを見る限りでは漆や天然アスファルトの特性を示すような僅かな吸収も認められないことより，漆や天然アスファルトが介在するような状況も看取出来ない。現状では，土器に付着した黒色物質の材質を明らかにするには至らないが，少なくとも漆や天然アスファルトの可能性は否定されよう。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

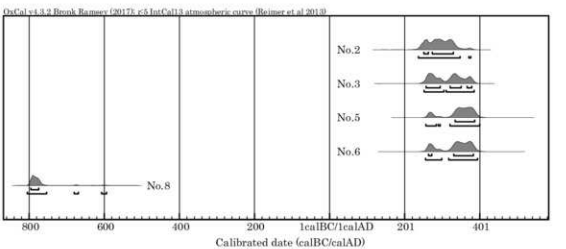
Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

山田富貴子，1986，赤外線吸収スペクトル法，機器分析のてびき第１集．化学同人，1-18.

第29表　放射性炭素年代測定結果

No.	注記など	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	δ13C (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率%		
2	G21 SC53-73 遺物集中6号	AaA (0.0001M)	1745±20 (1747±20)	-29.33 ±0.21	σ	cal AD 252 - cal AD 264	1699 - 1687 calBP	12.0	YU-10390	pal-12330
						cal AD 274 - cal AD 330	1676 - 1620 calBP	56.2		
					2σ	cal AD 237 - cal AD 348	1713 - 1602 calBP	94.6		
						cal AD 372 - cal AD 377	1579 - 1574 calBP	0.8		
3	G21 SC53-78 (掲載番号13) 土器集中6号	AaA (0.01M)	1720±20 (1722±20)	-29.12 ±0.24	σ	cal AD 258 - cal AD 295	1693 - 1655 calBP	31.4	YU-10391	pal-12331
						cal AD 322 - cal AD 351	1629 - 1599 calBP	27.8		
						cal AD 367 - cal AD 379	1583 - 1571 calBP	9.0		
					2σ	cal AD 252 - cal AD 305	1698 - 1645 calBP	41.2		
						cal AD 311 - cal AD 386	1639 - 1565 calBP	54.2		
5	G21 SC53-160 遺物集中6号	AaA (0.0001M)	1700±20 (1698±20)	-29.07 ±0.24	σ	cal AD 335 - cal AD 387	1615 - 1563 calBP	68.2	YU-10392	pal-12332
					2σ	cal AD 257 - cal AD 285	1693 - 1666 calBP	12.9		
						cal AD 290 - cal AD 295	1660 - 1655 calBP	0.8		
						cal AD 321 - cal AD 400	1629 - 1550 calBP	81.7		
6	H19 SC55-20 (掲載番号31) 遺物集中6号	AaA (0.0001M)	1705±20 (1707±20)	-32.95 ±0.20	σ	cal AD 264 - cal AD 273	1686 - 1678 calBP	8.1	YU-10393	pal-12333
						cal AD 331 - cal AD 384	1619 - 1567 calBP	60.1		
					2σ	cal AD 256 - cal AD 299	1694 - 1651 calBP	23.2		
						cal AD 318 - cal AD 395	1633 - 1556 calBP	72.2		
8	H20 IVb 94825 94826 (掲載番号69)	AaA (0.1M)	2570±25 (2569±23)	-27.15 ±0.19	σ	cal BC 796 - cal BC 775	2745 - 2724 calBP	68.2	YU-10394	pal-12334
					2σ	cal BC 806 - cal BC 754	2755 - 2703 calBP	91.5		
						cal BC 681 - cal BC 670	2630 - 2619 calBP	2.1		
						cal BC 608 - cal BC 595	2557 - 2544 calBP	1.9		

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3) 付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
7) 較正データーセットは、Intcal13を使用。
8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である



第159図　暦年較正結果

測定情報

サンプルスキャン回数: 64
バックグラウンドスキャン回数: 64
分解能: 4.000
サンプル ゲイン: 8.0
ミラー速度: 1.8988

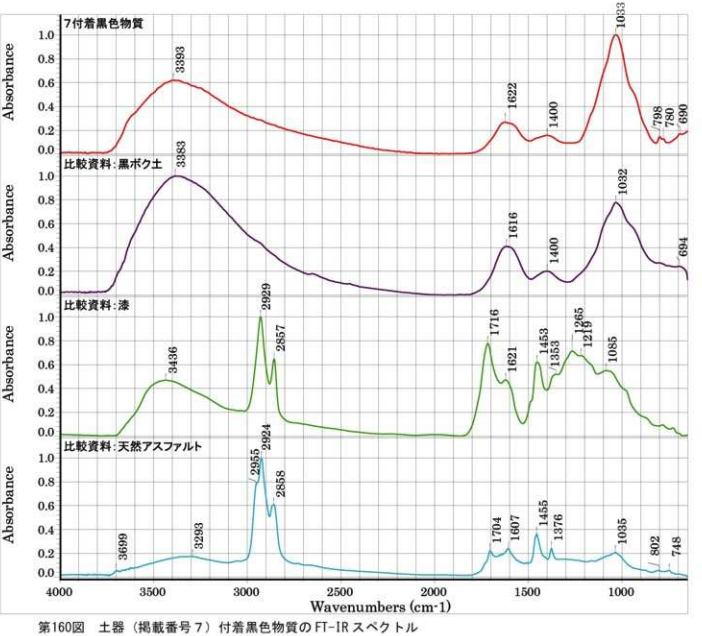
光学系の構成

検出器: MCT/A
ビームスプリッタ: KBr
光源: IR

備考

ダイヤモンドエクスプレス成型
顕微透過法
可変アパーチャ使用

ベースライン補正
スムージング処理
Y軸正規化



第160図　土器（掲載番号７）付着黒色物質の FT-IR スペクトル

第７章　総括

第１節　遺構

本報告書では，遺構を層ごとに掲載したため，総括ではまず，時期を特定できたものを時代ごとにまとめた。各遺構については，特徴的なものについて記す。時代ごとの遺構配置は，第162～164図を参照していただきたい。

１　Ｂ地点

縄文時代早期	土坑１基（Ⅶ層），集石９基（Ⅶ層２，Ⅵ層７）
縄文時代晩期	土坑２基（Ⅴ層１，Ⅳ層１），集石２基（Ⅳ層）
古墳時代	埋設土器１カ所（Ⅳ層），掘立柱建物跡３棟（Ⅴ層），土器集中４カ所（Ⅳ層），土坑５基（Ⅳ層），ピット多数，溝状遺構６条（Ⅴ層），道跡３条（Ⅲ層）
中　世	掘立柱建物跡３棟（Ⅴ層），土坑２基（Ⅳ層），礫集中２カ所（Ⅴ層１，Ⅳ層１），ピット多数，溝状遺構２条（Ⅴ層），道跡３条（Ⅲ層）

(1)　古墳時代の掘立柱建物跡

古墳時代の掘立柱建物跡が３棟検出された。ピット内や周辺からも遺物がほとんど出土していないため，ピットの埋土から時期判断を行った。埋土が，他の古墳時代の遺構の埋土とほぼ同じであることから，古墳時代の掘立柱建物跡と判断した。ただし，柱間距離やピットの径から考えると，中世以降の掘立柱建物跡の可能性もある。

遺構相互の時期差については，その向きから，１号と２・３号にはやや時期差があることが考えられるが，新旧関係については不明である。また，Ｂ地点では住居跡が検出されていないが，中央の谷部からは大量の古墳時代の遺物が出土していることから，調査区よりも北側に居住域が存在することが想定される。

南九州における古墳時代の掘立柱建物跡の類例としては，鹿児島大学構内遺跡（鹿児島市），橋牟礼川遺跡（指宿市），堂園Ｂ遺跡（南九州市）などがあげられるが，本遺跡の掘立柱建物跡の柱間距離は，堂園Ｂ遺跡のものに類似する。また，今年度刊行予定の春日堀遺跡（志布志市）でも検出されているが，まだ類例が少なく，今後の類例の増加を待ちたい。

(2)　土器集中

すべての土器集中が谷部で検出されている。ただし，破片の出土が多く，口縁部から胴部部までの形態が確認できるものが少ない。また，一つの土器集中から，時期差がある個体が出土することから，一括性の高い資料ではないと思われる。

ただし，土器集中３・４号に見られるように，破片ではあるが，壺形土器の占める割合が多いというのがＢ地点の土器集中の特徴である。また，出土している遺物が古墳時代前期頃ものが多いことから，中心となる時期としては概ね古墳時代前期頃が想定される。

２　Ｄ地点

縄文時代晩期	集石６基（Ⅳ層）
古墳時代	遺物集中９カ所（Ⅳ層），土坑３基（Ⅳ層），焼土跡３カ所（Ⅳ層）

(1)　遺物集中

Ｂ地点の土器集中と同様に，各遺物集中から出土する土器は破片が多く，口縁部から胴部部までの形態が確認できるものが少ない。また，時期差のある個体が混在することから，一括性の高い資料は少ないものと思われる。

ただし，遺物集中４・５・７号は，谷底にほぼ等間隔に並んで検出されており，それぞれがほぼ完形に近い形で残存・復元されている。この谷部エリアで，祭祀的な意味合いをもつ行為が行われたことが想定される。

遺物集中４・５号の壺（７・８）は焼成後に外側から穿孔されている。南摺ヶ浜遺跡（指宿市）では，甕棺墓の周辺から穿孔のある壺形土器が出土しており，これらに類似する。また，遺物集中７号の小型壺（29）は，内面外面ともにきれいなミガキが施され，内面は赤く，外面は黒く仕上げられており，他の土器とは一線を画する。外面の黒色が，漆やアスファルトに由来するではないかと考え，赤外分光分析を行ったが，そのいずれでもないという結果が出ており，詳細は不明である。

Ｄ地点の遺物集中の時期は，Ｂ地点と同様に概ね古墳時代前期頃の遺物が多いことから，中心となる時期としては概ね古墳時代前期頃が想定される。

土器付着炭化物の年代測定の結果からは，遺物集中６号（13）が1720±20BP，遺物集中８号（31）が1705±20BP という値が出ており，いずれも弥生時代末～古墳時代初頭に該当する結果が出ている。

遺物集中同士の時期差については，甕の口縁部に着目すると，遺物集中６号の甕口縁部はまっすぐ伸びる特徴をもち，遺物集中８・９号の甕の口縁部形態は，６号と比べてみると外反もしくは外湾する。そのため，６号より８・９号の方が古い資料であるといえる。その他については，新旧関係の認定にはいたらなかった。今後，Ａ地点の整理作業が進み，竪穴住居内出土の一括資料の様相が分かれば，時期認定に繋がるかもしれない。

＜参考文献＞（一部割愛）

石田智子2018「弥生・古墳時代移行期における薩摩・大隅の集落と墳墓の動態」『集落と古墳の動態Ⅰ』第21回九州前方後円墳研究会大会事務局

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号

橋本達也2019「大隅・薩摩地域における古墳時代中期の集落と古墳」『集落と古墳の動態Ⅱ』第22回九州前方後円墳研究会大会事務局

第２節　土器・鉄製品

川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点では，縄文時代早期～近世に至るまで，多彩な土器が出土した。特に，古墳時代の土器は，包含層からの出土量が多く，またさまざまな器種が出土したことが特徴的である。遺物については，出土数の少ない古代～近世の遺物は除いて，Ⅰ類～Ⅻ類までに分類し，さらに器種・部位・胎土等で細分して本文中では個別の説明を行った。まとめとして，まずＢ地点出土遺物を時代ごとに説明をし，次にＤ地点出土遺物の説明をするが，各分類の説明については共通する。

１　Ｂ地点

(1)　縄文時代

縄文時代の土器は，Ⅰ・Ⅲ～Ⅳ層から出土した。特にⅣ層からの出土が多く，それらを既知の研究に基づきⅠ類～Ⅴ類に型式ごとに分類した。

縄文時代早期の特徴をもつ土器群をⅠ類土器に分類し，それぞれ下剥峯式土器をA類，塞ノ神式土器をB類，苦浜式土器をＣ類とした。苦浜式土器は古道17から出土した１点のみである。深浦式土器を，Ⅱ類土器とした。縄文時代中期の阿高式系土器の特徴をもつ資料は１点のみの出土で，Ⅲ類土器とした。縄文時代後期の特徴をもつ土器群をまとめてⅣ類土器とした。それぞれ指宿式土器をA類，中岳式土器をＣ類，御領式土器をD類，また，底部片はｅ類としてまとめた。縄文時代晩期の土器をⅤ類土器とした。A類は入佐式土器で，さらに深鉢と浅鉢に細分した。B類は黒川式土器で，さらに１深鉢２鉢３浅鉢に細分した。多くは破片資料のため，全体の器形を復元することは困難であった。黒川式の浅鉢は胴部の屈曲が強いタイプと丸みを帯びて湾曲するタイプが出土した。Ｃ類は組織痕土器で，D類は刻目突帯文土器である。さらに底部片で分類が困難なものはｅ類でまとめた。

(2)　弥生時代

弥生時代の遺物は，Ⅰ・Ⅲ～Ⅳ層から少量出土した。Ⅵ類は弥生時代の前半の特徴をもつ土器，山ノ口式土器はⅦ類とした。またⅧ類土器は，脚台部分のみの破片でまとめた。Ⅸ類は時期的な特徴で分類することができなかったものをまとめた。Ⅳ層からは甕や壺，また鉢等が出土したが，いずれも破片資料である。

(3)　古墳時代

古墳時代の土器は在地土器の成川式土器をＸ類とし，細分を行った。1類は甕形土器で，さらに口縁部形態を外反もしくは外湾形態の２つに細分し，脚部はまとめて分類した。2類は壺形土器で，さらに肩部形態はナデ肩とイカリ肩の２つに細分した。底部形態は尖底や丸底，平底など形態やサイズもさまざまであり，底部としてまとめた。3類は高坏形土器である。口縁部形態は，坏部の屈曲が有るか無いかで２つに細分し，脚部形態でもエンタシス状かスカート状かでそれぞれ２種類ずつに細分した。鉢形土器はさまざまなサイズと形態が出土したため，4類としてまとめた。5類は坩形土器で，口縁部形態で外反するもの及び外頓するもの，また，直口または内湾するものの２つに細分し，さらに胴部と底部形態でまとめた。

①　埋設土器について

埋設土器である30の壺胴部に付着する煤は，煮沸具として利用されたことの証拠であり，鹿児島県内でも志布志湾沿岸の肝付町東田遺跡や，薩摩半島の鹿児島大学構内遺跡や南さつま市の清水前遺跡等で多数の類例が確認される。底部分に煤が付着する使用方法を想定すると，①三脚のような台状で道具に壺を設置し，真下に火をおこし，炎に器面があたらないやや離れた位置に壺を設置するという使用方法。また，②生木のツルなどの燃えにくい植物で輪を作り，上から吊して真下で火をおこすという使用方法の２通りが考えられる。胴部と底部の，両方に煤が同時につく使用方法は想定しにくく，異なる場面における使用方法で，それぞれの煤が付着したと考えられる。つまり，煤の付着で２段階の機能転換が考えられ，さらに埋設土器としての機能転換もされたということがわかる。

②　Ｂ・Ｄ地点の高坏形土器坏部の型式について

成川式土器の現行編年では，薩摩半島の資料を検討資料で扱っていること，また詳細な型式変化を追うことが困難であるという２つの点から，宮崎平野出土資料と比較を行った。その結果，出土する器種や胎土，また技法等で弥生後期からタタキやケズリを施す点など，異なる部分がみられたが，共通する部分として高坏形土器の坏部の型式学的変異がおいやすそうだということが分かった。時期的な比較を試みた結果，Ⅳ層出土の276・278・279といった，屈曲が強く，口縁部が外反傾向にあるものは，河野編年における6-1型式または6-2型式に相当する。時期は古墳時代前期前半あたりである。280は，外面は屈曲が強いが，内面の屈曲がそれほど強くないという特徴と傾きがやや浅いという特徴をもち，河野編年の７型式か８型式に相当する。時期は古墳時代前期中頃～中期初等である。また，Ｄ地点で出土した128は，河野編年における８型式に比定され，時期は古墳前期後半から中期初等である。なお，川久保遺跡Ｂ・Ｄ地点出土の高坏形土器は，破片資料のみの出土であり，包含層出土遺物であることから，一括性の低い資料ではあるものの，型式学的変異をおいやすいとされる高坏形土器で検討を行うことができた。

現在整理作業中の川久保遺跡Ａ地点には古墳時代の住居跡と考えられる遺構が約70基検出した。住居内出土土器は多く，セット内に高坏形土器が含まれているものに関しては，宮崎の土器とも平行関係に着目したことも言及することができそうである。

(4) 古代～近世

古代～近世の土器は，土師器や陶磁器類また鉄製品類が，Ⅳ・Ⅲ・Ⅰ層から少量出土した。土師器の器種については，中空の高台をもつものは埦とし，平底でなおかつ器高が低く体部が小さいものを皿とし，器高が高く体部の大きいものを坏とする。Ⅳ層からは，赤色顔料を塗布した坏でほぼ完形のものが１点出土した。見込みには十字の線刻があり，口縁部の欠損部分を右下に配置する時に，横に引いたのち縦に引くことが確認できる。赤色顔料は外面の一部と内面の口縁部にまとまって確認することが出来るのでそのように図化したが，その部分以外にも内外面ともに点状に赤色部分が確認できることから，全体的に塗布されていた可能性が考えられる。鉄製品は鉄鏃や刀子，また釘や鉄滓が出土した。

2　Ｄ地点

(1) 縄文時代

縄文時代の土器は全てⅣ層からの出土である。Ⅱ類に分類した深浦式土器はＤ地点から３点のみの出土で，Ⅰ・Ｊ-17～20区内で出土した。出土位置が近いことや胎土や雰囲気等が近いことから同一個体の可能性がある。列状に施文する貝殻連点文と突起状に貼付した文様が特徴的である。後期のＢ類土器に当てはめた丸尾式土器は，Ｄ地点から口縁部片が１点のみの出土である。前期～後期までは数点の出土だが，晩期はⅣＤ類土器の御領式土器とＶA2類の入佐式土器は，Ｄ地点からは１点のみの出土であるが，ＶＢ類に分類した黒川式土器は多めに出土した。そのうち深鉢が３点，鉢形土器が１点，浅鉢を９点掲載した。口縁部形態や器壁等さまざまな種類のものが出土したが，破片資料ばかりで全体の形態を把握することは出来ない。

(2) 弥生時代

弥生時代の土器はⅢ･Ⅳ層から出土した。Ⅳ層からは，前期から中期後半の特徴をもつ破片が出土し，その他には分類が困難であった破片資料も掲載した。器種は，鉢形土器，甕形土器，壺形土器，無頸壺と思われる破片資料が出土したが，小破片のため詳細は不明である。Ⅲ層からは，前期と思われる広口の壺で，外面に赤色顔料を塗布する資料が出土した。

(3) 古墳時代

古墳時代の土器は，遺物集中遺構と，Ⅲ・Ⅳ層からの出土である。遺構内出土遺物に関しては，先述した通りである。ここでは，包含層出土遺物についてまとめる。

甕形土器は遺構内や包含層から多く出土する。外湾や外反口縁は少数であり，上に伸びる形態の口縁部片が多く出土した。また，30や31また99といったミガキを外面もしくは内面に施す資料が特徴的である。また，31に関しては，かすかに面状の単位が観察できることから，タタキ技法を用いて成形した可能性が考えられる。しかし，外面に丁寧なナデを施しているため想定の範囲をでない。またどのような道具で施したのかも不明であるため，ここでは詳細な評価は避け，今後の資料の増加を待ちたい。壺形土器については，遺構内から多くの出土があり，穿孔を施す資料も何個体か確認できた。Ⅳ層出土の25は，頸部から上を欠き，肩部と胴部外面には煤が付着する。143は，外面に斜め帯状に煤が付着することから，斜めに傾けた使用方法だったことが推測できる。小林は，東南アジアの一般的な土鍋炊飯方法において「湯取り」の過程があり，その役割は灰汁取りと水量調節だとする。(小林2014) 湯取り方法には鍋を傾けるものとオタマで掬う方法の２パターンがあり，25やB地点のⅣ層出土の246のように斜めに傾けて使用した痕跡は，前者の「湯取り」を行った痕跡の可能性もある。しかし，そのプロセスを把握するための煤やコゲの観察は，完形品における内面外面の酸化とコゲの位置関係が重要であることから（鐘ヶ江・松崎2014），破片のみ出土した本資料では指摘に留める。

(4) 古代～近世の遺物について

古代～近世の遺物はⅢ・Ⅳ層から出土しており，古代の土師甕や須恵器甕，また中近世の鉄製品や古銭も少量出土した。Ⅳ層からは赤色高台をもつ土師埦が１点出土している。県内では，小倉畑遺跡や高井田遺跡等で出土例があり，黒川は，赤色高台をもつ黒色土器は県内では，９世紀中頃から10世紀前半にかけてその分布の中心が旧菱刈郡を含む旧桑原郡にあると指摘する。(黒川2006) 古代は黒色土器が多く出土し，また充実高台をもつ土師器坏が出土することから，古代の遺物が多いと思われる。また鉄製品については，バチ状を呈する鉄斧が１点出土しているが，持躰松遺跡出土のものと類似しており，時期は中世が想定される。高坏形土器や，坩形土器のような小型器種は，破片資料がおおく，全体の器形を把握することは困難であったが，高坏形土器の脚筒部はエンタシス状を呈するものが多い。

＜参考文献＞

鐘ヶ江賢二・松崎大嗣2014「成川式土器の使用痕分析―南九州古墳時代の調理技術復元への試み―」『九州考古学』第89号
河野裕次2019「宮崎平野部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相―編年の細別と外来系土器の影響について―」『宮崎考古』第29号
川口雅之2019「薩摩半島南西部海岸における弥生時代前期土器の編年」『鹿児島考古』第49号
黒川忠広2006「赤色高台を有する黒色土器」『大河』第８号
堂込秀人1997「南九州縄文晩期―入佐式と黒川式の細分」『鹿児島考古』第31号
中村和美2006「第５章奈良・平安時代８　土師器と須恵器」『先史・古代の鹿児島　通史編』
中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号
※論文・報告書は一部割愛

第３節　石器

石器については，包括的な検討はＡ地点の報告を待つが，以下の石器について，第４・５章の補足を行い総括に代えたい。

(1)　線刻礫について

線刻礫については，本県では旧石器時代（桐木耳取遺跡（曽於市）），縄文時代草創期（掃除山遺跡（鹿児島市），牧野遺跡（南九州市））の例（定義を広げるならば縄文時代後期から晩期の軽石製品まで）がある。

Ｂ地点の集石９号から出土した１は，遺物固有の特徴としては上記した県内の先例とは異なるが，出土状況については牧野遺跡例と類似する。

また，溝状遺構16号の埋土中から出土した98は，縁辺に刻まれた多数の短い刻線が特徴であるが，一見する限りでは刻線によって何らかの図像を表現しているようには見受けられない。むしろ，腱や繊維などを加工して紐や糸状のものを作成する「利器」としての用途を想像させる。なお，中柚木遺跡（霧島市）出土の砥石（掲載No.111）は，形状や刻線の状況が類似する。

(2)　磨製石庖丁について

磨製石庖丁の県内の状況は，島嶼部をのぞく県内の沖積平野部に多いものの，薩摩半島南部の小盆地や大隅半島の笠之原台地などにもある程度まとまって分布しており，地理的偏重というより県内の主要河川沿いに出土する傾向にある（本田1992等）。特に，不動寺遺跡（鹿児島市），高橋貝塚（南さつま市），大島遺跡（薩摩川内市），名主原遺跡・高付遺跡・西ノ丸遺跡（鹿屋市）では県内としてはまとまっている。ただし，ほとんどが包含層や自然流路の埋土内という状況で，遺構出土例は，一の宮遺跡（鹿児島市）と名主原遺跡等５遺跡である。

なお，近年の発掘成果では薩摩半島でやや事例が多くなっているほか，国分平野，姶良・蒲生地域と出水平野については，例数が少ない。現状が当時の実情を反映しているかどうか，留意すべき点と考えられる。

磨製石庖丁の形態については，出土数が少なく破片のため検討できない例も多いが，概ね，特定の形態に偏った出土状況を呈する例は見受けられない。ただ，大島遺跡と，製作地と考えられている名主原遺跡では，直刃の磨製石庖丁がまとまって出土している。また，移入初期の形態とされる擦切孔を有する資料も，わずかながら県内各地で出土している。直刃の396は，名主原遺跡出土例に類似しているようである。

他方，磨製石庖丁は西瀬戸内地域で導入初期段階で直刃に変化することが指摘され（下條2002），近年の発掘調査成果により，東九州における南北方向の情報等の流通状況がみえつつある。

こうした状況を踏まえると，（本県域における出土状況並びに器種構成の検討や土器の出土状況などの検討が先だが）南九州における直刃の磨製石庖丁成立の背景に，東九州～西瀬戸内地域の交流を想定する余地もあるように思える。今後の状況を注視したい。

<参考文献>

池畑耕一1988「瀬戸内系遺物の出土とその背景」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古希記念論文集刊行会

酒井龍一1985「磨製石庖丁」『弥生文化の研究』５雄山閣出版

下條信行2002「瀬戸内における石庖丁の型式展開と文化交流」『四国とその周辺の考古学』大飼徹夫先生古希記念論文集刊行会

堂込秀人2005「鹿児島県の石器からみた弥生時代の様相」『考古論集』川越哲志先生退官記念事業会

永濱功治2003「石庖丁の使用痕分析」『縄文の森から』創刊号鹿児島県立埋蔵文化財センター

本田道輝1992「鹿児島県下の弥生時代の石器と金属器出土遺跡地名表」『南九州地域における原始・古代文化の諸様相に関する総合的研究』平成３年度教育研究学内特別経費研究成果報告書（代表上村俊雄）

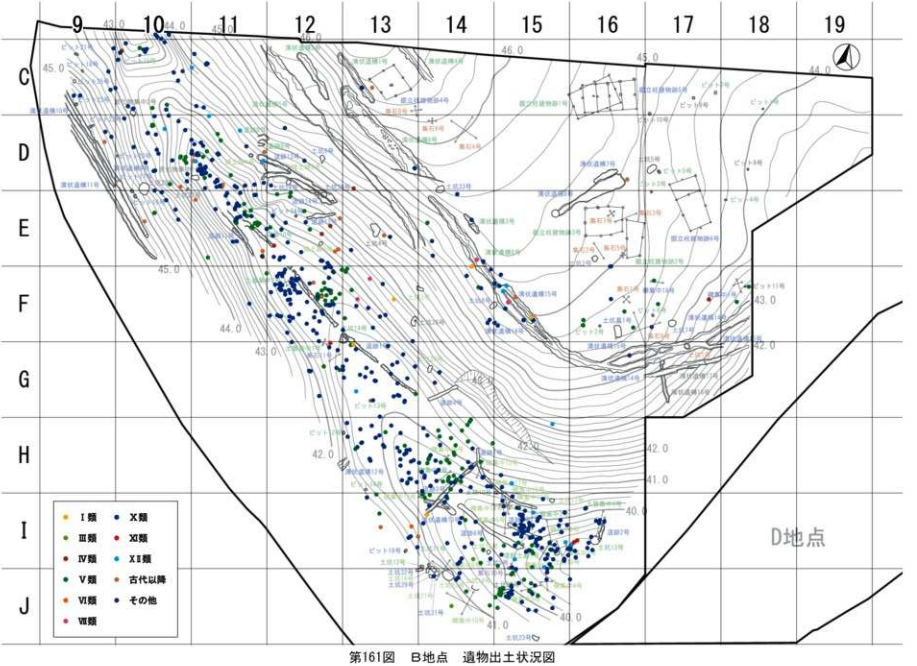
宮田栄二1996「鹿児島県の石器」『農耕開始期の石器組成』２国立歴史民俗博物館

※報告書は割愛

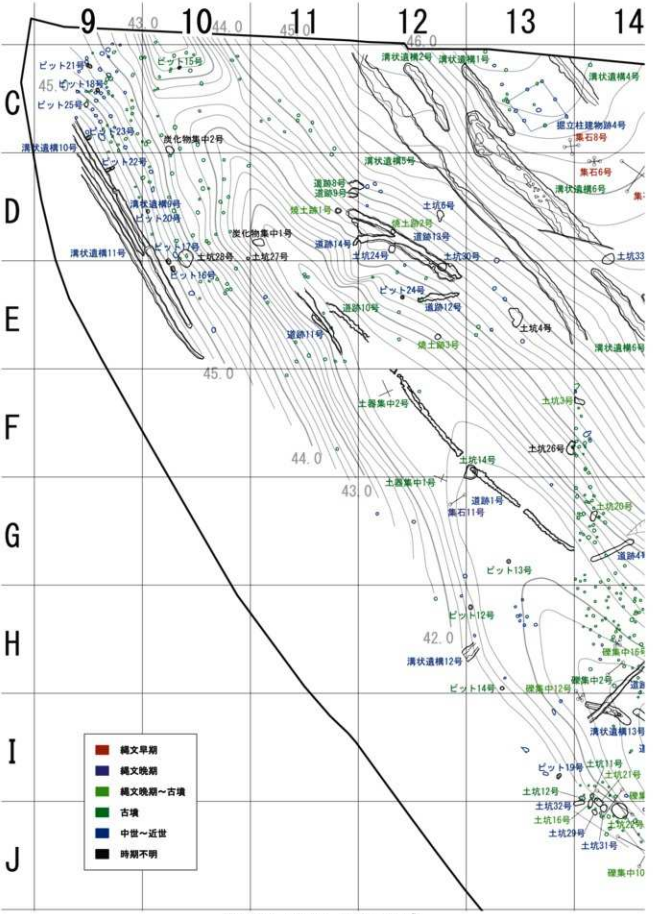
付表　鹿児島県内の磨製石庖丁出土遺跡地名表（※永濱（2003）以降の報告書を元に作成。時期・形状は記載がある場合は報告書に準拠。）

	遺跡名	所在地	時期	武器	形式			備考	掲載No.
1	武ノ上ｅ・ｆ・ｇ	鹿児島市武１丁目	弥生	包含層			擦切２		394
2	武ｕ	鹿児島市武１丁目	弥生	包含層			擦切４		395
3	武ｘ	鹿児島市武１丁目	弥生	包含層		直1	擦切１・擦切３		396
4	不動寺	鹿児島市上福元町	弥生～古墳	溝跡内	外傾５	直11	身２・刃２・ち２	方柳状石	397
5	鳥居ヶ原	鹿児島市鳥居町	弥生～中	包含層			擦切３		398
6	南洋産Ｂ	指宿市開聞の麓	弥生～古墳	包含層	外傾１		擦切７		399
7	酒塚	南さつま市金峰町宮崎	弥～中	包含層	外傾１		擦切７・擦切１		400
8	芝原	南さつま市金峰町宮崎	弥生～中	包含層	外傾１	直3	擦切１		401
9	御殿跡	南さつま市金峰町大野	弥生	包含層	外傾１				402
10	花倉Ⅲ	南さつま市金峰町大野	弥生～中	包含層	外傾１				403
11	下原	南さつま市金峰町宮崎	弥生	包含層	外傾１				404
12	笠置Ⅲ地点	南九州市川辺町神殿	弥生～古墳	包含層			擦切１		405
13	笠置Ⅳ地点	南九州市川辺町神殿	弥～古	包含層	外傾１	直7・1			406
14	鍛冶屋	南九州市知覧町郡里	弥生～末	谷・包		直7・1	擦切		407
15	大隅遺跡Ⅲ	南九州市川辺町神殿	弥生	包含層			擦切１		408

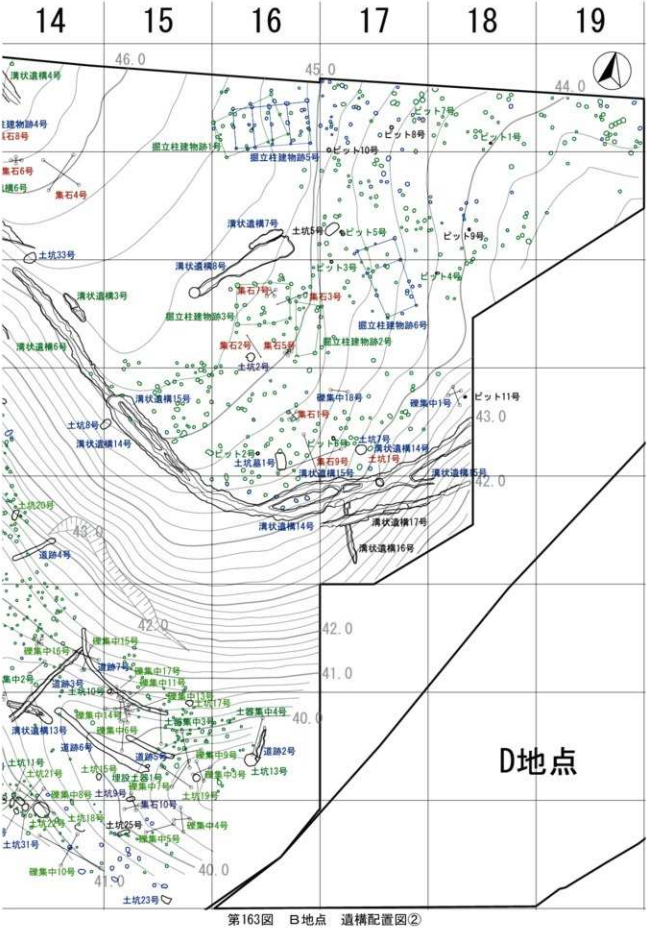
	遺跡名	所在地	時期	武器	形式			備考	掲載No.
16	古市	南九州市川辺町永田	弥生	包含層			方広７・1		409
17	土師園	南九州市川辺町平山山	弥生	包含層	外傾１				410
18	市ノ原第４地点	日置市東市来町湯田	弥生～古	包含層		直1			411
19	市ノ原第５地点	日置市東市来町湯田	？	包含層				未製品３	412
20	大隅A	日置市吹上町入来	弥末	谷跡内			擦切２・内傾刃１		413
21	宗田	薩摩川内市中郷町	弥末？	包含層			擦切１		414
22	矢島	薩摩川内市東大小路町	弥生	包含層	外傾２	直12			415
23	上新田	薩摩川内市青山町	？	包含層	外傾１			石なし	416
24	鳥色の杜	鹿島市浪花町中町	弥生	？			内傾？１		417
25	本郷Ⅳ	鹿島市浪花中央２丁目	弥～古	包含層		直？１			418
26	東玉川	鹿屋市西平町下東	弥末	谷・包	外傾１	直8			419
27	牧山	鹿屋市串良町細山田	弥中	谷跡内	外傾？		内しり・直しり・ち２・ち１	刃しり・刃直１	420
28	町田橋	鹿屋市串良町細山田	？	埋戻			方広？１	擦切石	421
29	鼎ノ丸	鹿屋市串良町岡崎	弥中末～古	谷・包			擦切９		422
30	野首町	肝属郡肝付町野首	弥～古	土器群			未製品１		423



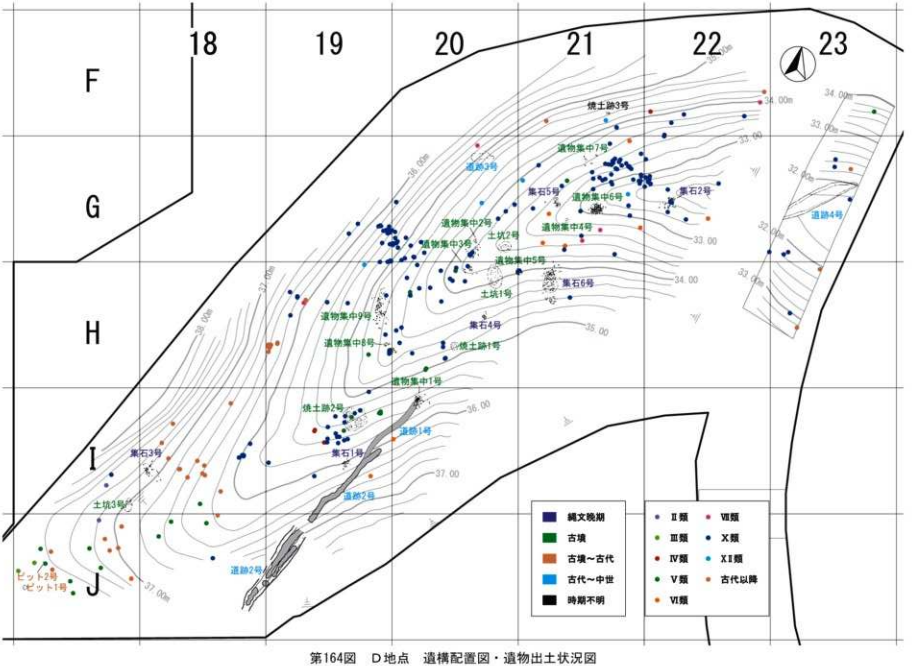
第161図　B地点　遺物出土状況図



第162図　B地点　遺構配置図①



第163図　B地点　遺構配置図②



第164図　D地点　遺構配置図・遺物出土状況図

C地点　補遺

第８章　補遺（川久保遺跡Ｃ地点）

平成30年（2019）３月に刊行された「川久保遺跡Ｃ地点」の報告書作成の校正の段階で，Ｂ地点の整理作業中の遺物にＣ地点出土遺物が混在していることがわかった。そのうち報告書では掲載していない縄文時代の後期と晩期の土器形式である４点を選びだし，本報告書に掲載することとした。

川久保遺跡Ｃ地点は，縄文時代後期の遺構は，Ｄ－３区西から東へ下る斜面のⅧ層上面で晩期の土坑１基，Ｆ・Ｇ－７区，西から東へ下る斜面のⅣ層で後期の石器集積遺構１基が検出された。遺構内出土の土器は，石器集積遺構内から，石器４点と土器片１点が出土した。土器片は，後期の土器片だと思われるが，破片が小さいことから形式は，詳細不明である。

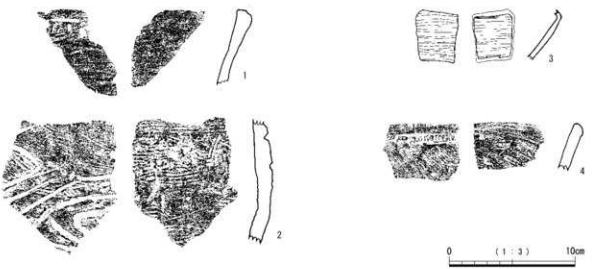
包含層遺物は，主にⅣ層からの出土で，縄文早期から晩期の土器が出土しており，Ⅰ類からⅧ類までに分類して報告した。

縄文時代後期の出土遺物

１・２は，縄文時代後期の深鉢形土器である。ⅣC類の土器に相当する。１は，Ｈ－６区Ⅳ層で出土した。Ｃ地点の報告書の分類に沿うとⅧ類にあたる。口縁部は外傾して開き，端部に向かって肥厚させる形態を呈する。内外面ともにナデのち横方向のミガキを施す。２は，Ⅰ－９区カクラン部分より出土した。内湾する深鉢の胴部である。外面はナデのち斜め方向に太めの凹線文が引かれる。内面はナデのち貝殻条痕で成形される。胎土には黒雲母を多量に含み，その他長石，白色粒，黒色粒を含む。

縄文時代晩期の出土遺物

３・４はＣ地点の報告書の分類に沿うとⅧ類にあたる。３は浅鉢である。VA2類の土器に相当する。Ⅰ－９区カクラン部分からの出土である。精製浅鉢形土器の胴部片であり，稜線がくっきり入り，器壁が薄いことが特徴的である。内外面ともに丁寧に横位のナデを施す。４は，粗製の浅鉢形土器かもしくは鉢形土器と思われる。Ⅰ－９区カクラン部分からの出土である。VD類の土器に比定される。口縁部外面直下に刻目突帯を１条巡らせる。内外面ナデで仕上げる。



第165図　Ｃ地点　縄文時代後期出土遺物

第30表　Ｃ地点　土器観察表

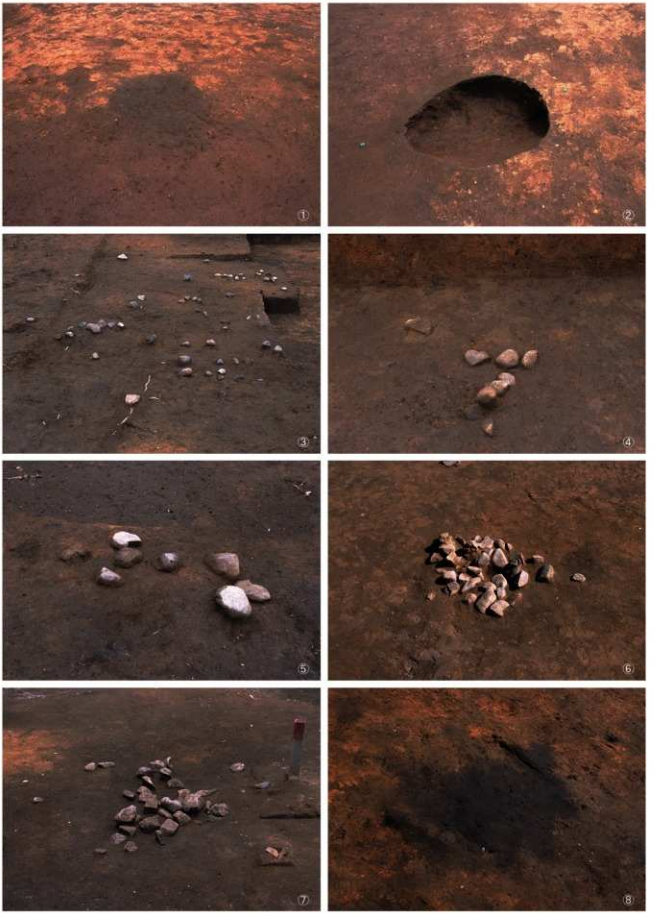
挿図番号	掲載番号	遺構番号	面積	区	層	部位	胎土							色調		調整・文様		取上番号	備考
							雲母	石英	角閃石	長石	赤色粒	黒色粒	その他	外面	内面	外面	内面		
165	1	－	深鉢	ｈ-６	4	口縁部	－	－	－	○	○	－	○	10YR/4 にぶい黄褐	10YR/2 黒褐	ナデ 3.ミガキ	ナデ 3.ミガキ	一括	
	2	－	深鉢	Ⅰ-９	カクラン	胴部	○	－	－	○	○	○	－	7.5YR/6 明褐	7.5YR/4 にぶい橙	ナデ 23凹線	ナデ 条痕	一括	
	3	－	浅鉢	Ⅰ-９	カクラン	胴部	－	－	○	○	－	－	－	2.5YR/2 暗赤黒	2.5YR/2 暗赤黒	ナデ 3.ミガキ	ナデ 3.ミガキ	一括	
	4	－	鉢	Ⅰ-９	カクラン	口縁部	－	－	○	○	－	○	－	10YR/2 黒褐	7.5YR/4 にぶい橙	ナデ 刻目突帯	ナデ	一括	

B地点　写真図版

図版1　川久保遺跡遠景

① 遺跡遠景（東から）
② 遺跡遠景（西から）

図版２　Ｂ地点　Ⅵ～Ⅷ層検出遺構１（土坑・集石・土坑墓）



① 土坑１号　検出状況
② 土坑１号　完掘状況
③ 集石４号　検出状況
④ 集石５号　検出状況
⑤ 集石６号　検出状況
⑥ 集石７号　検出状況
⑦ 集石８号　検出状況
⑧ 土坑墓１号　検出状況

図版3　B地点　Ⅵ～Ⅷ層検出遺構2（集石）

① 集石9号　検出状況
② 集石9号　出土線刻礫

図版4　B地点　V層検出遺構1（掘立柱建物跡）

① 掘立柱建物跡1号　完掘状況
② 掘立柱建物跡2号（左）・3号（右）　完掘状況

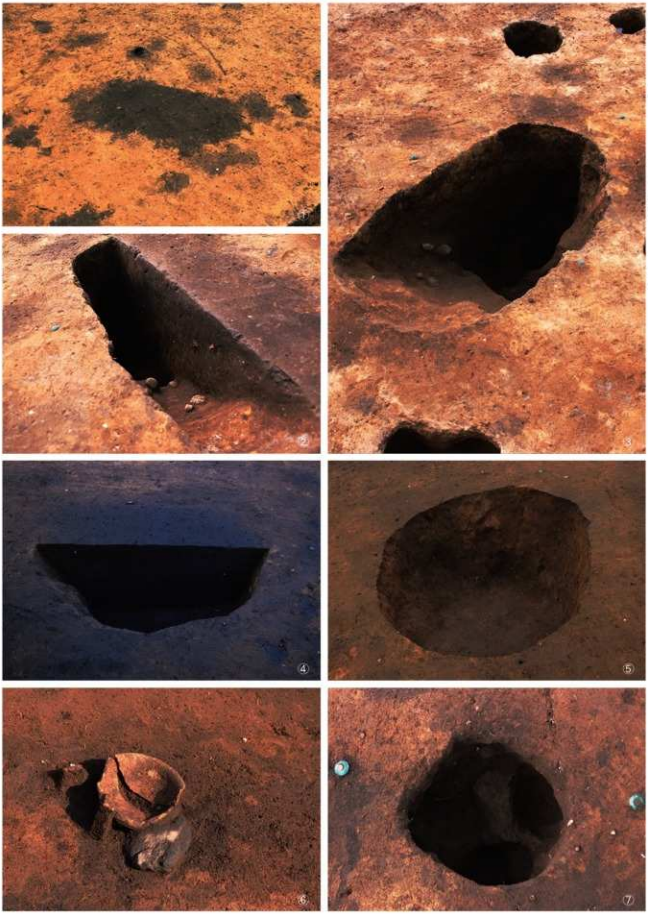
図版5　B地点　V層検出遺構2（掘立柱建物跡）

① 掘立柱建物跡4号　完掘状況
② 掘立柱建物跡5号　完掘状況

図版6　B地点　V層検出遺構3（掘立柱建物跡・土坑）

① 掘立柱建物跡6号　完掘状況
② 土坑2号　半掘状況
④ 土坑4号　完掘状況
③ 土坑2号　完掘状況

図版7　B地点　V層検出遺構4（土坑・ピット）



① 土坑５号　検出状況
② 土坑５号　半掘状況
④ 土坑７号　半掘状況
⑥ ピット11号　検出状況
③ 土坑５号　完掘状況
⑤ 土坑７号　完掘状況
⑦ ピット11号　完掘状況

図版8　B地点　V層検出遺構5（礫集中・焼土跡）

① 礫集中１号　検出状況
② 焼土跡１号　検出状況
③ 焼土跡１号　完掘状況
④ 焼土跡１号　断面

図版9　B地点　V層検出遺構6（溝状遺構）

① 溝状遺構１号　検出状況
② 溝状遺構１号　断面
③ 溝状遺構１号　完掘状況
④ 溝状遺構４号　検出状況
⑤ 溝状遺構４号　断面
⑥ 溝状遺構４号　完掘状況

図版10　B地点　V層検出遺構7（溝状遺構）

① 溝状遺構6号　検出状況
② 溝状遺構6号　断面
③ 溝状遺構7・8号　検出状況
④ 溝状遺構9～11号　検出状況
⑤ 溝状遺構9～11号　断面
⑥ 溝状遺構9～11号　完掘状況

図版11　B地点　Ⅳ層検出遺構1（埋設土器）

① 埋設土器1号　検出状況
② 埋設土器1号　調査状況
③ 埋設土器1号　調査状況

図版12　B地点　Ⅳ層検出遺構2（土坑）

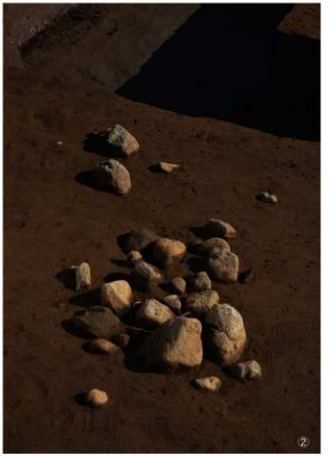
① 土坑13号　検出状況
② 土坑13号　半掘状況
③ 土坑13号　完掘状況
⑦ 土坑19号　半掘状況

④ 土坑14号　検出状況
⑤ 土坑14号　半掘状況
⑥ 土坑14号　完掘状況
⑧ 土坑19号　完掘状況

図版13　B地点　Ⅳ層検出遺構3（土坑・ピット）

① 土坑20号　半掘状況
② 土坑20号　完掘状況
③ 土坑24号　半掘状況
④ 土坑24号　完掘状況
⑤ 土坑28号　半掘状況
⑥ 土坑28号　完掘状況
⑦ ピット12号　調査状況

図版14　B地点　Ⅳ層検出遺構4（集石・礫集中）

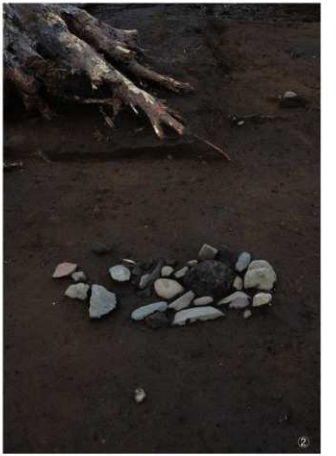


① 集石10号　検出状況
② 集石11号　検出状況
③ 礫集中２号　検出状況
④ 礫集中６号　検出状況
⑤ 礫集中９号　検出状況
⑥ 礫集中10号　検出状況
⑦ 礫集中11号　検出状況

図版15　B地点　Ⅳ層検出遺構5（礫集中）

① 礫集中13号　検出状況
② 礫集中12号　検出状況
③ 礫集中15号　検出状況
④ 礫集中16号　検出状況

図版16　B地点　Ⅳ層検出遺構6（礫集中・土器集中）



① 礫集中17号　検出状況
② 礫集中18号　検出状況
③ 土器集中１号　検出状況

図版17　B地点　Ⅳ層検出遺構7（土器集中）

① 土器集中2号　検出状況
② 土器集中3号　検出状況

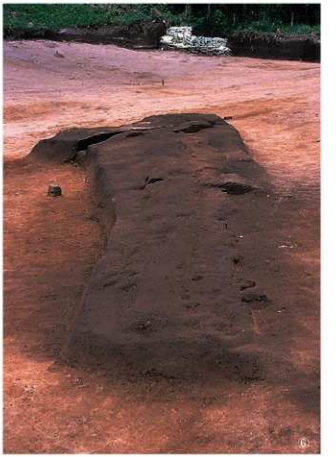
図版18　B地点　Ⅳ層検出遺構8（土器集中）

① 土器集中4号　検出状況
② 土器集中4号　検出状況

図版19　B地点　Ⅳ層検出遺構9（溝状遺構）

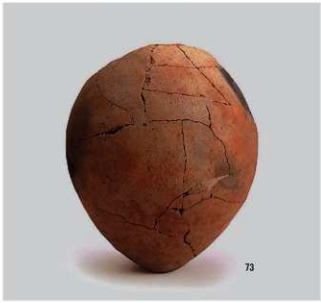
①　溝状遺構12号　検出状況
②　溝状遺構14・15号　検出状況
③　溝状遺構14・15号　断面
④　溝状遺構14・15号　完掘状況
⑤　溝状遺構14・15・17号　検出状況
⑥　溝状遺構14・15・17号　断面
⑦　溝状遺構14・15・17号　完掘状況

図版20　B地点　Ⅳ層検出遺構10（道跡）



① 道跡１号　検出状況
② 道跡２号　検出状況
③ 道跡３号　検出状況
④ 道跡10号　検出状況
⑤ 道跡11号　検出状況
⑥ 道跡14号　検出状況

図版21　B地点　埋設土器1号，土器集中2～4号，Ⅳ層出土遺物



図版22　B地点　Ⅳ層出土遺物1

図版23　B地点　Ⅳ層出土遺物2

図版24　B地点　Ⅳ層出土遺物3

図版25　B地点　Ⅳ層出土遺物4

図版26　B地点　Ⅳ層出土遺物5

図版27　B地点　Ⅳ層出土遺物6

図版28　B地点　Ⅳ層出土遺物7

図版29　B地点　遺構内出土遺物及びⅢ・Ⅳ層出土遺物

図版30　B地点　出土石器1（Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ層）

図版31　B地点　出土石器2（集石9号，Ⅲ～Ⅴ層）

図版32　B地点　出土石器3（溝状遺構16・17号，Ⅲ・Ⅳ層）

D地点　写真図版

図版33　D地点　遺物出土状況・Ⅳ層検出遺構1（土坑）

① Ⅴ層上面　遺物出土状況
② 土坑１号　半掘状況
④ 土坑２号　半掘状況
③ 土坑１号　完掘状況
⑤ 土坑２号　完掘状況

図版34　D地点　Ⅳ層検出遺構2（焼土跡・集石）

① 焼土跡１号　検出状況
② 焼土跡３号　検出状況
③ 集石１号　検出状況
④ 集石２号　検出状況
⑤ 集石３号　検出状況
⑥ 集石４号　検出状況

図版35　D地点　Ⅳ層検出遺構3（集石・遺物集中）

① 集石6号　検出状況
② 遺物集中1号　検出状況
③ 遺物集中2・3・5号　検出状況
④ 遺物集中4号　検出状況

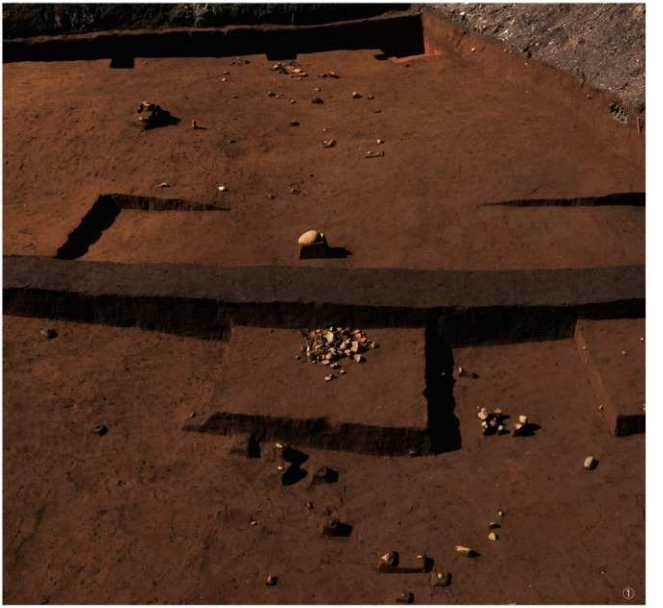
図版36　D地点　Ⅳ層検出遺構4（遺物集中）

① 遺物集中6号　検出状況
② 遺物集中6号　調査状況
③ 遺物集中7号　出土状況

図版37　D地点　Ⅳ層検出遺構5（遺物集中）

① 遺物集中７号　検出状況
② 遺物集中８号　検出状況
③ 遺物集中９号　検出状況

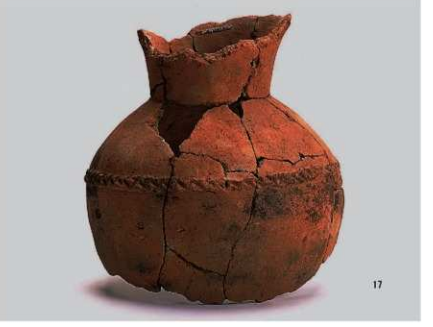
図版38　D地点　Ⅳ層検出遺構６（遺物集中・道跡）



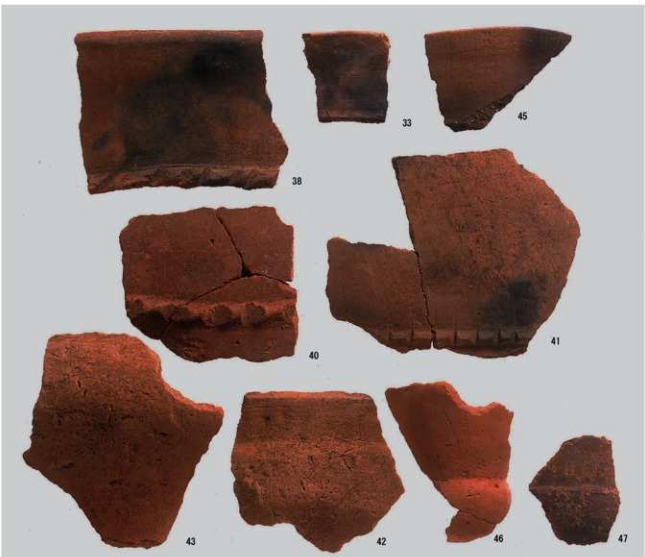
① 遺物集中　検出状況
② 道跡２号硬化面　検出状況
③ 道跡４号　検出状況

図版39　D地点　遺物集中出土遺物1（2～5・7号）

図版40　D地点　遺物集中出土遺物2（6号）



図版41　D地点　遺物集中出土遺物3（8・9号）

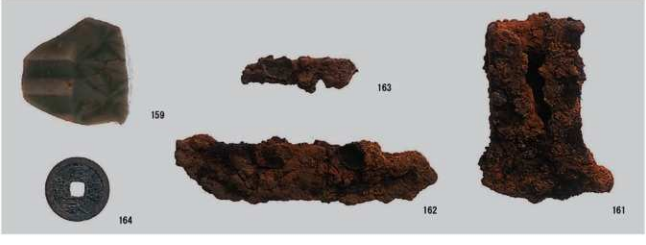


図版42　D地点　Ⅳ層出土遺物1

図版43　D地点　Ⅳ層出土遺物2

図版44　D地点　Ⅳ層出土遺物3

図版45　D地点　Ⅳ層出土遺物4



図版46　D地点　出土石器（Ⅳ層）

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（31）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

川 久 保 遺 跡 2（B・D地点）

発　行　年　2020年3月
編集・発行　鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　　刷　渕上印刷株式会社
〒891-0122　鹿児島県鹿児島市南栄３－１－６
TEL　099-268-1002　　FAX　099-266-4123